つぼ菫

女子文壇定期増刊

明治四十年二月十五日増刊（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



第三巻第五號

山村の梅花



三宅克己先生筆


各女學校御用
美術造花材料
附屬示範
製造器械器具一式
切取線
目録御入用ナレハ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候
縣　郡　町村
營業
女子文壇
東京市日本橋區横山町二丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番

胃病根治劑

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其發効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて發効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は普通製金壹圓貳拾錢　特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多ヶ滯りの古血及**惡血瘀血**を一掃することを確證す但し本劑は其發効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

發明賣藥は百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他に發する憂なき世界的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢着金即刻發送す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

沼波文學士。廣津柳浪
巖谷小波。河井醉茗　先生選評
佐々木信綱。　女子文壇編輯局

目下印刷中　三月中旬發賣

女子懸賞文集

第二　洋装美本　紙數五百頁餘

正價金三拾錢　郵税六錢（郵券代用必壹割増）

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷實に獎學五百金余の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元　東京々橋區大鋸町　電話本局六〇七番　（郵便振替貯金口座第一七二九番）　女子文壇社

特約賣捌所　○東京堂○東海堂○北隆館○前川文榮閣○上田屋○良明堂外書店

泰西名畫（戀）



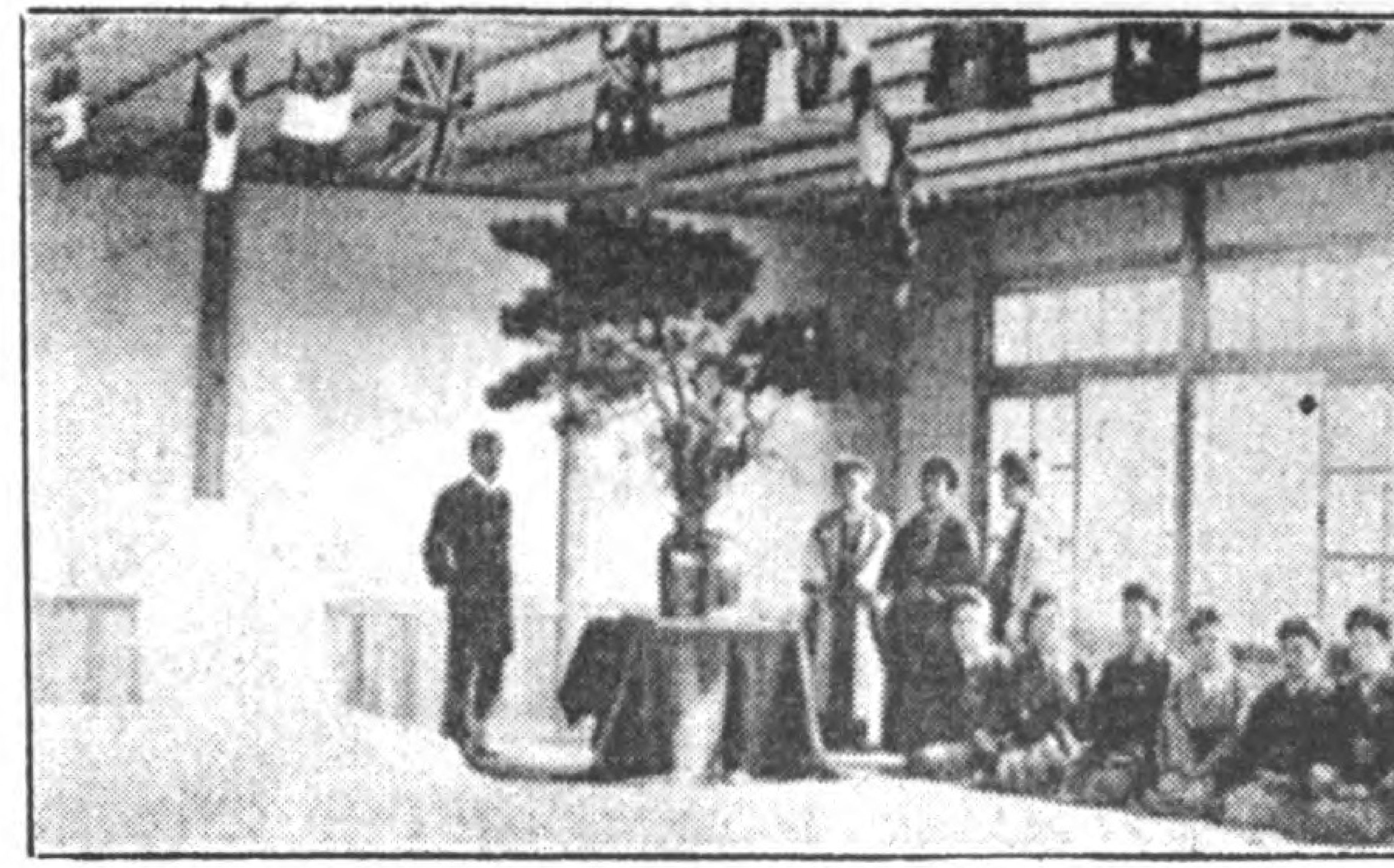
マーカスストン氏筆



私立長崎產婆學校第廿六回卒業生及職員

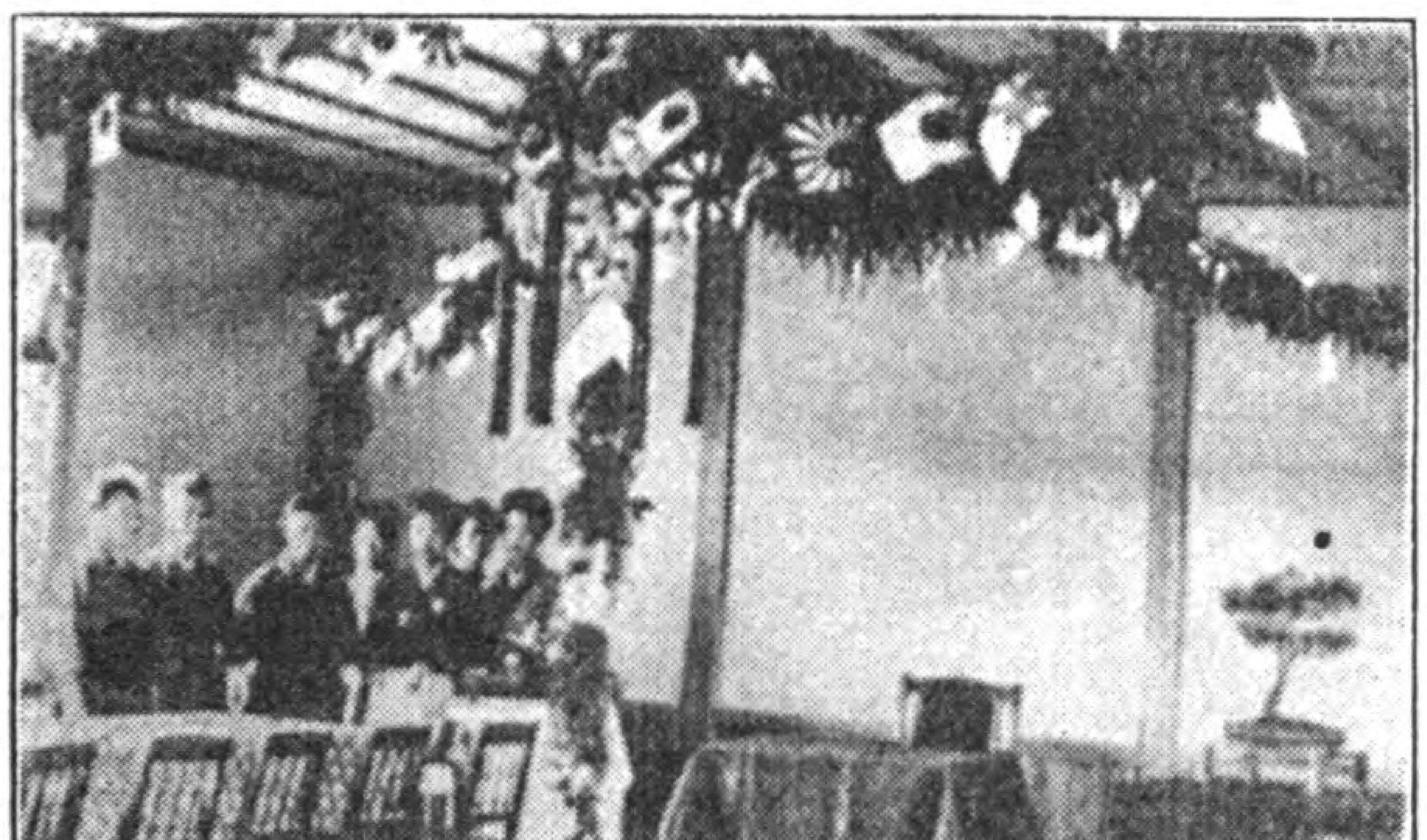
（卅九年十月）

若州小濱女子技藝學校開校式


式場の一


式場の二


（長谷川英尾子寄贈）
生徒成績品陳列室


來客接待室

誌友おもかげ（四）



浦賀 小永井峯子



靜岡 鈴木多歌美子



羽前 吉田きち子 長谷部里子



福島 松林まつゑ子



渡島 坂田ふみ子

（續々御寄贈の寫眞を願ひたし、御都合にてお返し致ますから……）

後るゝ勿れ＝餘すと半月

本社創業三周年紀念廉賣

◉廉賣期限 四十年二月中（延期せず斷然滿期正價に復す）

廉賣書目

（各書とも製本出來揃あり）

書名	體裁	正價	廉賣價	郵稅
詩文美文 玉むし	全一冊中形 新式上製	正價金六十錢	廉賣價參拾錢	郵稅六錢
女子懸賞文集	第壹中形 洋裝並製	正價金二十五錢	廉賣價拾五錢	郵稅六錢
美文作法	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵稅四錢
小說美文 朝ぱれ	全中形 洋裝本綴	正價金四十五錢	廉賣價廿五錢	郵稅四錢
言文一致文範	全大形 洋裝並製	正價金四十錢	廉賣價廿五錢	郵稅四錢
卅九年實地精査 女子遊學便覽	全中形 洋裝並製	正價金三十錢	廉賣價貳拾錢	郵稅四錢

◉好機不可逸

（郵券代用は必ず壹割増に申受く）

特約取次所

東京神田表神保町 東京堂
京橋尾張町 東海堂
京橋中橋廣小路 前川文榮閣
京橋鎗屋町 良明堂
日本橋吳服町 北隆館
神田裏神保町 上田屋

非常の盛況

各書の詳細は次頁にあり

出版元 女子文壇社 東京京橋大鋸町十一

（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）（電話本局六百七番）

見落す勿れ◉安いと論より證據

卅九年新刊　女子文壇社出版＝紀念廉賣書の批評一斑

（正價及廉賣價格は前頁にあり就て見よ）

河井醉茗著　山中古洞畫入

詩と美文　玉むし

▲婦人世界評

醉茗君の筆のやさしさは、本誌の讀者諸姊が御存知のとてありませう。この玉蟲は君の美文と新體詩とを集めたもので、いづれも婦人のために書いたのですから綺麗なものばかり、體裁もなかなか凝つたものです。

（四六判色クロース金箔入本綴上製）

諸大家序文　小森松風著

美文作法

▲中央新聞評

本書は總論に於て美文の起源名稱種類を說明して抒事文、抒情文抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳說したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

（菊判二百卅頁並製）

諸大家序文　小森松風編

言文一致文範

▲中央新聞評

言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論說、抒事、抒景、日記等數十編を示したり斯道研究者の歡迎を受くるものならん

（菊判二百卅頁並製）

鈴木秋風著　太田三郎畫入

小說美文　朝ばれ

「萬朝報」曰く　どれ是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く　いづれも短篇の小說ながら、著者が所謂寂寞の歷史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小說で何れも未だ浮世の荒波にもまれない靑春の女の幽情を寫したものです

（四六判金刷厚表紙本綴上製）

諸大家選評（第三版）

女子懸賞文集　第一

▲電報新聞評

當選の詩文を一纒めにしたるものにて短篇小說、消息文、抒情文、敍事文、論文、新體詩、和歌、俳句、はがき文、圖畫の諸欄に分てり近頃の靑年男女の文章は一體に進み來りしが殊に本書は女子と云ふだけに時節柄歡迎者多からん

（四六版四百二十頁並製）

中村報知新聞記者著　學校長肖像入

實地精査　女子遊學便覽

▲萬朝報評

都下各女學校の世評と、其校則の概要を揭ぐ、坊間幾多の遊學案內が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を揭げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尙ほ職業案內及學資の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

（四六判二百卅頁並製）

女子文壇

第三卷第三號　つぼ菫　春期增刊

○一等賞當選者（上等絹張洋傘）……短文「あはれ小鳥」……相原壽美子

（乙の四）

女子文壇 春期増刊

冬の靄

蒲原有明

なべての上に灰いろの
靄こそ默せ、日の終、
その灰いろに彩といふ
彩のあえぎを聞くごとし。

冷たく重き冬の靄、
夕はわびし、戀も世も、
宴も人も、ひと色に、
信も不信も、身も靈も。

死の林かとあらはなる
木立の枝のふしぶしは
痛みぬ、風に、―悔の音、
執着の靄灰色に。

過ぎし日のこと、このゆふべ、
忘るるぞよき、しかすがに、
殘さまほしや、ただしばし、
忘れじとおもふその思。

小說中の對話

廣津柳浪

然うてす、對話を疎忽にしては不可ません、地の文が少くて對話の多い作を、作者がづるい所爲だと云ふ人も能くありますが、なか〳〵然うてはない、地の文は書くのてすけれど、對話は書くのてなく寫すのてすから、眞個は地の文より對話の方がずつとむづかしいのてす、尾崎君も然う言はれたことがあります、會話ばかりは何うしたら上手に書けるかと敎へる譯にはゆかぬ、只其呼吸を自得するより外は無いだらうと。

對話てむつかしい處は、甲の人が話して、乙の人に移らうとする時の受け方てすナ、それが巧く書けるやうにならなければ、對話の卒業は出來ない、此對話の移つて行く工合が、巧く書けてあると作が活きて來るのてす、それには何うしても自分が其話す人に化つて其人の境遇、其人の性格、其話す塲合、此三つを能く呑込んて居なければ其人が現れて來ない。一番不可ないのは自分の言ひたい事を言うとする、是が不可ない、初めの間は迚も作中の人間には化れないて、矢張自分の言ふ事を言つて了う、私なども然うてした、初めの間は作中の人に化らう化らうとして、努めましたが兎角自分が出て、巧く行かなかつたのを大いに奮鬪して、書く時には作中の人になる工夫を廻らしたてす、此頃ては然う苦しくありません、初めの中は誰ても苦しからうと思ひます、自分の言ひたい事を言ふのなら樂てすが、それを抑へて作中の人間の心持になるのてすから、初心の者には苦しいてせう。

「目黑巷談」を脚本に書き變へる時に、對話のむつかしい事が猶能く分りました、併し好い經驗も得ました、處が芝居になつて、確か本郷座てあつたと思ひますが、彼の不動堂の塲てすナ、彼處の對話を俳優が勝手に直して、私の書いたのとは違ふ白になつて居るんてす、其爲に何だか斯う精神が抜けたやうに感じられましたが、俳優などても自分の言ひたい事を言うとして、作

の精神を失ふのは不可ないです、恰當作家が作中の人になり得ないと同じて、好くない癖だと思ひます、殊に作家の書いてあるものを、勝手に都合の宜いやうに言變へるなどは不都合です、矢張原作通りに言つて其精神を失はないやうにしたいものです。

それて前に言つた話の受け工合が巧くうつらないと作の活きない事は、對話を書く場合の必要條件ですが初めに一つ狂うて來ると、何處迄も狂ひます、一つ受け損つて變な風に書くと何處迄も變になつて、他の作を見て直す時なども、一つ不可ないと思つて筆を入れると、其人の對話は終まで直さなければならぬ事になるのです、初めが大事ですよ。

今一つ對話に注意するのは、短い句て、きッちりと適合つて行くやうに書く事です、一人て二三十行も話す場合は然うも行きますまいが、大抵の場合、對話は短い句の方が宜しい、又短い句が一つ一つ能く適合つてあると、少々一人て長く話しても活きます。

男女の對話を書分る事に就いては左樣、別に是と云ふほどの工夫もないやうです、女學生などのやうに判然と女の語を使ふのは宜しいが、下町邊りには隨分亂暴な語使ひをする女があつて、陰て聞いて居ると女か男か分らない、是等の語を活かして女らしくしやうとするには、一寸工夫も入用ですが、まア全躰に女の語だからつて、別にむつかしいやうな事もないてせう、動詞や、感嘆詞に多少の手加減を加へれば宜いのですから。

此頃、私の方へ蠣殼町邊の小間物屋て是非小說を書いて見たいと云ふ人が來ますが、書いたものを見ると日比谷公園て男女の學生が話をするとか、何とか矢張流行を當て込まうとするから、私は言ふのです、今、下町に居て下町を材料とした作を書く人は少いのだから、其方に手を着ければ屹度面白い、何も日比谷公園まで出掛ずとも、小間物屋さんなら自分の店へ來る人とか、周圍の人の樣子とかを描寫せば宜ので、其方が書くにも樂であらうし、又ものになる、兎角自分の柄にない事を書いて見やうとするから失敗する、何もわ

ざとらしく學生や何かを持出さないで、お內儀さんでも、小僧でも毎日見て居る人をお書きなさいと言つて遣りましたが、至くてす、もう東京に居ると云ふ事が小說を書くのに便宜があり、凡てに氣が利いて居り、小說の舞台は東京ですから、殊に下町に居るのなら其處を書けば宜のです、イヤ兎角迷ふものと見えます。

一記者曰く、或る日、溫かなる午後、麴町の靜かな住居に廣津氏を訪ひ、談偶ま小說中の對話の事に及んだが、後進の參考になる事も多からうと思ひ、右に其大要を認めた、文責は素より記者にあり。

生活と文學

溝口白羊

近頃女子の文學といふことが段々盛に成つて參りまして、「女子文壇」などでも、澤山諸孃のお歌や文章を拜見致すことが出來ますのは、誠に悦ばしいことで御座い升。

併し此のお家の御都合といふものでも御座いませうか、娘時代には如何にも熱心に文學をお勵みなすつた方が、お嫁附に成りますと、弗然と鼬の道を斷つた樣に止めてお了ひなさるのが多いのは、誠に殘念なことだと存じます、尤も一家の家政を預ると成ると、それはそれは忙しいもので、つい學校で習つたこと迄も忘れ勝に成るのは、誰しも覺のある事で御座いますが、文學を勵むといふことは決して鞠や羽根を突くのと同一ては御座いません、一家の妻と成つてからでも、何彼につけて其必要のある場合は澤山御座います、「歌や文章を作つてばかり居てそんなことが嫁入してから何の役に立ちます」といつて、文學熱心の孃樣をお叱りなさる母御が、隨分世間にはある樣て御座いますが、これは文學に耽つて實學を忘れるといふ一方の弊害ばかりを御覽に成つたので、文學といふことが如何ばかり婦人の日常生活に重大な關係があるかといふことを、御存知ないので御座いませう、理窟を申すのでは御座いませんが、どうせ物事には利益もあれば弊害もあるもので御座いますから、一方ばかりを御覽に成つて、

折角御熱心でいらつしやる孃樣の文學をお止めなさいますのは、失禮乍ら間違つた爲され方であらうと存じます。

私共が嘗て或敎育家の方にうかゞひましたのには、文學の御好きな方は屹度裁縫がお上手でいらつしやるといふことで御座いました。ひとり裁縫ばかりでは御座いません、割烹に就てもさうで御座いまして、意匠がかつたことには、凡てこの文藝趣味の有無といふことが、附いて廻るので御座います、例へば彼の諸孃も御存じの摸樣物の裁縫で御座いますが、アレをやりますに附けても、文藝趣味の有る方と無い方とで、大層な相違があるので御座います、兩身を裁ちましてから直ぐに二つ折にして身頃を裁ち、摸樣を揃へてから襟肩をあけますのは、普通に誰もする事で御座いますが、同一物を持たせて澤山な人に遣らせますと、十人が十人皆摸樣の合せ方、位置のとり方が違ふものださうで御座います。こんな時に文學の素養がありますと、僅かな事でもどんなに高尚にどんなに美しく、立優つて出來るでせう。

着物の色合や縞柄、摸樣などの撰擇、室内の裝飾、料理の取合せなど、どれ一つとして文藝の趣味に關係しないものが御座いませうか。一寸見ましても、アノ方は文學思想のある方かどうかと云ふことは、直ぐ分ると申しても宜しい位で御座います。これは平常お勵みに成る文學の結果が、自然と日常生活の上に表はれて參るので荒い心も自然に靜まり、起居擧動も自づからしとやかに成つて、文藝趣味の向上といふことが、どんなに其人の人格を高めるでせう。文學をお勵みに成る方は、何處と無く奥床しい處があるもので御座います。

どうか私が諸孃に願ひ度いのは、文學といふものは前申上げたやうに、日常の生活の上に知らず識らずよい結果を與へるもので御座いますから、成る可く兩老の聯絡をとつて、よいが上にもよい成蹟を擧げていたゞきたいことで御座います。さうしてお嫁附に成つても、益々文學を勵んで、美しい家庭に更に美しい花をお咲

かせに成ることをお願致すので御座います。文學をお勵みなさいます間接の結果が、諸孃の日常生活の上に美しく表はれませうならば、何處の親御樣がそれをお咎めなさいませう。くだらぬ事を申す樣でございますが、どうか一時の風潮に惑はさるゝことなく、眞面目に、健實に、立派な成蹟を明治の文學史上にお示し下さいますやう、御奮發を願ふので御座います。

源氏物語の名媛

文學士　吉岡向陽

源氏物語四十四帖(正篇のみにつきていふ)光源氏を中心として、貴賤さま〳〵の婦人を描く。容貌、心しらひ各々異也。されど、其れ、卷々にきれ〳〵記されたれば、打ち見ては其全斑を窺ふに難し。今其端々をつづしり合せて、それ〳〵の傳を作る。「源氏物語名媛傳」とは名づけつ。先づ君が始めてあひ給ひし空蟬より。

一　空蟬

空蟬のあるかと見れど、面影のかげもあやな。香をとめし小夜衣、
もぬけし人ぞ戀しき。……季歐

空蟬は故衞門の督が女也。世の覺え口惜しからぬ者なりしかど、少くして父に後れたる寄方なさに、內裏へも奉らむと思ひ揚れりし父の掟に背きて、弟小君を率て、老いたる受領、伊豫の介が妻となれり。ありしながらの身ならましかば、やごとなき方にも嫁ぐべかりし者の、かく舅とも云ひつべきが緣となれる空蟬が身も亦哀むべからずや。されば空蟬は伊豫の介が妻となりて、この二年ばかりも過ぐれど、親の掟に違へりとて、心ゆかずも過すなりけり。

或夏の夜、源氏の君は、御方違にとて、中川なる紀伊の守が家にわたり給ふ。紀伊の守は伊豫の介が先妻の子也。介の家につゝむ事ありて、彼の空蟬の其家に罷り移れる頃なれば、狹くていかゞと佗ぶれども、却却に人氣多きがよしとて、おはしぬ。紀伊の守さま〳〵にもてなし奉る。

給仕の童子あまたあり。中に氣はひ貴はかなる十二

三ばかりなるが交れり。君御覧じて、「誰が子ぞ」と問ひ給ふ。「それがしにしか〳〵の繼母あり。そが弟」と答ふ。「あはれのことや。此姉君や汝が後の親！。似氣なき親を持たるかな」とのたまふ。故衞門の督が宮仕に出だし立てんと奏せしことのありしを今かく思し合はするなりけり。君がわりなき戀はこゝにはしなくも緒を開きたる也。

君は臥し給へれど、寢られ給はねば、そと起きて、西面にいまして、女の唯一人臥せるに言ひ寄り給ふ。女物に襲はるゝ心地して、「や」とおびゆれど、鬼神も荒だつまじき氣色には、さすがに罵りも敢へず。君掻い抱きて奥なる御座に入り給ひぬ。

そも〳〵源氏の君とは如何なる人ぞ。君は桐壺の帝の皇子、紅顔匂ひ滿ちて、詩歌管絃究めたまはぬなく、心ばへ由緒ありて、物のあはれ思し知りよろづ心憎く恥かしげなる、實に當時のさる際としてあらまほしき理想的の人物なり。されば大方に見奉る人だに心しめ奉らぬはなく、物の心知らぬ賤山がつも尙ほ花の影には休らはほしきなめり。況して、かう懷しき氣色を見奉りて、疎かに思ひ聞ゆる者やあらむ、されど空蟬は人の妻也、假なる浮寢のほどを思ひてはいかて類なく思ひ惑はれざらむ。たとひ心づきなしとは見らるとも、寧ろさる言ひ甲斐なきにて過してんと思ひなる。

されど、そは甲斐なかりき。彼れの操は遂に挫けざるを得ざりし也。今は芒の穗にもおぢむ落武者の如く目を遮るもの、耳に入るもの、すべて、心呵責むる種ならぬはなかりき、常には心づきなしと思ひ侮りし伊豫の介が夜の夢に見ゆらむと恐ろし。

君は人の心の忘られ給はず、小君を得て、身近く馴し給ふ。これを使ひにて御文あり。女あさましさに涙ぐまるれど、尙ほさすがにゆかしくて、御文を面隱しに擴げたり。小君返事乞ふ。「かゝるものは見るべきものもなしと聞えよ」といふ。小君打ち笑みて、「違ふべくもの給はざりき」といふ。女は之を聞いて、はじめて我れに歸りぬ。殘りなく知らせ給ひてけり」と思へば、つらきこと限りなし。返り事聞えず。更に御文あ

れど又聞えず。
　君はいたく思し歎きつゝ、内裏を罷出で給ふ道のほどより、にはかに紀伊の守が家におはしたり。かくて小君して御消息あれど、女は夢のやうにて過ぎにし歎きを又や加へむとて局をかへて逢ひ奉らず。
　さはれ、人々、空蟬を君につれなしと思ふ勿れ。彼れは下にて戀しく懐かしく思へる也。品定まれる身の取り返すべからぬを知れるものから、ありしながらの身にて待ちつけ奉らましかばと思へる也。されば君の消息の暫しと絶えては、懲り給ひにけりとて、ちゞに思ひ亂る。思したまへ、思したまふな、空蟬は此中間にとぢめてむと思ふなりき。
　紀伊の守任國に罷りて、家には女のみ殘れり。小君よき折にてぞとて、或夜我車にて君を率て奉る。東の妻戸に立たせ奉りて、格子叩きて入る。姉は今しも西の御方と碁打ちてあり。西の御方どは伊豫の介の子、紀伊の守が妹也。
　君やをら歩み出でゝ、簾のはざまに入り給ふ。いとよく見透かさる。中柱のあたりなるが空蟬也。あらはには見えねど、頭つき細やかに、小さく見だてなき姿したり。向ひなるは殘る隈なく見ゆ。色白うつぶ〳〵と肥え、目もと、口つき花やかなるかたちしたり。彼れ、いと由緒ありげにもてつけたれば、尚ほ此勝れたる人よりは目留りて覺えたまふ。碁果てゝ、二人は一所に臥したり。
　小君、君を引き入れ奉る。むすめはいぎたなく、寐入りたり。空蟬もあやしく夢のやうなることの、心離るゝ折なき頃とて、とかく寐覺めがちなるを、君の身動き寄りたまへば、ふと聞き付けて、やをら起きて、すべり出でぬ。寄りて見給へば、あらぬ人なり、娘目さめて、あさましく呆れ惑ふ。君人違へたりとの給はむもつきなくて、唯御志のやうに語らひたまひつゝ、彼の脱ぎすべしたりと見ゆる薄衣取りて、出でたまひぬ。女の心を爪彈きして怨みたまふ。
　かゝる程に伊豫の介上洛したり。先づ急ぎて、源氏の君の御方にまゐり、伊豫の國の御物語などす。船路の仕業とて、少し黒みやつれたれど、人も賤しからず、ねびたる容貌淸げなり。君これを御覽じて思し出づること多し。彼の女のつれなき心は憎けれど、此翁のためにはあはれや、思ひ絶えんと思しなる。されど介の妻

をも率て下るべしと聞き給ひては、一方ならず心遽ただしくて、今一たびの逢ふこともがなと思せど甲斐なし。女はた君の思し忘れなんことの憂かるべきを思ひて、さる折々の御返り事にも懐かしげに目のとまるべき節加へなどす。否。かの小君のまゐる折もあれど、ありしやうなる言傳もせずなり給へるをば却りて怨み聞ゆるなりけり。

十月ついたち、伊豫の介、空蟬を率て國に下る。君、櫛、扇、幣など餞たまふ。彼の薄衣もかへし給ひつ。空蟬の歌、

蟬の羽もたちかへてける夏衣、
かへすを見ても音は泣かれけり。

あはれ骸は樹梢に殘れど、秋風さと吹きて、魂は長へに滅びたりといふべし。

かくて年は幾たびか返りぬ。伊豫の介は常陸の守に移れり。空蟬は君の須磨にさすらひたまふと聞きて、人知れず、思ひやり聞えぬにはあらざりしかど、消息すべき便だになくて、筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地してぞ過しける。さて君の須磨より歸り給ふ翌年、常陸守は妻引具して上洛す、たまたま君も御願果たしとて、石山に詣でたまふ。守、關山に下り居て女車こゝかしこに隱して御車過ごし奉る。君思し出づること多くて、昔の小君、今の衛門の佐なるを召して、文遣はしたまふ。女も昔の事の忘られぬに、この珍らしさにはえ忍びあへず、やがて返り事聞ゆ。

あふ坂の關や如何なる關なれば、
しげき歎きの中に分くらむ。

かくて、此わりなき戀はつひにとことはに消えにき。

常陸の守は老の積りにや、惱みてのみあり。空蟬宿世ありて、此人に嫁ぎたりしを、今これにさへ後れなば、如何なる憂目をや見むと歎く。守も妻のために殘しおくべき魂もがな。我子どもの心も知らぬをと後目たく思へど限りあるものにて、遂に亡せぬ。子ら暫しの程こそ情ありしか、つらき事日に添へて多し。唯紀伊の守、今の河内の守のみぞ追從し歩くと見れば、われを戀ふる心のあるなりけり。あさましのことや。かく生き止まりたる果てはかう珍らかなることも見るよとて、人にさりとも知らせず、つひに尼になりてけり。あゝ、胸に萬斛の涙を湛へて泣きいさちず、唯運命の命ずるところに任す。悟らぬほども倘ほその際に安んじ、悟りては世を夢と行ひすます。空蟬の心のいてもやさしや。（空蟬終）

つぼ菫

山田美妙

上

礒て摘みたる　つぼすみれ
これ見よがしの　衣紋どめ
いろが黒むを（と）　しほ風に
たゞなら誰が　吹かれうぞ。
海人になるとも　君がため
いとひはせねど　しかすがに
黒まば嗤や　飽きられん（笑はれん）
それが苦勞と　しら雲の
よそなる色も　うらやまし。
浪も　しづかに　水入らぬ
小舟に　ふたり　おゝ嬉し。
笑くぼ出せとて　頬をつく
そさまの指の　惡戯な。
（否な！　笑くぼを出せよとて
頬つく指の　にくらしや。）
出すもはづかし　出さぬもいや

さても辛氣の　世の中や。
海は彌生の　しほ乾時
むらさき色の　遠淺に
水際だちし　うきれ島
かろくゆられて　五つ六つ
むつむふたりが　こい中を、
まれてか小緣　吸ふ浪も
しほらしや　船と千話喧嘩。

下

漕ぎ出し　船は　歸りこず。
跡はいづくか　しらぬ火の
もゆるは魂か　あをしろき
其色とても　泣き顔に
むしれし雲の　ひま覗く
月さへ冴えて　ものすごし。
針をうゑたる　狼の
毛にしも似たる　沖の色

凄ずみ探んで　吼えたてゝ（たつる）
慈悲もなさけも　あら磯に
寄せてかへすは　浪ばかり。
（心に慈悲も　あら浪や
磯にかへるは　浪ばかり）
それを紀念と　ゆふしほの
渦もまさごの　千々よろづ
盡きぬ怨みに　涌きかへる。
比翼連理の　かれごとの
名ごりは海の　音ばかり。
眉は遠山　肌は雪、
この世の外に　身を化して
弘誓の船か、ごくらくの
下は地獄の　うき舟か？
濱風くろく　沖暴れて
秋いとさむく　千鳥啼く

「つぼ菫」に就いて

一記者

本號増刊「つぼ菫」と題した縁故に依り、山田美妙氏の新躰詩「つぼ菫」を右に掲げましたが、右は今より十七年以前の作で、實に新躰詩の起る第一期の作とも云ふべく、同氏の新躰詩集「新調韻文青年唱歌集」(二十四年八月出版)に出て居ます、なほ左の添書がありました。

この篇は明治二十三年四月三日の國民の友に出したもので、實は俗語雅語烹交ぜの野心で作つたもの。が、いくらか誤植もあり、よし無いともうまく烹交ぜても無かつたことゝて、その後、出版月評に於て花月子にそれらの趣をも評されました。其仰一々御最、今になつて一年を經、全く他人の作に對するやうな心を以て「つぼすみれ」を論じて見れば、いよ〳〵花月子の評、すなはち烹交ぜのわるかつた趣をも悟り、終に再び又筆を加へました。が、元が烹交ぜを望んだもの、之れを全く雅調にするにも未練があり、それから重立つた處だけを改め、依然としてやたら漬は、やはり、やたら漬にして置きました、他日の思ひ出のためとて此篇に限り、故らに原作をも示しました。即ち(　)の中の語句はいづれも原作のです。

右のやうな添書があつて、本文の詩は右に載せました通り、一字一句も違ひません、初めて是を讀んだ當座は如何にも變な新躰詩のやうな意がしましたけれど、今日から見ると、美妙君の大膽な企圖がなか〳〵面白かつたのです、若し其儘進んで來たならば、今日は何か成功した詩形が出來て居たらうと思ひます、惜い事でした殊に俗語、雅語を交ぜて詩を作らうと考へたなどは、意見として立派なものでした。なほ山田美妙君の作には感服に値する作が少からずあるので。右の「つぼ菫」が載つて居る「青年唱歌集」と云ふのは、第一、第二の二冊あつて、米仙の美くしい繪も挿んであり、横本で和綴の可憐な集でした、今は鳥度發見し難いてせう、第一の方には美妙君自らの作を蒐め「蒙古襲來」「故鄕の山」「るうまにあ軍歌」など歌つて面白い詩もありました、第二篇には「つぼ菫」の外に「ありんすどおたあ」の譯などが面白いやうです、二篇には美妙以外、當時の青年男女の新作が澤山に載つてありました。

花瓣

河井醉茗

菫

紫の菫が白の菫に問ひました、

「あなたは何うして紫になりませんでしたか、紫は詩人が讃美て、曉の雲の色だとも云ひます、山の色も紫でせう、海の色も紫でせう、夕暮の空の色も紫でせう、紫ほど派手やかな好い色は外に無いとおもひますのに、同じ菫でありながら、何故あなたは白くてゐらつしやるてせう。

白の菫は

「だッて白いのは私の性質ですもの、仕方がありません。

と淋し氣に答へました。

沈丁花

霜除の藁の陰に、靜かに咲いて居た丁子の花は斯う思ひました。

「私は人の氣の附くやうな姿でもなく、又誰の目にも着き易いやうな色でもない、知らぬ人は花が咲いて居るのか居ないのか、それさへも分るまい。只一つ、香と云ふものを直ぐ覺る人は、屹度私の傍へ來て、何とか彼とか言ふ、色や姿を愛する人は澤山あるけれど香を愛する人は一番少ない、私も近づきが一番少ない。

櫻

櫻の花片一つ、風に吹かれて地にも落ちず、舞ひ舞ふて、遠い空を上つて行きますと、立派な姫神に逢ひました、櫻と神樣とはお話を始めました、先づ姫神が仰やるには

「やよ櫻、能く此邊まで來た、暫く遊んで行くがよからう。

「ありがたう存じます、斯う云ふ所へは初めて參りました、もう地へは下りられないでせうか。

「下りずとも宜い、私はお前達を守つて、早く散るやうに、散るやうにとしてやる、咲かせるのは私の力てはないけれど、散らせるのは私の思ふ通り、美くしいものは早く散るが宜い。

「まア左樣てございましたか、私共は今まで、散る

のを風や雨の仕業だと許り思ふて居りました、散らす神樣には初めてお目にかゝります。神樣がゐらつしやらなければ私共は何んなに苦しいてせう。

百合

順禮の親子が山路を歩いて居りますと、山百合が咲いて居ました、其傍て休みました、

「おッかさん、此百合は何故斯んなに俛首て居るだらう、少し起してやらう

と、子は百合の花を上に向けやうとしましたが、直ぐ元の通り俛首て了ひました、母は笑顔に、

「おゝ好い子よ、百合は優しい花だから俛首いて咲くのてせう、起さなくとも宜しい。

「あゝ、おッかちん、斯んなに露に濡れました。

「露、左樣てせう、露は花の涙てす、優しいものは花ても何ても涙を持つて居ます、サア休んだら行きませう。

順禮の親子は立上りました、又そろ〳〵と山を上つて行きます、百合の花は二人の後を見送つて、矢張俛首て居ました。

お話し上手

坂下頽花

▲十數年前に私は屢次故森田思軒先生に會ひましてよく文藝上のお話を承はりましたが、私は其文藝上のお話よりは、先生が他の文士に比し一出色の點ある事を知りました、先生は非常にお話し上手の人でありまして、その又お話が社會の多方面に渉り、能く生活現像の問題に接觸して、何となく人をチャームする力のあるのに驚きました、

▲會話の巧拙は文士に關係ないかの如く思ふ人もありませうが、私は重大なる干繫あるものとして、文筆にたづさはる諸孃に御注意申上たいのてす。

▲無論歐米ては、たとひば交友社會に出入する男女がウイットを縱にし、若くはユーモアの才を揮ふ時は、それが直ちに文筆に傳はつて一種の文學となる位、要するに外國は其文學といひ文章といひ、我國の如く單に文章專門の人のみの書たものを指してはをらぬ、イヤ其範圍は廣いのてあります。

▲技工及び思想は文學の上に於て必らずしも優劣す

べきものではないが、これを涵養洗錬するには、前後がなければならぬ、思想といふものがなければ、技工の必要もないのです、世に如何に技工の天才があつても思想が陳腐なら、所謂其處に生命がないので、剪綵の花錦屛の餅でありませう。

▲扨又此思想といふものを涵養するのには、大略讀書と社交より得たる智識を融和陶冶する事でせうが、寧ろ其思想を吸收する分量に於ては、後者を重しとせねばならぬ、讀書より得たる思想は兎角抽象的に傾き易い、固陋に流れ易い、迂濶に陷り易い、之を巧妙に應用し活用して行くのは、社交的智識にあるのです。

▲詩文といひましても、矢張り他の美術、建築もしくは商工品の如く、人間生活に伴つて現はれ來るものですから(多くの場合は)所謂文學者と稱する人々が、今日の如く兎角高標清榜して同業者以外殆ど門戸閉鎖の主義を採つてをるやうでは、迚も永續して立派な作品を得ることが出來まいとおもひます、如何によい技工の手腕がありましても、其思想に於て涸渇してをるからは、示すべき文字のないのは當然であります。

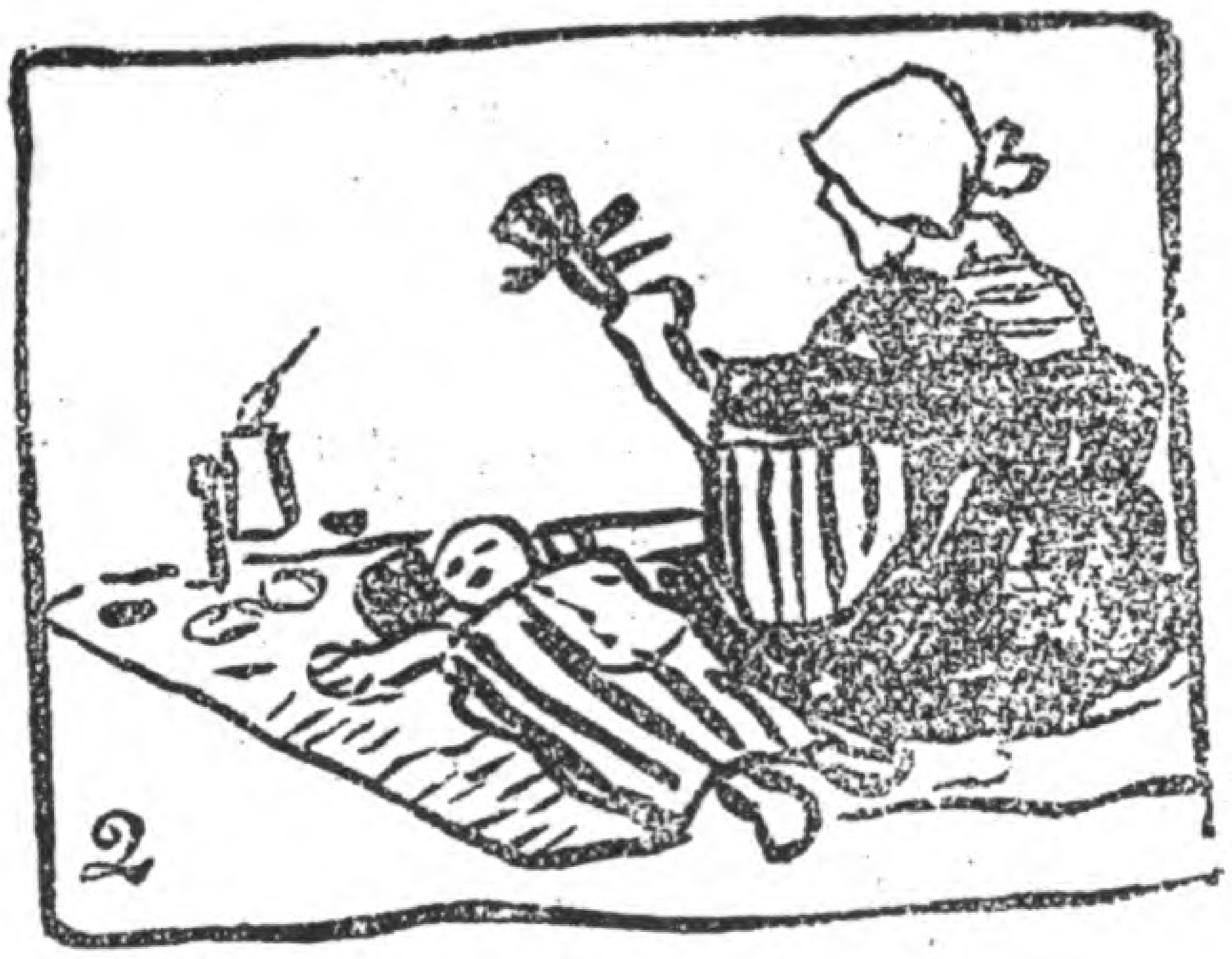
▲私は文筆に志ある諸孃に向つて、遠慮なく交遊社會に出入し、何れの方面の人たるを問はず、智力を磨き思想を養ふの機會を得られんことを望むのであります、會話は實に人生の眞の樂みなるのみならず、心と心と相觸れ、言ふべからざる一種の趣味と一種の智能開發力を有してをるものであります、コンバーシエニストは歐米では文壇の一位置を作つてをる位、淸新なる思想を有する諸孃から品位ある會話を作つて頂きたいものです、お話し上手になつていたゞきたい。

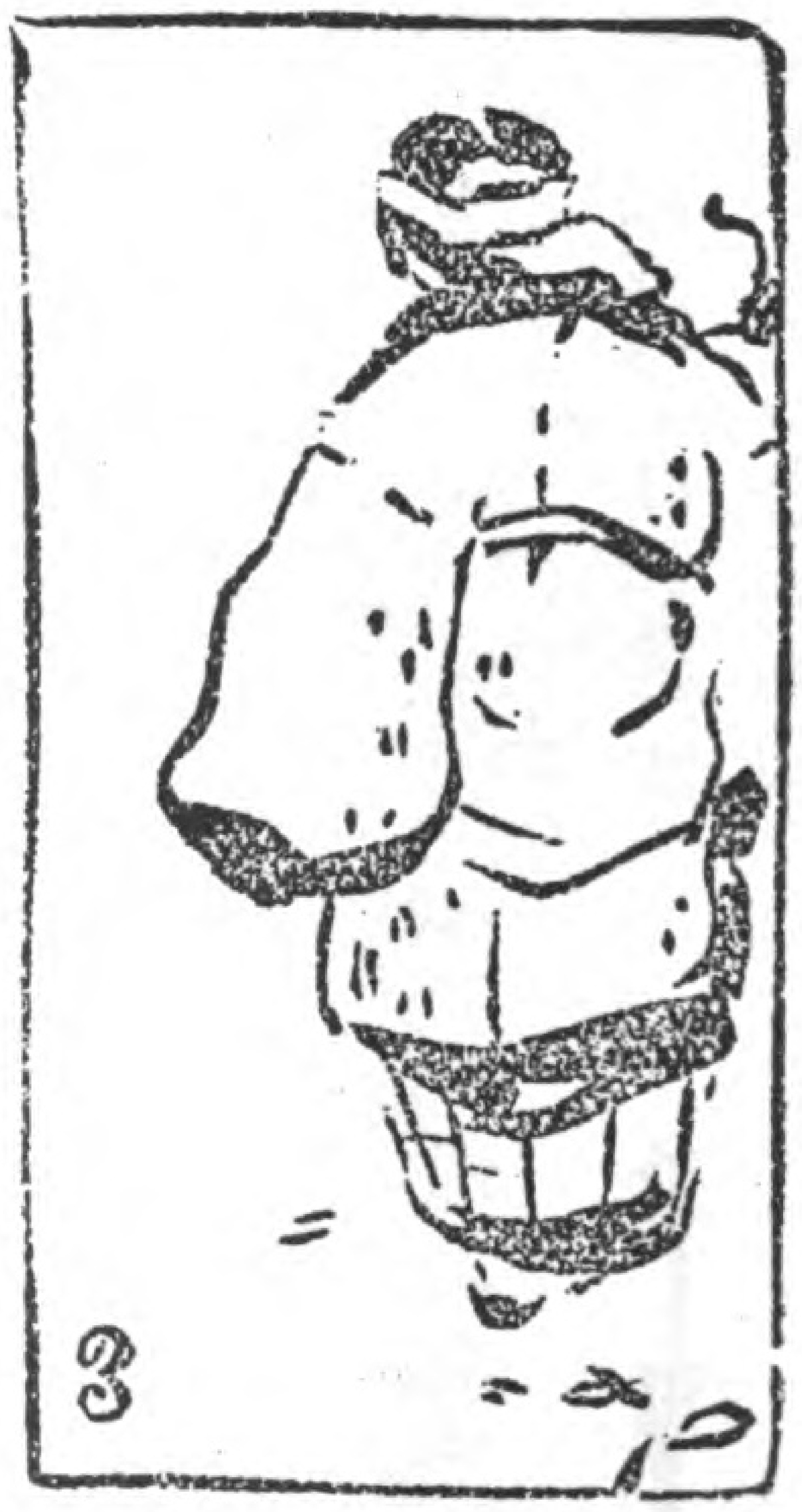
▲如此會話の事に就いて私の申上ぐる理由は三つの希望を文壇に屬してをるからです、一は大勢既に定つてをる言文一致體を漸次品位あるものに進むる爲めに其素地を作りたい、二は文筆にたづさはる諸孃が實社會の觀察を精細にし思想を豐富にして欲しい、三は歐米の如く我文壇の範圍をひろめて淸新の氣風を鼓吹したいといふ事であります。

▲社會に於ける女性の地位は、昔日とは違ひます、人の指目を恐れて交游社會に出入することを躊躇する樣では、迚も理想的の地位に向進する譯には參りません、朱唇一たび動けば忽ち滿場の視聽を惹いて花やかに品位ある會話の、翌朝の新紙に移されて、直ちに一家の文となるも愉快の事でありませう。

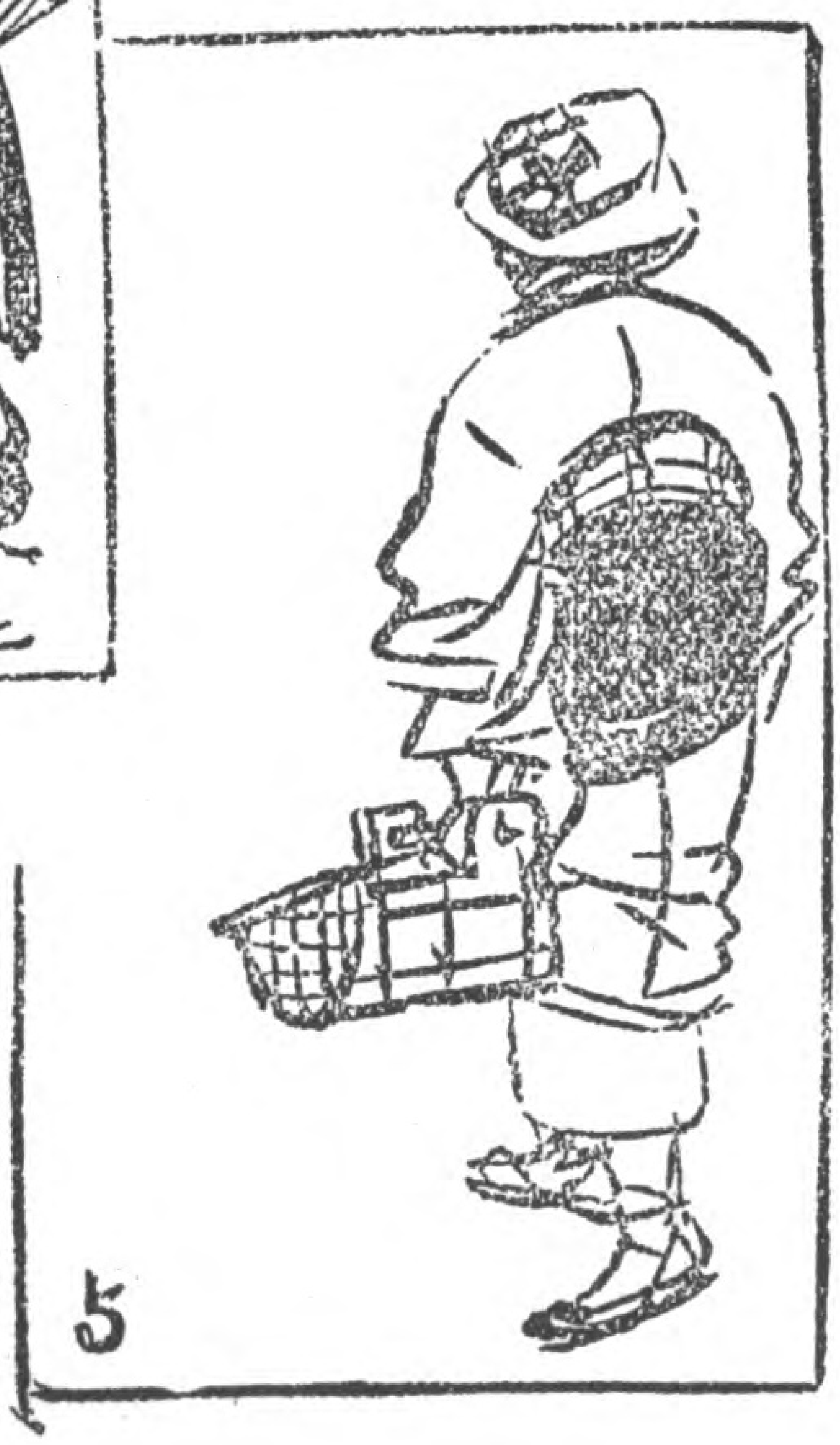
懸賞當選圖畫（三） 山中古洞先生選











(1)○聞く人（三等） 小樽色内町六一岩谷 綠子

(2)○夜さむ（四等） 岡野さかえ

(3)○子守り？（四等） 失氏名

(4)○月下（五等） 長門萩 小國敏子

(5)○金魚賣（五等） 京都市萬壽寺通高倉西奥村方 林きよ

詩人の面影

▲世間では詩人と云ふものを何う解して居るか知らぬが、隨分間違ひがあるやうで、或る一派の人は詩人と云へば女の腐つたやうなもので、活動の役に立たぬ、頭から悲觀する泣蟲のやうに思つて居る、又所謂星菫黨なる渾名の下に、女學生の親類のやうに思つて居るのもある、又詩人と云へば染物屋の物干の先に止つて居る鳥のやうに、高い處で獨り澄まし込んで居るかの如く考へて居る人もある、處が皆違う▲詩人を概觀して其態度を評するのはむつかしい事でもある。讀者諸濟にも其れ程面白く感じられまい、寧そ二三人の詩人の面影を此處に書いて見やうならば▲薄田泣菫君は目下、京都に在り、昨冬新婚をした、君は五六年以前の花やかな若々しい態度が取れて、沈着いた口數少ない人になつた▲蒲原有明君も昨年新婚をした、君は其初め一見して羅漢の如き人であつたが、話振の表情に富む事は稀に見るほどて、能く此人が彼れだけ深い考へを持つて居ると感嘆せしめる、以前の君は扮粧なども極く無頓着な方で、夏の最中に古色蒼然たる中折の冬帽を冠つて歩くなどは珍しい方ではなかつた▲窪田うつぼ君も話の上手な、優しい人で未だ書生々活をして居るが名利に淡い人で、一向其方には氣を揉まない、詩の外に文章も旨いけれど、比較的世間に知られないのは其野心を抱かぬ故でもあらう▲與謝野鐵幹君も亦一方の才人て、兎角敵を持つ人であるけれど、「明星」の爲に獻身的に働いて居る、「明星」の爲と云ふより詩の爲と云つた方が好いかも知れないが、新詩社は始終一貫して詩の爲に盡して居ると云ふのは確かだ▲岩野泡鳴君は元氣の好い人て、君一度笑ふと滿場搖ぐばかり、熱つぽいやうな處も確にある▲兒玉花外君は詩人肌の人だと何人にも云はれる、詩の趣向は歩きながら考へるさうだ、酒に醉ふと世を罵り、人を罵る（）が癖であつたが近頃ふつつり止めたは大勇猛心のわけだ▲溝口白羊君も詩人肌の人だ、君は自ら己を歌はないから世間には何とも解されないが、今後の發展次第で有力な詩人の一人となるであらう、人づきの好い方でないだけ質實である▲横瀬夜雨君は皆樣御存知の通り、月波根詩人の名の下に常陸の野に臥して居る、最も氣の毒な詩人、歩む事すら自由でないのだから、君の慰藉は詩と家とあるのみ。

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

○秋の日の記

愛知　荻雨女史

六時、村には朝餉の煙、川には霧、有明が淡く西に傾いて、岸にはお彼岸花が眞紅な鮮な影を水に落してゐる。雛の聲、虫の聲、百舌啼く村には柿が黄く照つてゐる。夜の扉は音なく開けて、四邊は朝すべくいそがはしい、小川の岸に立つて朝日を拜む農夫の息が白い。七時、街道には運送車が三輛、其の内のどれかが唄ふ馬方節が朝の空氣を搖ぶつて響き渡る。日向に眠る猫の眼が細い。

八時、裏の椋の木へ椋鳥が來て、ぼつ〳〵と死を打つ種の音がする。やがて近所の子守が走つて來て爭つて拾ッてゐる。六つになる弟が表へ出て、「ワッワッ」と大きな聲を出して追つてゐる。

九時、小蛇がちよろ〳〵と道を這ふ。野にはキラ〳〵と鍬が光つてゐる。畑道には六つ許の男の兒が三人、新しく造つた畑ぐろの未だやはらかなのへ、小石を投げて喜んでゐる。日當を通ると茱萸の花が香る。

十時、淺黄股引の商人が椽端に眞仰向きになつて、今來た新聞の小説を聲高によんでゐる。母がそれに甘藷かうみたから御上りなさいと云ふ、商人は遠慮なく食べる。子供を連れた女乞食が來た、一厘錢をやらうとすると、甘藷を下さいと言ふ。

十一時、繭煮る香がする。裏の垣越に座繰の音がする。それに合はして歌の聲も聞える。包みを脊負つた工女らしい娘が、何所かの嫁さんに、花田町へ行く道を尋ねてゐる。

十二時、午砲がなつて、野には百姓の影が見えぬ。垣添ひの道を歩むと、鰯を燒く匂ひがする。

一時、垣の破れ間をぬけて、其處に遊んでゐた雛を驚ろかして、瘠せた灰色の斑猫が、道の眞中でノビをして大豆畑の中へ飛び込む。急に蝗虫がバラ〳〵飛ぶ。

二時、とりかぐらの太皷の音がして、それを見る爲めに近隣の子守がバタ／＼とかけて行く。向日葵が稍西に傾いた。

三時、學校の生徒が唱歌を歌つて過ぎた後、霎時して向ひの村で鉦の音がする。黃ばんだ田の中には、農夫が案山子をたてゝゐる。

四時、やゝ傾いた日に輝いて、前栽の木の葉が若がへつて見える。柿ある家から臼の音が眠たげに聞える、野菊さく流れには、赤い襷をした娘が芋を洗つてゐる。

五時、野へ出た人、市へ行つた人、などが話しながら歸つて來るのが見える。村には夕餉の烟が靜に登つてゐる。百舌の夕を告ぐる聲！

（評）時々刻々悉く詩なり畫なりこの文は全躰に俳味横溢せりしかも些の工夫の痕無く目前の物を譯なく寫し去り寫し來る所感ずべし感ずべし。

○家庭の夕暮

靜岡縣藤枝町　薔薇子

終日のつとめに疲れた夫の澄夫は、今しも漸く自宅の玄關に戻りついて、埃にまみれて稍光澤のくもつた赤革の靴を脫ぎ捨てるのであつた。勇ましい門鈴の響にそれと、逸早く出迎へる新妻の加代子は、若々しい血汐の頰に、あてやかな笑を浮べて、多く口數きかねど溫い目色顏色、まづ結ぼれた夫の心を少なからず和らげるのであつた、軈て夫は部屋へ通つて、上着をとる、ヅボンをぬぐ、後ろから加代子がふうわりと重ねた飛白の二枚綿入を着せかける、白縮緬の兵兒帶を無造作にぐる／＼と巻きつける　まづやつとこつちの物と云ふ顏つき。桐胴の丸火鉢にカン／＼起されて、紫がかつた焰を吐いて居る炭火の側にゆつたりと胡座をかいて、甘さうに葉卷を一ぷく、碧い香しい烟は口髯の間からもや／＼と立のぼつて室内にたなびく、處へ加代子が茶を入れて持てくる、濃い熱い茶、それを眞心籠つた手に酌んで出されて、一息にのみ干した澄夫は、外のかわいた、冷たい空氣にあたつて、腸迄もひえきつた體が、一時に蘇るやうに思つた、斯る時の煎茶のうまさは別である、加代子はおきき勝手へたつ、澄夫は獨りさしてはつぎ、ついでは飲みして居た。短かい冬の日足はいつか暮れそめて、手許は薄暗くなつてきた。台處では加代子が下婢を督して晩餐の支度に忙しい、味噌をする音、肉を叩く音、かんばしいあぶらのぢわ／＼煎りつくにほひは、間をへだてた座敷に迄通つて來て、空腹で居る澄夫の鼻を打つ、やがて次の間に燈火はつけられた、加代子が出たり這入つたりして膳立するけはひがする、まもなく「貴郎、お夕飯に致

しませう」と報じてくる。手際よく並べた食卓の上には、榛と白との腹に處まだら味噌のつけられた鯰のぎよでん、畑の出て居るチキンシチウ、紅い胡蘿蔔、白い馬鈴薯、何れも妻が心つくしの手料理だ。「大層ご馳走ができたね」ほゝ笑みながら洋盞をあげると、妻はビールを拔いて酌をする、まだ白の胸當をとらぬ、「今牡蠣のフライが出來ますから……」と妻は再び勝手へたつ、程なく柚子を添へた皿は持來られて、胸當もとり去られた、澄夫はもう陶然となつて「ご飯に爲よう」。加代子は二つの茶碗に、たきたての熱い、いきの出るのを盛る、同時に箸を把て、骨離れのいゝ鯰の肉を味ひながら澄夫は徐ろに、今日會社での出來事を語り出す、加代子は微笑を含みながら熱心に耳傾けて聞いて居る、其間不安もなければ曇りもない、あゝ何たる樂しい晩餐であるよ。かくして澄夫は一日の疲勞を忘れて、またあすの活動に資すべき、あたらしい血しほをつくるのである。



改良服（選外）　栃木　波ぎ子

（評）描寫、微に入り細をうがつ。恐らくは是れ作者が理想の家庭。

○湖のほとり

堺市大濱通四丁目二八　竹叟文子

あか〱と燃えたる夕陽は既に沈んで、東の山はうす紫に夕暮の色に下界を包まむとして、徐ろに迫つて來る。この時自分はとある社の丘の上に、銀杏の落葉を踏んで佇ずんだのである。

あゝ實に靜かなる眺めである。この丘の上は大きな公孫樹が只一本、矗々と雲をも突かん斗りに聳え立つて居るのみ、それも最う皆落葉を盡して彼の枝に二つ三つ、此の枝に五つ六つと數へるばかり殘つて居る。梢を見上ぐると灰色の雲が寒さうに、ちぎれ〱に西へ流れて行く。麓は一面の櫟林で大抵は枯れて居る、その上に滿々と水を湛へた靜かな湖が見渡されるのである。

秋の湖！名を聞いてさへ靜寂の氣が迫る樣である、況して枯木の下に落葉を踏んで、目前に秋の湖を見下ろ

して居る、而も夕暮である、うすら寒い湖の風が颯と吹いて來ると、櫟林の梢をサラ〳〵と渡つて、落葉が一荐り時雨する。銀杏の一葉がヒラリと胸に觸れて、輕く音も無う地に落ちる。

四邊はもう淡う暮れ初めて、露でも降りたやうに瞬平として、湖はその中に白うほのめいて居る。

自分はこの靜寂の氣に堪へ得られないで、丘を下りて林を衝と走り拔けた。

こゝは湖の際で曲つた古い松が五六本生えて居る、小さな破舟が松につないである、其外には目をさへぎる物もなく一面の草原で、細い徑がうねり〳〵遠くつゞいて居る。

自分は松に凭れて湖の水を熟と瞶めて默想に耽つて居ると、落葉を踏む音が幽かに聞える、はつと思つて振り向くと小さな人の影が二つ、此方を向いて歩いて來る。小さな二つの影はだん〳〵近づいて來た、すると不思議や啜り泣きの聲が聞えて來る、何だらう此んな淋しい處へ……自分の胸は怪しう轟き初めた。

二つの影は愈々近づいて直ぐ前を通り過ぎようとしたので、見ると小さな順禮姿の姉妹である。姉らしいのは十四五で妹は八つか九つ、淡汚い白衣に身を包んでまだ歩き馴れぬのか、二人乍ら足を引き摺つて居る。寒さの爲めか飢ゑてか妹は啜り泣いて居る、姉はなだめるやうにして……。二人とも自分の顏を見上げた、愁ひあり氣な面を擡げて、而もその眼には涙浮べて……。あゝ哀れ……。その一瞬間に自分の胸に云ひ知れぬ悲哀の影がほのめいた。

順禮の後についてその身の上をとつおひつ思ひやつて家まで歸つたが、二人の姿は闇の中をとぼ〳〵歩いて行つた。

あゝ今夜はいづくに宿るであらう。その夜順禮の姿がちらついてなか〳〵眠られなかつた。

(評)　湖の景はよくも寫されたり末段は全く順禮ばかりになれり、終にやはり主たる湖を說いて結んでほし。

秀　逸

○お見舞

下谷　太田秋津子

寢覺の耳に電鈴の響きけたゝましう、何かと胸を騷がせて居ると、師の君が昨日より急の御病氣で御危篤との事、友なる方からの御通知。

朝餐もそこ〳〵に吾家からは僅二丁餘りの師のお住居途すがらも心のみ急がれて、どんより灰色に曇つた空のけしきも厭に陰氣に、總てそこら中一躰が悲しい秋の色を帶びて、身に迫る朝の氣もひや〳〵と、何となく心淋しい。師の御住居の前には主を待つ俥が二輛、

胸を轟かせ乍ら格子を開けると、土間には靴や下駄が五六足計り、玄關へ顔を出したのは矢張お弟子の千代子さん。玄關の次の六疊には知らぬ顔の方も交つて四五人いらつしやる。御挨拶して居ると奥さんは出て入らした。どう云ふ御病症てと伺へば、腦卒中てすが何しろ急てしたからと見るから御心痛が察上げられる。腦卒中、ふと恐ろしい想像が電光と私の胸に閃いた。まあ此方へ、今醫者が來て居りますからとお居間の次へ導かれると、お蒲團の端がほの見えて、襖越にどうも五日間は六ケ敷てすなと醫師の聲。撥と強く胸を搏たれた樣に感じた。ぢや又來ますすと歸られる醫師を奥さんは送つて玄關迄、一人の白衣の看護婦が、鞄を持て其跡から。窃とお居間を窺いて見ると、師には姪の龍子さんが松田さんと二人お床の裾の方に、も一人の看護婦が天井から釣つた氷嚢てお頭を冷やして居る。どうぞお構ひなく此方へと松田さんが被仰るので、ずつとお枕元に寄つて見上げると、お眼は開いていらつしやり乍ら、どんよりとして瞳動かず、お傍へ寄ても一向お分りにならぬ御樣子、お切ないのか時々お身體をお動かしには成るが、もうまるで人事不省、宿世いかなる縁しあつてか此世に師とし仕へ慈みを受けた方、息通はせ給ふ間の御目もじも早これ切かと、森とした室の内に云ふ方もない淋しい悲しい氣持がして、私は黯然と低向いた。

（評）當時の情想ふべし。

○夕ぐれ

上毛　つぎ子

今しも太陽は、丁度いつぞや繪て見た北海の氷山の樣な形して重り合つて居る秩父の峯の上、五六尋の所に止まつて焔と燃えて居る、影法師は馬鹿に細長く、畔を越えて向ふの田の麥の葉の一二寸に成つて居る上迄達して居て、妾が鍬を動かす通りに動いて居る。淺間山から絶えず吐き出して居る白煙は、妙な形して長い／＼尾を引いて、末は赤城山の方から一直線に引いて居る灰色の鱗雲に續いて居る、榛名山と赤城山は、丁度霞か、薄絹を張りつめたかの樣な夕靄の中にボンヤリとして聳えて居る。夕風が、がさ／＼と桑の枯葉を落して來て、颯と横顔を拂ふ、其の心地は丁度千本の小針を身體へ射込まるるかの樣、冷たいのか、痛いのか、思はずぞく／＼と身震が出る。野中の一本杉とて里に名高い道祖神樣の杉森には、雀が寄り集つて來て、耳が遠くなる程噪ぎ立てゝ居る、又お天氣が變るのかしら。角兵衛獅子の太皷が、ドンと一つ、眞紅に彩られた森

影に響いたかと思ふと、小さな獅子舞が二三人前の小村から走り出して來て、そして親方と一處に町の方へ足早に町の方へ行つた、大方今夜は木賃宿にでも一夜の夢を結ぶのだらう、太田中學校の生徒が三人、三十間計り前の田甫道を通つた、二人はラッケットを振り廻しながら一人は何か雜誌らしいのを見ながら、引き續いて醬油德利下げた十二三の女の子が二人さも寒さうに通つた、

耕地整理の人足の終業を報ずる拍子木が鳴り出した、少し過つと、三々五々袢天被つて腕組して何か話しながら踊つて行く、大方居酒屋へでも行くのだらう。

始め小さく目眩しい光り物であつた太陽は、次第々々に沈み行くに從つて大きく赤い圓い者と變つて、山の端に半圓形に懸つて、丁度龍田姬がひるがへした裳か、血潮に彩られたかの樣な、八幡山の櫨紅葉に數千の征矢を投げ懸けた時の裝ひは、一時にパッと燃え出した焰かの樣、其の麓の小徑を縫ひ行く馬追ひは丁度焰の中を行くかの樣。

淺間山の頂に寄り集つた鱗雲は眞紅な夕榮に彩られて丁度緋鯉が逆に泳いで居る樣である、妙な形をして、ふわりと浮いて居る根なし雲は、半面は眞紅に、半面は紫色がゝつて中天をさまようて居る、それがだんだん薄れて來てオレンヂ色となり灰色と變つて四隣は薄暗く成つて、狹い樣な淋しい樣な何となく妙な心地に成つて來た、

今迄、ボンヤリとして居た弦月が薄淡く光つて來て、次第々々に光を增す每に、自分等の影法師もだん〳〵はつきりと現れる樣に成つて來る、早や、東北の空には二三の夕星がいそがはしげに目ばたきしてゐる。

（評）雲を描く、精巧。

○妾が實家

山口縣　坂田芳子

殘の梅が香、まだ失せやらぬ今日、妾は實家を訪ふべく、今し村の境川の土橋を渡りつゝあるなり、小川の水は滾々として、永久に竭きざるが如く、岸邊に育つ、綠りの草は、暖かさ、女神の、裳の風に弄られて、彼方此方になびきあひつ、又來ん春を樂むが如し。

彼方の、周圍に白壁を廻らせたいかめしき造作の家、そは妾が實家なり。

傍への、梅の細枝手折れば、香りゆかしく。妾が袂に、匂へる……。一片は散りてゆるやかに、水面を、流れ流れて、何所までもと見てあれば、哀れ誰が惡戲か、竹の一本橫へてあり。

「おゝゆけよ、」と妾はそを取上げつ、一片の梅花に見いれるなり。

あゝ慕はしの梅花よ、永久にゆかしき、其香を送れ。

＊　＊　＊　＊　＊

朝、葉末の露踏みて野に立てば、萬里一碧瑠璃色の維

には、黄金、銀の星、いとも美はしう、鏤められて、さら〳〵と、葉末の露轉ばす朝風、いと凉し。妾は昨日實家にゆかんことを望みしに、何故か母は許したまはざりき。

是非と數日前より待ちしかひもなく。淋しき今日の一日は暮れぬ。夜半見し夢を思ひては、愈々實家の戀しく、遂に許しを得て、養家を出てぬ。程遠からぬ境川の土橋はこゝ。水は涸れ四方の緑りはあせて、過ぐる頃流しゝ梅花の今は金色の葉と變りて、礫の間を縫ひ縫ひ。傍の山を見渡せば、疎らに楓のいとも紅うなりまさりて、興上のそれより、紅葉の散りてゆるやかに妾が掌に入りぬ。徐かに涸れし水面に浮べて。

「妾が歸り來んまで玆に止まれ。」

周圍の塀は打ち碎されて見る影もなく、數多の庭木は何所へか運ばれて痕かたもなう、只茫々たる枯草の秋風にさらはれて、そよ〳〵と、淋しくなびくのみ。春、梅ヶ枝携へて、妹に導かれて門を入りし時のそれと、今の、あまりに變りしをいぶかり、暫時ためらひながら閾を超せば、母は憂の籠れる眼光にて迎へぬ。三時間餘にして家を出てぬ。

蓊鬱として繁れし、四季の草木は取り去られて、痕をとゞめず、只庭先の銀杏樹のみ、ひとり取殘されて、金色の葉を送りては、徒らに妹の手を煩はす、心憑さよ。

「哀、此家は既に里人の手に落ちて、借家とこそは、なれるなれ。

（許）うつゝを夢と思ひけるかな。



お掃除（選外）　常陸　酒葉つれ子

○田舍の秋

芝　川島たつ子

秋の夕は實に寂びしいね。殊に都遠くかけはなれた田舍はまた格別である。

かしこの松原、こゝの森よりたち昇る白い煙が遙か野末に棚引いて、其の上に紫に綠を交ぜた樣な山がうつすり浮ぶと、今迄野邊に働いて居た農夫は一人去り二人去りて、いつかとつぷりと暮れてしまつた。どこからか、打絶えがちに響く尺八の音は、遠き近き田家の秋の聲を綴つて、絲よりも縷よりも幽かに、宛も立田姫がうたつてる惠の歌の樣に聞える。それも止んだ。時々澄み渡つた大

空を鳴き行く雁金の聲は、宛も旅にある人の消息をさゝやく樣にも聞える。併しそれもいつか聞えなくなつた。夕風は颯と穗芒に白い波をうたせて遠くの方へ消えてゆく。

（諦めさんせよ別の風だ何日又逢ふやら逢はぬやら）

夢より淡くうちけむつた松原過り、續いて起る鈴の音、清らかな天地に響いて。薄墨の松原は更に霧が深くなつた。

默想多時、ふと氣がつくと芝生の上にうつるわが影法師。磨ぎすませる鎌形の月は今鎭守の森の一番高い松が枝に、浮かし彫りにしたかの樣にかゝりて、天の神秘をさゝやいて居る。

橋を渡つて右に折れ、流れに添うて行くと千草風を帶び白露玉と散り、深くつて淸き水、靜かに葦の影をうかべ、眞菰の枯葉を浸して徐ろに流れてる。黄になりて頭をたれた稻はこの月下に誰れをか招く。月は水に碎け、水は之を弄び、散りて亂れて水草にゆらぐ。月愈冴ゆると風は愈冷やかに。網綠にふるゝ棹の音、棹取る人は葦間にかくれて見えないが

（思出しては泣く夜が御座る泣いて明した夜も御座る）

一節の美くしい謠聲が、水の上をかすかに渡つて、胸をこそぐつて消えて行くのである。

あふげば山はおぼろに霞んで夢見る樣。しつとりと夜露にぬれた風は襟を吹いて身の毛のよだつ許り。寂寞!!、又寂寞!!、平和の田舎は今夜の餌となつた。

（評）假託一段の趣を添ふ。

○初茄子

姫路　三木喜代子

父上より萬事世話せよと委かされたる十坪あまりの茄畑、丹精の甲斐ありて濃き紫きの色あざやかに、二拾個餘り實を結びたればいとたのしく、今日も水遣りを終りて、夕餉の副食物の料として七つ八つ折笠に入れて斜陽西山に搞く頃持ち歸りぬ。

母上と共に夕餉の仕度に取りかゝりぬ。仕度萬事調ひて行水の湯も沸きたる頃、父上、兄上野より歸り給ひたれば、數多き木や草花もて自然に出來し生垣の柳靑き下の井戸端にて、盥に湯を汲み取れば父上より兄上、兄上より母上と順次行水終り給へばいざ妾もと、右の頰に木間より洩る美はしき夕ばえうけて身を淸むる程に、何にやらん盥の中にうつりしものあればいといぶかしく、身を靜かに見れば十三夜の月のうつり居たり。

斯くて母上の促かさるゝ儘行水終れば、水入らずの親子四人、差向ひに夕餉の膳に向へば煮茄のぼりて、父上には御酒の御肴にとて燒茄を進むれば殊の外喜び給ひて、喜代の丹精どうかなと箸を取り給ひ其美味と丹精を賞し給へば、いと嬉しく皆々舌皷ならしぬ。

（評）趣味ふべし。

○我が町の夕暮

名古屋　宮地すみ子

今しも時計は五時を報じて早や夕陽は西の山に沈まんとする黄昏時。隣りの鍛冶屋のチンカン／＼も聞えず眞黒になつた恰度印度人の様な顔に白い目ばかりパチつかせて。其處此處と破れた小倉服の油ににじんて黒びかりのを着て。汚れた風呂敷に大きな辨當箱を下げた職工二三人づゝ一組となつて。さア是からは自分の體と云つた樣にニコ／＼と白い齒をむき出して。ガヤ／＼と高聲に話して行く。

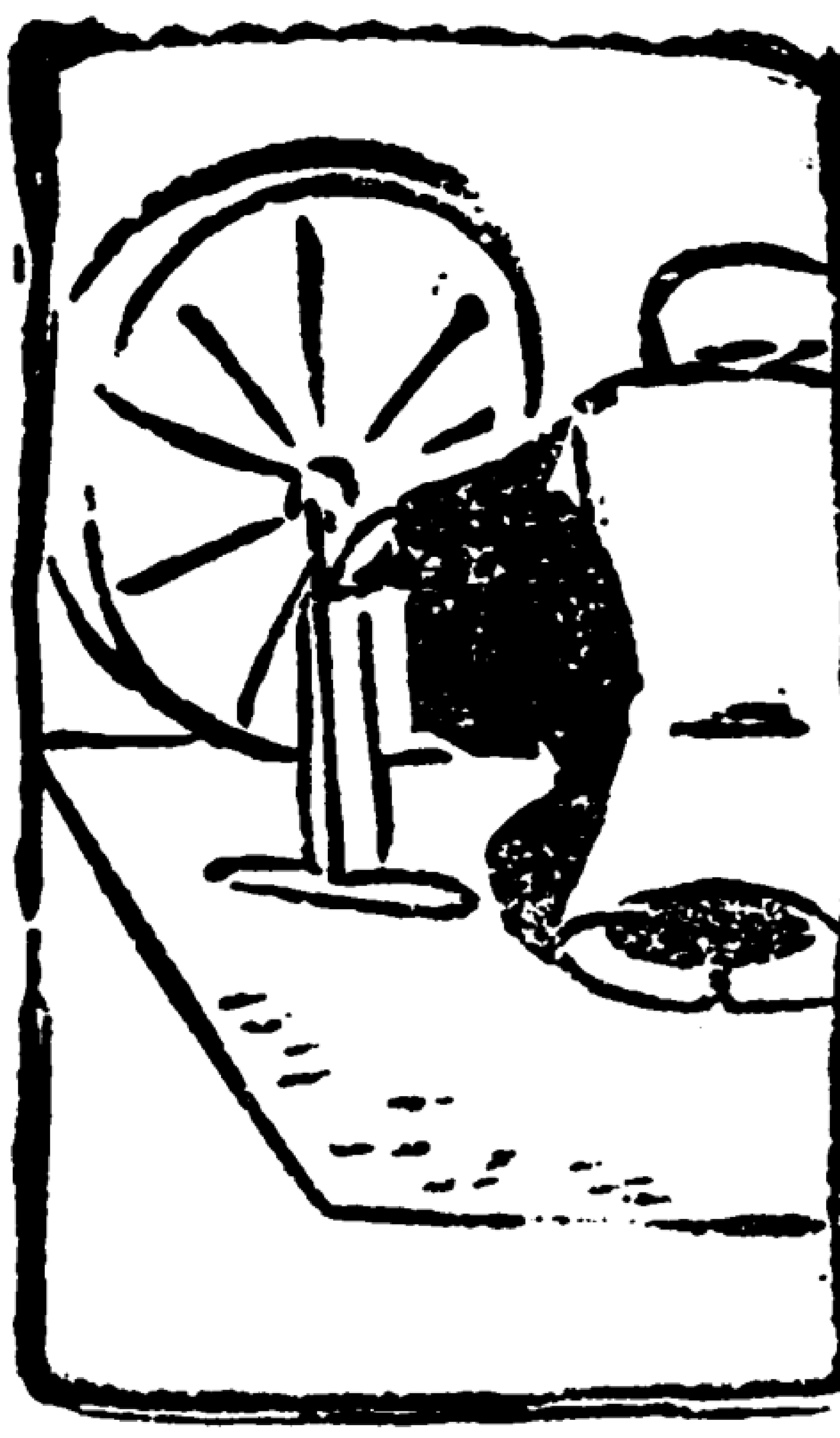
向ふの角の酒屋から愛けやうのある眼のパッチリした十一二の子が正宗の五合瓶に半分計り酒を入れたのを以て「君の惠みにくうらぶれば富士の高峰も高からず」と面白さうに唱歌を歌つて來た。筋向の湯屋から脊に丸仙と大きく染め拔いた紺の袢天を引つかけた三十計のぼつてりと肥えた意氣な勇み肌の男。ゆで蛸の樣眞赤になつて手拭を絞りながら。ゆたり／＼と出て横町へまげて行つた。暫くすると右手の方で「と――とふイ――」と長く引つぱつた聲がしたので。ふいと其方を向くと又一層調子を高く張り上げて。

「お稻荷さんには燒おかべ……」と歩調面白う。威勢よく呼ばつて向ふの角を東へまがつて行つた聲は次第にかすかになつた「と――の聲が漸々聞き取る事が出來る頃隣のお梅どん。いかき片手に飛んで出て「とうふ屋さん……」と呼んだがもう間に合はなかつた。

お梅さんが失望しては入て行くと高び足臺を肩にかけ。關西點燈社と書いた袢天を着た點燈夫が走つて來てパッと街燈をつけて去つた。

兎角する內に日はトップリ暮れて下女も奥樣も忙がしそうに往來して居る。横町の方て「ピイ……」と按摩の笛の音がした。

（評）細事却て趣あり。



老婆（選外）　讃岐　青葉女史

○汽車ごと

琴の音

ピユーッゴトゝゝゝ……神戸ゝゝ
ビール正宗葡萄酒はいかゞ……
新聞雜誌マッチ烟草――
シッポッゝゝゝ

亦二階の六疊て例の通りお隣りの剛さんとお向ふの婦郞さんとを呼て來て汽車ごとが始まりました。

何時の間に引ずり出してきたのでせうあたしの大事の書物が皆なステーションになつてしまつて汽車のはこは自分達の硯などが並べてあるのです乘つてる御客樣は將棋のこまで座蒲團を二つに折つて立ててあるのはトンネルだそうですそして三人で驛長さんも車掌さんも運轉手も赤帽も辨當屋も煙草屋もまだ汽車の音までするのですから大抵の事ではないでせう。

カチッ……何の音かと思つて見ますとマア東京行と和歌山行とが京都で衝突したのですつて！乘つてるお客樣は跳飛され東京行の硯の機關車は二ッに破れました、けれど便利な汽車ですと一番先の客車は一瞬間の中に早機關車になりました跳とばされたお客樣も中々丈夫だと見えまして死なずに又元のやうに立つて車にのせられて行きました。

お晝からは毎日こんな事をしてお隣りの女中が坊ちやんもう御飯でございますよと呼びに來るまでピーゴトゴトの音は止まないのです。

（評）思はず失笑せしむ。

○日記　備中　静香

九月八日、鷄が二度鳴いたので起きて見ると早や母屋の方では義姉さんがお三どんと朝飼の用意をして居られる、私はお手水を使つたまゝ潜戸を拔けて竹藪を廻つて池の岸に立つて深呼吸をして居るといつの間にかエスが來て居る、私はエスと池の廻りを三度競走して歸らうとした時、太陽が新しい光を放て森羅萬象を照し初めた、其光景の雄大であつた事たら寢坊の小兄さんなどに見せ度い位であつた、準備が出來たから七時半から學校へ行つた、今日の課業は皆んな大好き午前は數學に國語に音樂と理科とで午後は遊戯でジャーマンクワドリールを習つた、授業後は例の運動場の涼しい木蔭で高木さんとクロッケーを戰はして大敗北を取つた、三時過ぎ歸宅す、東京の大兄さんからの美い繪はがきが着て居た其餘白には斯う書いてあつた、常に云ふ通り朝は深呼吸に鐵亞鈴、學校では勉强と運動、家庭では長上に從順に品行をつゝしめと何時でも兄さんの御慈愛には涙がこぼれるのです、四時過ぐる頃から連りに涼風が裏の木立より送られて軒の風鈴を鳴す、裏椽へ机を持ち出して暫く學科の復習にかゝる、先刻まで小兄さんが釣床で何か大きな聲で讀むで居たのにふと聞えない樣になつたと思つたら其著本を顔の上にふせて……精米所の五時半がなつたらあたりが次第に暗くなつたから復習は中止、入浴したら晝の暑さも何處へやら、咲き殘りの夕顔三つ咲く、夕食後は例の音樂のお稽古、今夜は義姉さんがおひまなのでサ

アイオリンと凱旋の合奏をした、この方に趣味のない小兄さんも感服の躰で謹聴して居なすつた、餘興に義姉さんは月夜の曲を獨奏なさる、私は兄さんの注文で廣瀬中佐を、兄さんは藤田東湖の何とやら云ふ詩吟、十六夜の月は東窓からさし込んで此室の三人を照らして居た。

（評）も少し興ある一節あらまほし。

○作兵衛が日記　　優　子

十四日　晴

旭、屋根を洩るに驚き床を出でゝ一駄刈りに行く。初めて稲刈りをなす。

一時頃、祖母が携へたる酒一瓶を倒し眠る、つくつく法師の小便に三時半頃覺む。

十五日　雨

午前、蓑笠にて草刈りをなす、鎌切れよし。

午后隣の權助爺々の處にて遊ぶ、雨祭の御馳走とて、鰻のかば燒に濁酒、味噌汁に米の飯。

暮れ方皈れば正子嬶大明神の蓄音器再び出でゝ原田屋に天目七杯の借り。

十六日　晴

昨日の二日醉ひと惡感情とに、ふて寝をなす、更に大明神の託宣は、雀と共に喧し。

終日ます食を進めず、斷腸の思ひあり。

枕下なる古新聞の端切れ、引き伸して讀むに『無禮の友も絶つべし、不貞の妻も絶つべし』

十七日　曇

朝早くより岩森へ稲刈りにと宅を出で、途中の木の下蔭に、沈思默考。

一猛斷——然り——否——、

七時頃皈れば、まだ足も洗はぬ鼻頭眞正面より、病犬のかみつく如く嗅かれ、猫も虎となりて大喝一聲。

（評）不和を描きたる所ちと激に過ぐるれ他に佳所多ければ。



はふいん（選外）　　神奈川　柚木とよ子

○日記の一節　　[illegible]るり子

病の身を養ふべく暫の休暇をまたお母様に別れて思はぬ方へはしる汽車に乗つた。大牟田までは清見樣御夫婦と御一緒になつた。走り穗の朝風に打ちなびくのを眺めてゐた私を清見樣は淡墨で書たやうな鬚をひねりつゝ見まはして「ほんとに大きくおなんなすつたなあ、私らが年よるのも無

理はない」「まあどうしませうと眞赤になつていふを能もきかないで、「私が國に居た頃はおかつぱさんだつたが……」……渡瀬を過ぐると大牟田迄の人はそゞめくのでふと恥しかつた顔を上ると赤い片家根の建築物がある、オヤ紡績だ、あの側を通つて夕暮に叔母様を御訪ねしたのはもう二年になる、あの時は突然だつたものだからをば様も姉様もおるすだつたつけ……、今あの家には誰が住で居るだろう私がいつも姉さんと腰かけて、いろんなお話したお庭の岩は元の通りにあるかしらん、御家族はとうに某地に引越になつたから……そしてあのやさしかつたをば様はもう某地にもいらつしやらない、此の世にはいらつしやらない。汽車は止つた御夫婦は下車された。

思ひ出で多き四つ山を獨なづかしくながめて居るとやがて長州の海が見えて來た、半干かけた潟には漁士が黑碁石を散したかのやうに幷んでゐる、其向には此人人の羅針盤たる温泉山が白の紗を肩の邊からかけて立つてゐる。いつしか熊本もすぎ八代に下車して湯の宿に着たのは午後の四時すぎ。

お湯から上つて欄によつて潮風にふかれてゐると、とす〳〵とから臼の音がする、源氏の君ならばあの音ぞと問ひ給ふべき處である。しぼんでゐる朝顔が今この音に萎ちた。

お母様へ御手紙を書て切また椽に出るといつのまにか武雄がながめた如き金剛石をまきちらしたやうな空になつてゐる、床の間の「夏の月なきほとは庭の光なきいとむつかしうおぼつかなしやとのたまふ」とやさしう書てある掛物の相應したるも嬉しく淋しうもほゝ笑んで主の心をおしはかつた（八月廿日）

（評）面白し。

○雨後の朝　秋田縣　錦織つる子

眠た坊つちやんを背負て静かに二階に登ると八疊間があります。私は雨後の朝の光景を眺めようと想うて静かに雨戸をあけましたらアラいゝ景色……右手の大平山から左手の森吉山に至る一帶の山續きにかけて昨日一ぱい宿りし灰色の雲が殘てゐて丁度其雲から十六燭の電光の千も集めたやうなお日様が登て來ました。すると其麓あたりは急に霞んで森吉山以下の山々は頭ばかり、只だ近くに禿山と黑い松並木丈けは、ハッキリと見えます。

朝の弱い光線がパッと廣がると同時に直き目の下の目も配られぬ程の稻田は黃金の波のやうに幾て露のピカピカ光るのは銀の沫てないかと疑はれ遙かに見える富津内川は水銀の流れては……と見違ふ程てあります、川の少し向ふにかすんで小さく見えるのは停車場でやがてそれもうすらいで左手の禿山はボンヤリと黑ずむ

と川に架せられた鐵橋が輝きました。鐵橋から土手の下を走る鐵道線はさながら硝子で作られた長い管でもしいたやうで小砂利のキラ〳〵光るのは小さな銀塊とでも云ひませうか。

どこかて石油の空罐をたゝく音が聞えましたから其方面を見ましたら禿山に人が一人見えます。「アラ武ちやんよ」と其姿の隠るゝまて見詰て、さて眸を右に轉じた時はオヤマア、…以前の鐵道の輝き何時しか消失せて雨に洗はれた數十本の桐の木が強い光線に射られ其青葉が透き通て第二の景色が出ました。私は恍惚と佇んで一人で賞めてゐますと突然。停車場の彼方。鐘鐘塔の硝子面に一種のサーチライトを現出しました。と同時に雷のやうな響が耳朶を打たかと思ふとノツ〳〵と列車が目の下を走りました。さつきから靜かに眠てゐた坊は此時初めて目をさましました。

（評）觀察甚密なれど統一を欠く傾きあり、又しとすとを誤らぬやう注意ありたし。



洗濯（選外）　京都市　國井清子

○電話

備後　紅萩子

妾は、十六の春、初めて、田舎から、上阪して、安堂寺橋通りの、大きな、酒屋へ、奉公したのですが、初め御目見えに、上つた時に、店の柱に、箱が、懸けてありましたので、何かと、不思議に、思つて居りました處、愈々御奉公と、極つて、上つた日に、お嬢様が、店へ來られ、まして、其の不思議な、箱の前へ、立たれて、右の手に箱の、横に附いてる、長さ三寸計の柄の様な物を、持て廻されますと、リン〳〵と烈しい音を立てゝ、鳴りました、見れば、箱の上端に、鈴が、付いて居るのでした、少しすると、右手を放して、左手に、長さ五寸餘りにて、圓形の、直徑一寸五分、計の、物を取つて、耳に當てられました、そして、暫くすると、優しい聲て「あのね、東の七十二番」と。箱に向つて云はれました、不思議に、思つて居りますと、又重て、「はあ、さうです、東ですよ」と、約三分程後に、「もし〳〵、貴方田村様？……私はね、村上ですがね、廣さんは入らしつて？……一寸かゝつて頂いて、頂戴な、……はい、はい」何だか面白い、者だと思つてると「あ、貴方廣さん？……妾し村上、……はあ、あの突然ですがね、今夜宅

て、歌留多會、しますの、……はあ、夫れでね、是非貴方に、御苦勞を、願ひ度のですがね、……は……あ、さう……有難う一同滿足しますわ、荒木さんがね、貴方が入らしって下さらねば、相手がないって、大氣焔、當るべからずですのよ、……ホ、、、、では乾度ね、左樣なら、」耳に當てゝ居られた、物は、がたりと音がして、懸られた、又前の物を廻して、リン／＼、聞けば之が電話と、云ふ物で、數百里を、隔つて話が出來るとか、古參の下女の話、一度聞いて見たい、此電話!!!

(評) 面白く敍まる。

○日記の一節　　伊豫　曉　子

九月十六日、小雨しよぼ／＼と降る。

今日は安息日なり。例の如く早朝より教會に出席、樂天と厭世につきての說教を聞き正午前歸宅す。斯那さん高川さん來られしばし水彩畫の話などなして去らる。二時よりは岩平先生の御宅を訪ふて種々の懷舊談などをなし夕暮歸る。岩平先生は我が小學校の時敎へを受けし恩人なり。

かくて今日の如く罪なく過なく淸らかに向ふ六日を送らなん事を神に祈りて床につく。

九月十七日、雨天

暗き中より起き出でゝ米炊ぎ汁煮立てゝ弟妹等の昇校の用意なしやる。その後朝氣冷たき欄干によりて赤鬼灯の捨てゝある屋根の上に、白銀の如き化粧の水をゆるゆると流しやりながら山口の友を思ふ。直ちに晝飯の支度す。

なつかしさに堪へかねて山口の親しき友への書翰を認め、春夏秋冬の秋の卷をよみ、俳句十八句を得。

夜隣りの朝子さんと共に生花の稽古に行く。今日は夏山菊を稽古したり。

九月十八日、秋晴れの空心地よし。

中の町の德田さんより使ひして美はしきむくげ惠まれたれば、文机の上の一輪ざしにさし夕べの夏山菊は床の上に生けたり、女學雜誌の「新とろゝ」の料理實習せしに好結果を得たりき。

藤村詩集をよみ、祖父が明日魚釣りに行く辨當にとて我が最好物の酢飯つけなどす。

例の如く夕べの祈り果てゝさま／＼の冥想にふけりたる後寢につけり。

(評) 安らかなる生活。

○或　　夕　　岐阜　さ　ゆ　り

無花果の葉かげにうす赤く熟した實を見上げながら心地のよい行水をすまして亂れ萩とすゝきを染め出したお納戸色の浴衣と着更へた、ぬれ毛をかき上げながら薄絹に京美人の繪のついた＝私の一番好きなうちわを

もつて打水に生き返つたやうな青草に足を冷や／＼させながら杉の生垣に續いた枝折戸を開けて裏へ出た、蟬はもう鳴きやんで奥の木立の方から蜩の聲が涼しい風と共に送られるので…もすそをかゝげて萩の茂みからつと出ると今すてに入らうとして居る夕陽がパッと顔をてらしたのであつて、額に手をかざして見上げると榎をもやすかと思はれるまで眞赤になつた太陽の回りを金色に光つた雲が取りまいて居る、はや太陽は其半分を山の向にかくした、よわい名殘の光は隣りの白壁から桑畑いつぱいに投げられてつや／＼した青葉はゆら／＼と風にゆれて居る、と、見ると日は全く沒してしまつて空は緋眞綿をちぎつて投げたやうやがて其眞紅も漸やくさめて品のいゝオレンヂ色に變つたしばらくして消えると今度は薄紫のリボンを引きのばしたやうな雲が淡黄色とぼかしになつてちやうど姉樣がお縫ひなすつた友禪の長襦袢のやう…見とれて居ると其色もだん／＼うすれて行つて白くなつてしまふと藍色の山にがくつきりと際立つて目のさめるやうな氣がした。冷い風がゆかたの裾をなぶるので下を向くと赤い下駄のはな緒の色も見えわかないやうになつた、向の藪かげにチラリ點つた火が前の小川にうつつてキラキラときざまれて居る、美しい宵の空を仰ぎながらまだ夕食前であつたのに心付いてそつと枝折戸を立てて奥庭から坐敷の簾を上げて居間へと廊下を傳つた。

（評）快適

◎埠頭の奇觀

徳島市　小川なみ子

避暑休暇で暫らく歸省せられて居た妾しの親しい友が、愈々今晩東京へ歸られますので、妾しはこゝの《中洲》埠頭まで友を見送つた、河岸のアーク燈はパッとあたりに輝いて、兩側の家並みの影が倒さに水に映りて、三ッ四ッ錨をおろして居る帆舟に、さゝ波がチャプ／＼とぶッつかつて居る『イョー別嬪！』と陸の美くしいのを見たのであらう、ぎーと石炭仲仕が櫓を操つる『雨ぢやアねえか』と空を眺めて給水舟夫が呟やく、チリン／＼とベルの音、今しがた大阪通ひの汽船は盛んに煤煙を吐いて、出帆の用意に忙がはしい、岸の兩側には赤帽が飛ぶ、饅頭笠が合點々々をする、三等客が押かける、何んのことはない、恰度袋の豆が鎰れ出たやう、夫れも一としきり、ブーと汽笛が鳴る、上客らしいのが一人り二人り、あとは何となく埠頭の夜色は濕つぽい。

『逢うて別れよか、逢はずにおこか…』

陸の洋酒屋で若い美くしいのと何かヒソ／＼話して居た脊の高い水夫が、ヌッと往來へ凛々しい顏を突き出

して、恁う譯らしう歌つて棧橋にかゝると、乘客の土產に賣るのであらう、蛤を籠に脊負つた五十近くの婆アさんが『エヘンお樂しみ』とポンと脊を輕くたゝいた、すると衿の高い洋服は振り返つて寂しうニッコリ！。

ガラ〱と一輛の俥が後れ走せに威勢よくこなたに驅けつて來て、棧橋の際にコトンと轅棒を下したが、客は色さめた海老茶袴を着けて居るが、何となく品のある十八九の女學生、車夫はモウ四十位の年頃であるが、遠くに乘せて來たのであらう、額から汗がタラ〱と流れて居る、娘は大つきな支那鞄を下して貰つて『御苦勞でした……』と帶の間からソッと錢入れを出して車賃を渡さうとしたが、車夫は汗を拭き〱つと手を振つて『いらないよ……』『あのう……』と娘はあやぶむ、が、車夫はたゞ譯もなう娘の手を拂ふて『俺の村からお前さんのやうな賢い人が出るのだから、車賃なんざいらないよ……』『だッてお前遠方御苦勞をしたんだから濟まないよ』『好いよ全く俺の心づくしだよ、お前さんの感心な心がけに俺貰つて濟まない、東京さ行つたら何うか勉強して、立派に出世しなさいよ……』娘は氣の毒相に無理に錢を渡さうとしたが、車夫は又たも飽くまで受取らずにスタ〱と俥を引き返した、娘は歸へる車夫のうしろ姿を暫らく眺めて居たが、軈てホロリと淚を零した、おほかた感謝の淚であらう、此の樣子ては娘は東京へ行つて苦學をするのであらうか、妾しはたゞ何んとなく此の詩的な光景の身に泌んで、そゞろ曳きかへる車夫の後姿が尊とく思はれた。チン〱と郵便車が來る、プーと汽笛が強く鳴る、今までさわがしかつた混雜も濟んで、あとは埠頭もヒッソリとなつたが、妾しは何んとなく懷しい友と、賴母しい今の娘を乘せた汽船の出帆を暫らく見送つた。さゝ波がたえず舟べりをなめて、空には無數に星が瞬いた。

（評）敍景のスケッチ的。

○朝の港

四谷　山中芳子

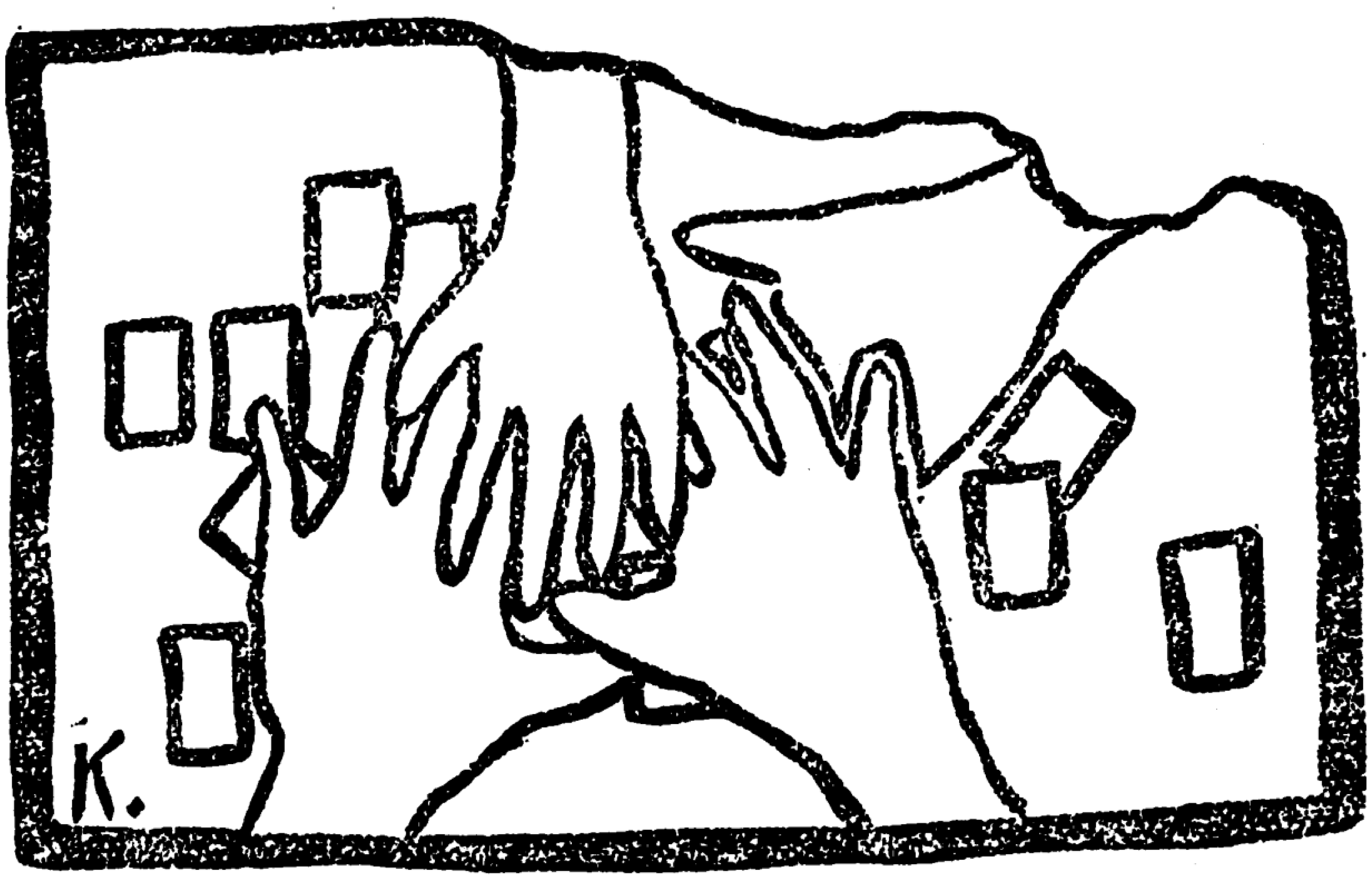
一夕、叔母の家に宿つた妾は、朝とく起き出てゝ、裏の筧より落ちる山水に顏を洗ひ、すが〱しき朝風に袂を弄せながら、とある丘の小高き一角にと立つた。丘の下の方は、大家小家軒を並べてゐる橫須賀町が、雜然としてゐて、左の方づらりつと規則正しく、海兵團の長い棟が一目に見える。濛々とした霧が、四邊一面に滿ちてゐる爲であらう、遙町はづれに接してゐる靜かな港の中は、朦朧として恰で夢のやう。小牛の、春草の上に橫はつて、さも閑かな睡を貪つてゐるかのやうな小島の影が、ほんのりと薄紅を呈した

かと見ると、漸次に薄紅はひろがつて、見る／＼大空を染めぬく。と見ると、靄に包まれてゐた港の中が漸く薄れて、林のやうに立ち並んでゐる檣が、鮮かに現れた。すると朝餉の烟が此處彼處の船から、幾條となく立ち昇つて、檣の周圍を細く糸のやうに繞つてゐる、萬戸淡として安らかな夢路を辿つてゐる町の方から鷄の爽かな啼き聲が、靜かな大氣を澄み渡つて聞えた。軈て横須賀町は、等しく平和な睡から醒め出るのであらう。

朝日は、はや小島を追ひ上つて、港の水面は白銀のやうな眩い光を放つた。と見ると今まで靜かであつた港の中は、何となく賑はしくなつて、碇泊してゐた小蒸汽が一艘、黒烟を吐きながら動き出すと、次いで山のやうに荷を積んだもの、引船したものが幾艘となく、靜かな水面を辷り渡つて出て行つた。小蒸汽の影が幽に、水と天と連るあたりに見えて、後に棚延いた黒烟が朦朧となつた時、ボーと長い餘音を引いた、心細い陰氣な造船所の汽笛が響き渡つた。

（評）快き眺かな。

かるた會（選外）　京都　千條子



○或る夜半

尾張　梶田愛子

御祖母樣に呼び覺された妾は、總身びつしより汗をかいて、胸の動悸の激しい事――。

跳ね起きて燈火掻き上げ、寐衣を脱いで「タオル」で拭つて居ると、ぞつと頭へ上つた、と同時に火影が明るくなつた。手早く寐衣を着變へつゝ時計を眺めると五分で一時。あゝ辛い事。今の恐怖かつた夢が眼の前に髣髴ついて眠れさうにもないが、風邪でもひくと大變と思つて、兎も角も枕に就いたが、どうして眠れ樣――。

そつと這ひ出して机の上に置いて有る冊子「歌」を持つて來て、蒲團の中で腹這ひになつて、當もなく繰つて居ますと、今迄は氣付かずに居たが、障子の紙がはた／＼と鳴つて、庭の松吹く木枯の聲の凄じさ、折柄窓の呉竹にさら／＼と音がする。嫠だら

うか、鼠だらうか、起きて見樣と思ふと、忽ち、表の倉庫の前邊て「フク」が非常な聲て鳴き出した、あつ!!今夜は見廻る事を忘れたが、と胸を跳らせると、父上が御寐間て拍子木を御打ち遊ばす「フク」は吠えつゝ門の中を西から裏へ廻つた。

多分何か忍んて來たのを追出したのてあらう。あゝ可愛いゝ事。御褒美に何をやらうと考へて居ますと、キーキー、と、さす樣な聲して狸が鳴いた、あゝ厭な聲。ぞつとした。時計を見ると丁度二時。

(評) 寂し、凄し。

○田舍の秋　岩代　背野和子

天は碧り高く、うらゝかの秋日和。二十戸の村は宛然神境の如く、冬も冷たき風をよそなる。飢うとは何の事かと、足穗の稻乾すは自然の垣根。栗は軒を遶らし、小豆落すあり、芋は幾山に積り、柿は色のみ殘りて珊瑚球を吊せり、豆は莚に廣庭の半はを領し、尚若き女、老いたる爺の嫣かに交はり、若きは赤き襷、老いたるは手拭被り、赤銅色に雪の肌、勇みうち合ふ槌の音、鷄の聲と妙なる對比の態幽なり。

「此年は何ちゆー豊作だんべ」通りかゝりしは此界隈きつての正直爺樵作なりき。「はァい有りがたう。はァい此豆かい、此れ五石位あんべーか。オッこれァ豪い、わしの所てァ十俵と思つた田から十二俵獲れだンよ、切角精出さッしやい。」後手の樵作爺、道が鷹揚に頭ふり〳〵行き過ぎぬ。はや暮近うなりぬらん、野より歸りの農夫鼻唄うたひて。また樂しからぬはなかりき。折しも食をつぐる下婢の聲、大根煮る汁の香、すき腹の勞働者に報らせて。

(評) 豐かなる繪。

○嬉しきもの　岡山　三宅筆野

世の人の花に紅葉に浮かれ樂しめる時、傍目も振らずいそしみ罷きて、扨、學び屋の業も休みとなり、父母の御面拜せん日もあしたになりぬるとて、いそ〳〵と荷物をかたづくる時、聽て東の空白みて直ちに驛に馳せて切符求め汽車に打乘りたる程、目ざす驛に着きて故郷の山川に迎へられて我家に入り人々の變りなき樣を見父母の溫言を耳にしたる時、總て云ひ知らぬ嬉しさなり。旅に在りて故郷の父母よりのおとづれあるは友より文の中に花封じ入れて是は此處に咲きし花よ之は君と共に愛てし蘺故郷を思ひ出づる料にし給へなど優しき言葉を受けし時亦いと嬉し。學校よりの途小學校の生徒の腹痛めるとて惱めるを勞りて路敎へられつゝ父母の許に屆けやり數日にして其子の何事か樂しげに語らひながら校に昇り居たるを見し、是も嬉しき物の一つに數まへつべし。春の麗かなる日植物採集に行くとて師の君を中に野邊に出て蝶追ひながら諸の草花摘み集め己れ誰よりも種類多しなど誇り顏に云へば友も負けじと他を求めしなど思ひ出づれば嬉しき事多し。夏の夕庭の面に水うちて簾の目正しく見るから涼しげになし置きて父の歸りを待つも嬉し。

(評) 小學生徒の係緊深し。

新體詩

河井醉茗先生選評

○生れし妹

徳島市東富田
割屋敷、林方　富士谷あい子

白梅かをるわが窓に
笑みよろこびをつゝみたる
あしたの雲のとゞまりて
うれしや妹は生れたり。

乳ぶさやしたふ産聲に
ひかりみちぬる愛のまみ
花とにほへる清らかさ
み空の星と見つるかな。

庭の椿も妹の
春戸の蜜柑も妹の
されどもみちのちさき手に
とるにはあまり重かりき

はだやわらかき神のてを
はなれしまゝに人の世の
初夢むすぶまなざしよ
あゝわが歌はふりにけり。

終の一節は何等絶好の新韻でせう、小さき人の生れたる朝「あゝわが歌はふりにけり」と感ずるは實は美はしき詩人の情（醉茗）

○武藏野

信濃上伊那郡
中箕輪村澤　有賀まさ子

瑞雲、東空に靉いて
彩波躍り、簫響き、
歡樂高潮く黎明を、
斜に落つる銀河。

零れて凝りて華麗に、
珊瑚と煌り瑠璃と輝る、
麗し宮居。美し殿。
露の柱や。露の扉や

天降れる女神の月姫の、
鳳輦ゆるう軋らせば、
七草千草、燦爛と、
金沙銀砂をすべり行く。

光明颯と閃くや、
瓔珞貫いて鏤めし、
武藏は露の野邊といふ、
聖き崇高き姫が領。

實際の武藏野でなく、理想の武藏野とも言ふべく、氣高い感じのする作です（醉茗）

○夕雲

石狩國由仁市
街地、山森方　沖の石

袖屏風してたはむれや、
なづかし人の俤の
現の如くあらはれて、
おもはそめたる人ありや
秋の潮よる岩の上、
遠くなびける夕雲の、
わかき瞬にながめては、
げにうつくしく花やかに
秀才うらやむあこがれや
熱情たらぬをはかなみて
もだへにくるゝ十七の
あゝ若き血のをどりては、

げに永劫に其まゝに　かはらずあれと祈りしが—
忽ち淡ら薄らぎて　舟つどひ居る南歐の、
港の如きありさまの　うす紅にただよひつ
あゝ其上よゆふくもの　五色よあまり清ければ
恨むが如くながめけん、　波のみだれを其まゝに
あつき思ひのやるせなう、　あせにし血潮くるはせし
若き秀才はいづこぞや。

秀才をうらやむ女の情熱は、雲の色よりなほ紅ゐに映りました（醉茗）

五等　○希望

赤坂區丹後町九十八　齋藤紫桂子

旅の衣に露重く　澤邊の道にくれしとき
夕星えみて道ひかば　希望にあゆみかろからん
夕園生に下りまして　花に希望を結びたる
星のみ涙其まゝに　輝きてりし朝の露、
つかれし金羽ソトなでゝ　あけなば又も歌へとや
神のみ藥と星姫が　希望を結ぶ夜半の露、
花と小鳥と諸共に　此世をかざる少女子の
希望にみちて鳩のごと　輝くひとみは星の御子

何となく西洋のうたらしい（醉茗）

秀逸

○姉君

小樽　岩谷綠子

我家に近き丘に立つ、　寺の佛事の時なりき、
少ひさき唇に臙脂ぬりて、　額に黛あざやかに
み髮に金冠いたゞきて　緋色のひもにさゝへつゝ。
燁ゆき燭灯に振袖の　金砂銀砂をかゞやかせ
小扇かざす稚子姿、　千疊を踏む姉君を
母の膝なるわれながら、　美くしとこそ思ひしが。
あゝ歳車廻ぐるごと(に)、　人の運命はかはるかな、
古き小椽に餘念なく　針仕事仕給ふ姉君の
いたまし姿仰ぎては　悲哀の涙溢れけり。

中の一節に對して終の一節は大いに力が拔けました、惜しい（醉茗）

○夕べ

品川　林のぶ子

風の羽の　どよみに

病葉は
足悩みの
雲の扉に
藤衣
弱肩の
青鹿毛に
木がくれぬ
彼方へ
をのゝき
入日は――
喘ぎぬ
萎えにし
乙女は
曳かれて――

雨あがり（選外）　姫路　恒子

餘り短いので、意味が通りかねるやうにおもひます、今少し長くても宜い作でせう（醉茗）

○歡樂

京橋　矢代あづま

埋もれし去歳の樹の實の
その種子のせまき夢にも
いかならむ呼息かよひて
覺よ種子うるほひは充つ
流れよる命の小河
ふれやすき思ひさむる
さやかなる音をばきかずや
涓滴のみなもといでぬ



夢みしはなにのあやしみ
ゆくすゑの樹抄ぞかなふ
うづもれし殼にはあれど
歡樂を慕ひつくすと
萠えいでゝさらば一月
生ひたちてやがてはある夜
身は浮ぶ光の涯か
琴の音の調の榮か
なが胸の底にしもまた
あくがるゝあゆみ響くや
菫花こそ君が伴侶なれ
眞白百合君に添はまし

埋れし木の實のうたは、いつか聞かうと思ふて居ました、此作、少しは瑕もありますけれど、先づ新しい方でした（醉茗）

○母上の肩もみ參らせて

埼玉縣　船津千代子

明日の下讀はや終へて
いざもみまさん母上の
み肩のあたり肉細う
思はず落つる一しづく
日頃の憂ぞしのばれて
あゝ母上は老いませり
妾は未だ十五年
肩上げ取れぬ身なるもの
今日のうき身をすぎし世の
語り草とぞなさん日は
幾年後の事ならむ

あゝ母上は老いませり
いつわらぬ少女の詩、山のあら玉磨きたまへ(評者)

○失せにし兒　新潟縣　くさ笛女

かたく閉せる唇に　冷たき色のせまりきて
頬の紅はあせゆけど　さすがに殘るほゝ笑の
しせるともなき面わかな。
やわ肌氷る地の下の　暗き旅路にたゝすとて
誰かは縫はん晴衣　紫匂ふ袖口に
寐息の通ふ心地して。
塵をもするゑて生ひたちし　わが家の花はちりにけり
せめてと握る小さき手に　血しほ躍るとおもはれて
二たび三たびうちふれど——。
乳をもとめて泣く聲の　いづくともなく聞ゆるに
もしやと見ゆる口元の　うごけるごとくおぼゆるを
あゝゆすれども　ゆすれども——。

兒の失せたのは美くしい惱みです、別に此作が新しい譯ではありませんが、眞情の詩はいつ見ても飽きません(評者)

○柱なき小琴　麹町　佐　杜　子

秋來となりしさびしさの、悲しき胸の夕ぐれや
柱なき小琴に額ふれて、さびしく笑むるうき事や
こよとて母は云ひませど　しばしをてゝに琴の前
はじらひ顏におさらへの　席に侍りし其時よ
爪紅をさてとくと云ふ　友が言葉にほゝえみて
とりし日こその心地すれ　袂そと見る面ぶせや
肩あげとりし十六を　行くにをかしとすねたるも
柱なき小琴の戀しさや

好いところを歎はれたのですけれど、未だ言ひ足りませんから、作者の感ずる程は其れを讀者に傳へることは出來ませんでした(評者)

○たのしき夜　六分　やま川

薄絹月夜古壽ふりて　銀燭五千影長う
春をおごりの殿の內　ともしにそむく花嫁の
うばらのかざし羨はしや。
雄蝶雌蝶の盃に　くむや甘酒の香の滿ちて
うたい娛しき高砂の　譜を奏ずれば金屛の
黃龍春の曲を舞ふ
少女十九の若き血や　ひそかにもらす微笑を
やさし片頰に浮ぶとき　戀の朱をはく花がめの
牡丹くづれて夜はふけむ。

美くしい(評者)

○新　春　淺草　大沼きさ江

浪路はるかにながむれば　霞にまがふ夢の色
空にうするゝ星影に　理想のかげを仰がせて

新しき日は來りけり
湧き湧く春の汐の上
望みつきせぬ我春は
田鶴の羽音を輕やかに
眞紅にもゆる天津日の
物皆清くよみがへり
若き汐の聲ぞわく。
七彩の雲たなびける
海のかなたの蓬萊の
榮華の風のふくや今
金絲の光波射るや
歡喜謠ふ朝風に

創意はないが詩語の按排、頓ては思ふやうな事も歌へるやうになるでせう(評者)

○新春

姬路市 峯の春陽女史

甍百萬簷を聯ねて、
花の都はから紅に、
賀ぎの門松かざりもたてゝ
掲げし旗のかなりや。
山より送る川ゆるやかに、
瑠璃なす海に流れゆくや、
洋よりよする潮はみちて、
雄波雌波とむつみあふよ。
白鳥靜にみ空をかけり、
限なく八洲を歌ひ繞れば、
人靑春の血汐はわきて、
只みる紫平和の御國。

太平の象が現はれて居ます(評者)

○夢のあくがれ

栃木縣 榮谷菊子

靈鷲の扉かくれ
あえかなる野守姫
瓔珞の彩濃き
輝ける燈光に
疾くさえて新の
ひろがへるみ袖の
玉映ゆるみ階を
風なき白鷺日
痩菊の下なる
我が夢をれたむか
美蕾くゆる夢野
導かれ紫路や
冠をすべりて
魂迷のくらやみ
精紙勞ふ嬉しさ
夜にしもかくれて
幻に見るかの
睡魂のあくがれ
根照し水ーさゝらと
細音をたてゝ走せ行く

○ほゝ笑み

麴町 淺井千鳥子

添きゑまひの母が手に
振の袂の跡はもえて
装ひあげし遊らひに
そと照らしみる姿見の
若きほゝゑみさながらに
み頰の痩も安らかに、
縫はせ玉へる友禪の、
戀ごもりしふくよかさ、
頰のほてりのつようして、
鏡に落つるおのが影、
ほこりゐまする父母が
あゝ幸おほき身なるかな。

○歸り着いたる

近江 辰井琴子

音は都ととゞろけど、
はかなく櫂を砕きては、
破れし片帆に風うけて、
こゝは都に遠ければ、
男波女波は和風に、
醉へるが如き靜けさや。
寄する汚れの逆潮に、
離散港の慕はしく、
歸り着いたる筑紫潟。
邪惡の濁風たゝずして、
散り浮く花を從へつ、
あゝ何なれば汚れたる、

潮流を截ふて帆上げけむ、——
油流るゝ涙の上の、
浮寐の夢を守りては、
せめての幸よ舟あるは、
番ひ離れぬ白鷗等が、
陋巷をよそに暮さなむ。

○戀

芝區　入江茂子

ゆきずりや
相見し人の
面や姿や
君のまゝなる心地して
幾度となくかへり見し
あゝわれ知りぬ
人と別れて今都路に
こひしてふこひ

○きよき笑み

四谷　河野槇子

日あたゝかく風薫る
熟睡せる稚兒や
頬に匂ふ淡きゑくぼ
きよきものよ無心の笑み。

夕霧の下りそめて
ほの暗く光投げ
新しき雜誌もち
我名見出しゝ嬉しさは

花影の搖籠に
散る花の掠むるごとに
夢やいかに美しからむ

瓦斯燈は朧月とも
しづかなり裏通り
急ぎゆく乙女一人
りんごの頰に溢れたる

○春野の吟

下總　岩瀬信子

天津み空の玉の扉を
吹くや若瀬まれく手に
葉、たんぽゝ名なし花
栄ある刷毛に染めし如

幽にもれて軟風の
優しう頬に觸るゝ談
例へば若き繪たくみの
質に美しう咲けるかな

愛いだきて朝ぼらけ
み空絲に色こめて
あゝ醉ひ鳴きて露の
翠に胡蝶の下るとき
ひとり逍遙ふ春の野や
夢結ばんに心地よき
春の樂譜ならす時
こゝに詩人や生るらむ

○小猿の歌

府下　梅香

安土の峰に隱れ行く、
京と伊勢との別れ路に、
小猿曳くなる越の子が、
うたの拍子の面白や。
竹の葉越しの夕日影、
別るゝ友とわが袖を
雲に友逍る夕ぐれを、
こは興ありな舞衣の、
旅より旅になれてゆく、
夕立すぎし草の根に
もつれ戯るゝ小蝶舞、

○夕の祈禱

曉子

月見草咲ける池畔に
池の心惟淸くして、
美はしき夕日の名殘り、
露の雫ぞ花に宿る、
人の子よ汝が罪悔いよと、
さまよふ遊子草に伏して、
さまよひ出づる夕ぐれや、
浮世の濁り此處にあらず。
流るゝ雲にうすれ行きて、
あゝさながらの御國の樣や。
宣り出す鐘のひゞきに、
さゝぐ夕の祈禱ぞ淸き。

○小犬

大阪市　横山春子

夢より醒めて幻の、
下駄履く足も地につかで
裏へ廻りて共用の、
洗面器の水は靜かなれど、
頭なやむや空想に、
甍の上に霜白し、
烟立ちそふ朝井戸に、
例の斑犬今朝見へず、

朝餐に少し間のあるに、
朝霧深う立ちこめて、

いざとく歸り新夫と、
白銀の花咲く寒菊の、

斑犬は血潮にまみれたり、
よき犬ありと一聲の、
棒にしたゝか打たれけり、

斑犬子を持つ親にして、
つら／＼之れをかんがみる、
死するは己が運命なれ、
のこされたりし小犬等は、

冷たき床に起居して、
白犬は容顔よき乙女子に、
黒犬は厨にはんべりて、
夜の固めを守るらん。

○利根河畔に立ちて　上毛　河内とめ子

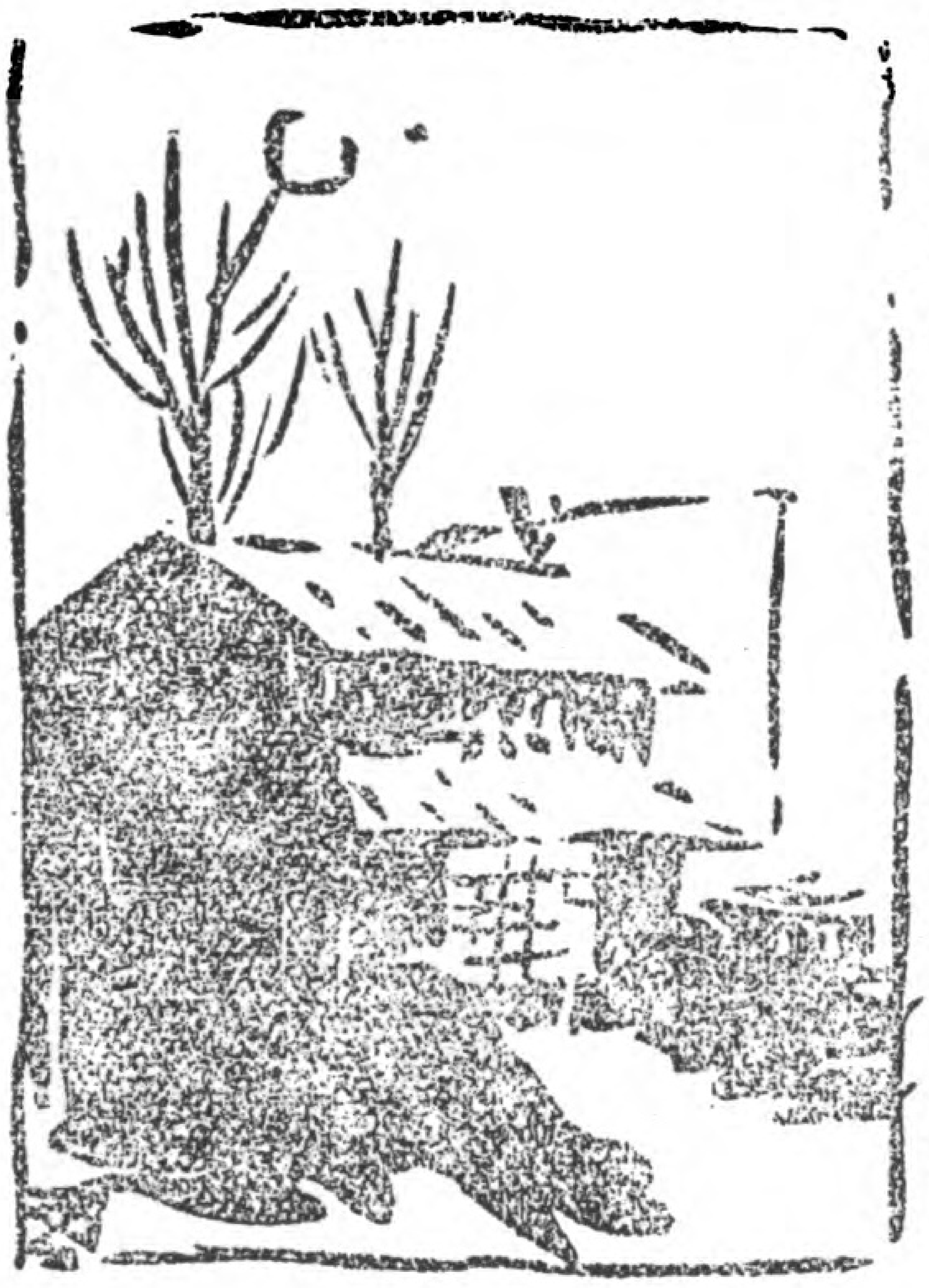
光かすかに日は落ちて、
つれなき雲は漂ひぬ。
蕭々として利根の水、
そは寂寞の使者かも、
空しく歸る我が身には、
若き心のとめがたく、
はてしも知らぬ喜びの、
渡りしこともありけるを、

もすそぬらすや裏田圃、
稲はさかさにほされたり、

朝餐の膳に向はんと、
垣根過れば露落ちて、

明星いまだ消えぬ頃、

寒月（賞外）　恩方村　中島縫子



哀怨愁訴の咽びあり。
希望の星を奪はれて、
如何に淋しき今宵かも。
鍬とることも耻らひて、
影をば胸に描きつゝ、
運命の小車廻り來て、

去にし古夢くり返へす、
誇りし才は今いづこ、
頰に滴る悲の涙、
我が意を知るか利根の水、
汝の姿の謡ふうたは、

○野の花

私慾争ふ戰の、
野邊に生ひ立つなよ花は、

夕日は落ちてうら寒き
わら屋につゞく細道を

家なる妻は桑に手に
新酒備へて風呂たてゝ

心は如何にせつなきよ。
影も止めず消え失せて、
あゝ我如何に幸なきよ。
蕭々として流れ行く、
我を誘ふに似たる哉。

石見　稲水女史

罪の血汐の流れたる、
生れながらの盲目なり。

弱きを知れる野の風は、
汝を弄び野の蜂は、
蕋をおかして蜜をすひ、
果ては嵐の散らすかな。

うきあつかひに耐へ難く、
星ほの見ゆる夕ぐれを、
天を仰ぎて涙ぐむ、
すぐせかなしき野の花よ。

○わらや　越後　籠野とり子

川邊のすゝきかき分て
舟より夫歸り行く

甲斐／＼しくも料理して
歸る夫を待ちわびぬ

摘灯しのもとにして
破れ窓のぼる夕けむり
二人楽しく夕餉時
平和の里をのぼりゆく

○無明

肥後　三浦たけ子

あゝ冬ざれの夕野路、
よるべ知ずも彷徨ふに、
貫き冷たき石抱きて、
似たる運命の吾なるか。

光の姫の物好み、
幸薄き身に應ばれば、
偶と撰まれし吾眼玉の、
用なきものと召されしや。

明日より後は日影だに、
あはれ空鳴る大粒の、
のぞむ効なき眞黑闇、
溶けも入らずや吾胸に。

○花うる人

上野　宮田信子

寂しめ/\と寒雨の
樒も御座る如月の
市に鳴らした花鋏
樒に焚いたる伽羅も候。

寢ざめの髪にかざすとて
もらふた櫛はさら/\と
歌妓に召された花料に
醉との戀の謎ぢやけな。

霞にしめる紙衣きて
男盛りを誇さむそうに
紐にやつれたかくれ笠
在所へかへる獨り者。

○秋韻

埼玉　露花

光まばゆき秋の日は
庵を照らしぬ羽顔の
山陰寒う住人の
花桜か風にやれて

秋を戀しむ風情かな
姿優しき乙女子や
庵の園うに現れし
髪の亂れのいとはしう

思ひに惱む眼光や
西に流るゝ雲を見て
ここをも戀はもれぬかな
沈む思ひに山茶花の散る

○あさすゞ

大阪　平尾とき子

雨細う草木に惑む
その下露を吸はんとか
葉らん幾本生ひ垂るゝ
迷ふて宿る下陰に

歌ひはじめぬあさすゞが
とりて愛でんと物好きや
ハタとと絶えぬその歌は
逢うて寄りぬ忍足
心なきかなあさすゞよ

○中禪寺湖畔

千葉縣　北田仙子

曲汀八里かこみたる、
日の影赤う射し添へば、
田又山のしたもみじ、
水にうつろひ映えばうし、

芳山紅の唐にしき、
みどりの湖のたゞ中に、
下照る姫の装ひや。
上野島は紅葉せて、

常磐木のみぞいや茂り、
神の名の如此の島の、
不動の像祀らるゝ、
岩が根幾世波立たん。

仰げば空に二荒山、
頂き白う砂光り、
さながら錦織りなして、
霧のいゆきもはゞかりや、
麓ばかりは紅葉しぬ、
今日が盛りの見榮する。

○月の光

豐後　仁王門子

照り澄める月の光は、
その光溶けて草野の、
白銀の空のとばりや、
草をゆく水が小旋。

むらさきは桔梗の花や、
無花果のひろ葉をすべる、
白きは萩のみだれなり、
月の樹そてに冷めたう。

くちびるにことばありて、
はたゆびに笛は持てども、
此の胸に歌はありとも、
このおもひいかに吹くべき。

○小さき花守

越の國　小間幽蘭

戲ふ嵐にふる霜に
小さき胸をいためつゝ

幼き妹がいそしみに
くれなゐもゆる緋牡丹や
八千草あふる地の面に

しなれし花にそゝがんと
手にもつ如露も重げにて

首うなだれし緋牡丹に
羽がいおなじき蝶二ッ
安けき夢を結びけり

つくりあげてし小花園

あまふうばらの香も高う
匂ふすみれと愛らしや

今日も下りたつ庭もせや
そゝげる機の愛らしさ

いざそゝがむと寄りそへば

○鄙の秋

門司市　彌吉和歌子

菊はさ霧に香をそめて
秋はれきよき大空も
富士を越し行く燕を見て
地に影引く五重の塔

紫蘭の露に筆とると
もすそからまる花野をこえて
都のおばのかへしぶみ
頬にくづるゝ片えくぼ

父母兄姉妹と
いくさ話しに月を待つ
芋あつめて踊るさの
しづかに吹くは何の曲

時雨する夜はまどいして
そこには清き愛もあれ
夕焼け雲を背にうけて
眠なる笛をあたゝめて



もう一息　郡山園　美枝子

○與謝の入江

丹後　城下百合子

天の橋立むらさきに、
波路や獅子崎霧こめて、
海士が群る岩影に、
霧服げの夜の神の、
唐繪に似たる磯馴の、
ゆめよりあわき汐煙、
眞砂路一照月すみて、

天なる繪師の彩れば
漁り火小さき霧の中
咲くやゆかしの姫小百合
夾錦に近くなりませば
松に淡き夕月の影、
さつと夜風にきえゆけば、
舟唄遠き夕凪の海。

○花野

越前　みす子

きらめく星の金冠や
うす紫の舞衣に
夜の女神はしづ〳〵と
いさゝ小川の樂の音に
舞ふて天降れる花の野べ。
此の時――默思の
尾花や萩や女郎花
浮き神のみつげなば
聞かんとやなら仰ぎぬる
白き面はかゞやきぬ。
なさけの露をうま酒の
こほろぎ鈴虫くつわむし
明日こん秋をうたはんと
姫のもすそを追ふなり。

燃ゆる花唇の接吻に
こゝにはじめて生命あり

少さき翅をゆらめかし
みめぐみあつき女の神の
おやしきしこの草々も
愛のかなりのいと高し。

明けを待たんの朝顔や
秘めし口もと愛らしう
うす紫かはた白か。
かくて女神のおもはゆう
踊りの舞の其の刹那
ア丶美はしや花の野べ。
桔梗や崇きさゝやきを
希望に充てる其の面は
ほゝ笑まして大空に
えならぬ響たかく\/と

神戸市　柳　溪　子

○初日影

この時天津宮居には、
神の御夢今覚めて、
黄金の車、銀の轂、
天女眞白の袖ならべ、
八重雲ひらけ、紫の、
常夜長らく熟睡せし
玉の階事しげく
舞踊の荘厳かに
護衛の役をつとむれば
光ぞこれや初日かげ。

徳島市　小川なみ子

○のこる光

やさしく寧謐になつかしき、
藥にふくめるしら露に、
人に悟りのなからずや。
藝術が鎖りし聖の香よ、
詩人聖辞に憧憬がるゝ
くろがれ窓に身を凭せて、
懺悔の人となるなかれ、
世をばつれなく見るなかれ。
つかりし人の手にふれて、
しぐれよかゝる袖の露、
ゆくてにせまる闇の世も、
かよはき胸にしのびつゝ、
なつかし影よたゞよひし、
のこる光はきよからん。
星に啓示の光りあり
さなり理想のにほひあり
自然をうつす絵師の笑よ
人に名誉のなからずや。
冷たき月に身をば悔ゆ
浮雲の富よ、戀、罪に
幸ちにはぐれて身をしづむ
涙の人となるなかれ。
理想よ悟り、容れなば
をみなの道をてらせかし。
希望の星よそらにいてゝ

備後　松本菫子

○秋の歌

翠の空のいづこよりか、
かの華けき彩雲は
その綾衣纏ず、
そこに色あり君見ずや、
空に玉手の縦横に、
我が世の土に花咲いて、
降りたゝします秋の女神、
神の裳か綾の衣、
音潔はしや天津風。
そこに聲あり君聞けや、
踊ると見れば白、赤、黄、
わが庵の園に虫の音のする。

○菊と牡丹

鉢の白菊旅立ちか、
さして東に向ひ居る
まがきの牡丹旅立ちか、
西のみ空に向ひ居る
かくて蝶々は案内か、
ひら\/菊に舞ひ來る
されど牡丹は悲しやな、
たゞ涙をばおとし居る
やれし蛇の目の傘を
菜の頭巾をほゝ冠り
白の衣裳に黄のたすぎ
菜のスキより袖出して

下総　中村よし子

○萩

萩の根摺ごろもこの朝を衣て
君と見る秋園つゆしげし、
虫の聲——ほろゝ散る花
痿みだれ髪ぞ君が頰に。
君口吟む歌を判きがてに
佇みをれば吹く風すゞし、
白玉はら\/袖に散る
虫の聲——花ちるあはれ。

大阪市　有田かをる子



短篇小説

廣津柳浪先生選評

白玉椿

三河豊橋町鍛冶町五十五増吉方　ますず子

上

「雪夫！待てッ。」「僕等の事を何故先生に言つた。」何れも十四五の色黒き少年、五六人、不意にばら〳〵と來りて、同年頃の雪夫と呼ぶ美少年を押取廻きつ。

「さあ何故言つた、」「返事せんか。」と一突々く。突かれて雪夫は蹌きながらも、涼しき瞳に、屹と其黒き面を見つ、小さき聲にて「僕は那麽事は知らない。」

一人は寄つて其胸を横に拂へり。「噓を言ふない。」

「否、眞個てす。」と哀れなる樣にて言へど、敵は右より左より、犇と迫りて、赦すべしとも見えず、蜘蛛の圍にかゝりし蝶の、遁れ出づべき隙もなし。

「强情だな！」と今一人、平手にて、其名の如く白き頰を、はたと打ちつ。雪夫は手出も得爲で、口惜しげに淚を浮べ、「君等は一躰何うしようといふんてす、失敬ぢやないか。」

「默れ！生意氣な事を言ふな、穢多の癖に。」穢多と聞くと等しく、雪夫の眉は動きて、顔の色稍蒼白めぬ。

「穢多め、早く詫びろ！」と勝れてたけの高きが、太き手を、むづと雪夫の頭に掛けたり。

「何を！」と言ふより早く、其手を拂ふと見るや、其敵の八文字なる眉のあたりを、太かに撲返しつ、雪夫は己が身の弱きをも忘れたるなり。

「畜生、やれい！」誰かは知らず、叫ぶより疾く、拳は雨の如くに降來れり。

「お待ち！あれ、お待ちッてばね、何をするのよ。」と身を惜まず割つて入り、雪夫を庇いてすらりと立ちしは、是も同年頃の、然も麗やかなる少女なりき。

「やあお千代さん、」「お孃樣だ。」と口々、腕白どもは唯呆れたる樣なり。

「お前達は眞箇に亂暴ですね、雪夫さんが可哀相ぢやないか、もう堪忍してお上げよ、ね、好い人だから。」

「お孃樣が那麼に言ふなら、皆堪忍してやらうや。」

「うむ、穢多め、氣を注けろ。」高慢なる口利きて、どつと勝鬨作り、十間許行きて、右手の藪の蔭に隱れぬ。

腕白共も言はるゝ儘、素直に從ひしお千代といへるは、此近在に並ぶ者なき豪家の秘藏の一人娘なりき。

「貴方怪我はしなくつて？」と心優しくいたはれば、

「有難う。」と雪夫は涙の顏に、感謝の色を浮べつ。

「又其處等に隱れてゝ、何かすると不可いから、私、あの、お家迄送つて上げますわ。」

少年は稍躊躇しが、拒み得ずして肯きぬ。

雛の如く美しき少年と少女とは、打連れて、彼の藪の前を過ぎ、小川に渡せる土橋の袂迄來れり。

不意に後の方に物音するに驚き見れば、腕白共藪を出でゝ、並びて道に立居れり。

「穢多めが女と並んで行かあ、わあいく。」と手を拍ちて笑ひどよめく、里の童のはしたなさに、お千代覺えず色を染むれば、雪夫は堪えず一目散に走出しぬ。

「あら、雪夫さん！」と呼べど顧もせず、麥畑の間を行く姿、彼方の森の蔭に消えたり。

綠の糸のやはらかき、柳の下に佇みて、お千代は殘惜しげに見送りつ。薄霞む空には雲雀鳴いて、麥吹く風暖かなり。

下

菜の花に月朧なる道を、唯一人歸來るは彼の雪夫なり、彼は此春の試驗を終へしと共に、都の中學に入る事となりて、今日しも同村の叔父の許へ、暇乞に行きたるなりき。

家には父母の待ち給はむと、心は急げど、一向名殘惜まれて、足を留めしは彼のお千代が家の前なり。

過ぐる日は危き難を救はれ、其後とても優しき言葉を掛けられしを、彼はなき名うたはれむが心憂さに、素氣なくもてなして、遂に一度笑顏も見せざりしなり。

狹き女心には、如何にかわれを怨みけむ。

「お千代さん、あれは僕の心ぢやないから、」と口の中に呟きて、はらくと落つる涙を拭ひ、手にせし一輪

の白玉椿を門の柱の割目に挾みつ。

「最早これがお別だ！東京へ行つたら、穢多と言はるゝ心配もあるまい」と、人無きに言ひしが、思切りて、足早に立去りぬ。

門の外に人の氣勢は、友や來りしと母にも告げて、お千代よくとり戸を開けて立出でしが、誰とて待つ姿もなし。さては空耳なりしかと、入らむとして薄月の光に見れば、前なる柱に白玉椿！彼は言知らぬ懷かしさを覺えて、思はずも身を顫はしたり。

雪夫は翌日郷を出でつ。

濁れる世に、二人は玉の如く淸けれど、再び相見む日は、さて如何ならむ。

穢多の子に同情すると云ふのは新しい趣向ではない、雪夫が白玉椿の花をお千代の家の門に挿んで置く一段は一葉の「たけくらべ」の終に似て居る。併し此作は選者に書けてある、小說を書く人と云ふ事が許し得る點にまで達して居る、なほ今後の造詣次第（選者評）



◎眞情

北海道小樽區色内町二番地
飯田季春子

秋の空の變り易すく、皎々と輝き渡つた十四日の月は何時しか薄灰色の雲に掩はれて、雨にでもなるかと怪まるゝやう。今一頻啼き合た蟋蟀、騒々と楓の茂を搖がせた天狗山颪の、一毛刷サツト芝生を撫でたので、直と其音を絶つと、夜は一入物淋しうなつた。今し危く曲んだ腰掛に、ギウと音を立てて腰を下した二人の男、何れも人品の鄙くない、夜目にも凛々しい容貌だ、若き人は秋風の身に染みてか、頤を懷に突き入れて、悄然と項垂れてゐる、稍々年嵩の方は、今し雲の網にかゝつた如な月から

視線を辷らすと、腰掛の隅を圍ふてゐる蛞蝓を、杖もて突き乍ら、若き人の側面を眤と見詰めた。而して如何にも沈んだ調子で。

「高田、僕の言ふことを一通聞て呉れ、君と僕とは竹馬の昔から、眞の兄弟の如く、互に心を打明て親しんだ交情だ、僕は君と何處迄も生死を倶にし、將來の成功を同に樂うと誓ひたればこそ、君のお父樣があれ程におつ仰つたのを、心にもない誹謗を以て排けて、共に出京しようとしたが、昔堅氣のお父樣は、什麼しても諾さないので、遂に意を決して君が十七、僕は十八の春、左樣だ恰度今夜の如なうら淋しい、薄月夜であつた、君と袖を連結て、故里を出たのは。其後僕の兄や姉が、父を說き、又君のお父樣をも宥めて、二人とも樂しく學の道を辿るやうになつたのだ、君も知る通り、僕は昨年志す學科を卒へて、兎に角自活の代を得るやうになつたが、君は當に來るべき春が、天下分目の境なんだらう……!然れに、僕があの位諫めたにも不係、君は未だ踏も汚はしい、女に惑つてゐるさうぢやないか……!若し那麼ことがお父樣に聞えたなら、嘸ぞ悲まるゝだらう………、否や僕を什麼に恨みなさるか知れない、君を斯ら墮落させたのは、僕が勸めて東京へ連れて來たからだ、お父樣の言葉に隨つて、故鄉に居つたなら、今時分は魚鉾をとつても一人前になつたものを、アアコ此亮造は、高田のお父樣に何とマー言譯が立つか……春雄君、僕と共に國元へ歸て呉れ、而して僕は君のお父樣の前で、必と男らしい申譯をするから……」

世には斯もやさしき友もあるかな、亮造の我が友を思ふ情の、諄々と說く語、句每句每肺肝より吐露する如き言葉に春雄は、涙に潤んだ面て、恨めし相に虛空を睨むと蹶々と立て、亮造の膝に打伏して、身も世もなく泣き沈むのである。軈て頭を擡げて、

「秋山君……、ユ恕して呉れ……、面目ない…………、僕は闇黑な夢路に迷てゐたのだ……、今夜こそは全然夢から覺めたッ、今からは必と清淨無垢な元の春雄に復活から……、亮造君ッ、ボ僕は君の今の諫を聞くと、コ此腸が千切る思だ……」

髪を掻り、胸を搔きて、悶へ悲む樣のいぢらしさ、

「春雄君!眞實に君は改悛して呉れるか……春雄君!ボ僕は恁麼嬉しい事はないんだ……」共に手と手を取り替して、暫し涙にくれた。亮造は帯の間から

時計を出すと、雲間洩る月光をうけて、

『ヤ、モー十時だ、サア行かう』と立つて春雄を助け起さうとすれば、

『秋山君、僕は改めて眞心から君に願あるが、僕に呉れる譯にはゆくまいか』亮造は一寸頭を傾けて、一の字の眉をひろめると、何時しか可愛き微笑を浮べて、

『ハア之れ、之は何時か君の者となるべきだが、未だ君に渡すのは劍呑だよ、しかし君は之を持て何するのか』

『君と骨肉を分た人の寫眞だもの、僕は眞の兄弟だと思つて、肌身離さずに、僕の心を慰めやうと思て』

『左樣か、夫では君に任せやう、僕の爲には眞身の妹、君の爲には生涯の友だ、汚損ないやうに、大切に可愛がつて呉れ給へ』

何時しか庭草に置かれた露の玉は、今眞黑の雲を拔け出た月の光に輝て水銀の如う、何處よりか洩れ聞ゆる讃美の歌は、宛然聖き神の御使が、靜かる天の御園に此の二人のはらからを、誘ふかのやうな心地するのであつた。

新演劇の一幕を見るやうな氣もするが、多くの投稿家が割合に男子を描かない時に當りて純粹の男子どうしの波瀾をうつさうとしたのも面白く、筆にも力があつて讀むのにも張合がある、只、わざとらしい處は幾個處もある（選者評）



女學生（賞外）　大阪　清子

◎百合の花

廣島縣賀茂郡仁方村字西町　手島まさ子

「葉山さん鳥渡」、恁う叫んで寫生に餘念も無い一女生を呼んだのは、面長な女教師で、身には銘仙の袷に紫紺の袴品良くつけ、第九教室の洋窓から其眞白い富士額を見せた、葉山と呼ばれたるは下豐頰のした十五六の可愛子で、綠の髮をお下げにし紅のリボンで其れを留め矢飛白の着物に若紫の袴を胸高に締めた一見大家の令孃の樣な、芳子と云ふ本科三學年の生徒てある。

「はい」、恭しく挨拶して、懷かしげに見上げると、女教師は此處に來た。

「葉山さん何して居ます」

「は、妾惡戲してましたの、あ先生ご覽なさい、あの

深山の處から雲が湧き出て、其の間からお日樣が突つと光を放つて居る處何とも云へぬ好い景色です事よ」
「本統深山の紅葉にうつる旭日の影瑠璃の雲、あゝ好い景色だ、ほゝ寫生したんですか、どれ拜見しましよう大變上手に成りましたね」
「あら先生は」
「其れはそうと皆の者は如何したんです」
「妾も如何なすつたんだろうと思つてますの、揃いも揃つてお來校ないんですもの」
「如何したんでしよう、あ最う八時、まア這入つて居ましよう」恁ら促されて芳子は默つて師の跡に從つた。見晴の好い南窓を開けて師弟が寄り懸つた時、太陽は尺餘も昇り雲も何處へか消へて了つて、白日青天の空にひばりが二つ三つ飛んだ。向の馬場の木の間の悲相な馬子の唄が微に消へて行くと、栗毛の駒の嘶く大聲が手に取る樣に聞えた。遙に沖を見渡せば眞帆片帆往きつ踊りつする舟の多く、雲の如く霞て見ゆる小島の間に金波銀波の燦々と、磯の千鳥の群れ遊ぶ風情宛然一幅の活畫を見る樣な瀬戸內海の絶景を、恍乎として見惚て居つた女敎師は突然と
「葉山さん貴女故鄕は何處てす」
「は、妾の古里は極、田舍ですわ」
「お父樣もお母樣も被爲入いますか？」
「…………」
然の答も出さず涙ぐんだ目は師の顏を掠めて傍に反した、刹那、遺失品記名欄に自分の姓名を發見した。加之も品は手紙だ
「先生、妾は手紙なんか忘れた事はない筈ですが、如何したんでしよう」其まゝ机上の手紙を見れば確實に、葉山芳子としてある「あゝ間違てはあるまいかしら」恁う思つた、されど自分の姓名が書いてあるからは、自分の物に相違ない、不思議ながら兎に角開封と決心した、不審の眉をひそめつゝメを切ると、はらりと落るは自分をのぞく他一同の退校狀。
「あッ先生こ！これ……はッ」
「葉山さん理由は何と書てありますッ」
「わー妾が一人を幸ひ机下に書物をかー隠してせー先生の目を掠めて、問答して其れて嬉しとする、樣な者と一處に居てはッ、わー妾其んな事露程もッ」芳子はブックの上に泣き伏した。「あゝ潔白な心を一妾を、なぜ皆樣はあゝ、なぜ〳〵」
「あゝ葉山さんそんなに泣かんてもいゝてすわ、ね、エ

貴女に其んな行爲があるか、ないか、其れは妾がよく知つて居ります、自分等の勉強の足りないのは云わないて、人を惡言する、そんな性根の腐敗つた者は退校しようと如何しようと勝手にさした方がいゝてすわ、彼女等に心鏡があつたなれば、やがての程に改心するでしよう、貴女は潔白な、百合の花てす、ああ天使てす」

「せー先生、父もない、母もない只兄と二人の憐の孤子何時迄も可愛がつて頂戴ッ」知らず、知らず、二人の手は離れまじ、堅く握り合つて居た。

* * * * * * *

翌日、北川女學校の第八教室に調の高いピアノの音につれて鈴を振る様なほがらかな聲て校歌を歌つて居る二人があつた、無論それは女教師の原田辰子と生徒葉山芳子とてある、同日海岸通を徘徊して居る十八名の色青い女生徒を見た者があつた。

女教師と女生徒の愛情を描いたものとして、七八分は成功して居る、

應接室（賞外）　一ノ宮森郁子



瀬戸内海の景色を見ながら郷里を尋ぬる處、自然に出てゝ而かも感興の多大なる、好個の文字。選者評）

○無我の愛

東京芝區八久保巴町卅四平山方　さゆり女

哀れな音をして流れる裏の小川のほとり、寂寞な天地に物思はしげに立つて居るのは、家庭敎師の淑子てある。

靜かに歩み寄つた主人の妹のマリ子が、

「淑子さん……」とそつと肩へ手を掛けたので、靜かに振向いた。其態度の落付き方、深く愛の籠つて其眼指、實に家庭敎師らしい。

生家はさる素封家だが、繼母の何かに付けて邪魔氣な素振りが見えるので、遂々身を退けての今の境遇斯く露けき秋には色々の感に打たれる事てあらう。

「あなた何か考へて御在つしやるのではないの？」

淑子は「いゝえ……」と菊の花を見つめて居る。

「家庭敎師が御嫌になつたのでしよう……」
「マリ子さん……私が如何な決心を持て御宅へ參つたのか、何卒御聞き下さいまし……。」
淑子の聲は稍強く嚴格であつた。
「世の中の幸福な方とは如何な方を云ふので御在ませう。マリ子さん……御兩親の揃つた方程御幸福な方は御座ません。鳥が未だ雛の時、もし雄鳥が居なかつたなら餌を運んで食べさせる者は御在ますまい、雌鳥が居なかつたならば、翼の内に抱いて暖めてくれる者は御在ません。そうしたらどうでしようか、其雛は充分に成長する事は難かしいでしよう。又春になつて天地の惠み深く、野山に木が見事な芽を出しても、親木があつて保護せなかつたら、或は鳥や獸に踏まれて、すく〳〵と高く立派に生ひ立つ事は出來ないかもしれません。人も其れと同じ事てす、如何に肥つて愛らしい子ても命迄忘れて愛して下さる御愛母樣がなかつたら、瘦せていた〳〵しい樣な子ても良い御愛母樣があつて愛して下さる子には、後には劣るて御在いませう、天性は如何に優しい愛らしい心の子てあつても、人々が自分を愛して下さらぬと認める樣な境遇に立つ時は自然自然に美くしい愛らしい心は癖んで終ひ、天性は癖んで居ても愛する人多く心長閑に美化せられた子には到底及びますまい。お孃さんは御可憐さうてす、私の經歷に照らしても確かに御可憐相な御不幸な方です。物心知らぬ内に愛して下さる御實母樣に離れて御終ひになり、今の御繼母樣は御愛しになりませんのに、旦那樣は御他出勝、私も初めは家庭敎師にならうなどと云ふ考へはなく、東京へ參りましたの。てすが御孃さんの御話しを承り、自分に比べて御いとほしく何卒癖ませずに御成人させて上げたい、世の無常と云ふ事を御知らせ致し度ないと、思ふ一心に遂々決心して此大森の御宅へは參つたので御在います。其れからと云ふ物は、癖みかけた御心の追々に淸くなるのを拜見致しては何より嬉しく、御學問や御手藝の御上達を伺つては末頼母しく、我ながら云ひ知らぬ程嬉しく、淸く氣高く御成人遊ばして、世の事の御分明りになる迄は、御母樣に及ばずながらなり變つて、如何な事情が有りましても御世話致す決心で御在います。
御實母樣の愛の如何に深いかを御存じなく、此拙ない私を無上の御頼りと遊ばす、可憐な御心を思ふと遂淚が止められません……。」
椽近き松が枝の隙から、床しく漏れる絹行燈の光りは、

露子の琴の音を此白菊のあたりまで傳へ初めた。
感慨に沈んで居た淑子は蘇生つた樣に面を上げて。
「御孃さんが御琴を御初めになりましたから御先に失禮致します……」と、足早に立去りし其顏には月より清く美くしの、愛と希望の光りは輝きました。

家庭教師の議論が主になつて、小説としては面白くないかも知れないけれど、變つた處に無我の愛を主張する、之れ又一篇の時の面影、（選者評）

秀逸

○雪の朝

周防　はる子

明け渡る東の空、薄紅に彩色れつ、鶴峯山はうねりくねり、それが白々と雪のお化粧をして、銀の屏風を立て廻したよう、麓には棋川がまた銀布の如に緩う流れ、山と川との間に三々五々茅屋の列んで今し炊烟のむら〳〵立ち騰るは山河の里。

これと云ふ奇勝てもなけれど、私は冬の朝々お庭越に此景色を眺めるのが常で、今朝も茫然妙なる鶴峯の雪の姿に見入つて居ました。

ふと表門の方て、何だか怪しな女の泣聲が起つた故直と玄關に飛び出たが早何も見られない。「はて？」私は不審な心地がするのでごた〳〵足駄を穿いて雪の中を小走に——向ふを見ると、汚穢しい身裝した一人の小娘が——

「お汝どうしたの、」

一寸此方を振り向いたが、猶しく〳〵と泣いて行く。

「お汝どうしたの、冷たくつて……え、」追付て訪ぬる私の顏を見上げた少女は、「いゝえ」と顏を横に振る。私は益々怪訝いのでよく〳〵聞くと。

此女は森の内の娘で、森の内とは私の家から十町餘山手の一軒屋、昔は大分資産もあつたと、そして感心に孝行な娘があると此間母上も話されました、が私は恁麽に哀れな狀とは……。今聞けば唯一人の母親が永らくの疾病て、それが何かの勢で昨夕よりめ

えびと蛤（賞外）　秋田　藿村女史



、、、つきり重くなられたと。固より姉兄もなければ近所に一人誰便ろう人も無いとか、――あゝ私の家を慈悲の神と……そうよ、そうよ二度までも。

「お汝早くお歸りな、直ぐにお父樣は行かせますから……」。

彼女の顏には憂の內に喜びの色が動いた、そして淚を拂つて駈けだしました。私は其いぢらしい姿の消るを見るや潸然と熱い同情の淚が‖美しい〱白雪の上に零るを禁得なかつたのでした。

「お父樣、往てお遣なさいませ……」私は恐る〱、碁を圍んで居られる父上の傍に平伏して。

「お父さま……何卒……」

「よろしい、あつちやへ行てお在て」叱り付る樣に、例の嚴かな口調で。

私は彼女の身の上が可憐て―それに家のお父樣の酷たらしいとよ、お書齋の內てしく〱獨て泣いて居ました。すると、背の襖がすうと開いて「雪子は泣いてお在おやないか、什麽したんてす、早く御飯を食らぬともう登校の時刻てすよ」言つて母上は去うとせられる。

「お……お母さん‼け……今朝森の子が二度來ましたとね、それにお父樣は……、自……自己の天職に悖ると云ふものてせう……いくら貧乏な家だつてお見舞申すがお醫者樣のお役目だわ。」

母上は無言彼方へ行かれた、そして父上に何か云はれる模樣てしたが、やがて三人どつと大きな聲で笑つて立たれました。

暫くするとお玄關の方で靴の音がキウ〱……、それがだん〱雪の中へと消えて行く。朝日は華やかに鶴峯山より光線を送つて、お庭の石へ雀が三羽ひらりと飛んて來た。

かわいさうだと、思ひ詰めてひとことながら淚にくれると云ふ少女氣質、斯うもあらうかと思はせる、合せて山家村裡の醫師の家の模樣なども先づ描かれてある（選者評）

○磯の暴夜　　下谷　太田秋津子

「夫れじやあ什麽しても忌つて云ふだな。え、お新」熟柿臭い息を吐いて、團造が見幕は段々と凄まじい。お新は眠入つてる淸太を抱いた儘、低向て何とも云はぬ。臺所の方には竈馬の聲が淋しく聞えるが、外には雨戸搏つ風の音、濤の聲、何やら暴風雨に成り相な。

「おい默つてゝ分るかよ。何とか返辭しろよ……お新默つてゝ分るけえ……」

「忌です……」低いけれど判然して居た。

「何忌だと……へへ聞た風の事云やがるだ、何故忌だよ……さあ其忌だと云ふなあ什麼な譯だか云つて見ろやい……お新何故忌だ」

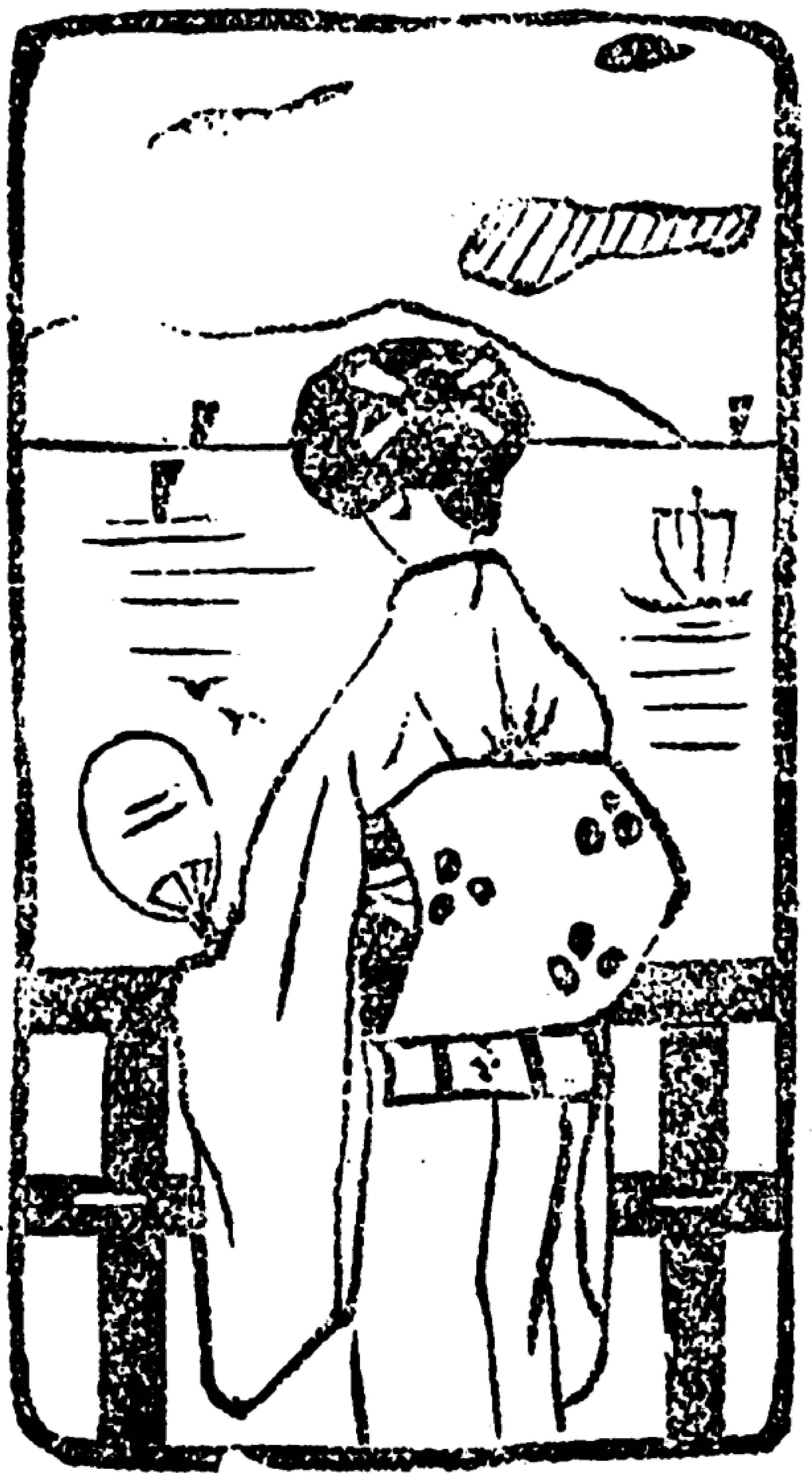
風は益々加はつて、戸を揮つ音いとも烈しく、隙間からの風に洋燈の光の、あはや滅せんとするも度々。

「何故默つてやがるだ。云はねえか……親の命令も聞かねへて——お新手前はな、己の眞の子じや無えだぞ。何所の奴だか知りもしねえ投身者の子だつたぞ……今生きてるなあ誰のお陰だと思やがるだ、其位な事分らねえ年じや有んめえ……やいお新」

聲に驚いてか淸太が突然泣出した。お新は背を叩いて賺すけれど、中々泣止み相にもせぬ。

「煩せよ餓鬼め……聲聞いても胸糞惡くなるだ……連て去せやがれ……あゝ煩すえ餓鬼だ……」

火の附く樣に泣立つる淸太を抱てお新は土間へ下た、醉が廻つたのか園造は、腕を枕に彼方向き、ごろりと



眺望（選外）　芝　木村花枝

横に成つた。其姿を見返つたお新の目は涙が一杯。淸太を抱て外へ出て、賺し乍ら的途もなく歩き出した。

お父樣は何故彼麼な情ない人にお成りだらう、以前は彼麼な人でも無かつた物を……あの厭な、大嫌な、長吉づらを家へ入れるの何のと云つて……餘り人にも好く云はれぬ彼長吉づらが何所が好い者ぞ。安樣の向ふへ廻つて仕事の邪魔計り、怨みの種に數ある小面の憎い彼長吉め、何で夫にされようぞ…………お父樣も亦餘りな…………船出してから一年餘りにはなれど、未安樣の死んだか生たか、夫れさへも分らぬのに……。

後毛はら〳〵頰をうち、裳裾亂れて雨氣を含むだ風冷たく身を刺すに、ふと氣が附けば何時か不識々々の間にもう此所は濱邊。手なる淸太はいつか又眠入つてる。見返れば眠れる人家遙かに黑く、疎らな磯松は枝を揉まれ悲鳴を上げて、風は荒び、浪は怒る、月なく、星なき空暗う。暗憺として物凄い夜の磯。

お新は吹附る暴風に、袖で犇と淸太を蔽ふたが、凝然と無心の寢顏を透かし見て、吻と太息を吐いた。此樣に可愛い子があるのに、安樣は實に什麼したんだろう…。悲しい想胸に滿ちて、お新は眤と海を見た。四面暗黑の中に望るゝ、渺茫として涯知れぬ海の面には、烈しく怒濤の吼る聲。ドドドッと寄せて來ては、巖に碎ける勢凄く、ぱつと散る飛沫が雨のやう。闇い空には風暴れて暴れて、砂交りの冷たいのを、お新が身躰に容捨なく吹付ける。

ふと自身は投身者の子と思ふと、俄に總身水を掛けられたやう、竦然として立止まつて了つた。

義理の父と云ふ事は今知つた譯ては無いが……あゝ妾は救はれた子、眞の子より恩は深い……養父の言葉は背かれぬのか…恩、義理…嗚呼安樣……。

突然安樣と獨言つた。ふら〳〵と氣が變に成つた。

お新は又泣出した淸太を確り抱いた儘、波荒ぶ磯を脛も露はに、胸に消えぬ俤追つて、一目散にさすは何處ぞ………………。

例の通り文章は達者である、筋は少し面倒すぎて短篇には書き足らぬやうで、終りも少し餘韻を殘さうとして略筆しすぎた、嵐の中に立つ薄倖なる女の樣は讀者に哀を催ふさせる(選者評)

○慰勞金

牛込　盛田とき子

神田の川に面した砲兵工廠の、空を凌ぐ大煙突から吐出す黑煙、こゝでは每朝六時から七時夜は五時から九時迄數千の職工我先にと入つたり出たり、せわしげにして居る、そをして工廠の廻にある諏訪町や柳町の人家て干した物は皆煙突から出る油烟て黑くなつて居るので、御かみさんたちの大こぼし、時は十一月末近く菊の色は褪せて紅に染まつてるは楓葉ばかり牛天神の大銀杏は果敢なく葉は落ちて居る、此景色を朝夕に見て居る諏訪町の百軒長屋の片隅に暮れ行く秋の悲しさを染むる燈火の下の二人「多賀さんも御氣毒ですねえ、今多賀さんを學校へも上げたいは山々だけれど、御父さんはもう彼の世の者、春雄は行かた知れず、此時に私しは病氣、どうか多賀さん惡く思はないて」と四十を越した品よき人は多賀子と云ふ子の實母て實子にわびつゝ落る淚をさえながら苦しき息の底よりの此言葉、多賀子は同じ曇る眼を打おさえ、どこかふるえる聲で「御母樣そんな御心配なさらずに私がどおかして御母樣と暮して行きますからどおか御心配なふらずに早く御身體を」と母は多賀子の手を病やつれた手てし

かとおさへ「多賀さん」と後は滴る熱涙。

早や北風ぴゆう〱と白く立てる霜柱を踏みつゝ「御母様入つてまゐりますの聲を殘し今朝も又出廠母は多賀子の後姿を見送り、未だ學校盛りの彼の子をどをしてあんな處へ通はせるのか、これと云ふのも皆親のあんまり子を可愛がつたから出た事、吁定めし草葉の陰に居る夫も嘆て居る事だろう、私も彼の人と一處にあの世に行か知ら、いゝえ今死んだ處であの多賀子に利益のある事でなし、彼れももう二年で十九、そうしたら何處かに頼んで嫁にやろーか知ら、何ぼ春雄でも今に後悔して來るだろー」おゝもう日が暮れるのであろう、多賀さんは歸るであろう。

常に工廠の門を出るにも下向きの多賀子は今日は勇ましく出て唯夢中で歸て、「御母樣御嬉びなさい」と多賀子は懷中より出す一對の紙

一金八圓也　　　交換手　高山多賀子

右明治卅七八年戰役中業務を勉勵せしに由て賞與す

明治卅九年十一月廿六日　　東京陸軍砲兵工廠

と書いた書に八圓の金と三圓九十錢の半期會計を揃へて出したが母は答ふる言葉は無く、只嬉し涙の數「御母樣今日これだけ項戴ましたから家賃二ケ月分四圓と米や二圓を持てまいりましようか」母は初めて「多賀さんが良く御働きなさるから御賞與とですか」「はい」「御氣毒だが多賀さんの云ふ通り紛失しないよーに」「はい行つてまいります」「そおして下さい」馳て行つた賀子の後姿を見て「吁多賀さんは」と泣伏した。

「吁之で紛失さずにまあ安心と娘は胸をおさえ淋しき天神の下通り後に見ゆる家々も何んとなく樂しく行く途中、向のほの暗き燈火をあびつゝ柿の落葉を打踏つつ悲しげなる豆腐屋の聲、娘はこゝで買て母に安心させましよと、呼ぶと賀子は其言に打仰ぎ見合す顏と顏「あら兄さん」「おゝ多賀」と颯と降來る秋の村雨。

一言以て言へば未だ小說は書きなれない稚、何うかして工夫はあるが、上手とまでは行かない、けれども惡い癖はない、上手らしく見せやうとするよりも、正直に眞情をうつさうと努めて居る、此作をうちやらざりし所以はこれ（選者評）

○友がたり　　本郷　波葉

天はいよ〱朗かに氣はいよ〱澄渡り旭は杉の葉で彩つたウエルカムに照つて國旗ははれ〱と飜つた、今日は六百の女生が待ちにまつた秋氣大運動會の日である、接待係の詰所の方へ近づいてきた女生徒、長うひいた袴の裾に小い靴を見せて紋付に徽章を付けた姿

は此に詰めて居るのと同じ扮裝、進藤さん實とに青木樣はお可憐相ね」と今きたのが口を開くと椅子にもたれて通券をいじつて居た進藤「マー山本さん突然にそんな事…をかしいわね青木樣=青木樣、ほんとにお氣の毒よ近頃めつきりおやせなすつたわね「エ、そうなの溫和い方だから口へはお出しなさらないけれどね…私今父兄席からふと記錄係席を見ましたのよ…とねあの沈んだ目で運動をみつめて鉛筆をいじつて入つしたの例の悲しい目てね…あの目を見られたら堪らないわね、あの兄樣のお骨は昨日來たのですつて」

「兄樣は淸國で死くなんなすつたつてね中村樣御親友て入つしやるから御存じてせう」中村といはれた黑目勝の愛くるしいのはそつと目にハンカチをあてたが我名を呼ばれて「エ、そう…そうなの！」と聲をのむ

「そしてまたあの筆で訴へられたら堪らないのね」…

あら來賓よ…御案内を山本さん」わつと會場から響いてくる勝鬨の聲續いて起る喝采!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊

食堂の方から出た女生、一人はまさしく接待係の中村「青木さんいゝてせう席へ上らなくても‥ね休息時間だから…」多くの人の口に乘た薄倖なる青木とは此人てあつたが徽章は違ふが中村と同じ裝ひ、細面の美しい眉に掛つてる雲は世の憂がしたのであろう成程少し瘦せも見える、彼の心には美麗に飾られた滿艦飾もメーポールダンスも多くの來賓の聲も樂隊の音も皆無一物であるらしい、無語のまゝ機械的に靜かな植物園の方へ足を向けた、何やら話しながら二つの姿は松の木陰に蹲つた「中村さん有難うよ」と青木は鼻つまらせてハンカチを出そうとした刹那、何やら落した之何?と中村は拾うとしエ!、それ!!と青木の頰には紅が上つた「青木樣私にまでお隱しなさるの、寫眞のてせう」青木は術なさそうにうつむく「せめて看病てもなすつたらまた少しはね」「エ、遠い國てはあり、あまり急だつたもんてすからね…」と語を切つて一覺悟はしてましても白骨を手にした時は!!やつぱり女てすもの」とはかないものを地上に落した、遽然ハンカチを目にあて「せめて半年生きてたら留學年限も卒て少は滿足して往たてせうにね、兄とは云つてましたが一生たよる許嫁つて事定つてたもんですからやつぱり家政の樣な事ばかりに身を入れて…師範にても入つてたらと今更ね」と句をきる「じやこれから獨て」「マー貴女までそんな事を！たとひ式はあげなかつたにして

も兄としていたにしても……それに妹たらあんな盲目なんてすもの、私一生妹の慰藉者となりますわ」「でもお祖母様がね」「エ、私も只一人の祖母に心を配はすかと思ひますとね……だけど是も前世からの約束なら仕方ありませんわ」と涙をのむ中村はまた案じて「でも貴女の身體がね」「有難うよ、なぜ病身でせうね」としみ〴〵と云つて「倒れたらそれまて、こんな不幸ですものどうせ：父もなく母もないからだですもの……たのみつたらあなたばかり！宅へ歸つたつて祖母が一人亡夫の前に座つて香ばかしけむつてるのを思ふと他人は面白い今日の日がいつそ苦しくつて……」「ほんとに察しますよ貴女の御身を思ふとね身を斬られるより切ないの」と青木に向けた目を落せば瞼におさるゝ涙は櫻色の頰に傳つた、折から理科室の方から響た鐘は休息終りか身にかへてもと沈だ中村の聲がして悄然た姿は松を離た。

運動會の賑やかさと、個人の悲境とがコントラストの妙を得て居る若し運動會てなかつたならば、此の悲しい話も半分は只に聞流されたてあらう、選者も讀み流したてあらう（選者評）

散歩（賞外）　但馬　春蝶女史



○あはれなる少女　大阪　花岡雪枝

初夏の夕まぐれ、女は想にいたむ胸を撫でつゝ早稲田の森より外山の原にさしかゝり草やうやく深く木立繁りて路なき處にいたりし時うす闇の帷あたりをとざして小雨しと〳〵と降り出てぬ、されど其女は去らんともせず、幽暗なる木の下蔭をさまよひて果しなき空想にふけりつゝある折しも、帛を裂きたらん樣なる一聲くれ行く夕空に聞えぬ其時彼女はつと驚き何思ひけんすご〳〵と去りけり、嗚呼彼の女は何を苦しみ如何なる煩悶をなせるや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「花子さん私ネーせめてお母様なりとありますれば

「櫻木さんもー何も運命とあきらめるより仕方がありません

「それもーですけれどネ貴孃も私も母親がないので

「ほんとに孝行がして見たいですわ

「人は理想だの戀愛だのといつて煩悶しますけれども私等二人は親の事てくるしむのですわネ、花子さん

「櫻木さん何にも彼も因縁づくですから是から好く勉強して自分の望を達しましたら其れで宜しいですわ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後一人の櫻木隆枝は或る銀行員の妻になつて居そーだ、一人の梅本花子は醫學博士の妻になれり。

一言に評し去れば青き初めの文章と云ふ外はないが、何處となく風韻を帶びて文格を具へたのは、幼いながら此處に採用した所以で、頼母しき將來あらんことを祈る（選者評）

○孝行豆腐

京橋　山内ちゑ子

夕照美しく、殘の暑堪へがたさに、我は納涼かたがた姉上と住吉神社へ詣てんと、船松町より渡船にて佃島へ渡りぬ、參拜して河岸に出てんとする時彼方にてトウフー、トウフー、と最もやさしく憐れなる聲きこゆ、不思議に思ひ向ふを見れば、年頃拾七八にやあらん娘が、重たげに豆腐箱を荷ひ來れるなり。定めし深きゆゑあるべしとは思ひたれど日も既に暮れ舟人の出ますよといふに急ぎ渡船に乘りぬ。船中にて獵師の妻らしき婦人の話すを聞けば、彼娘は何と云ふ孝行者だろう、さぞ骨が折れるだらう、近頃は皆が孝行豆腐と云ふて買て遣るので母親にも甘味物が食されると大層悦で商賣して居る、亡父や亡兄は草葉の陰で悦んで居ましようといへり。何處の者と尋んとせし時船ははや岸に着き、人々は爭ひて陸に上りたれば惜しき事限りなかりしも、詮術なきまゝ家に歸りたり。其後は彼女の事が心に懸り、越て三日目の日渡船塲の水夫に委細を尋ね遂に彼女の家を訪問することゝはなりぬ三疊の間に古き破れ毛布を敷蒲團の代りとして臥し居る六十路に近き老婦とはぎ〳〵の單を身に纒ひたる娘とは涙を流して喜び語る其の話を聽けば昔は徳川の御家人なりしが、明治の御代となりて秩祿を奉還し、或る商業を營み始めの程は損毛も致せしが、次第に商方の事も覺えこれならばと思居るうち、或る者にあざむかれしが原因となり店は人手に渡す良夫は病に罹り數年の看護も其甲斐なく歸らぬ人となりし後、此處に引き移り悴の腕を力にて僅に其日を送る中、日露の開戰となり、悴も補充兵に徵集せられ、二百三高地にて名譽の戰死を遂げ、がつかり致しましたが病の原因となり、御覽の如き爲躰、娘が孝行にして呉れますのが一入いぢらしく、早く此の世の御暇がほしなど、泣きくづをれての物語りに、我もおもはず袖を絞りたり、僅かばかりの志を與へ種々慰めつ、又の日を契りて立ち歸りぬ。

小說と云ふより叙事文の一章とも見るべく、極めて幼い書きぶりであるが、女らしく、飾らぬ情が現れて居り、邪氣の無い點を愛す（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

秀逸

磐城　村岡敬子

◎幾年か羊呼ぶとて吹きなれし笛の音くしく身にしむ夕

神奈川　野中百合子

◎はらはらと落つる桐の葉戸を打ちて悲しや月もくもりけるかな

相模　林けい子

◎秋の野に七草千草おほかれどまづはやさしき女郎花かな

近江　辰井あやの

◎狂女走る裳裾にすゝき亂れふす秋風九月むさし野の原

横濱　吉川香都子

◎歡樂の榮華はいつか夢となりて破れし御簾に木がらしの吹く

上毛　眞砂壽子

◎川ひとつ隔しかなたあひる鳴きてきりのはれまに藁屋ほのみゆ

越後　桑野ふじ子

◎木の葉散る音をきゝつゝ唯ひとり君とかたりし花の日思ふ

三河　滿須子

◎ほまれある名を得む旅のかどでなり母よさ泣かでよさ笑みたまへ

横濱市　齋藤とし子

◎新潮や東の空のほのめきて秋津島根は年改たまる

豐後　平山良子

◎美しう花咲きかをる殿の門をみ歌つかひの叩きける哉

豐後　向井翠芳女史

◎音もなく落ちし一葉を袖に秘め戀ひしき人の御名かきて見ぬ

常陸　酒葉貞子

◎波よする渚の松に月出てゝ磯の七村夢美しき

成田　武田たき子

◎幾曲りまがりまがりて行く果よいづこなるらむ大利根の川

麹町　まぼろし子

◎木犀の香りこちたき暮れ方や西ゆく雲に思ひみだるゝ

横濱市　源勝子

◎夕もやの月にはれゆく岡の家にほのぼの白し夕顔の花

兵庫　柳田白百合子

◎病の身を紅葉こぼるゝまどによせて君ます空の亂雲みる

羽後　前田比佐子

◎秋たけし月の御堂に忘れ來し笛よ今宵は神吹きまさむ

下谷區　岡野さかゑ子

◎ほのくらき神の御庭に白鳩のほろゝとなきて友戀しとや

武者雪子

◎打ちなびく竹の葉末に蝸牛危き身とも知らずやあるらむ

伊勢　松本しげ子

◎繪のごとき興ある雲に過ぎ行きて月すみ渡るむさしの原

赤坂　齋藤紫桂子

◎歌かをる小扇かざしほゝゑみて君とながめし小波の月

靜岡　松村紫の武

青海波たちまふ皇子の綾の袖ゆふ日に彩えて紅葉散るなり
○　大坂　ひろ子
山彦も答ふるものを懐かしき君が情けにそむく我が身よ
○　上野　栗原はる子
夕立の名殘りの露を葉にすて葡萄のうれ實夕日にはゆる
○　小石川　千代鶴
我宿のま萩の花ぞ咲きそめぬふりよき枝や君におくらむ
○　東京　光熙女史
雲の色のたゞならぬ夕べ窓によりて物思ひをれば雁なき渡る
○　紀伊　鈴木むつゑ
すゝき原大和へつゞく禿山をまろび來てふく秋の風かな
○　周防　捨子
風はやみ蟬のこゑ〳〵はたとやみて大地裂けよと夕立のふる
○　靜岡　羽根安子
三保の濱浪も音なき夏の夜にふりわけ髮に松風ぞ吹く
○　上野　新井琴子
ながれよる鐘の響にくづされて夕の銀杏を淋しと泣きぬ
○　埼玉　風水女史
さはいへど胸のもだえをいかにせんとはにほむべき夢ならなくに
○　埼玉　喜美江
かにかくに思出おほき車路の行手にかすむ三保の松原
○　安藝　少女
初秋の風にゆられてなよ〳〵と蝶の命も短かかりけり
○　鹿兒島　帖佐よし子
ほこりかに咲くか桔梗の花の猗千草の野邊をひとり領めたる

○　薩摩　鹿江女史
蟲の音もやゝにさび行く秋雨に人死ぬ野邊の鐘の聲かな
○　紀伊　森林春園
夕日さす野川の末を見わたせば穗蘆色つき秋風ぞ吹く
○　船津　萬小夜子
旅に在す友や如何と思ふかな月に更け行く蟋蟀の窓
○　秋田　黑丸とみ子
月の夜に友と別れてひとり路三笠の山の男鹿友呼ぶ
○　成田　山田芳子
夕榮を背に受けて川口の柳の下に馬洗ふ見ゆ
○　北總　渡邊一枝
猪の鼻の松の木蔭に杖立てゝ夕日の海に歸帆眺むる
○　三河　獸子
かくてつひにいづち行く身かみ手によりし芭蕉の蔭のさても戀しき
○　德島市　住友登喜子
妹に乳なき乳ふさふくませて母がみ墓に詣る夕暮
○　陸中　若生なか子
何時のまに青葉もみぢとなりにけり故郷こひしき夕ぐれの里
○　神戸　木田しげ子
都には聞く人まれになりにけりいづこたづれん山ほとゝぎす
○　麴町　山下星子
思出の夕小窓や笛よせてさびしきまゝに吹いて見るかな
○　相模　靜の子
曇りなき御空に月は只冴えてかりがれ渡る風の夜半
○　上毛　河内とめ子
今宵しも五年振りにおとなへば人はなくしくたゞ蟲の聲
○　山梨　とよ子
蟲の音にしばし迷ひてかへるべき途忘れけり秋の夜の月
○　上毛　關口梅子
何となく悲しきことの身にしみて涙もよほす秋の夕暮
○　伊勢　大國靜代子

たらちれの母に送らむ文書きて戸による夕かりがれ渡る
○　讃岐　むらさき女

静けくも野寺の鐘の聞ゆなり夕べ日記かく旅のやどりに
○　伊豆　上原静枝子

うせにける友の柩を送り行く小雨そぼふる秋の夕暮
○　武蔵　伊東香子

夕日うけて紫匂ふ小萩原順禮一人たどりゆく見ゆ
○　備中　大山益子

折々は栗の實落る音のして夕雨淋し山陰の庵
○　美濃　傍島みゆき

明星の光りうするゝしのゝめや梅多き畝に露のなく
○　神戸市　しげ子

置きわたす霜の細道盡るあたり木立寒けく家二つ三つ
○　神戸　河村律子

黄菊咲く翁が宿を訪つれて今宵も聞ぬ昔し語りを
○　石川　をばな

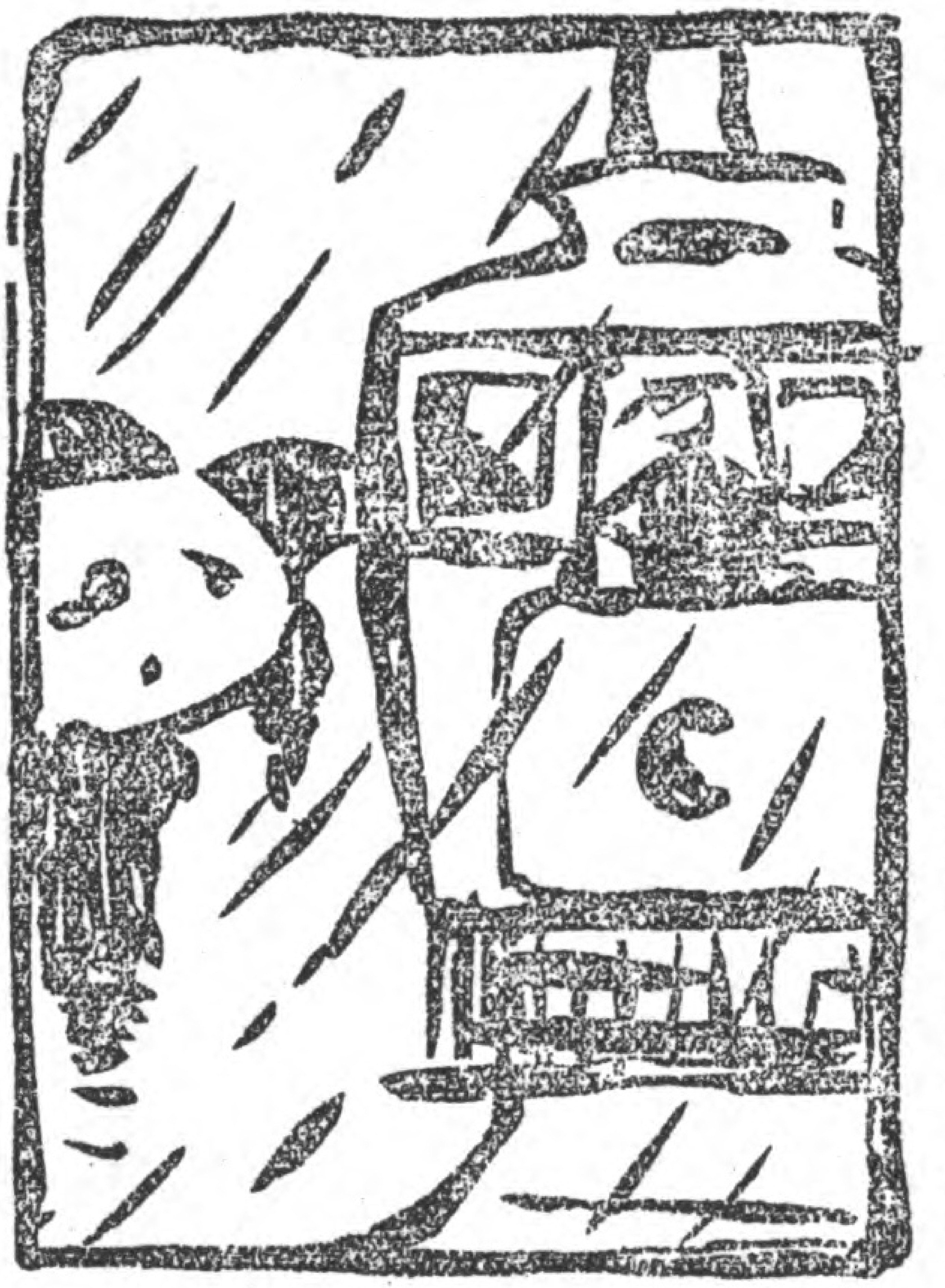
月さむき世の小道ゆく尼の衣の袖に紅葉散るなり
○　尾張　加字田愛子

霜に鳴くきつれのこゑに夢やぶれ父なき吾子の行く末を思ふ
○　富山縣　すみれ

むちうたれ小走る牛もかざしけり秋のしるしの紅葉ひとひら
○　奈良　中富よしみ

たそがれのみ墓に寒き秋の風拜む少女のみだれ毛を吹く
○　新田　得子

われとても血あり涙はあるものをなどか浮世のつれなかるらむ
○　浅草　吉村外子



雨の日（選外）　浅草　富取はつ子

露と風葉末に踊る影見ればちゞにくだくるわが思ひかな
○　新田　柳舍

幼子が乳母の御膝にかり枕何夢みてかほゝゑみにけり
○　伊豆　遠藤かいち

夏の川平和の玉せにのせて浮きては沈む流れ藻の花
○　駿河　かほる

安部河原こぎ出づる舟のあとやさき堤のさくら色うすうして
○　山口縣　山中けい子

ひらけゆくみよのけぶりに櫓をたえはせゆく舟の足かろきかな
○　備中　唐井とみ子

すみ染の夕げの烟たつころはいづくの空もさびしかりけり
○　美濃　水村淺子

夢なれば母も赦せよ我戀を今は浮き世のはかなき身とは
○　秋田　旭明女史

涙もたぬアイヌの子よと人は言へど厚子の袖をしぼる夜半もあり
○　秋田　大橋貴惠子

嶺に立ちて越し方遙か眺めやる霧にかくれし夕宿の里
○　備中　大山よし子

秋姫の御辮の裳裾やぬれにけん宮城野十里花亂れけり
○　羽前　紅子

罪の世に眞理の神にいだかれてけふも人の子失戀になく
○　成田　波志津女

利鎌なす月の光りのさゆる鼓身をきるばかり寒き夕暮
○　朝井千とせ

心無き里のうなひのどよめきに鷲飛びて梅の花散る
○　茨城　前原琴江

こよひ來る人をまつ間のつま琴にしらべ合せてまつむしのなく
○　千葉縣　白菊女史
舟一つまた舟一つあらはれぬ霧たちこめし鴨川の淀
○　備前　正富ゆかり子
たそがれや片われ月の影さえてさつをゆくなり山の小路を
○　越前　野坂まさを
來む年は斯も悔ひじと去年の今日の契重ぬる年の暮かな
○　磐城　鈴木棠子
さすらひて十年ぶりなる故郷は昔に變る人のみにして
○　上野　金子尚枝子
をちこちの山の紅葉も散り果てゝ月かげさむし木枯の宿
○　美濃　內藤美知
寂しげに案山子の立てる夕ぐれを啼かぬ鴉の低う飛びゆく
○　秋田　比良多碧子
夕虹は誰が思ひでのかけ橋や共に渡らむ理想の國へ
○　越後　宮島泣崖子
手燭して虫鳴く軒に小娘が糸瓜水取る夕月夜哉
○　長野縣　內山けさよ
薪とりてかへる少女の籠の上に木枯吹いて散る紅葉哉
○　成田　野々宮國子
亡き人のみ墓まゐりのこの夕べを細の霧低う雨ふりいでぬ
○　石見　みさを
川の洲に小鳥網はるこの夕汀の蘆ざわきの風ふく
○　本鄉　うさぎ子
長へにゆめ路なれやこゝまでは浮世の憂さの攻めし寄せれば
○　群馬縣　吉村橋隆
草も木もうつろう秋の悲しさをよそにへだつる野邊の夕霧
○　靜岡縣　三輪榮子
いなごとぶ秋の小道ををさな子か三つ四つ二つとりてかへるよ
○　府下　鵜澤良女
衣ほせる媼が裏庭人なくて小さき柿のほろほろと散る
○　美濃　谷合美知子
鳥渡る音靜かにて紅葉ばに夕日かげろふ山寺の庭
○　房陽　文子女史
衣擣つ音はさやかに聞えつゝ田中の廬はきりこめにけり
○　安房　錦織ちえ子
あまが家ののきのかきがら色あせて母ぞ戀しき秋風の吹く
○　淺草　小野寺翠花女
秋の風傷の夢に活くろ子が胸の愁を寒く吹く哉
○　八代美代子
ひれもすにおこたるものゝ軒下につゞりさせてふきりぎりす哉
○　明石　孤蘭
月今宵破窓の萩に追懷の昔かたりて獨泣くかな
○　常陸　大和田淸子
なき君を一人書齋に忍ぶ宵小窓淋しく雨の音聞く
○　東京　とし子
夏の夜を歌にもかなと筆とれば田の面幽かになく蛙かな
○　播磨　高見學子
淋しさを語ろふ友となりにけり眞垣に匂ふ白萩の花
○　新潟市　まさ子
姉樣の撫子させるとき髮に螢とび來ぬ川添の道
○　若狹　かな子
世をしのぶ編笠はれて虛無僧の見あぐる月に雁鳴きわたる
○　常陸　酒葉つれ子
川上の妹が里わも秋ならし萩の一枝けさ流れきぬ
○　讃岐　東原武子
蜘蛛の糸漸くかけし哀れさに折らでやみたる八重椿かな
○　筑後　野口みどり子
病む母のみとりさみしき此の夕月はありながら霰たばしる
○　淺草　翠花子
川添の籬に香る糸萩を手折りて贈らむ東の君に
○　和歌山　保子

山の手に清水くみきぬ手弱女の袖にこぼれぬ萩のほそ徑

○　磐城　鈴木勝子

うらぶれの身をなぐさめん友もなく思ひ悲しき故郷の秋

○　奈良縣　中富よしみ

枯尾花なびけるまゝに見えおくる枯野の末の弓張の月

○　讃岐國　越茂子

妻こひの鹿の鳴く聲打絶て世は木枯になりにけるかな

○　西川縫子

寂として天地ねむる富士の夜や石室に見る月の小さき

○　兵庫　藤原かれ子

夏の日も山端にかゝる暮近きおもはしげなる夕氣色かな

○　赤坂　森英子

たれか知るくるしき海にたゞよひてたえせず秋の風にあふ身を

○　讃岐　靜香女史

あさがほの色にもまさる心もてめぐみたまへよ水莖のあと

○　東京　吉江子

螢追ふわらべも見ゆる里の路月に照りそふ糸萩の花

○　近江　宇野八重子

お正月（選外）　豊後　甲斐重子

母老いぬ望はならず吾れ病みぬかりがねきく立秋の夜半

○　大阪　高原眞子

冬ちかく暮行秋の空さえて光り限なき月の影哉

○　高槻　春雨子

夕からす鳴音あはれに聞ゆ也けふ早暮れて秋となりけり

○　西ノ宮　森井せい子

われひとり秋の哀れを知り顔に川邊の野菊しほれてぞ咲く

○　春村玉枝子

ながむれば北にながるゝ星ひとつあれにしにはに鈴虫の聲

○　相模　池田まさ子

打群れて遊びし事もうばたまの一夜の夢となりにけるかな

○　熊本　平岡清子

春の夜の淡けき月をともしびに詩書繙けば月猶光る

○　滋賀　伊藤登久子

五年の昔となりぬなき母のくすり通ひ路いまはうらめし

○　岩代　すみれ子

いつの世に逢はるゝ事か知られども我は變らじ神にちかひて

○　羽後　楓女史

暮はてゝおぼろになりし山きはをふたゝびみせて出る月かな

○　備後　高木壽代

いつしかにいさら小川の水かれて只徒らにおちばしくなり

○　牛込　阿部絹子

別れにし君を思ひてたゞ一人月ほそによれば時雨降るなり

○　千葉　錦古里八千代

嬉しきは悲しき夢をみたる夜の覺めたる時の心なりけり

○　失名



秋の夕苦吟の窓に歌ならで紅葉亂れぬ歌集の上に

○　小石川　上野たへ子

くもりなき月のみ秋の心地してひるの暑さはかはらざりけり

○　岩手　紅百合子

あれはてゝ一人淋しき我庭を飾立てたる大和撫子

○　栃木　津根の花女史

まてばこそ幽かなる音も大方の物に紛れぬ時鳥にて

○　埼玉　戸山せい子

寒き夜に忍ひもあへずさをしかのつまこふ聲の憐なるかな

○　　四谷　横田久子

夕暮にひとりさまよふ磯濱に心ありげに濱音高き

○　　優子

久方の鈍色月の影ゆれてあんまの笛に物思ふ哉

○　　磐城　武者ゆき子

猿の聲も身にしむ山風にものさびしくも時雨來にけり

○　　宇都宮　芳野靜子

萩の葉に宿る白露吹き散らす身にしみそめし秋の夜の風

○　　岩代　丹治はるみ子

山寺の鐘の音遠くたそがれて秋の一日の暮さむかりき

○　　横濱　近藤まさ子

押寄せて磯に碎けし浪を見る黒き法衣のみ僧やゆかし

○　　阿波　仁木花汀

秋砧北行く雁のみにしみてあはれを添ふる夕窓の月

○　　西の國　白蓮

母よされど白きかひなの血の燃や五尺の髮をいかにすべき

○　　岡山　岸本雪子

都にも我の姉あり顔よくて和歌をよくすと母上の給ふ

○　　大阪　島田ひろ子

いはけなき心ながらに身は老いて鏡の影のはづかしきかな

○　　廣島　越智只子

少女子は早苗を持ちて田の中に八千代に殘る瑞穂植ゑなり

○　　越前　新保靜子

秋の野の千ぐさの花のいろ〳〵におもひみだれて虫のなくらん

○　　薩摩　木塚きみ子

夕暮れて大空曇る野の原を泣く子抱ける順禮の行く

○　　長門　濱子

父もなき母なき身には秋の夜の月の鏡に惡ぞ知らるゝ

○　　磐城　村岡花月

時めきし昔の跡をしのべとや松にかゝれる秋の夜の月

○　　富山　高野秀子

なつかしき母の形見をながめては涙にくるゝ秋の夕ぐれ

○　　靜岡　吉原靜江

羇路を朝立いそぐ旅人がつく息白し有明の月

○　　大阪　和久濱子

夜もすがら文を抱きて泣く身ぞと知らでや人の月にうらみむ

○　　上野　松井清子

たが罪ぞ片合と生れて恥ずる子にまろ袖かみて泣くか歎へし

○　　近江　杉原稚園子

稚兒も眠り母も眠りて夜は深しひとり思に遠砧きく

○　　上野　なみ子

おばしまに二人若き兒笛とりて調べあはする夏月夜かな

○　　徳島　笹川益子

うちわたす磯野の萩のあやにしきまつ織りそむる秋は來にけり

○　　長門　孤琴女

みだれ髮なでつゝ向ふ水鏡をのがすがたのよしあしぞしる

○　　横濱　きよ子

外國にいます兄君身の上につゝがなかれと祈りこそすれ

○　　佐賀　辻登茂子

聲かはす人もなければたゞ一人寢起の床のいとぞかなしき

○　　兵庫　石原糸子

朝露にぬるゝ千草のかげみればやどれる蟲のこゑぞきこゆる

○　　越前　野坂まさを

聳立てる岩逕はくれて一筋の流れに殘る秋のひの影

○　　みどりは

から車しづかにかへる町はづれさやけき月は道てらしつゝ

○　　紀伊　田中文子

友去りてひとり月見る秋の夜やまがきの萩に露みだれちる

○　　愛媛　拾翠女史

夕すゞみ川邊すゞしくよる波に堪へぬ暑さも忘れはてつゝ

○　　埼玉　近藤登久子

にぶくとも心の駒にむちうちて文の林にいざや遊ばむ

○豐後　安藤良子
蜂茶屋見おろす磯の松の上に眠るが如く白帆霞めり

○下總　入木美喜子
散り落ちてまた咲きかへす花はなしかはす花とは武士のその身よ

○伊賀　二百三高子
少女子よ畑の千麥採入よ向ふが里に小雨そゆふたつ

○大阪　櫻木美智子
かゝる時母だにまさばかくは我歎かぬものを雁鳴けばとて

○岡山　永原多計子
涼風に送られきたる琴の音は誰が爪音か夏の夕ぐれ

○高見琴子
淋しさに雨戸おしあけ眺むればおぼろにかすむ十六夜の月

○佐渡　谷川桂月
跣足おもげにさげて踊り行く少女の袖に櫻花散る

○磐城　鈴木紫子
宵の君のかへり來む日と白百合の花いけて待つ丸窓にして

○備中國くにゑ
風死して蟬亂れ鳴く午時を氷賣る童母病めりといふ

○神戸　清水露子
夢に見し優しき姿去りやらで木の間にかゝる清き月見る

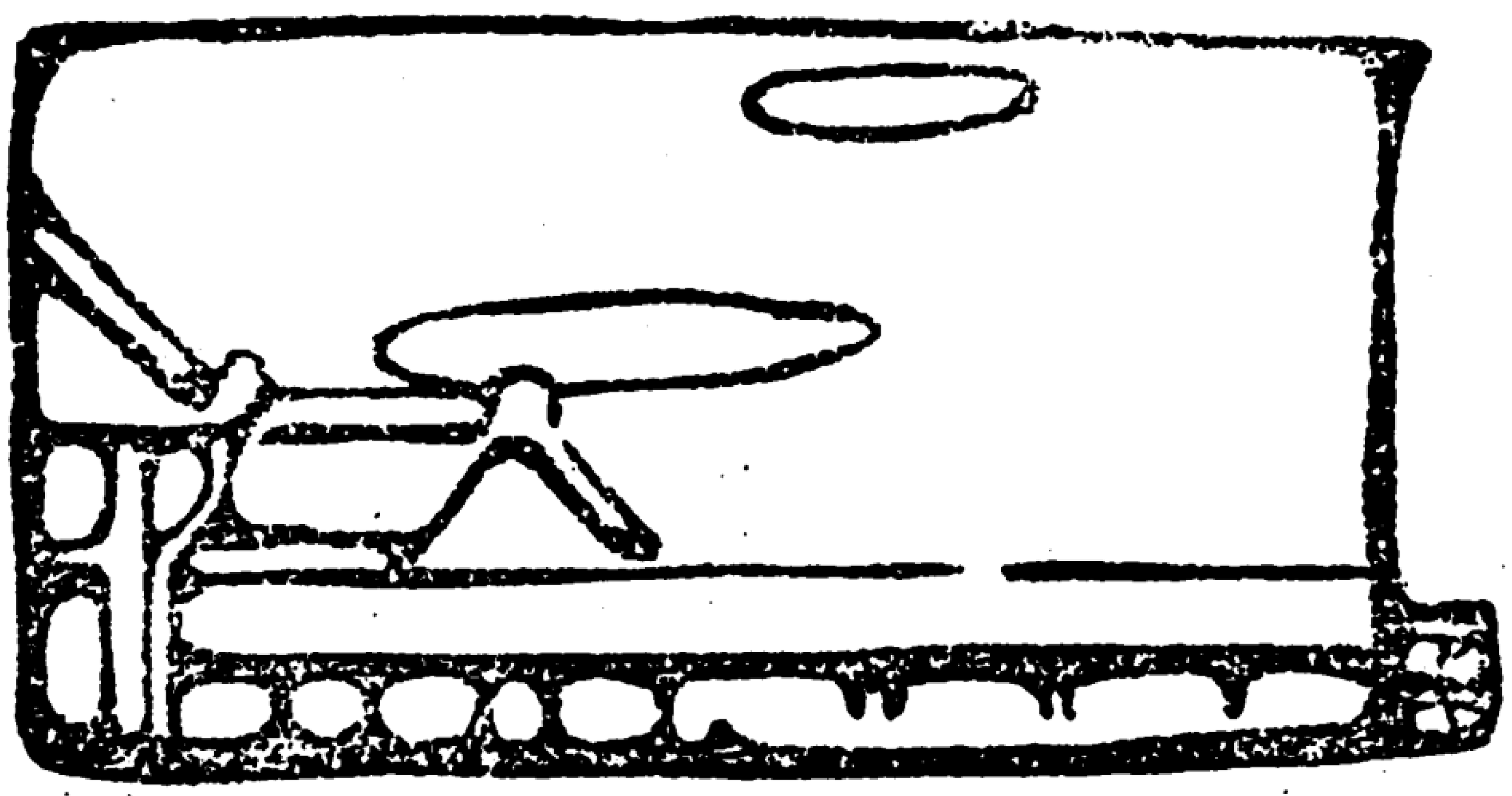
○德島　齋藤菊子
空みれば俄にくもりなる沖のむかひの海にうつる夕立

○芝區　鶴岡かつ子
美しうしだれ萩咲く花影に蟲籠下げて美人はゝゑむ

○神戸　大島ちさ子
姉樣と呼べど呼べども答なしつめたき石に秋風ぞ吹く

○埼玉　船津千代子
夏草のしげれる中に只一基斷碑に殘る名こそしのばゆ

是は何?(選外)宇都宮　森谷秋子



○福岡　鶴田靜子
片時も君を忘れて戀慕ふ心のそこや誰か知るらん

○栃木　花房道子
何となく音も變りて吹く風の身にしみそむる白萩の窓

○遠江　田中すみれ
はらはらと庭の梧桐に音のして旅窓の深夜物思ふかな

○常陸　秋山江月
幾久し秋のすゝきもかわられればかわらぬ月の影をのすらん

○越中　中野香馨
立ち寄らば聲や絶えなんたなりなば月やこぼれん糸萩の花

○栃木　青木しづゑ子
涙なのみ眺めて今日も暮に鬼令いくり行かば山は見へき

○茨城　秋山蓬子
いつはりの甘き言葉よさりながら胸はみだれて物思ふかな

○陸前　孤子
たのみつる友の永眠にしこの夕べ萩の破窓に小雨そぼふる

○紀伊　岩田その子
亡き友が心盡せし朝顔の君いまさずとも花や咲くらむ

○熊本　白川乙女
立つ霧に中へたゝれし浜千鳥聲ならぶる友や何處に

○高岡　有磯浪子
四方は皆いと靜まりて靜やかにかすかに聞し初雁の聲

○播磨　平谷たづゑ
夏すぎて軒にきぬたの音あはれ桐の葉おつる山里の夕

○神戸　砂川春子
君が門或夜ひそかに音づれば朧月夜に梅ヶ香かをる

○神戸　夢里女

雨晴れて木の間もり來る月影を見よとや庭に松蟲の鳴く

○　大和　たちばな女

破衣して供人ぐして月の夜を姫徒歩ますなでしこの園

○　千葉　伊藤壯子

雨雲の高根はなるゝ朝風に翠なぶらせて行くほとゝぎす

○　千葉　八木滿洋枝子

あら磯のあら浪高く吹きあれてともよぶ千鳥聲哀れなり

○　下關　長四みつ

おろかなる身にしあれどもたゆみなく進まほしきは敷島の道

○　伊豫　曉子

萩の戸によりて空見るこの夕白雲湧くよ故里の山

○　越後　古海きい子

朝日さす庭の垣根にうすくこくいろなつかしき朝顏の花

○　上毛　森野壺子

月すみし野邊よりもれぬヴァイオリンの調べ床しう文よむ窓に

○　紀伊　阪本春江

君戀し思ひになやむ夜もすがら月になきすぐ雁がれの聲

○　安藝　すみれ

ととなはぬ調べながらもものしたる拙きわざと笑ひませ君

○　秋田　白露子

露わけてみ墓にまゐる少女あはれ一人の母に何時わかれけむ

○　東京　史子

水の面くはちすの咲ける池の朝つゆおもしろく風かをるなり

○　神戸　輝月女

なくむしのこゑにあはれとまさりけるむかしかたりし友をおもへば

○　粟　陽子

名の高き松の木陰に立ちよれば絕えず露もつゆにぬれけり

○　相模　とみ子

やむ母をなだめて今宵窓押せば弦月松に鳴く郭公

○　富山　時子

草も木もかればんかりのあつき日を別れをつぐる鈴虫の聲

○　大阪　櫻木美智子

琵琶抱きて涙にくるゝ老法師破れし衣に風霜からむ

○　淺草　大沼きさ江

なにとなく住まほしくと思ほゆる宿もる月の影を友にて

○　東京　瀬川とき子

秋衣またぬはなくにあさ夕は我が夏衣さむき風吹く

○　美濃　木村淺子

なにとなく物のしらべも亂れ毛の人にはづかし若草の床

○　對馬　重富白露

霧時雨釣する舟の影きへて御所の浦に鷗群る

○　常陸　川並はな子

朝顏やよき朝風にそとゆれて白き露ちる五歩の庭かな

○　本所　林富士子

はちす散るたまどの前にぬかづきてしばしばしぐむうら若き尼

○　岩代　根本松江

兄上の凱旋ましゝと夢に見て獨り泣きたる雪の朝哉

○　豐前　工藤榮子

行きくれて伏家に宿る秋の夜や尾上のしかのこゑあわれなり

○　三河　金田蘭香

瑠璃の雲紫の雲うすらぎて鐘の音ほそう笑ます詩の夜

○　陸奥　柳田泉

十反の帆はねむりゐて堤を行く馬の鈴なれば春長閑なり

○　福岡縣　春子

三とせぶり父のおくつきたづぬれば法名のもじのいとうすれたる

○　内之浦　竹民女

旅衣きなれぬ母がさむしろの寒夜の床に夢もあはなむ

○　巣鴨　關根きぬ子

花とちり雲と消へゆくひさかたの月日の道に關守もがな

○　紀伊　花月女子

月かげにわかれし人をおもふかな秋風さむき野はづれのみち

編輯局選

文藝遊戲

姉妹合せ

はしがき

記者

讀者諸孃が御存知の通り、文藝遊戲第一回「姉妹合せ」は新年の紙上に當選以下を發表しましたが、應募大多數で發表しきれず巳むを得ず後に廻しましたが乃ち左に掲げるのはそれです。一寸申添へますが是は或る母親が何か一藝を敎へてやると言つた答へに擬して諸孃の言はれた中から、似合ひのものを選者が姉と妹に合して見たものです。

姉　　愛知　はごろも丸女

妾は憶う申すと、何だか生意氣なやうですけれど、お恥し乍ら(演藝)――俳優！に深く〳〵趣味を持て居るのでございます、それに妾の家庭は至つて嚴格で、ハイユウのはの字さへ夢にも云はれません、が只なんとはなしに、せりふまわし、七三の見得、しつくりと床に合せた女形飛立つ程にすきですの、殊た太功記の初菊、夕霧伊左の踊、寺小屋の首改め、等は觀て踊つた晩なぞ、呆としてまんじりともせられぬ感慨に打たれるのでございます、とてもならぬ妾の運命に、の願ゆゑ、妾は一生思い捨てる覺悟ではございますが、が、爾役、只一人夜道を歩みますれば、何となく、小言に夕霧のセリフ…おはずかしうございます…。

妹　　三河　しぐれ女

妾は踊を習ひたいと思ひます、踊の素養があれば自づと擧動も優美になりますが、其よりも猶嬉いのは踊つてる間の心持なので、まあ、あの霑しい唄と、床しい樂器の音につれて、色々の振をする、其間といふものは、何事も忘れて了つて、丁度花園を飛歩く小兒のやうな樂しい心になるだらうと思ひますわ、ですから、品のよいものばかりやりたいので、先日もある方の鶴龜を見ますと「齡にたぐふ丹頂の、」といふ處で鶴が羽袖を擴げる形をなさいました、お上手で居らしたせいか、緑紅亂るゝ中に、雪のやうな羽を伸す鶴の様も浸ろ目に浮ぶ思がしました、此時から一層習ひたくなりましたの。

姉　　横濱　島田小菊

お母さん私れよく考へて見ますに、オルガンもお茶もお仕事もと、澤山習ひたいのですが、今私の必要上から申しますと英語ですわ、なぜならば、お父さんは亡いてせう、だからお店を任してある通譯や番頭等は、私等を馬鹿にすることが度々てす、てすから私はもつとよく會話と文典とを、學校の歸りに、二時間ほど英語專修學校の女子部へ通つて習ひたいと思ひます。

妹　　神田　瀧月女史

妾は簿記學を學びたうございます、そーして自分の御小使ひから諸事の費用迄が一切分るようするので、年末にそれを見て、無駄な費用が澤山入つて居たら、來年からはそれを減じて貯蓄するよーにしたいのです。

姉　　岩代　信夫さと

母様私は御料理を習ひたいと思ひますほんとうはヴアイオリンが好きですきてお習ひしたいのですけどお嫁入りしてから家の人がもしそんな事が嫌いてあつたらそれきりですものそれよりかお料理を上手になつて同じ材料でもいろ〳〵たくみにおいしくこしらへて誠實につかへたならばおうちの中がまるくおさまつてどんなに樂しく幸福てせうそれても私そんなにお上手になれるかどうかはわからないけどお料理をお習ひしたいのよ。

妹　　肥前　峰子

お母さん我々だつて裁縫の稽古や生花、茶の湯琴なども習つておく必要はございますがそんな事云つたらお父さんのお叱りも御座りましようから、先づ御料理の稽古からさしてもらひましよう。

姉　　下野　鈴木ゆき子

妾は尤も短歌、新體詩を好みます、それて彼の晶子さんのような人になりたいと思つて居ます然し歌を作くつて三度の飼料を得ようとは思ひません、勞働のかたわらに作詠して終生歌の研究を致したいと思つて居ます。

妹　　秋田縣　黒丸T、K子

お母さん、一藝とて別にありませんが、私は新派和歌を習ひたいのであります、是非新派和歌獨習とか云ふ本を買つて下さいな、買つて下さる？ホヽヽ、嬉しいわエッ、あら一つ即吟だなんて。

姉　奈良　詩香守女

私繪を習ふて見たいのです、水彩畫ても油畫ても亦日本畫ても何でもかまひませぬ、そこの處は兄樣に御相談を致しますとしてネ妾いつかお母樣も御承知てしよ御一所に海水浴に行た時、濱て寫生をして居た女の方があつたてしよう、私は其れを見てから、どうぞして畫をよくかくやうに、人樣の前ても寫生をズン〳〵出來る樣になりたいと、始終思ふて獨習を仕て居るのですが、どうか先生の許へ通はして下さいませ、旅行てもして其のスケッチを記行文の中などえ挿んだならどのやうに嬉いてしよネゆるして頂戴よ。

妹　東京　吉江子

お母さん私は畫が習ひたいと思ひます此の文壇を見るにつけても亦お友達は皆な畫がお上手なので御自從の繪はがきを下さるに私はいつも書けないのが殘念ですから。

姉　岡山　永原多計子

母樣妾に學校て勉强さしてもらいました其上、何にか好みの藝を敎へてあげるつて、誠にもつたいなう御座いますが、御言葉に甘へまして申しましよう、妾は少さい時から音樂がすきなので、それを專門に稽古しようと思ふ故、東京の音樂學校へ入れて下さいませ、妾も充分勉强して當今一流の音樂師となるつもりですから、何卒御願申ます。

妹　和歌山縣　岩崎辰子

お母さん妾にはヴヰオリンを習はして頂戴よ妾は大變此頃音樂に趣味が出て來ましたのそれに此頃は所々の音樂會なんかに參るのが樂んで待つてゐます位、そして音樂會などへ行きますと自然に社會の交際も良く解つて來ますから、お隣の花子さんなんかも近頃からお琴を習つて居ますそして今ては餘程お上手ですわ、て妾も早く好きなヴヰオリンを習つて音樂會へも出たいと思ひます。

姉　泉州堺　濱江子

妾は御琴の稽古を致したう御座ます。御可笑な話てすが妾が一家の主婦となつた時に必要だと思ひます。良人が無聊に苦んでいる時とか。月美しい夏の晩など。琴を彈いたなれば必ず良人の精神を慰める事が出來ると考へます。又良人が音樂が好で樂器で合奏がしたいとか言ふ時妾が琴を彈ずる事が出來るなれば其希望にかなへる事も出來ます。

妹　横濱市　折部色子

ぢやア妾、遠慮なしに言ふワ、笑らつやア嫌やよ、アラ笑て……れヱ母樣、妾何が習ひたいのよ、ホ、、何ぢやア解りませんワれヱ……何よホ、、、、三味線よ、妾あれが一番大好きて、小さい時分から、大きくなつたらば、三味線のお師匠樣になるのですつて、始終思て居たのよてすから何卒れ。

姉　宮城縣　千田めぐみ

私れ編物を習ひたいと思てよ、も――寒くなツてショールも入るし手袋もほしいし私の好な物を何ても好なように造つたら私の氣にも合し經濟てよいわ御母樣にも何か編て上げましよ御財布ても、そしてれ、上手になツたら内職にして御小遣のいくぶんかお補ないたいと思てよ。

妹　周防　梶隨りの子

オヤツー、お母さん、其はほんとてすかオ、嬉しひ事、私ネ日頃から、願ふ〳〵と思つて居たのですけども、あのう、私には、編物を敎へて頂戴な、ネ母樣。

姉　滋賀縣　松ケ枝

母さん私には裁縫を充分敎へて下さい、なぜ私が裁縫を習ひ度かと云ひますと、凡そ女は他家へ嫁入して、音樂や生花は知らずともすみましようが、裁縫を知らぬとは云へまい、殊に行つた先て何々を縫ひなさいと云はれた時に出來なんだら、どんなに悲しいてしよう、

妹　福井　やす子

お母さん、妾は裁縫が一番上手になりたくつてよ、女は琴ても、茶ても花ても知つて居なけりやなりませんけれども、其れらは一通りて普通の女には澤山てすよ、けれども裁縫は、お嫁に行つてからでも一番に大事だと思ひますわ、家内のものが着る衣物まで他人に任立てさせるなんて女として第一恥しい事と思つてよてすかられ、お母さん、妾は裁縫だけは、どんなに、むづかしいものても、出來る樣になりたいのよ。

姉　福岡縣　坂田登代子

後生てすから茶の湯を習はして下さい何日だつたけ愛國婦人會々議のありました際幹事樣が「あなた方は學校の方て茶の湯を習つて居られませうから一つたてゝ下さい」と申されました折

に顔から火の出るやうに恥づかしふございましたそれじやお正月の十五日から行つて宜てしよう其前一寸あなた茶の湯の先生の許へ行つて賴んでおいて下さい彼家なら近くもありますし何日からでも敎へてくれるそうですから…是で私も安心しました。

妹　安藝　千島

お母さま私ネ萬藝に達するより一藝に達せよと申す事も御座いますから私には生花一藝をいよ〳〵是れまてと云ふ限りのあるまて敎へて下さい勿論毎日稽古にして頂いて花も三四瓶づヽ生けて見たいのですそして道具などもこれが足りないと云ふ事なしに悉皆揃えて頂きまして將來屈指の花道指南者にして頂けば此の上の望みは御座いません。

姉　大和　菅野　きみ子

あら、うれし、そんなら御母さん、造花をならはして頂戴よ、內には、花園はないが、四季枯れない、花を拵らへてれ床の間や、書斎を飾り又、アメリカの兄樣にも、送つたりして樂しみたいわ。

妹　豐前　工藤　美香子

母さま妾には造花を敎へて下さい、此度れ、上町の雪ちやん方に先生がきたのよ、東京から、大へん花をつくるのが上手てすつて、君ちやんも月ちやんも行くつて云 いおりましたから妾もそこへやつてちようだい。

姉　北越　奥　竹

私は有名な醫家について一ト通り看護學を修め度う御座います看護は神聖てそうして人生中最も必要だと思はれますから。

妹　周防　をみなへし子

あのお母樣・妾習ひたひもの數多あつてよ、裁縫、茶湯、生花、禮式、まだ〳〵あつてよ、然しお老人のある內に、お嫁に行くと、是非習つておかればならんのは、まつさーじですよ、お若い方の元でも色々の事業に就ておいてになれば、かたもころてせう、又癢痲痴斯、たがひうちきづなどもよくなほつてよ、それて年とれば尙なくてはと思つて。

姉　荒川　久　子

私習ひたい物いくつもありますの、れー母樣、あら一つ、それては一番柔術が、まあ!、びつくりなすつて、何故つて母樣、この間泥棒がはいつた時、實にくやしかつかわ、番頭がしばられて、もしも私が柔術を知つて居たら、あヽあの春着もとれなかつたてしよ、またお金も、思ひ出すと實にくやしいぢやありませんか、それにお琴の歸りが遲くなると、あの橫町を通る時にそれはこはいのよ、だからつい行くのがいやになるのよ、れー、その時私柔術を知つていたらお琴も上手になるのよ。

妹　因幡　三橋　春代

母さん妾は御存知の通り身體が弱くつて、他人に對して誠に恥しい次第て御座いますから何日かお老父さんに薙刀を敎へて下さいと願いましたが、婦人にそんな事を敎へる必要がない、生氣意になる基だ」つてお叱りになつたから、何うか放課後一時間宛ても宜敷御座いますから敎へて下さいな、夫れに妾非常に好きだから。

姉　赤阪　高木　とめ子

女と云ふものは、其良人を助け、家庭の圓滿するやうにつとめなければならないそれ故今まで學問をさしてくださつた上に何が習ひたいなんてもつたいないと思つて居ます今度御母樣からの御たづれ私は樣々の本を讀みましたが音樂と云ふものは、家庭圓滿をする道具によいと云ふことてすから私音樂が習ひたう御座います。

妹　香川　操　女　史

お母ちやん學校の先生が女と生れて音樂思想のない者は女てはない、と云はれたから私し是非今年から琴のお稽古にやつて頂戴私しおとなしくて優美てそして音色のよきものは琴にかぎると思つてよ。

姉　德島市　住友　登喜子

お母さん、私ほんとに嬉しうございますわ、ては私に割烹を習はして下さいれえ…此頃いく所にも割烹の講習がありますから…。

ある大家もいはれました「今の女は學問ばかりに偏して、家の取しまり法、料理法などにちつとも心をつけない、だから夫が食慾から茶屋遊びを始める」などヽいろ〳〵料理法から起る家庭の不和の理由をかいてありましたヮ…私ほんとにそうだと思ひますわ…。

妹　沖繩縣　ふ　さ　江

お母樣妾ネお料理を習い度いのよ第一之をよく知てると毎日〳〵甘しいものがたべられてお金もいらないしお嫁に行つても氣づかいはないて

しやふそして父様も母様も今よりもつと〳〵こえて母様なんか西洋料理は御存じないから實に便利よ。

姉　　松山茂子

お母様折角の御尋れに甘へまして遠慮なく申上ます妾は細い事をいたしますのが大好きて、とうからお縫を習つたらと思つて居ましたのよ、けれど學校へやつて貰つてまだその上生花とお琴の稽古に行つて居ますのに、そう〳〵我儘は申上兼れまして差控えて居りましたのよ、若し妾の望みをお許し下さいますなればお友達綾子さんが行つてお出なさる先生にお頼みをして、お習ひしとう御座ります。

妹　　石狩羽衣

お母さん私は字を書く事を深くならひたひのてす、皆様が、手紙を下さいましても上手に、書いてあるのを、見る度に私もあのよーに書けたら、皆様と、玉章の交換致すのにと思ひますもの。

姉　　浅草野菊

お母様、私畫が習ひたう御座います。そして上手になつて父様が、遠洋航海にいらした時姉様と仲よくしてるの、畫にかいてお送りしますわ外國には蜜柑が無いてしよう。てすから書いてお目に掛ますは、きつと父様お喜びになるわ、先生が畫は心を優美にするとおつしやつてよ。私れ花子様と一緒に泉堂先生の所へやつて頂戴。

妹　　武藏波南子

妾畫が好いワ、れヱ母様妾に畫を習はして頂戴な、何故て？だつて妾、先生が「貴郎は畫をおやりなさい、確に天才がある」と仰せられたし、其れに今の處て日本はまだ、女子の美術と言ふ事が、あまり盛てありません、如何も西洋の様に盛てはないワ……アラ母様、彼方を向いて……何？……聞いてるつて？……それて妾は美術家となつて少しても好いから、女子の美術を發達させやうと思ひますの……母様、皆聞いて、アラ嫌やだワ。

姉　　伊豫迷小舟

お母さん私は音樂が好きてすから、是非音樂を致へて下さい裁縫を學校て習ふのて澤山だし、だつて生花なんか何にも役に立たないものそれよりかヒヤノかバイオリンの一つも心得てゐればどんなに氣を晴すか知れやしません、お客様がゐらつした時だつて音樂の心得のない程淋しいものはありません、生花なんか、町娘のする事て音樂を第一文明的てせう。

妹　　陸中森森子

妾ネお母さん、音樂を深く習ひたいワ、何故つてネ、妾音樂程人生の慰藉となるものはないんだと思ひますよ、だからネ、胸に暗雲のかゝることのあるときは、何時ても、手風琴と遊びます。

姉　　美作よし子

私は和歌が習ひたふございます、和歌は文學の内ても、趣味が深く、優雅て、其の上、何時、如何なる處ても、我思ひを、述べることが出來そして其爲に何物をも要するでなく、高尚な、和歌ほど好いものは無いと思ひます。

妹　　深川鈴蘭

私れー母様、御歌が習ひたいわ、御祖父様がいつも歌は女に適當してるとおつしやつてよ、ほんとにそうれそれに此間の會にも作れないて随分羞しかつてよだから是非習はして頂戴なそして上手になつて祖父様や道子さんと御歌の交換をして遊ぶのいゝてしやう、又此間の様によい景色の時にも、すぐ御歌が作れたら、どんなに嬉しいてしやう、あゝ早く習ひたい、母様お願ひ。

姉　　本郷山姫

裁縫や生花や茶の湯はひと通り習つたし、これからは妾、琴を、ヴアイオリン、ピアノ、オルガン、ても音樂よりはあの繪畫の方がよつぽど！。オホヽヽヽ、妾何だか變てすはネ、あまりうれしくてどれおどれやら判らないのよ。あゝ妾何を習つたら？……オヽお母あんありますは〳〵、妾あの先生について習いたいのよ、ネお母さん！、先生つて女子文理さんて、して習いたいのは和歌てすよ、藝としては可笑いけれどても妾この外に習ふたい奥深く學びたいと思ふものはないのよ、お母さん許可いて下すつて。

妹　　三重せき子

私は和歌が習ひたう御座います、うれしきにつけ悲しきにつけ、わづか三十一文字の中に、情をあらはし思ひを述べたならばどんなにか趣味が深いてあらうと思ひますは、私は何よりも和歌が一番ならひたう御座います。

妹　　武藏波南子

姉　椿花女史

あの阿母樣私錦町の林さんの所へ茶の湯が習ひにゆきたいのよ茶の湯は女子に誠によい遊藝と思ひますはまづお障子の明け方歩み方其他日々の行ひが大變やさしくなるてしようと思ひますからぜひ私に習はして下さいよ。

妹　大和　島田清子

私は活花のお稽古と謡とを習ひたいのよ、謡はお父樣も祖父樣もお好きだし高尙て上品だから本町のお叔父樣にお頼みして、活花は上町の靑岳先生に就て習いたいのよお母さんお頼みして下さい。

姉　北海道　三つ野はる子

母君樣私は裁縫が好てすから向ふの中村樣へ裁縫が上手になりましたら私も裁縫の先生になり皆樣に敎へて上たてと思ひます。

妹　南葛飾　中里きん子

私は世に出てから慈善を行ひ世にあはれむべき人々を力の限り助けたいと希望いたして居りますがしかし女子は何か一藝に達しなければ世に立つ事のむつかしく考へて居りましたところへ母樣の御問ひ、どうか習はせて下さい、て私は、女子の貴賤の別ちなく學び覺ゆべき裁縫が學びたうございます。

姉　尾張　すみれ

はい有難ふ御座います、我儘の樣て御座いますが音樂がすこし深く習いたいと思ひます、音樂を好むものは思想を高尙にしますそして一家を調へた時父母や夫を慰め其上自分の心も柔らいて家庭がいつも圓滑て平和を維持するにはどうしても此自然の美の音樂の力てなくてはいかないと先生からも承つて居ます、現にあの下町の春子樣れ音樂がお好て其道をお究めなすつてからどことなく氣高くおなりなすつて、御一家を慰め御自身もお樂みだそして、誠におうらやましい事て御座います。

妹　牛込　翠竹女史

裁縫も習ひたく思ひますが學校を卒へますれば一通りは出來る樣になりますから私はヴアイオリンを練習致度う思ひます御隣りの信子さんが何時も御上手に奏して御出てになるのを聽きますと私は一度は習ひ度と思つて居りましたから今度母上が一藝何ても敎へて下さると仰しやるのてすから是非共ヴアイオリンを練習させて下さい先日、月淸らかに冴へたる夜に、夕空晴れて秋風吹きと妙えなる音て奏して御いてになるのを母上もおきゝになつて、お上手てすこと、直さんもあの樣に彈ければと、大變おほめになつたてせう…若し私が少しても奏ずる樣になりましたら父上や母上の御心を何時にてもおなぐさめ申すことも出來まして樂しさも增しますし又私の望も達することが出來ますから…

姉　德島　かれ子

お母樣それては私に生花のお稽古をさして下さいはい其理由は生花はお琴やなんかとちがつて靜てあるばかりてなくお花を生けてあるお座敷へ行くと何となく奥ゆかしく又氣高い樣に私は思ひます最一つは花は人の心を和らげるものであると云ひますから私が他日家を持つた時に其たしなみがあれば花のために夫なり他の家人の心を慰むる事が出來るてあろうかと思ひますからぜひ生花を習はして下さい。

妹　三重　久冝子

私はお茶湯のお稽古に遣つて下さいまし、私はいつも學校て遊ひ運動ばかりして居りますから自然身體の動作が粗暴て少しも優雅な處が御座いません若し他家へお客に參りました時又自宅へお客樣が入らつしやいました時餘り粗暴な擧て御座いますと一度てお轉婆娘と見なされて品格をおとすのみならず人樣にまて不快を感ぜしめるようになりますから私はどうしてもお茶湯のお稽古をして優雅にならなければならないと思ひます。

姉　酒田　柳子

母樣ては私に舞踏を習はして下さいな、いけませんのあらだつて私いつ迄こんな田舍なんかに居ませんわ、私舞踏位知らなけれりや佛語なんか習つたつて役にたちはしませんわ、えゝ東京の舞踏會て、母樣はいつてもあんな昔くさい事ばかりおつしやるけど二十世紀の女が……夜會なんかに招かれた時に自分ばつかり舞へないと外國の貴婦人にはづかしいわ日本の少女はやぼだつて笑はれますのてすからどうぞ習はして頂戴ねー母樣、どれを習ふも同じてすもの。

妹　飛騨　殘月女史

そうれ、妾、女優になつて見たいと思ふのよ、新派なのてすよ、そしてれ日本の昔からの英雄や女傑の脚本を作つて海外へ渡航して演じて見たいと思ふの、いゝゑ、母さんさへお許しなら

今からでも準備をしてよ。

姉　　長野露子

私は幼時から音樂が大好きでありましたからそれに音樂は優雅高尚の思想を養ふとか申しまして是非習ひたいと思ひそれて昨年オルガンの方はすみましたから本年は是非ヒヤノを習ひたいと思つて居りましたところですから場所などはかまひません。

妹　　安藤みどり

私は音樂が一番好きお母さん音樂を勉强さして下さい其中でもヒヤノ、ヴアヰオリン、琴此の三つてす、是れを都の名師について修め天晴上達したらこんな田舎て小鳥や松風に調子合せて一生が終へたひのです。

姉　　渡辺智恵子

妾の習ひたいのは琴なのよ先づ場所は人里離れた別莊て六丈間ぐらいの戸を開きて長歌の老の松などたんづると氣がくさ〱した時や又沈む時など本當に晴れ〱してれ心持が桃源に舞ひ遊ぶ樣て浮世をすてた樣な感が起きて、嫌味がなくなるのよ又親甘て來客の時などは御馳走にたんじて御らんに入るのよ琴の音は高尚て家庭の快樂には、一ばん立派な樣です。

妹　　神戸市　大谷秋月子

妾お母さんお舞が習いたいわ、お琴にせえつて？だつてお舞だつたら飛んだりはれたり蝶々の樣に綺麗なんだもの……やつぱり、いけないの？お琴の方が上品だつて？……それじやお母さんお琴にしてよ。

姉　　相模土筆

お母さん私はお變人なのてありませうか、私は手不得手なもので、帆を揚げたいと思ひますは私の不得手なものはネ、御習字と算術と、それから國語てすは、あつ！それよりかあの１御父樣はお醉なさると漢詩を直ぐ吟ひ初められるてせう、だからネ私がお母さんの代りに、新體詩を作てネ、何かと合して歌て上げるはよいてせう、習へば私達つて出來るてせうれ。

妹　　奈良白菊女

お母樣何か敎へて下さるつてそうてすネ生花や茶の湯は女の學ぶものじやと伯母樣はおつしやるが妾そんなもの大嫌ひ料理だつて結構、琴や三味んかも好まないし、音樂は學校ておそわるバイオリンなんかて澤山てすからネ今日御父樣に願つたのてす妾和歌を敎はりたいのてすお父樣はお前の樣な、お轉婆ては、しよせん駄目だつておつしやりますが妾お轉婆てすから心靜かに研究したいのてす、先生なんかの事は前から習ひの光子さんに願ひますかられ、どうか御承知を願ひます日光子さんに御願ひして先生の座え行つてもよいてしよ子……。

姉　　滋賀縣　辰井ふみ子

かあ樣私は花を造る事を習ひたいと存じます、美くしい種々の花は、自然の最も纎細美を代表したもので蜂が吸ふ甘る蜜は愛の蜜、其露はしい息吹は私達乙女の息吹、美はしい花瓣は恥にかみ勝の女の頰かと存じます。また菊の霜に俯ぢませんのは女の貞操、姫百合の優しいのは優美、自梅の氣高いのは高潔、すみれを披露して烈しい日光を遮ぎるたんぽこの花は博愛を示現するものと存じます、て御座いますから不束な私はこれ等の花を現實に致す樣、一心に念じましてお花を拵らへ世に分ちたう御座います、其うちには私も薰染致しまして、清い美しい花の樣な生涯をおくる事が出來樣と存じます。

妹　　土佐　中山翠美

妾れ母さまそれぢや御願ひしますのよ學校へはやつて頂き琴も生花も敎りまして何も不足はありませんけれども妾いつから刺繡が習ひたいと思つて居りましたわれ母さまいゝてせう御習ひ中ても妾の望みは刺繡てすのよいけなくつてこれが御願ひてすわ……。

姉　　常陸　川中すげ子

母上樣何卒敎いて頂戴な、田舎住いの妾故六ケ敷い事は望みませんがチあの禮儀作法、女子として學ぶ可きは料理法、飯や汁の煮燒は誰れしも出來得る事なれ、だがれ千種萬變趣きた異にして口すべきものこそ聞かまほしくてなん、右御覺へましたなられ、衣服の裁ち縫ひ。

妹　　秋葉

アラお母さん私の好きな物を何ても習はして下さるんてすかそれならお琴がいゝわ。先日私或雜誌を讀みましたら一たん他家へ嫁した女子とて不時の災におひ獨立して生計を立てなければならぬ樣な事が起る其時には琴の師匠等は最もよき職業だとありました。幸ひ私がそんな不幸に合はないとしてもお琴は高尚て優美て私大好てすからどうぞれ。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

○あはれこの學資

本鄕眞砂町一五　田中常子

あはれこの學資!! 人目も草も枯れなむ足曳の山里に、わが尊き戀しき父母の、朝に星を戴いて山畑を耕し夕に小山田に水をやり、歸りては煙いぶせき埴生の小屋に幼き三人の弟妹を育て敎へ給ひつゝ柴折り焚きて夕餉の仕度……あゝ父上は、母上は一年中身より襤褸を脱ぎ捨てゝ心安らかに月花をめで給ふことはげに罕なり。糲食を美味に代へて、苦辛も、あはれ苦辛も我を樂しみに、營々として勵み給ひて送り給ふこの學資!! 思へばこは父上の額の汗の玉なりけり。母上の家政の費を節して送り給ふ深き惠の露なりけり。あはれかくして父は、母は妾が學成り業卒へて錦の衣着て歸らなむ日を指をり數へて待ち給ふなり。あはれ此尊きありがたき學資。おなじ學資も他學生の學資とは雲泥の差なるかな、縱令一文たりともいかであだに費すべき、髪飾り、身廻り、衣食住なべて健康を害し禮儀を失はざる限りは勤勉を楯とし節約を旨として以て一日も早く父君母君に慰安を與へまし、あはれ父上!! 母上!! 今一年の月日待ち給ひてよ、誓つて花折りかざしてその尊き御顔を拜みまつらむに。

(評)この心ありて始めて人の子なり人は神の子などゝ氣取るより先づ人の子たるべきなり。

○歸り路

津市西新町三九　松尾花子

秋の水ちよろ〳〵と痩せて苔蒸した石の髯を舐めて美くしい砂路をさら〳〵と流れて行く永代橋から左に折れて籬越しに小溝を瞰いた澁柿のたわゝに色付いた村家を外れると廣々とひろげられた萬頃の稻田!!

私は今日の一日を、暫し病に休校まれた友淑子樣の室に暮して此閑靜な人なき村里、病に痩せ給ひし友の姿、床に活けられた秋の七草の楚々たる風情に云ひ知れぬ秋てふ沈默を覺えたが

今は俥に搖られ乍らみだれ髮の友の「寂しい姿」を心に呼て歸りゆく路なのである。

空はいつか曇つてゐる。振り返つてみると布引の連峯も濛々した白雲に腰の邊り迄包まれて雪崩れた裾の小山の麓から颯と展べた扇の襟に萠黄色の稻田!!と鳴子の音が沈だ重い空を渡る度に群雀がぱつと立つては直又傍の田面に落ちる。路傍にゆら〳〵、野菊が咲いてゐる。ふと見やると此道の極まる處村の共同墓地で何故か人の群つて騷ぐのが目に入つたので、私は俥を急がして其丘陵の麓を過ぎる時ふとみると吁何と云ふ慘めな樣であらう!!!赤黑い顏に顴骨高く目は膜に閉ぢられて爛れ、塵に垢に汚れた髮は艶もなく、瘦せほうけた旅の老婆が草を枕に倒れてゐると、是は其子とも見るべき汚い襤褸に黑う日にやけた顏の十歲計りの女兒が、母にすがつた儘連りに欷歔してゐるのであつた。

と今來た私の後から戸板が舁がれて來た。

旅の女!曇り日の夕!!私はひしと胸をつかれた旅にさすらひうらぶれの身の便ない母子只二人!!時には木枯荒ぶ山寺の軒に相抱いて寒さに泣いたてあらう?時には情知らぬ人に罵られたてあらう!その襤褸に包む身には冷たい涙が溢れてゐよう、吁瘦せた身は如何なる、「涙」の歷史を秘めてゐるのであらう?私は人知れず此みぢめな哀れな「旅の老女」の爲に涙に咽んだのである。重い空から遂に糸の樣な糠雨を落して來た。

（評）前段後段ともによく秋を現はせり。

五等

○花ちやん

大阪市　辻金子

花ちやんは今年二つ、あまりの可愛さにだきとつて、堤から、名なしが淵の方まで散歩す。

向ふの堤に村の小供が旗をもつて騷いで居る。爺やが『おひろいて御じやすか』と、何も答へぬ間にいそいで行つてしまつた。あら花ちやんはいつの間にか寢てしまつて、重いこと、子守に慣れないのですもの。

私の好きな、名なしが淵、前後には松葉がかさなつて深き翠を一面に、ちら〳〵と漣を立てゝ居る眞に幽境後にばた〳〵と足音がして『石なげをしよう』と里の子が、あれ、ととめる間もなくドブン……バッバッと水煙が立つて、つる〳〵と波紋を……。

あの腕白者、一寸こちらをむいて恥かしさうにおじぎをして逃げて行つた。可愛いゝ子よ、この村の人は皆深切です、町の人は冷酷よ。靜な里、好きな里、ああ此の村の人になりたい。母樣にお願申して、もしも許す、と一言おつしやつて下さればまあどんなにかとおもはず『さうなつたらうれしいのね、一生花ちやん

のお守りいたしますわねえ花ちやん』と囁きました。けども花ちやんは、よく寢んで居て喜んでもくれませんのです。と、無心の可愛いゝ顔をしかめ泣きださうとして又スヤ〳〵。暫くして、ホツ〳〵と咽喉をならしながら笑つてますの、ま、どんな夢を見てるのでせう。まだ、あらまだ、口元に笑みをたゝへて『可愛いつ』と、思はず花ちやんをだきしめました。

驚いたのでせうワーッと泣き出しました。どう致しませう『花ちやん、かんにんして頂だいも泣かないのね花ちやん、花ちやん』幾何なだめても、すかしても私を許すとも申しませんの、益々火のつく樣に泣き叫ぶのです。あゝ、どういたしませう。泣きたいのは花ちやんばかりではないのに!?

（評）いかなる不平ありけむ。



あみもの（賞外）　豐橋市　うた子

秀逸

○魚賣り朝鮮人

備中　倉田笹舟子

二三日前より人は暖かき床のみ戀しい寒い曉を、鷄の聲より先きに、魚よ〳〵、とつい聞き馴れぬ、調子外れの呼聲が、此處後月河の流れに沿うた二階に、朝寢をむさぼつて居る妾の夢を醒ますのである。

今朝は殊の外早かりしと、心に誇りて河邊に出て、深呼吸は終つた時、例の魚屋の聲が向ふの橋上に聞えた

やがて門邊に騷々しい人聲、物數寄な私は手拭肩にしたまゝ聲する方へと走つて行つた。見ると何事にや人は黑くなる程、そして彼の魚屋を取りまいて居る、魚屋は年頃十七八の少年で裝ひは普通の勞働者に違つた處はないが、訝かしいのはその言葉遣ひ、どうしても邦人とは思はれない。

隣家の女房が聲高に語るを聞けば彼れは果して朝鮮人で、今春彌生の三月此處より半里南の西濱と言ふ處へ飄然漁業を見習ふとて來たとの事、初めの程は言葉一つ通はなかつたが、眞率なる漁民の情に辛うじて邦語を覺え、二三日前より棒を肩にして、夜は明けやらぬ寒空を外の魚屋の行かぬ間にと、殊勝にも怠り易い若

い身で、履きも習はぬ草履に足を傷けながら、つらい仕事を續けて居るとの話、聞いて妾は思はずホロリとした。

人々は彼れが怪しい口元て漸やく發するその言葉を、面白いと聞くのか、幾度となく拍手し果ては笑ひさゞめいて居る、それを見た私は彼れの身の上が、哀れに悲しく想像されるのである。

あゝ思へば彼れは何故に故國離れた此の濱に、かゝる賤業をなしつゝあるのであろうか、凜々しい眼光、引き締つた口元、決して賤しい家に生ひ立つた者ではない、金を貯へに來たのなら魚屋などせずとも、外にまだ〱取るべき業はいくらもあるに、或ひは情深い親が塵の浮世に飽き果て、その子をば俗世離れた漁村の民と化せしめて、憂世の事は白浪と共に安けく過させよと、はる〱此處には連れて來たのであろか、思う、家には彼れが一日の勞動を慰藉すべき父母は待つて居るのであらうか、はた又同胞は村はづれ迄彼れを勞ふべく迎ひに來るのであらうか、いや〱それでも傍の人がもう歸らないのかと言へば歸る〱としほれて言ふのは、或ひは故國と共になつかしい父母同胞も殘して來たのであるまいか、若しさうとすれば如何に淋しい朝夕を送つて居るであらうか、妾も遠からぬ古鄕を後に神聖なる敎鞭をとる事茲に二年、馴れたとは言へ新愁をひく秋の朝夕、ともすれば先生と呼ばるゝ身のあまりに幼なげなれど、東の空戀しの思ひは胸に漂ふものを、元より異邦人の彼れと妾と比較すべき限りではないが、住みなれぬ異國の秋風、彼れの身には如何に冷かに感じられるであらうか。

程經て彼れは人々の嘲りを悲しと聞いてか、群衆を逃れ出て、恰度哀れを乞ふかのやう妾の立つてる前に來た、此時妾は何となし彼れが哀れになつかしくなつたので、一尾の鮮魚を求めた、憂はし氣なるその顏は俄かに喜ばしく見えて、まはらぬ舌に、有難うと辭儀して立ち去つた。

あゝ哀れ深き異邦人よ、情知らぬ世人は如何に罵るとも決して悲しむ事はない、君が人よりも勤勉にして實直なる行ひは必ず正直な天が見そなはすであらう、そして遠からずその業は成り、こひしい故國に待ちます父母同胞と共に、今の悲しさを物語りに興ずる日も來るであらう。世人は何と言ふとも妾は毎朝君の價安く鮮らしき魚を購ふ程に、人の無情を憫たず嘆かずセッセと働いて、徐々に來る成業の日を待つて居るがよい

かくて妾は彼れの成業と日々の商ひの多からん事を祈るのであつた。

（評）文の長過ぐる嫌あれどこは同情の深き爲なるべし。

○出廬

岐阜市　泉　龍　野

松風の響波の音夕暗ほのかにあたりを罩めぬ。

松原がくれ蒼穹高く白やかにきらめく、それや遠州の沖の灘ならん、そのあたり白帆幽かに二つ三つ、南に馳せる夕凪の、海は遠く〳〵末煙りつ、紺色淡く沈みゆきて、さながら夢とばかりに、長汀曲浦たゞ女浪男浪と音のみ高うなるめり、げに靜にも又哀れなる夕べならずや、あはれ悲みある身のこの思出多き湖に對しては、今更に小さき胸裡に悲哀の琴のなり渡る哉、淋しからずや松風の響、悲しからずや波の音、我が一縷の慰藉ある光明は消え失せたるよ、そを何故と問ひますな、零落の子、迷ひの子、草深う茂りて壁落ち柱はゆがみたる故園の家にさらでだに狂ひ狂へる小さくか弱き胸の、かすかなる



雪景色　（賞外）

登米町　猪股きつ子

悲哀の琴線をわななかして、此寂寥を味はんには、餘りに果敢なきを悲しきを、それより羽箒にて拭へる如く清き湖畔よ、夕月花やかに微笑む宵、明星青白く瞬く黃昏、紫の虹美しく匂ふ晨、殘月一痕潮風に烟ぶれる曉獨り其ほとりを逍遙ひて爽かなる海の歌を聽き、幽玄のみ空を仰ぎつゝ白き空想の翼を伸べて、身も世もあられず佇みたりしが、げに其幼時の羨しさよ、聖なる胸の泉は百合の花びらに置く白露のそれよりも清く、其若き黑瞳には未だ汚れし人の世の戀をも紫陽花の葩と移らふ世の人の影をも宿らで、譬はゞ無心の小羊が若葉薫る五月の空に、無花果の樹蔭をさ迷ひたらんが如く、唯是れ一個の罪なき空想兒に過ぎざりしものを、悲い哉。恐るべき「時」の流は我を懷疑の衢に導いて、罪深き汚淵に沈ましめぬ、かくて此悶の子醒め易き青春の夢に驅られて、漂泊の身となりしより、小鹿の角の束の間も平和の影を認むるなく、理想は破れ煩悶し懊惱し、徒らに半世の歷史の頁は只果敢なき

運命の六字に葬られんとす、まして草家空しく母老いたり、さばれこの薄倖兒、今や此崇高なる大自然の懷に包まれては、いたく我が身のこし方を悔いぬ、されどあゝされど我や此のまゝに故郷の野に沈吟して、運命のはかなきを傷みつゝ空しく涙にくつべきか。あはれこの巓の如き信仰の礎に立ちて、我やそも何をか惑ひ何をか疑はむ、よし老になく母に背きて再び暖き平和の境をいでんとも、我れは唯大なる自然の美を思ひ出として、なつかしき家を出でんかな、いざさらば、雲遠き都の空へ。

（評）景の敍到る情の敍聊足らざるを覺ゆ。

○懷舊の涙

茨城縣　桂香女史

蕭殺たる靈石山の麓、泰寧精舍の梵鐘、幽かにひゞき渡るの時、夕榮已に消えなんとして、凄絶かぎりなし今しも妾は、月代の奥津城にひとり亡き友、久間千代子の君と、ありし往時をくり返し、哀悼の情にうたれつゝあるなり。

君よ、哀れとはおぼし給はぬか、まこと死をも誓ひし程に、妾をひとり此世に殘しおき、松風を友として白玉臺中永へに夢圓かならんとは、實にや、月は常夜の燈火をかゝげず、花は不斷の香を吐かず、脆きは人の命とは知れど、笑ひ興ぜし當時の面影、その麗はしきかむばせ、あゝそれ何れの時にかまた再び見るを得んあはれ、爛れたる三芳野丘の花に樂天の感想を形造りたるのあした、皎々たるむらさき山の明月に空想の書樓をきづきたるの夕、あるは大極紅を流せし霞湖畔、共に舟を浮かべて神來の興に接したるの時、君それ忘れ給はざるべし。

あゝ月、あゝ花、君逝きてより早や一春秋、妾を慰藉の友ならで、却て落涙の種ならむとは。あはれ千代子の君よ、われ今君が亡きがらのほとりに、懷舊の涙にむせびつゝあるを君しるや知らずや、物思へば悲しうのみなりぬ、物いへば涙のみこぼれぬ、あゝ。瞼を開けば一炷の薰香、烟淡くして夢に似たり。無限の感にうたるゝこと少時、やがて佛陀の冥加を祈るべく、うなちを垂れて聲ひくく「佛の出世は優曇華の佛に値うて信を生ずることは甚だ難し涅槃に臨んて供養して檀度を具足することは倍難し偈に曰く

一切の諸の世間に於て　生るゝ者は皆死に歸る
壽命無量なりといへども　要必らず盡くるとあり
夫れ盛なるものは必衰へ　合會ものには別離あり
壯年久しく停まらず　盛なる色も病に侵さる

衆くの苦輪は跡なく　　流轉して休息となけん
三界は皆無常にして　　諸有には樂あるとなし

仰ぎ希くは千代子の君をして十方の諸佛大悲の願を垂れ給ひ三界流轉の苦輪を解脱せしめ、速に覺路の法門を開きて佛果を得せしめ給はんことを一と。念し了つて去らむと欲せば晩鴉大空を掠めて聲細く長く。

同　人　（賞外）

（評）佛味大に趣を添へたり。

○不思議

姫路市　矢島芳子

古へより言ひならしゝ如く鶴と龜とは千とせ萬代生き永らふべきか、小川を流るる清水は眼に見る如く異ならざるか、久方の雲井にかかる月と日は昨日も今日も同じきか、樹々の梢を裝ふ春の花、野もせを彩る夏の草は、年々歳々相似たりと見るは、謬まてるにはあらざるか。同じ枝にも二日三日とおくれて咲くもあり、五日六日先だちて散るもあり。或は蕾のまゝにて凋るゝもあるめり。秋の野邊の粧ふべき千草も、花咲かで刈らるゝも多かりなん。牛馬の跡にふみにじらるゝもありなん。虫の類に含まるるもあるべし。あるは夕べの嵐に枝を折られて葉を吹



津市　加藤ゆき子

き切らるゝもあらむ。かかる間に雨と露とにうるほひて、美しく咲きみだれ時てそきぬれと心しづかに散る花は、あないづこよりして此の幸を得たりや。すゐたのまんと思ひの蕾の、はかなくも吹き散らさるゝはそも如何なるならはしぞ。人のいきとしいけるもの、、必ず死すと言ふことを、免かれざる定めなりとは、吾も人もまのあたり見聞くからに、さばかり疑はねども、身の立つ齢にも至らぬ身にして、既に兄と呼び弟と稱へし友どちに數多く分れたるはそも如何なる譯ぞ。嵐に落ちつる蕾は謂はずや。咲き後に散る花を見るすら世の人々の惜むなるを……わづかに指折り數ふべきば

かりの、日數立ちて暮れゆく、秋の空にも涙をそゝぐ習ひなるを、……花の實も是より後にと、望み待ちたる親しき人々に先だゝれゆく人の心は如何なりけん。

（評）面白き想なり。されど末段文理亂れて意聞え難し。

○憂の旅路

千葉縣　林　霞江

ある夕べ、廣野にあひて歩み惱めり。

夕雲、雲の紅、草紅葉、草の紅、人は夕雲を愛し、人は草紅葉を愛づ。

知らずや夕雲は日の終焉、知らずや紅葉は草の滅亡日の終焉を喜ぶ人よ、草の滅亡を樂む人よ。覗よ、彼處街道にまろぶ松の大樹の、去にし雨の夜、風雨の夜、あるは幹より、あるは根本より、千歳の命の玉の緒を絶ちて、枝を折られ、葉を散らされ、苔を破られて、どう／＼と倒れ伏しゝ時、君よく笑へりや、君よく微笑めりや。茅の内、瓦の下、われ知る凶險ありしを、自身に干る破滅を恐れ、他人に係はる破滅を喜ぶうたてや、我もいま其的となりけるなり。

　光と人との界に雲あり
　　闇と人との間に草あり

天上、いま雲は消えゆく。消えてゆくは嬉しけれども、今は夕べ、雲去りて來るものは夜の闇に非ずや。地上いま草は枯れゆく、枯れてゆくは悲しきかな。草逝きて降れるは地の闇なり。羽を得て登らんとすれば、あゝ空の闇。地を穿ちて降らんとすれば、あゝ土の闇。行くに原暗く、歸るに森黑し。悲しや、われ終に地獄のものと思へる時、東山月出でゝ、夜に光ありき。白露草に點して、地に光ありき。

　かくて再び「憂の旅路」辿り進む。

（評）意甚深し末段の月光まことに靜る心地す。

○秋雨の夕

三河　つ　は　め

日もすがら低う垂れ罩めし雲の、暮るゝ頃雨となりぬ興なきまゝを小窓によれば、崩れたる石垣の邊り、遲咲きの百日紅、雨を帶びてほろ／＼と散るが見ゆ。道には早や夕餉の煙り低う漂ひて、厨よりは物煮る香り溢れ出づ。壁を這ふ蟋蟀の姿も今日はいとゞ瘦せて見ゆるよ。彼方なる垣のあなた、いと大きやかなる柿の一もとありて、末實の二つ三つ、つれ／＼さうに殘れり。

ひそやかなる蟋蟀の聲起りぬ。

森隱れの路を人や行く、土をする下駄の音懶げに、何處よりか、臼の音靜やかなり。

我は目をそらして、遙に草生ふる小道の邊りに注ぎぬ遠の森は霞みて見るべうもあらず、折柄の雨いとゞ降り添はりて、ほのかに靡る尾花小路、畫ける如き三つ

の影の動くが見ゆ。我は凝乎と見入りつ。哀れそは小牛の行くなりき。蓑笠着けたる前なる男、手綱双手に強く曳けば、後なるがはげしき鞭を加ふるなり、小牛は辛うじて歩みつ……。やがて、向ひの森近く、いと太き牛の聲はげしく起りぬ。見れば、葉落ちて疎になれる木のもとに、老いさらぼひし翁の、杖にすがりて佇むあり。

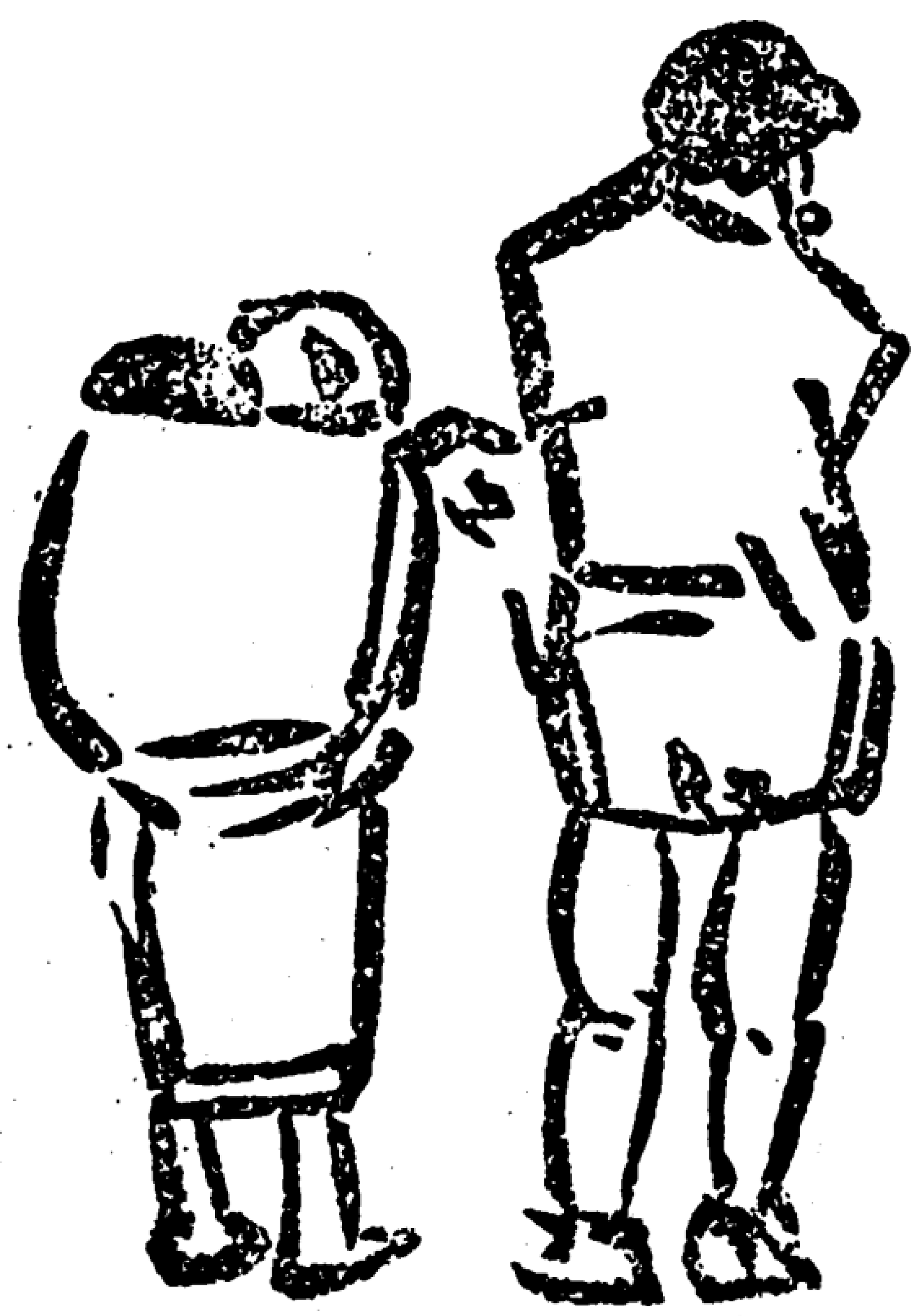
やがて翁は覺束なげに杖を運びて、雨の中に立ちつ、懶げにとぼ〳〵と辿る小牛を見つめぬ。

さるにても翁よ、小やみもなう降る雨に、老いの身の、骨に泌む寒さ覺ゆらんに、――、

太き聲の牛は、そが裏手の方にて又啼きぬ。

小牛は耳を立て、振返りてたぢろぎぬ。後なる男繁く鞭てば、小さく濕ひたる鼻を、高く空中にあげ、懶げに長くなきつゝ小走りぬ。哀れ、可憐の牛の兒よ、甘し乳房離れて、未だ幾程も經ざらしものを、かくては、再び汝が母に會はん事もえ叶ふまじ。さるを、人の子すげなくて、かくは、いましめの手綱に汝れをしくゝるか、罪の咎に汝れをし打つか、されど小牛よ、嘆くまじ、やがては、慈悲深き神の御手は、汝がさゝやかなる角のあたり撫で給はん、まどろみの夕、愛のみ神は、汝がいとしき母のみふところに、添伏しの夢もたらし來まさん、――。うら淋しき聲の、やがて姿も小さうなりぬ。

（評）敍述の氣味あるを惜む。



農夫（賞外）　靜岡　藤本靜江

○農家の生活

靜岡縣　貞水女子

第八月。田の仕事は三回目の草取り製茶は三番茶。中旬より豆類の收穫あり、粟、黍、胡麻、蜀黍、薩摩其他野菜類や綿など此月畑にどわ〳〵してゐる。干草とて來年田に入るべき草を刈り、干して蓄ふ。

野菜は瓜類、茄子、南瓜、靑唐瓜、葱、牛蒡、人參、雜魚、麵類、其他、遊ぶ事や食ふ事は、いち穢なだから略し升。

小笠郡中村には祇園祭りと云ふて、舊曆六月十三日の晩から十四日の夜迄、五組の村人、五臺の花車を出し每年飾りを擬らして面白い祭禮があり。同郡原谷村では月送りの盆て、新曆八月十四、五六七日取わけ十七日は百餘人の靑年が揃つて每年非常に賑かである。而しそんな事て農家の生活が出來る譯てはないから、ど

うしても仕事のなりゆきや常の暮し向を云ふので隨つて野菜類や間食迄書き、仕事が苦勞なら愚痴も書いて皆樣に笑はれます、然し一村でさい家々によつて幾分か違ふから、まして郡が違ひ、國を異にすれば生活が違つて、、、同じ農家も非常に苦樂の違ふ所がありませう面白いなまりのある所は誌友の御力でどうか本誌へ投じて戴きたい。

妻は疾から想像して居ります、何稼業でも一擧兩得は無いもので、壹利壹害が此世の人に授かつた運命であらうが、五欲とか八迷とか、人には凡夫凡婦の心があつて自ら迷ひを取り、此世ながら八萬那落の底に落ち八寒地獄の責を受け、日陰者とか病身とか、生れも付かぬ畸人になる人もある。心ある人は踏むべき道を踏むで太陽の御前に勇ましく働きながら一村の上に立ち志墮落の人は時にはおちぶれて、土龍や蛇おんばに劣る人もある、天帝より歳々變らぬ四季を戴く人間程、種々雜多の欲に迷ふ者はないのである。

一村の榮えは總て一國の爲だから、家々で勤儉を重ずべきであります。

○果敢なき運命　福岡縣　濱中たか子

静かな朝であつた自分は例のやうに冷水浴を終へてから樅や椋などの生ひ繁つてる裏の木立の中に分け入つて何か默示してるやうな梢の繁みを眺めてゐた、するとほつつり音して木の葉の精が脱け出たやうな綠の玉が一雫落葉を敲いて、夫れに驚いたのか胡蝶が一つ悕しく木の間から飛んで出たが見る間に蜘蛛の網にかゝつた、自分は可愛想に思つたので直に小枝を投げて蜘蛛諸共に地上に落したが既に遲く胡蝶は蜘蛛の毒牙に咬まれて苦しき最期の羽を微かにうち振はすのであつた。……自分の宅の隣の琴のお師匠さん昔は去る家柄の奥さんであつたが思はぬ事業の失敗から夫は家勢挽回の爲め南米とやらへ其のあとを便り少ない糸の師匠の細き烟が今の住ゐである訪ひ來る人が安氣でせうと言へば何時も笑つて居られるが月明かな夜などは悲哀な調べに想夫戀を奏でゝ居らるゝので。……

綺麗な姿をして春の花野を飛び廻つてゐたら人は羨むか知れないが此の蝶も人なき葉蔭には遣る瀬なき思ひに袖絞つてたのではあるまいか、ことに秋風の冷かなさげすみに遭つて、飽く事知らぬ蜘蛛に脅かされて、さらでも冷たき假寢の閑かならぬ夢を破られて葉末の露に姿映して双頰のやつれ羽の破れを熟と眺め入つた時あはれな悶死の樣を目成つて夫れから夫れへと悲しい事計り思ひ續けてゐると此の靜かな森の繁みの中にも何だか自分をこんな悲慘なる運命に導く魔の神が潛んてるやうな氣持がして急に怖氣が差して來たので亡骸を抱いて急いで此所を出たつきり。

○終りの夜　石狩　初子

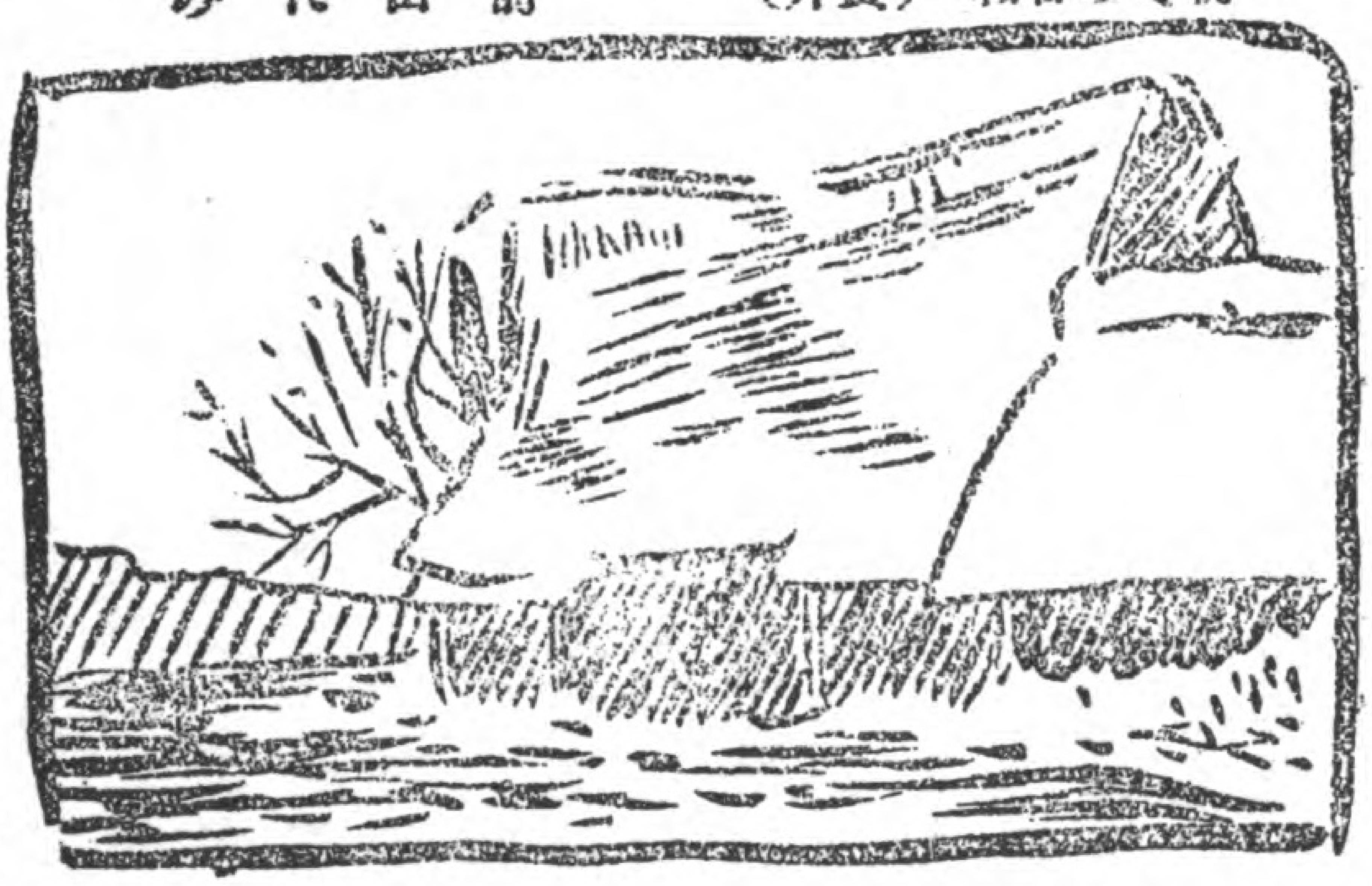
最早寢ませうと枕許の燈をぱつと吹いたがつい消え損ねて薄暗い光は亦元の通りに愛らしい寢顏を照した。

「もう何時迄見たつて仕方がない、どうせ行くのだもの……だけども可愛相で……」固く決心し乍らも脆い心には復た呟いて、自分はひとりの妹絹子の寝姿を熟熟と瞶た。ふくよかな両の頰に厚くのびた髮の毛が房房とかゝり、紅を注した樣な脣に微かな眠息が漏れて……此の他人の家に姉の愛の手に抱かれて眠るのも此の夜限りとは、其の平和な夢路に誰が告げよう、知るに由なく、安らかな其の樣は實に罪が無い。

吁、たらちねの君の慈なくいまし給うたならばよしや身には襤褸のきぬをまとふとも、心は何時とても變らぬ愛の泉に浴しつゝ樂しんで有うに、哀れな世のさだめに、はらから只二人相抱いて泣きつ悲みつ人の情に怎うやら冷やかな夢を結んで居たが、あゝ夫れとても三月とはつゞかないで。

未だ心も無い蕾の花の絹子は、今宵限り遠く逝くのである、朝た夕べ熱き涙もて結れた姉妹の四つの袖を、其の親みを、吁何故に裂かるるので有う。自分は得堪ず成つてうなゐ子の胸のほとりに顏おしあつると、のばして居たふつくりとした兩の手を靜に合せて、何やら神に願ぎ奉る樣に見えてほほ笑んだ。

初冬の日和（賞外）　前田たみ



寂しい秋の夜はまた、血を裂かるゝ思ひは益々慕るのみて……。

○夕の田舍路　千葉縣　川早とし子

二人とも紺絣の着物姉は十四五胸高にしめた幅の廣い帶髮は御下げにして無雜作に紫色の紐で結んだまゝ妹は十一二裾の短かい筒袖をきて帶は薄紅色のしごきをして居る、そして二人共色の白い目ぼつちりとしたそれはそれは可愛い顏だちだ「末ちやん居ましたよ」「こゝにも一つおやこゝにも澤山居ますね姉さん」――颯と吹き來る秋風は稻の穗をさやさやと鳴らす、千代田町の稻も鎭守の森も野川の水も等しく夕陽の光りを浴びて地上の萬物皆燃えんとするやう、折から「末ちやんもけいちやんも、もう御歸りお湯が沸きましてよ」見れば彼方の家のかき内から品のよい奥さんが手招ぎをして――「ハーイ」と姉のけい子が返事した聲はさながら谷の戶を出た鶯の音のやう二人は「見渡す野べの秋草色……七草千草花咲き亂れ」……と歌ひながら向ふの方から歸る……風呂の烟はスーと家の後ろに。

○松の雫　上毛　いま子

妾は今綾子さんと、御庭の松の大木の下に、彳んでるのである、綾子さんは妾より二つの年上で、幼い時か

ら姉妹の様に仲がよかつた、オヽ大きい〳〵笠の松、妾は如何に懐かしく思ふよ、汝には忘る事の出來ない紀念があるてはないか。

月は松の梢を透して、妾等を照してゐる、黒い松葉の影が、綾子さんの浴衣に映つて、墨繪の派手な松の大模様ある、浴衣と化した、そして色の白い、如何にも氣高い顔から、姿のすらりとした様は、松の精が抜け出して、人間となつたかと思はれる、綾子さんは上を見上げて、アヽ月はあの儘だが、松はあの儘だが!!!ああ三年の昔てあつた、丁度今夜の様な晩てあつた、余は月が美しいので、綾子さんと二人て、此松の下で、月を見ながら樂しく話をしてゐた、あヽ其時兄さん―嗚呼然し今はゐない――が、二人の傍を足早に通つた、而も激した様、周章てヽ呼びとめたが見向きもしない、いつも優しくして下さる兄さんが、何うしたんだらうと、二人て馳け寄つて兩の手をとつた、見ると眼は異様に輝いてる、兄さん何うしたの、敏夫さん何う遊ばして、と聞いても返事もしない、やヽあつて、もうこれきり御前達に、逢へないか知れない、二人とも仲よくして、幸福に世を送つて下さい、と沈んだ調子でいつたが、直ぐに氣を取り直して、さらば、とばかり二人の手を振り切つて、後をも見ずに……、月は雲にかくれた、兄さんの影は暗に消えた、

あヽ優しい兄さんは遂に行かれたのだ、綾子さんは如何に悲しんだか、兄さんは妾と異腹の兄妹てあつて、先の母さんの子てあるのだ、故に兩親との間は餘りに暖くは無かつた、然し妾には優しくしてくれた、又妾と親しい綾子さんも愛らせれた、否愛以上てあつた、綾子さんも兄さんには同情をしたのてある、然し兄さんは其夜、父と衝突して遂に家を出られたのてあつたあヽ敏夫さんは今頃は、何うしてらつしやるだらう、見上げた目を落していはれた、妾は餘りの悲しさに、言葉も出ない、只々互に手と手とを固く握りしめた、女神の様な綾子さんの頬には、露の玉の幾滴、オヽそれよ、月の雫か、松の雫か!?!

◎暮春の山里　千葉縣　吉田花園

一際心も浮立つものは春の景色にこそと、兼好法師のたヽへしやよひも早や過ぎ行きぬ。

何時の間にか花は散りはてヽ、若葉やう〳〵に繁り、青柳の糸を亂して吹く風は、やがておそ櫻の處々に春の名殘を留めつるをも誘ひ行きて、眺めも今は寂しうのみまさるものから、片山里の世はなれたるあたりこそ、尚ほおもしろけれ。

朝日うら〳〵とさしのぼれば、野に山に、さては賤が伏屋のかどべ迄、のどけさみち〳〵て倦かぬ心地す。青葉および繁れる木立さは〳〵と吹く風に、音たてヽ群れ居る鳥の騒ぎたち行く、さては麥限りもなう連りたる中に、交りて咲ける菜種の花は、あざやかになつかしく見ゆるに、雲雀の聲おもしろく、それもいつしか遠く聞えて、はては影も高く雲井に消え行きて跡もな

し、賤の乙女等が打群れて飛びかふ蝶にたはむれ遊べるさま繪にもかゝまほし。

綠したゝらん許りの山に霞たなびきて、濃く淡く、岩つゝじの處々に交りて咲けるもをかしく、河そひ柳の枝ながく、流れ行く水の面にまかせて、かるくゆるぎ花びらの浮び來るを見れば、此の川上に遲櫻の風になやめるをも思ひ出でらる。

夕さりくれば、かまどの煙立ちのぼり末は棚引きて山のふもとをめぐり、をちこちに牛飼わらべの家路をさして歸り行くなど、さても靜けき山里は、暮れ行く春も知らでのどけきさまにこそ。

○無事なりし犬に

鳥取　山根綾江

此のほどS（犬の名）とにて野邊に出でし時、ふと姿を見うしなうてより、S、Sと狂氣の如く尋ぬれども行衛は知れず、桔梗女郎花の花は目に付けどもSの姿は見えず、家にも歸り居るならんと家に歸り見れどもSは歸り居らず其のまゝなきものとなりたるか哀のSよ！月は變れども今日はSの命日、心許の花まつらんと門邊に出づればSによく似し犬は走り來ぬ、ちかづくまゝによくみればまがふ方なきS、あゝうれし。

Sはいづれに行きて居りしか？一月の間然もからだはよくすこやかに、よくふとりて。

と見れば首輪の變りて前よりよく、又不思議や首輪に結し玉章

此の犬はさる日むごたらしき犬殺しの手に殺されし吾が愛くるしの犬によく似て候。過る日野邊にて私しにしたひ來りて、はなれぬまゝに、家につれ歸りて愛し居り候が犬の主は如何に妾と同じくなげき玉ふかと思へば罪にて、又このなれし愛らしの犬に別るゝのつらさをしのびて、再び前の野邊につれ出でゝ御返し申候。

あゝSよ！Sよ無事にてありしか。

いづれの家の主に飼はれしぞ、と問へば未だ見忘れて居らざりしか、よりそひて、尾をふりてたはむるゝ愛らしさ。

○秋海棠

四谷　錦子

千草の香に、秋やうやく熟しぬ。大空はれて日は高しいま我が家の十歩の庭を彩どる花は、げに秋海棠にぞありける。あゝうるはしのこの花思ひ出深きこの花、咲くはなも見る場所もむかしに變らねど、かはるはただわが心。

輕くうなだれしこの花をめでにし母やいまいづこ、右手のやれ垣に、些のほこりげもなく、ゑまひたる、その優しのすがたに似たる御心に、いつも溫顏慈容もてむかへ給ひし、なつかしの母いまやいづこに。

あはれいつも御枕邊にありし花よいたづきにやつれ給ふ母君を、ひねもすなぐさめし花よ、など御果て給はん日を今少しながらへらしめぬぞ、あゝ。

俳句

巖谷小波先生選評

（三）

頭巾着て聚樂の使者と語りけり　伊勢田丸町　谷口壽子

【評】樂しげなる句なり。

（四）

初嵐硯の海を渡りけり　熊本縣菊池郡隈府町　松井さき子

【評】凉しげなる句なり。

（五）

寐ころんで星の契りを拜みけり　越後中頸城郡寺野村　藤原かず

【評】洒落にして而も艶なり。

秀逸

きり〳〵す啼て障子にとまりけり　神田　きん子

春の野に江戸紫のすみれかな　淺草　葉津子

鐘つけば下りて來さうな雲雀かな　上毛　竹内松子

母は砧我は讀書の夜寒かな　横濱　吉川香都子

紙をすくわら屋の庭や白芙蓉　碓氷　五十貝菫子

菊活けてよき日を祝ふ女かな　上毛　和田季子

百舌鳥の鳴く森へさし入る夕日哉　南總　小川綠子

忿に一つ家の火事燃えにけり　大阪　須磨子

秋雨や白き花咲く墓の草　愛知縣　渡邉俊子

鉢叩く翁は醉ておわしけり　奈良市　白藤女

木枯や東へ一人荒法師　羽後　伊藤鶴子

草の露葉毎に月の姿かな　柳宇子

青柳に附木の舟をつなぎけり　武藏　星戸菫子

萩寺の萩の盛りの小雨かな　羽後　前田久子

我戀は糸瓜のぶらり〳〵かな　島根　秀子女史

雁鳴くや針に物いふ留守の妻　岩代　岸野常子

象潟や堂にものせし女文字　羽後　菊池雪子

萩さいて虫はなけども殘暑哉　紀伊　阪本春江

須磨の月停車一分眺めけり　徳島　笹川益子

何處やらに虫の啼き居る秋野哉　仙臺　中目きよ子

山鳩の啼くや茂りの奥の院　相摸　とみ子

秋風や兵火に焼けし京の町　陸中　阿部富子

蜂屋柿赤きに對す月見哉　上毛　關口薔薇子

木の鳥のふくれて居るや霜の朝　埼玉　大塚よしき

竹むらに月のしぐるゝ野寺かな　芝　登美多つゆ子

僧一人飄然と過ぐ枯野哉　下總　飯坂秀嶽

盆踊まつ秋らしき月夜かな　下谷　柳子

萩の露うけて歌書く内侍哉　清國　林正子

梨にあきて葡萄を好む病かな　福岡　安部信子

駒下駄の音も凉しや橋の上　磐城　原田清子

書翰文

文學士稻波瑞甫先生選評

○借りたる花瓶にそへて

京都川端東竹屋町　山本壽子

暑し暑しとかこちたりし夏の日も梧桐の葉に過ぎ去りつはや蓼の穂の紅そむる頃と相成申候ところ皆々様には御すこやかに渡らせられ候由御めでたく存候私事もお蔭さまにていささかのさわりもなく暮し居り候まゝ御安心下され度候。偖先達つては御大切なる花瓶を拝借いたし早速御返し申上ぐべき筈の處御承知の通り道具好きの父事一方ならず賞玩いたし今一日〳〵ととめおき候を今日やう〳〵御返しいたし御許様にもよろしく御禮申上くれとの事申出候多くの人々も見給ふ度にめづらしうるはしとほめそやされ私も何となく面目ある心地致し候。御宅にても御入用の事ならんとは推し居り候へ共かやうの次第にてつい〳〵延引いたし何とぞあしからずおぼしめし下され度候なほこの手袋は見苦しくは候へども御妹子様にとて私事手業のいとま〳〵にあみ候もの故御納めおき下されたく候先は御禮までかしこ。

（評）おちつきたる書きぶりなり。

○郷里の妹に

滋賀縣甲賀郡寺江高等小學校　坂里輪子

秋もいつしか暮れかゝり、朝な夕なの時雨は遠近の山の梢を色どる候と相成候處まづ御兩親様を始め奉り御許の君にも、恙もあらせられず候や御伺申上候、其後は意外の御無音に打過ぎ何とぞひろきみこゝろに御許し下され度候、慕はしき故郷を出ては、青葉若葉の影涼しき頃に候ひしを、噫おもへば星霜は夢の間にすぎ去り、はや埋火のもと戀しきけふこの頃と相成候、あはれ故山の景はいかにと、心はいつしか慈愛ふかき父母君がみ許に通ひて、いとゞ懐しさのまさり候、今更事新しく云ふよしもなき事に候へど、一意專心にお學藝にいそしみ、容儀端正につくらふべきは女子のたしなみに候へど、折れず撓まぬ心しらひこそ肝要に候へ、暇あらばこの姉に代りて水仕の業何くれとなく、母君の御手助をなしたゞ一すぢに孝養をつとめて、他意なき樣くれぐれも願上候、冬期休暇も近づき候

まゝ歸郷の上は濱の眞砂の數つきせぬ話聞え上げ度、一日千秋の思をなし待ち居候。

（評）母をおもひ妹をおもふ懸しき心飾らぬ文にあらはれたり。

秀逸

○菊にそへて

九だん　芳子

よも御忘は遊ばすまじ去年御園生に胡蝶を追ひて、たはむれ候折振分し給はりし白菊、いぶせき座に、かく美くしう咲き匂ひ候、御父君之御丹精と承はれば御懸りもおはせんとためらひ候を、いな心置給ふなとをしげもなふ分ち給ひしやさしき御心いと嬉しくていかで美はしき花咲かせんものと朝夕の培ひに一しほ心をつくし候甲斐ありて色も香もそのまゝに咲き出てし嬉しさとて御目にかけばやと露のまゝを。移されし淺生が庭としらぬかも色香ゆかしく咲けるしらぎく。

（評）瀟洒。

○りん子樣に

（本誌上君が御名を拜して）

稲井　千代子

夢地園かに御地の公園散歩の折惶急しき起床の電鈴に破られ心殘りを頭の内に呼び起して伏床立ち出て朝の務卒へぬる時妾が唯一の友將師なる文壇は運れぬ嬉しさにとる手遲しと開きて先づ妾が目を引きしは君が御名未だに御住所變らせ給はておはせしかさらば疾くより御けしき伺ひまつりしものを只管に此彌生御管業遊せしとのみ存じ侍りてうと〳〵しうのみ過し候を免させ給へよや妾も戰ひの治りし故もて後一とせを此所に過す身とは相成りしにて候扨も去年のこの月にも候ひしかな實習の爲にと御地に學びし事の候ひしは其折は起伏しともにいとも厚き御情うけ乍ら時々の御伺ひだに申上ずさぞかし失禮ものよと思召させ給ひしならん今更申わけがましく候へ共いつか忘れ申さず姉君逆と拜びまゐらせて箸とりまゐらせし事や豫備病院への昇降の途すがら名高き公園の秋景色一入なりし事など今一度かの樂しき日をと友がき打より語ひつゝ候ものをつきぬ緣にて候ひしかな今この文壇上にて君が御消息を知り得しは一重に文壇の賜と嬉しく候此上は昔に變らせ給はず末長く御交りのほど願上候最早や目近き卒業の日指折り樂しみ居り候君には御自愛遊ばし日頃の博愛の御業に東洋のナイチンゲールと歌はれ給はん事祈り上候。御覽遊ばされ候ばゝ御返しを待ち上候

（評）久しく隔たりし友垣を再びもとに結びたる文壇の功沒すべからず。

○田舍にある友に

陸中　くれなゐ女

あつき〳〵都の夏あまれ御身の上うらやましく存じあ

げ候、文にのみ見る床しのけしきをまのあたりにし給ふさへあるに物皆ゆかしき御ふるさとの山や川や、かならずや美はしの花も昔の香に匂ひ候ふらむ。
「水道のたまりはなけれど、こゝはまた流るゝ水の清く候朝早く川に出でゝもの洗はむとすれば山の端輝きて……」
何といふうるはしさ、澄める水白妙の衣、ましろの御手、あゝその旭に照らされ候はいかに………。
「上野より汽車は四時間、遠しとにもあるぬに、訪はせ給へ桔槹しるき茅の屋に機織る音は私に候」
その音、君が妙なるオルガンの調べにもましてさてそはなつかしう候はむ、たゞくちをしう候母ふしどにあり候ぞ。
なほ暫し詩中の人となりたまひて來らん月にはとくやさしの御聲きかせたまへ、數へて待ち渡り居り候八月中の日打水し終へて。

(評)　この手紙同時に見るやうなり。



ふきそうぢ　（選外）　靜戸　篠秋宅

○母樣へ

北海道　白菊子

悲しき晩秋の夕古里の空を眺め暮し候折柄、御情溢る斗りの御水盃の跡、嬉しとも懐しとも幾度となく拜し參せ候。妾も御陰樣にて平和なる御家庭に起き臥し致しわけても奥樣は御懇にお世話下され賤しき身にも餘りたる幸と喜び居申候。
扨てとや承り候へば此度妾への良縁あれば歸郷せずやとの御赴き餘り思ひがけなき御仰にて夢にあらずやとまでに驚き入申候、思へば溫き御膝許を出で候てより隙行く駒の足速くも最早三度目の秋も逝くにて候、只恥しきは三歳の春秋を如何に過し候にか顧れば彼れも是れもわざ進み申さず今更ながら効なき身にて候、さはれ御慈愛深き母上樣にはつゆ咎めさせ給はず明け暮れみ心痛めさせられ有難き御思し召しの程、吁如何にして報い奉らん。此上は只々御旨に從ひまつり御心安め奉るべきなれど、何事も不熟なる身は衣裁つとて裁板に向ひ候へば手振ひ胸戰き、折ふし婢に代り候てはお米磨ぐとて覺束なき手振の我ながら恥しう人目を避るなど、まこと十七も年を重ねし身のわざとも覺え申さず候、かくて人に嫁ぎ重き務を擔ひなば萬づにつけ恥しき節も多からんと思ひ廻し夫

れのみ辛きことに御座候、何卒行先きの妾を憐み給ひて二とせ三歳美しき御當家に家政は元より女のふむべき道見習ひとして御奉公御許下されまじく候や、何も／＼輕々しく願ひ奉るには候はず、幾日かを人なき室に胸いためひとり過去を顧み、行末を思ひわづらひ候ての御斷り篤きみ言葉に背き參するも忍びず候へど、塞きつゝとり得ぬ心のうちは萬づ御推量給り度く、重ね／＼も御許し下され候樣伏て願上候。穢なき胸のうち足はず乍ら斯と箋染め候て夜は甚く更け申候。末乍ら御身恙くおはしますやう神かけて祈り上候。

（評）花の盛は短きものにて候ぞや。

○田園の友へ　　麻布　露野玉子

しめやかなる雨の音に窓の障子押し開き、燈火に庭の木立打眺めつゝ此文認め申候。御言葉に從ひ近詠數首。失敗の恥は元より覺悟のまへ、君と妾との間の事なれば、極々秘密に御目にかけ候。若し幸にも御添削の榮を得ばうれしく候。

　去年の二人吉備路の秋をたゝへにし一人は嫁きぬ一人は去りぬ。

君は廣島の空に嫁がせたまひ、妾は東都へ去りぬるを。あはれ故郷の秋今如何に候らん。

　黄金吹く吉備の中山なか／＼に戀ひてこそまされ遠くはなれて。

　都路に似し人見ればまどはれて母やいかにと西の空見る。

旅にありて、兎角こひしきは故郷に候。

　天日は秋野に落ちて金色と少女に照りぬ頬に御髮に。

　暮雲は眞紅に、野は蕭條として風は颯々、一立てる少女は涙に候。

　比叡晴れ愛宕はくもり一しきり京の色町夕時雨降る。

　洛外を行けば伽藍の數おほみ案内は京の美はし少女。

　京人は皆うつくしと聞くものをおぞやわが姉にしく人はなき。

こは西の京に遊びし時のスケッチ中のそれに候。以上は歌人ならぬ歌人の、歌人眞似ての仕業なれば、無類の珍品、歌といはんよりも品といふ方、おだやかに候はん。御笑ひ下され度候。秋の八千花今を盛りと咲きいて候。田園の景色さこそ一入に候はめ。こなたには、向島の百花園など見るべきは候へども、時間と道路の都合などのありて、いまだえゆき申さず候。尙目黑邊の散策、殊には「傾城に誠ないとは誰れがいふ目黑に殘れる比翼塚」に詣て、古を忍ばんもうれしからんと存じ居り候。何卒して參りたきものに候。

坐ながらにして見得らるゝは、廣尾の秋色に候。まだ申上げたき事は、秋の木の葉の數つきず候へども、またのたよりにあなかしこや。

（評）興ある消息文なり。

○竹雄さんより　尾張　渡邊霞石子

海軍のにい樣の御葬わね、きのうでしたの、きれいでしたよ、なぜ姉さまは居らつしやらなかつたの、待てたのに！丁度兄樣のやうな軍人やね、お隣の村長や先生がね、勅語のやうな者をお讀なさつてわお燒香なさつたの、僕はお駒と一所にお燒香したの、式が濟んでからね、其海軍の軍人お髭の人がね、僕をお呼びになつて、お前さんは何と云ふ名前ですつて僕に聞くの、僕は廣瀬竹雄と云ふんですと云つたら、それはいい名だ、定めておをきくなつたら軍人になるんでせうねと又聞くの、はい僕は陸軍の大將になるつもりですと云つた、すると兄樣は海軍だのになぜ陸軍になりますかと言たから、兄樣は海軍だから僕は陸軍になつて挾み打ちにして露西亞を征伐する筈であつたが、兄樣がいなくなつたからいけないと僕は言つたらね、眼に一杯涙を出してね、とにかくえらい人になつて下さいと、僕におつしやつたの、姉さま！僕はえらい人になるんです、僕はもう泣かないよ。

（評）可なりの出來なり。



圖畫（賞外）常陸　戸田つる子

○山里より　三重縣　帆山靜子

うらがれし一輪ざしの野菊は、今しがた愛らしの妹の手によりて、露にほゝえむ山茶花とさしかへられ候まゝさそく其傍に筆とりて此消息したゝめ候。

都はいかにか、昨日けふの木枯に此山里は、尾花がくれを行く水の、いとあはれなる迄冬がれて、人なつかしさはとても都人には知られぬまでに候。

かねてより、紅葉せば驚かさむとのたまひし木々の梢は、日毎の露しぐれに、秋の色を染めつくしたりと思ふまで色深く、折柄の木枯につれて、門の小川に唐紅の棚をかけ渡したるも、いと面白う候を、そよとのおとづれもしたまはぬは此山里のしのぶの宿、嵐にまかせて忘れはて給ひしにや、日毎御車の音もやと、まち暮すあるじの詫しさ、おしはからせ給ひて、もみぢ葉ふきちらさむ風より先にとく

とく訪れ給へや。萩女郞花こそかれはて候へ、籬に咲き殘りたる白菊に秋の哀れは一しほ深く、柴栗やきし爐の邊りに、一夜古き思ひ出語らはんと、いと興深うは候はずや、必ず必ず一夜は、馴れぬ山里の旅寐を思ひたち給へとひたすら待ち入り候、かしこ。

（評）清興掬くが如し。

◎歸省して

東京　江川春子

新橋でお別れ申してから只もう夢の樣な心持なので名古屋で夜の開けたのも龜山で乘替へたのも確と覺えて居ないでしたが、山田驛に着いてお母さんと房子とのお迎ひにあつた時の嬉しさと云つたら妾與個に嬉しくつて〳〵人目もかまはず齒躍しました、房子が紅葉の樣な兩手を出して「姉さん抱ッこして‼」と縋りついた可愛さには思はずほろりとして豐かな薔薇色の頰へ接吻しましたが薔薇の用意も出來ましたので、房子を抱いたまゝ夫れに乘つて急ぎましたが、家へ近づいた時間の感といふものは、丁度ある一種の電氣に打たれたやう、何ともたとへやうのない愉快でありましたそこへ、伯母樣も居らつしやるし、君子樣もお訪ね下るし、立ち替り入り替りお訪ね下さるお人が多くつて御挨拶も寬くり出來ないのですもの、姉樣のお傳言を申し上げる事が、出來なかつてよそれからあの思ひに思つて居たお父樣のお墓參りもせられなくなつてしまつたわ、其夜はいろんなお話を續けて居ましたので、ねたのは十二時すぎてでした。

今朝は早々黄菊白菊など持つてお墓へ參りそれから學校の樣子やら姉樣の御親切やらを淚ながらにお話申し、かわつたお姿を今更らしうお悔み申しました、夫れから姉樣の御名代だと申して、秀雄樣のお墓へも參りました歸へると直ぐ行李を解いてお土產を出して居ると、房子は覺束ない足で驅けて來て、無邪氣な笑顏で待受けて居ましたが與ると直ぐお辭儀をして、「お母ちやん姉ちやんにこのちれいなもの貰つた」‼と倒れる程喜びました、まだ〳〵申上たい事は山々ですが、今日はもう夜も更けましたから後から緩くりお話し申しますそれではお身御大切になされまし。

◎東都に着して

伊勢　伊藤惠子

東海道五十三驛溫かき夢は愚か、此時は都門に歸る學生の多き爲、漬物桶の漬物の如くなされ、暑さと苦しさとに呻吟しつゝ新橋まで立往生、東都の客となり申候。

君よ歸省の折の新橋驛は獅子奮迅の勢とや申さん、然し都門に歸る折の桑名驛は屠所に牽かる小羊のごと、あゝ意氣恙無しの言は止し申さん。

次の歸省は卅九年の暮か又は東台の櫻花も散り五月雨の詩趣に飽く頃か、妾は麻布兵營消燈喇叭のかすかに響く時も、增上寺の晩鐘一杵二杵……の時も絶まず戀

め申さん。

今回はこれにて、今宵の夢は故園をさまようならん。

◎伯父樣の許に　兵庫縣　森井せい子

御挨拶は御面會の節に讓りてすぐに筆とり申候。さて過日御預り致し候君子樣御身の事、私も日頃に懷しき君に候へば誠に嬉しく、姉樣のやうに何かと打ち解けて御話し致し候へども、何やら御淋しき御樣子にて多く語り給はて消れ居給ふに、いかにかしてと存じ、濱へは行き給はずや、野邊の遊びは如何にやと、さま〳〵御すゝめ致し候へどたゞ〳〵御他出を御厭ひ遊ばして、終日もの思はしげに籠り給ふ、あゝあの事情よりならんと推し量り候てはなか〳〵に傷ましく、かくては御病氣のもとゐともならんかと思へば心もこゝろならず候。何とか宜敷き御分別は御座なく候哉、御賓慮伺ひ上げ候。母も此事にのみ胸痛め、何とか思案のなき物か一度伺つて見よとの事に描き筆にて斯くの通りに御座候。何卒よろしき御返事待奉り候〳〵。

◎病床より　下谷　赤堀静子

又例の御悪戯書きもよき程に遊ばせやあの繪皺にをかしうて今日は心持すが〳〵しう相成り候〇〇博士の御藥も君がみ筆にはかなひ候はじ、有りがたう候。少し靜に立居などするにつけ塵も拂はぬ病床の邊誠にいぶせく御承如の氣質止み難くて只今奥の離れに部屋換え致し候、詩にも繪にもの鎭守の木立こんもりと、僅に見ゆるがなか〳〵に戀しかりける御住ひの端も見えず青かりし田の色づけるも人々の眺めに候。御同樣三伏の暑さ さすがにじり〳〵と骨身に浸み渡り候てさらぬだに私ほとほと死ぬべう覺え候を只少し見ぬ前遠の景色驚くばかりに繁りあひ候ていつか我領にもと御庭より移し植ゑし日廻のにくき迄勝れて高う獨顔なるもつく〳〵と甲斐なき我上の引き比べられ候てわびしさのやるせなう候、今は七つ六つ蕾豐かに、驕誇らしきが咲き出づべう候英詩など綴り給ふにはいとふさうらんよき姿なるに、など御待ち申候をちと寂しきほこり打ちたたかせよろこばし給ひてんやかして。

賞金（賞外）　下野　武代子



◎友の許へ　濟國　林正子

金石も溶けん計りの此頃の暑さ、私等でも堪へられないのに、ましてあなたは妊娠しかも來月が産月さぞ辛

い事でせうとお察し致します、でも今暫くて可愛い稚兒が抱かれるのですから其を樂しみに辛抱なさい、私が云ふ迄もなく御承知でせうが、よく〳〵立居振舞に氣をおつけなさいよ、初產が一番大事ですからね、決して重い物は持たぬやう、人出の多い場所へは行かぬやうなさい、少しつゝは運動をなさいよ、どんなに暑くてもお腹を冷さぬやう夜着を脫いでは可けませんよ、分娩の時は苦しからうとのお尋ね、私も經驗がありますが何そんなに心配する程の事はありません、お腹の痛みは隨分劇しいですが、休み〳〵ですから辛抱が出來ます、案じるより產むが易い、と云ふ通り存外容易に產れるものですから、決して御心配なさるな、私が以前のやうに御地に居たならばお產の時は手傳つて上げるのですが、こんなに隔つて居ては行けませんから神樣に祈つて居ます、俊夫樣に其儘の男の子を御安產なさつた夢を見ました、男の子だつたらさぞ俊夫樣がお喜びだらうと思ふと獨りほゝ笑まれます、俊夫樣へも宜敷く、　注意の上にも注意して御身大切になさい左樣なら。

◎姉樣の許へ　　岡山　三村東香

一昨日御手紙を戴きました、あの時送つて下さいました小說は御友人の作ですとねほんとによく出來てゐますこと、私はお芳が妹と別れる所を讀んで、四年前堂山の八重櫻が散つて葉が青うなりかけた時に、ォヽ丁度大坂に博覽會のあつた年でしたね、姉樣が東京へ御立ちになる時に門出を見送りしたいのは山々でしたけど、あゝ何が不自由なつて病ほど不自由なものがあるでせうか、其時姉樣も私の病が治つてからつておつしやつたけどそれも色々都合が惡いつて私は病の褥の上で姉樣と袂を分ちました、姉樣ほんに〳〵私の胸の內ははりさける樣でしたよ、其時の有樣が思ひ出されてそゞろ同情の淚に袖をぬらしました、あの時私に下さいました短册ね今に短册挿に水莖の跡を止めてゐますよ、此間の休暇にもね、房ちやんや美ちやんや、君ちやんなどと骨牌會を開いたのですよ、其時にもね、春子樣が御居でになればつて皆云つて居らつしてよ。姉樣待つてゐますよ早く歸つてね!!

◎友の許に　　米澤市　高橋縫子

下の谷川の流れも絕え〳〵に、風の架けたる紅葉の橋、渡らば中々絕えなんとてか訪ふ人もなく、時々訪ふものは、夜の嵐と小鳥の群のみさらぬだに秋は一入物うきに語ふものとては松風のみにて、いと〳〵淋く存ぜられ申候。

お許樣にはお變もあらせられずおすごやかにて學びの道にいそしみ給ふよし誠に嬉しく存じ候。

妾とても、父上母上だに健かにあらせ給はんには、お許樣と手を連ねて、同じく文の林に辿らんを、妾事今は此山里に、病み給へる父上母上にかしづき、少しの暇には書物など取り出て、われと我心を慰め居り候、語ふ友とてもなき妾が憐み給ひ、時々は雁のたよりをおこせたまへ、かしこ。

新歌謠　編輯局選評

第二　滋賀縣甲賀郡　藤野しづ子

花のこよみを一枚づゝにはねて行くかや
春の風

うまい事を云ふ。

第三　京都府竹野郡深田村　形山千代子

勲章もろをて新宅建てゝお嫁貰うて新世
帯

成程新歌謠。

第四　上毛太田町入町　大沼楓子

子供神の子神の子なれば摘んだすみれに
蝶とまる

神の子が詩的。

第五　宮崎縣兒湯郡上福北村　濱砂まさよ

行けや東京戻ろや京都中で一夜は濱松に

古調新體

秀逸

○茨城縣　菊江女史

今宵目出度や年神様てお年とつたり豆をまく

○石見　八杉都志子

蝶の影さす障子の内に可愛い赤兒が夢を見る

○麻布　伊藤清梅

城て名高い名古屋の城は金のさち鉾あまざらし

○伯耆　太田鳩子

菫なぜ摘む菫の花を摘めば蝶々が逐ふて來る

○神奈川縣　內田悦子

早く縫ひたい妾の晴衣次の日曜に着てみるに

○米澤市　髙橋縫子

雨に降られて立ち寄る木蔭上見りや櫻が咲て居る

○滋賀縣　川島嶺子

歳は拾九の花賣り娘聲のよいので花を賣る

○奈良縣　中富よしみ

可哀い鶯とまれるまゝにいけて見たいや梅の花

○埼玉　小宮とめ子

おもては雪に靜にくれて內は歌留多に夜が更ける

○備後　松本菫子

わしにや似合ぬ當世廂銀杏返しに結び直そ

○岩代　岸野常子

頭がきれても私やつらくない母に手傳ふ水仕事

○
舟方追分波間にきこゆ濱に出てまつ入舟を　茨城　うた子
○
負けるはくやし勝つてはすまず姫様相手の歌かるた　大阪　俊文子
○
追いつ逐へしつする羽子板の袂からたつ春の風　埼玉縣　和久井きん子
○
姉の白菊斷かぬうちに妹黃菊の咲きそめる　神奈川縣　萩原あさ子
○
捨た此兒を父親へ抱けとひゞいた霜の鐘　鶴野　香蘭女史
○
岐阜は好いとこ鵜飼の名所織田のかはずが鳴て明ける　岐阜市　川出愛蓋史
○
兎狩らんと山追ひ行けば雉がとび立つ峰つゞき　上毛　河内とめ子
○
こぼれ松葉もはやかごに滿ち乳ぶさ待つだろいとし稚子　上毛　金子尙子
○
汽笛鳴らして今出た汽船明日は私が乘つて行く　香川縣　嘉女
○
おぼろ〳〵の朝霧ぬけて出たよ白帆が二つ三つ　熊本　たけ子
○
生れ故鄕の人ぢやと聞けばお名は知られどなつかしい　愛知縣　河村林子
○
桃が咲いたよ十戸の村へ明日は樂しいひな祭り　上毛　柳澤愛子
○
雪の山道氷の坂も女房思へばつらくない　府下　鵜澤銀子
○
夕べ夢見た美き姫御前が召した模樣よ此花野　信濃　登喜子

○
本誌見るたび紀州の諸友御名だけても懷かしい　紀伊　津田鳳佐子
○
琴に三味線女子文理よ私しの好きなは此三つ　津田二三子
○
踊り娘は美人の一人私しやつれても恥しい　滋賀縣　川島敬子
○
ほんに可愛いや糸屋の娘襷を締めて袖絞る　日向　濱砂まさよ
○
今朝は元日うれしい春よ宅のお嬢の化粧振　羽後　渡部英那子
○
今日を限りの暇となつて共に手をとる汽車の窓　陸前　猪俣きつ子
○
嫁にゆくなら侯爵ぐらひ婿をとるなら學士でも　千葉縣　石渡久
○
冬は田舍じや氣樂なものよ炬燵へはいりて麻をうむ　越後　松山けん子
○
袴むらさき模様はないが染めて見たいよ花紅葉　京都市　岩淵滋子
○
海老茶色より紫すきよはてゝ高尙で品がよい　下野　梅月子
○
春の藪過の玉藻のかげに雄蝶雌蝶の夢圓か　豐後　あけぼの女
○
晝は終日野で働いて夜はお側で針仕事　周防　梅橿子
○
のこし書していさめてくれた妹に見せたい卒業證　廣島縣　かけい
○
妹可愛や鈴の眼張つて母に頭冠を振る姿　大分縣　岡南蝶子
○
わたしや松島嫌いつき島あまの橋立まつ逢や　備後　松本重子

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

○留守居

麹町區上二の四四加藤邸内　秋子

人の家にはそれ〴〵大切な物がございます、それでもしも一家の主たる人が外出致します時は必ず留守居を置いて出ます、そうでないとしますれば、何時盜難に遇ふかも知れませんし、また急用が出來するかも知れません、て已むを得ず戶じまりをした位で家を明けて出ますときは氣掛りて成るべく歸宅を急ぐのが至情でございます、家を明ける事はそれほど心配致します、けれど心を明けるのはあまり氣に掛けないといふのは、一躰まあ何といふ事でございませう。

私共の心には澤山の財產がございます、正直といふ衣服や、貞淑といふ器具や、綿密といふ調度や、柔和といふ裝飾品や、或は勤勉といふ食量もあれば、勇氣といふ薪炭もあり、其上寒さを防ぐ慈愛の煖爐、非常に處する忍耐の懷劍、節儉といふ羅針盤から、秩序といふ錠前まで備つて居り、他に忠といひ孝といふ地所家屋があります、こんな大切なものを持ちながら留守居なしに外出することを何とも思ひませんことから、いろ〳〵の盜難に罹るのでございます、で留守の間は書物といふ恩人が來ても、教訓といふ先生が訪うても、または諫言、忠告などといふ知己が尋ねてきても空しくかへつてしまふ外はありません、ものはぬすまれ訪問者は還り、遠からず死といふ急電の飛ぶ事は夢にも知りませんから誠に後日の悔を殘すのでございます。

嗚呼どうしても心は外出してはなりません、留守居なしに外出してはなりません。

毎日起る用事は多端です、爲に外出するのは結構です、たゞ、併し、必ず一人の留守居を置く事を忘れてはならないのでございます。

（評）心學の書を讀む心地す

秀逸

○自然と人

府下　鵜澤菫女

○試に海邊に逍ひて、一掬の白沙を檢せよ。其の種々なる色彩と形狀との中に、如何に天然の力の大にして微妙不可思議なる趣を備へたるかに驚かさるゝなるべし。微の微の極微なる小砂と云へども、各形を備へ色を具して、到底人間の力を以て想像し且つ模造する能はざる美妙幽玄なる趣を備へざるはあらず、否な我は其の一小砂の中にも數千萬年の天然の變遷、人事の推移歷史の終過などいと意味深く織り込まれたるを見て無限の感慨に擽れざる事能はざるなり、意味深き哉この天と地と。

○此の意味深き天地の間に住しながら、この意味深き天地の色彩の間に浴しながら、然かも無意味に一生を送り行く人の果敢さよ。天地は依然として、朝に夕に絶えず其美しき色彩をこの人間界の上に灑ぎかくる間に長き長き人生は、夢の如く幻の如く、且つ速きこと電の如くに、時代沒し、帝國滅して、殆ど盡くる所なく續き行き過ぎ行き消え行くなり。而してこの人間が跡に殘して行く處のものの多くは一片の墓石のみなることを思はゞ、誰か無恨の悠久の域に沈まざるものあるべき。

○然も見よ、其の機に殘したる一片の墓石すら、如何なる有樣に爲り行くべきか、或は淋しき暗き杉村の蔭に、或はいぶせき竹村の片隅に、始めこそ香花を手向け墓邊に灑ぐものありて、風に倒れ雨に蝕せらるゝことを免るゝことを得べけれ、五十年百年恐るべきタイムの力は幾夕陽の淋しき影と、幾風雨のわびしき音とを、其の不朽と賴みたる石の上に押寄せて、漸く詩人の聽を攪するの料となり、漸く古蹟を尋ぬる歷史家の參考物となり、遂に風に吹き亂さるゝ尾花の中に埋沒し盡さるゝに至る、此時に當り、我身は如何？……。

○疑問、疑問、總て疑問なり。されどこの疑問の暗黑中に猶ほ一道の光明の恰も森々たる海波の中に於ける黑潮の如く、いと赫輝として照り渡りたるを認むるを得るなり。されどこの光明や何處より來しかを知らず、又何處へ向って輝き行くかを知らず、

○暗黑は苦痛の極點なり、ましてこの光明の光次第に遠かりて、最早其の微かなる影をすら望み見しこと能はずなりたる時の心地、殆ど世も身もあらぬやうにぞ感ぜられし。其時の我は空想を逞うして幾萬年の後、地球には人類跡を絶ち、熱を失ひ恰もかの昔熱あり人住したりし月球の現在と均しく、白く冷かになり果てて、徒にくるりくるりと太陽系を廻り居るならんなどと想像したりき、而して血あり熱あり理想あり生命あり

と自信せる人類の末路は、極めて果敢なきものならんと想像しき。

○過ぎよ過ぎよこの人生、過ぎよ過ぎよこの果敢なく心細き人生——疾風の枯葉を捲くが如き勢を以て、電光の瞬間に消え行くが如く速かに過ぎよ。而して繁華なる都會は荒凉たる野と變ぜよ、然らば其の時は、我等の想像し能はぬ奇獸怪鳥は其荒凉なる野に滿つらん、かくて又幾百世紀の月日は一瞬の間に過ぎ去れよ、然らば、地球は漸次熱を失ひ、活動を失ひて、恰も今日の月球の如くなるらんこの時は川は氷り、山は悉く雪に鎖さるゝに至るならん。其時の荒凉寂寞たるさまを想像せよ人間の熱情は如何に、衝突は如何に、慾望は如何に。戀愛は如何に。あゝ、喜びて過ぎよ過ぎよ、未來は未來、たゞ現在の愉快を失する勿れ。」

（評）末段に救濟の光明を見たし。



お塵取り（賞外）　長岡市　土田りた子

○剛毅　伊豆　西堀榮子

ナポレオンの遵奉せる唯一の格言は、「剛毅は眞正の才智なり。」と云ふにありき。剛毅は則ち堅實の意志にして、事業を成功する唯一の要素なり。雲に聳ゆるアルプスの山を眼前に控へて「此山は古來車馬の通じたるとなく又通ず可き道なきを以て到底六萬の兵を進め難く候」と士官の上申するをきゝて、我を妨ぐるアルプスあらんやと揚言したる彼れナポレオンは遂に二軍を統督して其險阻を越えき。是れ豈に堅實の意志を以て天然を制したるものに非ずや。總軍四百萬、肅々としてセルキゼス大帝の黃金座を擁して、マリア灣頭に望みたる波斯兵に對しレヲニダスの率ゐたる三百の兵は心膽金鐵の如く、波斯兵より武器の請求をなすに對して戰ひて之を取れと言ひ放ち、遂にテルモピレの喩に敵を迎へて大に之を破りたりき。是れ豈に堅實の意志を以て人衆を制したるに非ずや。權勢烈日の如く百官諸司猫の如く、其の前に屈服したる妖僧道鏡に面じて和氣清麿は宇佐八幡宮の神托を復命し、天つ日嗣の御位は萬世一系の皇統に非ずんば之を履むとを得ずと述べ、終に彼れ妖僧をして神器を汚すとを得ざらしめき。

是れ豈に堅實の意志を以て、權勢を制したるものに非ずや。

セネカの病旦夕に迫るや彼は其友に謂つて曰く「我れは父あり母あり、我れの病死するを聞き給ふや必ず慟哭して其の健康を害し給はん、我れは之を思ふが故に死すべからず」と、斯の如くにして彼れは其の生を萬死の中に保ちたりき。是れ豈に堅實の意志を以て病氣を制したるに非ずや。堅實の意志は斯くの如く天然に勝ち、人衆に勝ち、權勢に勝ち、病氣に勝つ。然れば天下何物か克く堅實の意志を屈服せしめ得るものあらんや。

「力倆ある者は常に多し、然れ共堅實の意志を持つものは尠なし」と慨歎せしは。佛國の大文豪ヴイクトルユーゴーなり。我れ今日に於て此感殊に深し、人衆日に多くして偉人豪傑寡なき所以のもの即ち之なり。熟ぜざる可けんや。

（評）文理整然旨趣明白。

○女子修學論

本鄕　葉薄ゆり子

今日の世は昨日の世にあらず。日に進み、月に進む世のなりゆきは、一刻も止る事あるなし。かくて女子の修學も浸々として止る所を知らず、今は女子大學となむ呼べる、いかめしきものさへ出て來て、才媛淑女は、競うて此に就かむとす、慶すべきかな。賀すべきかな。されど更に之を一面より見る時は、又憂ふべきものなきにしもあらざるなり。修學は眞の修學にあらずして修容なり。修言なり。容色を作るの法を學び、言語を裝るの法を學び。只自個は偉なりてふ迷信を大ならしむるのみにて、精神の修養に於て却て失ふ所こそあれ、得る所は更にあるなきなり、女子に自尊の迷信を抱かしむる程うれはしきはあらず。

夫れ女子は男子に對して內助の効を成すに於て天職を全うするものなり。既に內助の効を以て本となさば、自尊の許すべからざるや亦一々辯明を要せざるなり。男子天たらば女子は地たるべし。天普通の靈光を放ちて止まざらば、地は化育の効を致して萬物の保養を司るべし。若し地にして徒らに靈光の薫育をはばまむとせば、世は遂に序なく。頑なきものとなり了らむのみ。女子の男子に於けるかくの如し。自尊の心を起して學問を鼻にかくるが如きことあらば、家庭は玆に滅し、夫婦亦遂に暖なる能はざるべし。されば只終世を獨身にて暮さむ人ばかりは修學も必要ならむ、只妻たり、母たらむとするものは、普通學あらば足りぬべし。いたづらに自尊の風に犯されて世を亂さむは人の願にあらざるなり。我は世の女子の獨身者多きを願はず。さて女子の修學をも益なきものと

いひつるなり。

（評）もとより辭あれど亦一種の論として聽く價あり。

○罪惡觀

名古屋　小山かく子

罪惡とは何てあらう。云ふまでもなく良心の意志命令に背いたる言行其ものを指すのてある殺人、强盜、姦婬、詐僞、放火、不忠、不孝、の惡德を敢てするものあらば、世は忌憚なく冠するに惡人を以てし、罪人を以てし、罰するに國家の法律は彼等を容捨せぬてあらう。然り此の如きは悉く罪惡の人たるを免れぬてあらう。

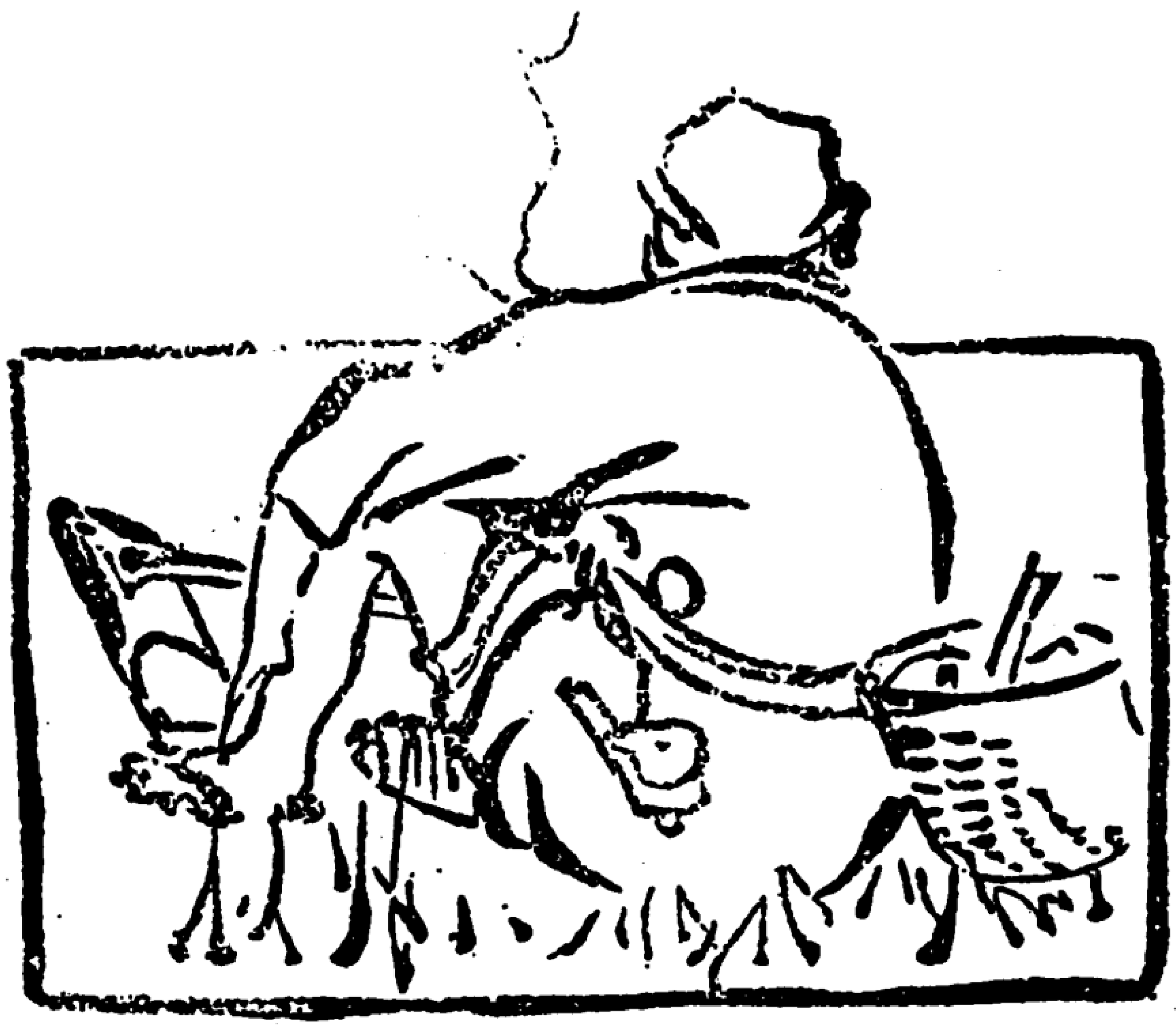
さり乍ら、自分は道德倫理の上より觀察して、此等の諸罪惡が根本的罪惡の原素てあることを信じない、只其末流枝葉てあることを認めるにすぎぬのてある。

然らば自分の意見は何てあらう。

假令具體的の罪惡が犯されないとしても、人其良心の命令に服從せず、自己以上絶對無限の存在者――即或人の神、生ける上帝、眞理――を否認することが、罪惡の源泉を犯したものであると云ふのてある。

更に明白に露骨に云ふならば、自分の主張は、かう云ふことになる……何ら具體的の罪惡を犯さない人でも、自己以上絶對無限の存在者を信じ愛し畏れ敬ふの意志なき者は既に凡の罪惡を犯すべき要素を有する。

（評）これ亦一主張。



農夫　（賞外）　和歌山　津田文子

○眞の自由

東京　齋藤溪子

『我に自由を與へよ、然らざれば死を與へよ』とこれ誠に天の聲てある。人生、自由を得るより大なる幸福なく、人間として、自由を得たる程算きはあるまい。

嗚呼、自由なる哉、自由なるかな。自由は生命なり。自由なきは死なりと、吾人は信ずるのです。苟くも、人と生る、自由を求めざるはあるまい。然も善く之を得た人は如何程かある。？

月にむら雲、花に嵐、實に、不如意なのは憂き世の實相てある。怨み、怒り、罵り、憂へ、悲み、悶へ、果敢なむは吾人てある。自由を得んとして得られず、壓制を脱せんとして脫し得ず。妄想顚倒して、常に罪惡を作るのは、吾人の當相てある。自由を得たるものな

く、不如意を訴へないものはない。果して然らば、自由は遂に得られないものであるか。人間は到底、滿足を得るの日はなきか。

吾人は、『然り、自由は得るに難からじ』と答へん、世に所謂自由とは何？富貴、名譽、此等を獲て、安樂に世を面白おかしく渡るを得るを云ふてはないか。この自由ならば、これ眞の自由ではない。名譽、富貴等の爲に本心を失ひ、他物の爲に自己が自由にされてゐるのであるからだ。

吾人が、悲、憂、悶、怨、怒等は、皆これこの他物の爲に自心を失ひ、他物の爲に轉ぜられる爲に起るのである。これ決して、自由と云ふべきてはあるまい。

世間の人多くは、如上の自由を求むる故、之を得難いのである。眞の自由の如きは、さ程六ケ敷ものてはない。然らば。眞の自由とは何？

曰く『能く物を轉ずるにあり』てある。

他人、我を毀るも怒ることなく、他人の富めるも妬むことなく、己に迷はず、他に轉ぜられず、能く自心の本來を自覺したならば、身心圓かに、明かに、直ちに一毛端に於て偏ねく能く十方の國土を含受するの自由を得られるであらう、これ余が所謂、眞の自由てある。この自由を得たる人程幸きはなく、この自由を得る程人生、幸福な事はないのである。

この自由を得たる人、これ眞に生ける人にして、この自由を失へる人、これ死せるに同じきものである。

（評）大悟。

○人世　　熊本　逝く春

抑々人は何を爲す可く世には生れ出づるのでござりませう？それは哲學とか云ふ部には入る問題て私等には到底解する事は出來ませぬ。が、何れ世に生れたからは、世に對しても、充分世其物を知る責があると思ひます。世を充分知る事が出來て、其責を果し得た人こそ、眞に幸福な人なのでござります。

然るに世と云ふものは實に複雜極のないもの、之を知るの方法も亦決して容易てはありませぬ。膝を埋むる座布團の上から見下した世の觀察、金縁の目鏡をこしての世の觀察、それは實に覺束ないものである。あらゆる困苦と苦痛とを自らなめるにあらざれば、眞の世を解することは出來ないだらうと思ひます。

然し私は、困苦と苦痛とに一生を送るを以て、足れりとは申しませぬ。時に自然のふところに抱かれてご覽なさい、困苦の中に一つの限りなき慰藉は得られるのでございます。時に人情の搖籃にゆられてご覽なさい、そこに苦痛を忘るゝ力は得られるのでございますかくて初めて、人は世を知る事が出來ませう。

不遇に泣く君よ、眞の幸福は君が眼によりて得らるゝであり ませう。綾羅の衣、八珍の食にあきて、之を幸と喜ぶ人の子あはれ、これを又羨む世は、世自身を知らないのでござります。

（評）意未だ盡されず。

○天才も頼むに足らず

長府　高田沖子

第一學期の試驗に河田樣に首席を占められ、第二學期はと一生懸命食ふ物も食はずに御勉强なすつた御兄上樣、またしても九十八點對九十五の差で二番となられた、お兄上樣の失望は非常なもので「河田は天才だ僕等凡夫の蹤の遠く及ぶ處でない」と口癖の樣におつしやいます。

が、然し妾は決して天才だから是れを凌駕する事が出來ないとは思ひません、天才とは苦痛に恨ゆる無限の力でありま す、世に天才と稱せらるゝ御方は、千難萬苦を排して勤勉の功を積まれた方に外ならぬのです、即ち克己心の强き者を天才と申すので、此の克己心の强弱は其の人の天性に關して、容易に出ぐる事が出來ないと申しますもの、「習慣は第二の天性」常に苦痛に堪へ忍ぶ心を養つたら、後にはよく己れに勝つ事が出來る樣に成るでありませう。誰れやらの歌の「雨あられ雪や氷とへだつれど落つれば同し谷川の水」で、彼も人なり吾れもまた人、と專心誠意全力を盡して事に當つたなら、何事も出來ないと云ふ事はありますまいと思ひます。

妾は斯く申して、御兄上樣を慰め且つ勵まして居ます。

（評）惰夫をして起たしむる言。



公園の夜櫻　（賞外）　羽後波郡　美耶子

○卓上私言

名古屋　小山かく子

◎米櫃の底空しきに係らず、常に大放螺を吹き立てつゝ世渡りするものは、必しも香具師社會のみに限らざる也、ひど工面して美しき衣裳を着飾らんとする妻君も夫也、廿圓の月收もて廿五圓の生活をなさんとする良人も夫也。

◎聊矛盾なるに似たれども、苦しき時に同じ苦みに逢へる人の經驗談をきゝて幾分の慰めを得るは事實也、弱き牝雞が足手纏ひなる雛を携へて、却て强くなるも、意氣地なき男子が可弱き妻を娶りて旦那らしくなるも事實也、事實は妙なものに非ずして眞理を含むもの也、

（評）多少の訓戒多少の台辭。

新笑話　編輯局選

秀逸

○朝寐　菊子

母「みいちやん姉さんにもー起きなさいと云つておいて」子「だつて姉さんは目をあけて眠ていらしやるんですもの」

○十二階　横濱市　山﨑よね子

親父、東京見物して歸つた息子に向ひ「太郎お前五二一會を見て來たかい」太郎「五二會は見ないが十二階を見たよ」

○病氣　千葉縣　八木蒲津枝子

夫「おい風をひいたからお粥を炊け」妻「はい何程位ね」夫「一升も炊けい」

○たしなみ　遠江　白菊

「姉さんなぜ御つくりするの」「是は女のたしなみてす」「其れならばなぜ修身の時先生が敎へないてしよう。

○品行の試驗　廣島　戸木野としえ

父「御前は品行を最少しよくせぬと試驗に上られない」子供「でも御父さん、品行の試驗はないのだよ」

○江戸ッ子肌　麹町　淺井千鳥子

江戸ッ子國者に向つて、「君、江戸ッ子肌つて何ういふのか知つてるかい」「ムヽ知つてるさ、君のやうに眞黒なのさ」。

○知った顔　越中　なゝし子

甲女學生「山田樣こそ眞に理想の婦人よ、乙女學生「實に左樣てす併し貴女は理想と言ふ事を何と解されて……

甲女學生「アヽ只今一寸忘れてまゐりましたが何時か貴女に了解安い樣ブックに解しておいたのよ。

○ハイカラ　後藤貞子

女敎修身の時間に皆さんのお父さんやーお母さんは平生も何とお云ひてすか。

（或兒童）先生がハイカラじやから宅のみいちやんまてもつて。

○眼鏡　香川　惠女

甲「三錢眼鏡をかけ大威張りて行つて居たがはつとつまづく、すると

乙「そらあまり威張つて居ると……」

甲「なーに己の眼鏡は望遠鏡だからさー」

○丈くらべ　茨城縣　石　强子

子「お母さん僕はなぜ姉さんより丈がひくいの」

母「おまいは姉さんより後から生れたから」

子「じや兄さんはお母さんより先に生れたの」

○くうふく　長野縣　桐原敏子

客の給仕をして居て　妻君「あなたモー少し御あがりなさいまし　客「イーエ澤山モー空腹になりまして一粒も通りません」

○知らぬ　伊勢　かげろふ

母「絹ちやんや外て小便すると人が笑ふよ。

女「母ちやんいゝの　妾誰も知らん樣に眼つぶつてするから。

○水　うすらひ

「桶屋樣今なほしてもらつたばかりだのに早もりますよ」桶屋「御當家の水はもり易いと見えます」

○世界第一　岐阜縣　安田幽深

「日本は世界第一の富國だ」「何故」「明治卅七八年の日露戰役の時黄金山を占領したから。

○煙草代　富士山好女史

女房「貴方位煙草を吹かす方も珍らしうございます。貴方が無駄に煙にしてしまふを金て妾が強乞り申してる帶は、樂に買へます。」

亭主「己が此程煙草て無駄に金を費つてるんだから、其高い煙草代程の帶がどをして買へるもんかれ。」



短文

編輯局選評

〇あはれ小鳥

北海道天鹽國、留萌村　相原壽美子

今私の手にある哀れな小鳥。何處から迷ひ込んだのか飛ぶ事も出來ずに臺所に震えて居たのを、救ひあげたのです。時々少し許り口をあいては悲し相な聲を出します。アアどうしたなら元氣よく私の手からとび離れる事ができるでせう。

終の一句、全幅の生命。

〇雪の朝

旅順口　愛菫

昨夜からひらく\と綿をちぎつた樣に降つた雪は、さつぱり晴れて、名にしおふ二〇三高地や、鷄冠山、椅子山、松樹山、何處も彼處も、不公平なく白衣に被はれ、支那人の家からも何時になく、煙高ふ……この時太陽は黄金山の無線電柱の頂きに現はれ、あたりまばゆく光を放つのである。

勝ちしものも負けしものも、あゝ皆雪に埋れぬ。

〇我住む里

香川縣香川郡東濱村二三一　長尾藤子

私の住む里はいはゆる山又山で目のとゞく限り山ばかりです、村はたゞ三十戸の農民のみ、みんな忠實でまるで一家の同胞のやうな心地がします、そんな山中でも住めば都の習ひであまり不便もかんじません。

郵便も日に二三度。

〇工場

越後小千谷　籠野とり子

今汽笛が鳴つたと思ふと廣い工場へぱッと電燈の花が咲きました、そして間もなく夕霧につゝまれました。

目に見るやう。

〇お嫁入

大阪市北區上福島　直田松枝

今日は姉さんのお嫁入、いつ行きなさるかと思つてゐたら、朝からぐづく\して晩になつてしまつてから行きなさるのよ、私が、お嫁に行く時は朝早くおきていくのよ。

奇拔。

零　選

○神様の御たち　足利　飛露子

今日は陰暦の十月一日で、日本中の神様が、出雲の大社へとおたちなさる日、私は朝早く起きて、村の鎮守様へ参りました、冷たい空氣を吸ひつゝ朝露をふんで鳥居をくゞると、宮の中には早くも、燈火が捧げて有た、私は靜かに兩手を合せて御祈りをしました。

道中御無事で。

○五千四百椀　北海道　泉　翠

私の家内は、兄弟合せて八人、御兩親との十人ぐらし。お給仕番の私はたいへん忙しいの、此は八月中の計算、お汁と御飯並にお茶を合せて、平均六椀としても一度に六十杯、日に百八十、月に五千四百わん。

統計學者、一驚を喫す。

○正月待ち　近江　深谷岩子

取入た米は藏へ積込し正月餅は、それ〴〵、三俵有る、廣い畑には自慢ではないが、里芋、大根、ねぎ、人參牛蒡、枯た畑にも青々と、人の目を引く朝鮮菜、皆な笑つて、年取らう、榮は千代に、家は平和に。

めでたし〳〵。

○迷の道　安房　木村倚子

妾し達が此の世を渡るに先づ初の十五六里行くと迷の道と云ふ所がある、右は戀路左は修道、右を行けば失敗の村に出て左を行けば成功の町へと出る、心すべき事であるかな。

こゝが思案の別れ道。

○獅子面　秋田縣　ＴＫ子

「京から下る唐繪の屛風、一重にさらりと建て回はし……鳴りを靜めてお聞きあれ、森も林も鶯の聲。」と秋田特有の獅子面舞踏は初まつた。折しも彼方の梅花、春風に輕く誘われて、前に二片三片。

有聲の風俗畫。

○味噌たき　水戸　重子

私の内では、毎年味噌たきを致します、母様は、麹と、おしほを交ぜる、女中は釜の前に、お火の付番、兄様と番頭は、お味噌つきを、私は、豆のよいのと惡いのをよりわけるやく。

善玉、惡玉。

○玉虫　西ノ宮　森井せい子

私が幼い時磯邊へ遊びに行つて、「玉虫來い〳〵」と、云ひながら細い沙の所をほつて居ますと、ほんと

に玉のやうな、玉子色の眞丸い美しい虫が出て來ました、今でもあんな美しい虫が居るのでしようか。

ほんとうですか。

○家の周圍　三河　棚木とき女

妾の住居は人里はなれた所です、後は鞠の樣な丸山、前は庭と小川を距てゝ面白い岩山、東と西は、年中喰べるお米の出來ます田である。

都會の家の周圍は奈何。

○女らし　九段　よし子

流行の高襟髪に紫の袴召して文机によれる樣もまた心憎からねど、びんの毛一條も亂さず帶は胸高く品よくキチンと結び正しく座して衣縫ふ女の樣はほんとに女らしいと思ひます。

洋畫と日本畫。

○平和の村　新潟市　花　枝

桃や櫻の盛り時で祖父樣が金婚式を村の人を招ひて擧げた間も無く向ひの家も銀婚式をすまし隣家では明晩新嫁の來るさうで明後日は學校の新築祝ひがあるとかまことに平和の美しい小さな村であります。

新聞取る家も五六軒。



かうもり直し（選外）　栃木　文　子

○朝の風　栃木縣　櫻　女　史

西田小川の岸を辿つていつもの五丹田の角で私は草苅籠を下して鎌を研ひで居りますと涼しい朝風がさはざはと吹いて岸に咲いて居た眞白な卯花がほろ〱と私の肩に散りかゝりました。

西行ならば歌よまん。

○妹の手紙　越後　菫　女　史

投げ込んだ直樣、封切ればホロリりと落る白百合の一片、文字の無いので不思議に思ひ、日にかざして見たら、針でゝも書いたであらう「裏の流に浮いて居たのを月光で摘つたのです」と只だ十有餘文字のやさしき言葉。

すかし百合。

○霜の日　埼玉　江森すゝき

ゆるう吹きくる颶に交りて、かすかに私の鼻をついたので、あたりを探すと枯草の中に小さな菫が可愛くも紫色の三つの花を、重さうに支へてゐるので、まあ霜多き此頃を能くも耐へてと、己の溫かき息を吹きかけて……。

枯草は自然の溫室。

○夕の磯　滿須子

夕暮磯に待つて居ると、嬰兒が母の懷に入る如く數多の漁船が輝く海の上を蹈つて來る。あれ彼方に我背子の乘つて居るのが……。あゝ、浦和の住居も夫故ぞ、波も、嵐も心して、毎も安らけく戻してくれよ。

雨よふれ〳〵風なら吹くな。

○父上の笑顔　鳥取縣　因幡翠子

働き人が一人ふえて手入がよかつた爲か今年は半中も實入が多かつた。之なら帶の綫もはずまねばなるまいかなあと、背戸の一段二畝の稻を米にした晩、算盤はじいて父上が!。

娘の笑顔。

○うそ　鹿兒島市　露萩子

滿洲行く金送れと書いて下さいと電報用紙を出して今年入營した權作は私に賴むのです、あられもないうそを云ふて、貧な年老いた親を心配さすのかと思へば筆もつ手は思はずふるへるのであります。

小さき胸を痛めて。

○人さま〴〵　下總　伊波勢野富子

小間物屋の美代さんは愛らしく。敎師の房江さんは同情ありさうに。花賣りの里子さんは行末賴もしく。本屋の歌子さんは高尚さうに。料理屋の葭江さんは近視眼らしく。其からハイカラで理屈家らしいのは判事の邸の哲子さん。

美代、房江、里子、歌子、葭江、哲子、名は實の賓なりとかや。

○寫生　下野　穴原信子

旭が登ると必ず、一番の目白が、軒に吊した乾柿を食ひに來るのです、其影が障子に映るのを手本にして妾は毎朝筆をとりました。畫が漸く出來あがつた今朝見ますと、柿は最早食ひ盡されて居ました。

活畫。

○衣の色　佐世保市　中尾結子

夕暮ふと欄干に寄れば、天つ女神の織り出だし給ひけむ藤色のいと上品なる雲。夢の如くに月の顏出だしたる樣、嗚呼さながら妾の紋付の色其儘、着初はこむ初

春にとの母様の御言葉一日も早やかれよ初春。

無聲の天衣。

○冬の夜　　仙臺　中目のぶ子

辨慶橋の擬寶珠は、凍り付いた人影とも見えて淋しい、橋の袂から河岸へ折れてゆくと、後の河上で恐しい音がした、氷魚が月に躍つたのであらう。

夜も十時に近く。

○野菊　　大阪市　島田ひろ子

姉様、今日ね運動會で嵯峨へ行つたの、そら渡月橋邊の好い景色つたら姉様に見せて上げたかつてよ、祇王祇女の墓の傍で野菊を澤山摘て來て今夫を鴨河へ流したの、姉様直ぐ拾ひに行て頂戴よ、と西の都の妹から。

鴨河の水はひろ子さんの家の前。

○妾の後悔　　阿波　内田貞子

妾へ初めて巡査のお嫁にと云つて呉れた、妾いやと云つた、又小學校の教員に行かないかと云つて呉れた、其れもいや、ちようど十人ばかり云つてくれた、なれ共、妾行かなかつた罰か今伯母同様で後悔して居る。

綠不綠。

讀書（賞外）　八王寺町　乙踊もん子



○野菊　　沖縄縣　大島ふさ子

背闇の小石に躓きて、不圖かたわらにありし野菊の姿やさしきに、すりむきし膝の痛さも打忘れ、かゝる名もなき荒野にも慰藉はありと。

○初夢　　南多摩　中島繁子

妾が乘つた眞白な鶴が、大空高く舞ひ揚ると、そこには美くしく裝つた天津女神が居られました黄金の冠紅のみ衣、目覺むる斗りの華美やかさに、妾はそと近づきて、恭しくわが歌を捧げました。

○寫眞のよりどり　　大分　白百合子

一は紅粉を施し綺羅を飾つて、澄まし返しのお姫様、一は紫の袴裾長く首稽葉の襟止、莞づきずな女學生、一は清しい目深い笑くぼ、はちきれる様な肉附の小兒、私は此の無念無想の邪氣のない、天使の様な小兒の寫眞をとりました。

○自然の樂しみ　　埼玉　里の少女

山も田も畑も綠の布にても包まれた様な里は忽ち黄金色に化したと思ふ間もなく山はもう紅な流した様そして田畑の作物は農夫の手に收獲されて見渡す限り廣い廣い野原となつた一年中に村里の景色は幾度變化するであろふか。

○雲　　若狹　澤田六合

二三日來の雨が止んで、西風が强く、薄墨色の雲が、斷々に飛んで行くと、白い雲が、競走でもして居る樣に、追ひかけて前の様な形になり、

又今の樣な形になつて、何處へやら。

○舊友　京都　辻　愛子

私の一番すきなのは舊友と幼時の事を互に語らふのが一番樂しいです此間も私の幼稚園通ひの時のお友達がこられて種々話した末幼時の二人の寫眞を取り出して大笑ひでした。

○夜の横時　常陸　石守女史

大きな船が眠つてでも居るかの樣、皆な掩ふて浮んで居る荷船の四つ五つ、川を挾んで列んで居る倉庫の上には、星がさも寂げに瞬いて居る、ふと灯が消いたと思ふと、二丁計り向ふの橋を今車が渡つた、折柄工場の汽笛がボーと寂寞を破ると夜は沈々と更けて行く。

○國旗　石川縣　富田蘭子

妾を何故に人達は叮重に扱つてくれるのであらう、今が今とてばらのような香のする衣類と一所に箪笥から出された許りだ、そして妾が顔を出す時はいつも人々は笑顔にて喜く迎へてくれる妾は何と幸福者であろう。

○猫の日記　信濃　秋涙子

毎日鈴虫を取つて喰るので秘蔵の秋の興をそぐ者とて頭を叩かる、午後蟋蟀を捕るとて石燈籠から飛び落た其時萩の蔭に仲惡のぶちが居てワンと吠えたので二度吃驚無中で梅の木へ上つて降りるに困つた。

○機織日記　滋賀縣　宇野八重子

絹織一反漸く織り了へて、お婆さんより頂きし甲斐絹を裏にすべく居間に入る、渋茶二碗に心を調へ、今日こそはと習ての考案、奥州紋に來れば、生憎母さんは留守、惜段妹の來るを幸ひ、寒薔薇を賞しつ母さんを待つ。

○夕雲　讃岐　壺女史

夕ばえ雲美しく西の空をオレンヂに染め出して、名殘の靜風がすや／＼と稻穗をなめると、思ひ出した樣な蛙の一しきり、鎭守の森には早や光うすい十六夜の月が、平和に滿ちた村落を夜の神に渡す可く現れた。

○美しき蝶　常陸　村山綠子

清ちやん昨日まで我が家のほとりに戯れし美しきこの蝶は夕吹きたる小嵐に其の身紅葉の下に淋く伏して永眠の夢、あゝ可憐なる此の蝶よ紅の路を着てそこゝろよく。

○悲し　大阪市　橋本かずを

凉しく覺えた風も肌をつんざくように思はれ木の葉も梢より枯れ落ちる此頃さゝいの事でも、物悲しく成りますのに遠く故郷を離れて東都に勉强の爲とは云へ、こいらつしやる方々の御心を汲みますと同情の餘り悲く成升。

○曉の山　讃岐　鍬山光子

曉に開けし霧の海に裂の衣纏ひて浮びたる山の如何に神々しさよ何處の寺の鐘ぞや一聲盛んとして又一聲遠く反響を送りてそこに昭しき朝陽さし上りぬ。

○友垣の聲　京都市　橋本八重子

美つくしい御聲が縣子樣優しい御聲が依子樣清い御聲が年子樣可愛い御聲が龍子樣廃つい御聲が文子樣太い御聲が私し。そして聞たいのが記者樣の御聲。

○つとめ　播磨　古月史

私の内は家内五人、空氣清き野良へ毎日／＼稼ぎに出られます私は家に留守して御飯焚き、夕方には皆さんの勞を慰すべく深山に水を入れて風呂を沸します皆樣は夏でも冬でも風呂はよいものだとお喜びなさる。

○朝　靜岡縣　伊藤秋露

鷄曉を報じ、次て時計が五時を打つと、母上が直ぐに臺所へ、……即て姉上が座敷で障子を掃ふ音、父上は火鉢に、六時もすぎて御飯はいつの間にか、まだ妹は何か夢みて、スヤスヤと。

○祖母を思ふ　九段　さとし子

我が國を出ましてから丁度三年になります私を愛して下すつた、祖母樣とお目にかゝらないのも同じく三年です……あの御髮の白毛は如何計り多く成つたかと思ひます。

○夜の一時間後　兵庫　柳田百合子

夕食がすんでから一時間後二階では父樣とお客とがうたひをうたつて被入やる姉樣はお欲にふけつて呼んでも返事もなさらない兄樣は教會へ弟は美術の復習を私は裁縫妹はオルガン下女はお使ひ猫はざぶとん。

○夕ぐれ　陸奥　照子

空に光りのない星がちろり／＼。夕影の小草は露に沈んてしつとりと色

もなく影もなくほんのりとした薄暗い夕暮露の宵、はた草の匂ひか漂ふ、おゝ四五日前まで千草の影てすだいてゐた彼の鈴虫魂の迹てはあるまいか。

○初霜　　　　　　　　　三河　長坂よし子

日頃でも閑雅にして、趣味多き我家の周圍は、今朝は又一層てある、後なる山は松の梢に化粧をし、前なる小川は、其水の流るゝ所を殘して銀を布き、庭は塵をかくして眞白、あゝ美しいこと、此初霜。

○妾の理想　　　　　　　　　野　菊

家はあまり廣くなくても、こざつぱりとした日あたりのよいところて、庭には草花を植ゑて、心をたのしませ、おつかさんをば、一生たのしく、くらさせたいこれが、私の第一の望みよ。



電車（賞外）　東京　紹津麗子

○小鳥　　　　　　　　　安藤みどり

冷たい雪の朝、流し元て水仕事をして居ると、二羽の小鳥が頻りに餌を拾つて居る、多分夫婦てあろー、私は哀れに思つて、お米を一つまみそと流しやると、羽音やさしふ飛んて逃げた。

○口紅　　　　　　　　　鳥取市　上山千重子

初若水に乳母が丹精の化粧ぶり、振りの小袖に襟重ねて、父上の御前にかしこまるオヽよい娘ぢやと御髭にふさはぬ京人形を下さつた、嬉しくてそと口付すると、如何しよー眞白の頰が紅にけがれて。

○二十三夜　　　　　　　　　鹿兒島縣　貴島臣子女史

今宵は陰暦九月二十三夜てす、海外に御出成されて居ます兄樣達の無事を御月樣へ、祈るため月の樣な丸いおだんご二十三造らへました、先つ佛壇に供へ面白い昔語りなどして、御月樣を待つのてす。

○熊の手　　　　　　　　　京橋　今泉磯千島

淺草行電車て酉の市に行つて緣喜な熊手を買ひました、餘り澤山の人て車に乘れませんから、停留場の方へ歩いて行きましたら、學生等が笑ひつゝ熊手々と……フト見たら皆な落てしまつてゐるの、妾恥しかつたわ……。

○みたいわ集　　　　　　　　　紀伊　春江

して見たいわ山紫水明の地に詩的生活、飲てみたいわ糖燐酸、食べて見たいわ鶴の肉、行つてみたいわ龍宮界、登つてみたいわ富士山、參つてみたいわ、日光山とつてみたいわ文壇誌上て特別賞……

○紅葉の美　　　　　　　　　門司　岡　よし

山皆紅葉、紅葉皆山、天を照し地を燒く、往來の人は皆火焰の中に入るかのやう、萬斛の酒もて見上ぐる人々を一時に醉客と變らしめ、妾の取り出したる手帳も忽ち紅と染めなした、あゝその時こそ妾は立田姬のみ衣中に包まれたのてあらう。

○會津東山温泉　　　　　　　　　福島縣　宮原靜香

會津の一温泉なる東山は、南東北の三面悉く翠巒青峰に圍繞せられ、纔かに西の一方を開く、一帶の溪流は來りて其中央を貫流し、浴樓は其兩岸にあり、水聲人聲、轉た別天地に入りたるの思ひあらしむ。

○妾の家　　　　　　　　　宇都宮　菊の花

お父さんは繪畵、叔父さんは劍術、お母さんは講談、姉さんは小說、兄さんは俳句ださうて、弟は新體詩、そこて妾の得意は短歌てす。

○雪の夜　　　　　　　　　因幡　三橋春代

餘り淋しいから炬燵の火を吹きたて、そして行燈引き寄せて女子文壇を讀んて居ると、窓の戸がコト〳〵と鳴るから氣に懸つて、そつと窓を明けて見るとオー奇麗な事野も山も眞白になつて——

○寄宿舍　　　　　　　　　伊藤とし子

室長會議て淺子樣はお留守、お衣裳持らの靜枝樣が「淺子樣は此間來たあの着物より外にそう好いのは無いのね」、と仰やる、私しは餘りだとは

思つたけどいらん事だと思つて口をつぐんだ、だけど今日は糸織のが小包で來たんだから、私も少しは云つてもいゝのよ。

○私　　魚津町　松木潔子

都たる句にあこがれて、花を追ふ蝶の樣な、樂しい希望に充ちた、御嬢樣方とは變り、父なく母亡く賴む兄樣は戰死、此先どうなる事やら。

○我家のつとめ　　紫　苑子

毎朝夜の明けるのをまつて父上は葡萄畑へ手入に母上は全じく草取りに姉上は東都て學問な私と弟とは毎日毎日小羊のお守りやくに。

○家庭　　備中　山本登茂子

私の家は、前に多島海なる大泉水をかまへ、後に郡中第二の高山を背負つて居る靜泉な家であつて常に松ふく風と岸うつ波との合奏、夫れに一家族團欒の娯樂會が設けられ毎日毎夜開かれて居る●

○日曜日の樂み　　德島市　天野君江

朝早く起きて、お友達と、氏神樣へお參詣に行くのと、歸りて家族がより集まつて御飯を食るのと、其れからお友達と音曲會へ行くのと、妹や弟と庭へ出て遊ぶ時母上のお話を聞くのと、寢しなに女子文壇を開いた時。

○水車屋　　群馬縣　横田君代子

細流を集めてエネルギーを得、年中止まず轉し、八本のきねに二柄の臼を働かし、市中何百の料米を搗き、兄は毎日運送に從事し、僅少の礎を得て家内五人の糊口を充たす。

○太息　　本郷　朝井千とせ

若き嫁君の夕暮戸に寄りてホツとひそかに吐く太息はいじらしきもの、繼母の夫に向ひて繼子の讒言仕つゝわざと吐息するは悄きもの、病みやつれたる病人の漸く枕に縋りて微かに嘆息漏したるはいと憐れなり。

○秋の海　　三重　平尾すゞ子

私は、海がすきてす、朝は太陽が上りますと一面に金でもふりかけたよーに輝き、夕ぐれは秋の事てすから見て居る間にくれて、遠くには、いさりびが見えていとあわれ夜は波の音が戸をたゝく。

○秋晴の三幅對　　美作　玉子

錦の幕張り詰めし野山の景を、黄金の席敷詰めし田面の色とそれから一面瑠璃色に晴れ渡つた大空●

○樂み　　埼玉縣　園子

家中皆播除濟まして黄金の玉付けたらむ如き蜜柑の木の下へ行く。友と寫生に出て、それを評しなどして家路に歸る。白手拭頂て好な唱歌うたひつゝ畑の菊つみ。目白籠の繪の如く寫る冬日和に詩集をひもとく。

○天氣　　常陸　鈴木良子

西の空には惡魔の如き真黒な雨雲はびこり、東の空には女神のやうな星が輝ひて居る。晴天と雨天、どちらが勝つて、あすのお天氣となるだろう。

○どちらも　　鹿兒島　玉菊女

四田のお父さんから、浪ちやんへと袴地を貰らつたのお母さんは袴にしよう、兄さんは改良服がいいと、浪ちやんはどつちにしますかと、たづねたら、ふたしどちらも好だわ。

○妾の希望　　きぬ子

妾の希望は、凡そいくそたび變じましたろう。一度は白衣白帽の人を見ては看護婦に。今一度は美しい心を持つて居る幼兒を、徽へ導く小學校の女教員に。そして今の妾の希望は……

○女　　静岡縣　わか菜子

唐人髷に結て人形弄りして夫ても澀樣お十六と調戯れた妾が、三年の間に島田になつて丸まげにかはつて、もう正雄迄抱く事に成りました。

○人のさまぐ　　神戸　中宮楓子

上品なのは、高島田に平打の簪をさした令孃達、よく目立つのは庇髮の當世式部、愛らしきは、すなをな髮を、お下げにしていつもにこ〳〵しての菊ちやん、みにくきはお三の束髮に奥樣の白たけながの蝶々髷。

○我居間の朝　　富山　高野秀子

我室は八疊の二階てすぐ木立の多いお庭や廣い田畑をながめ下さるゝ四季共によい景色、中にも、日和のよい朝は、黄金の玉をむすべる木々の梢の間から汽車が通ふ樣がいとたのしい。

○聞きたいもの　　備後　高子

紫式部の名と、まだ聞いたことのないあの雁の聲と、他人がかけてする妾の批評と。

○春の夜　　小田原　秋葉女

宅のお庭には大きな櫻の木があります每年美くしく咲くので生徒が夕景なぞ寫生に居被ろのよ夜は月瀬樣が一人てそれは〳〵美くしいうす衣をまとうて遥くてながめて居被る。

○豐ちやんへ　　北海道　飯田季春

御送のお寫眞は誠によく寫れてゐます、只否なのは惡口翁が物置の陰から差び顔を顯したのよ、御地は今烏賊釣り鯡漁、鱒漁などが盛な秋てすれ、新鮮しい烏賊の鐵砲燒鯡の刺身鰯の粕煮等は此地ては食ひません。

○無花果の木　　廣島　恒子

去年亡くなられたお父樣が最も大切にしていらした無花果の木に今年は例年にない多くの無花果がなりました、それて私は屹度此の木には父樣の御靈がはいつて居るからだと思ひます。

○水源の涵養　　羽前　長岡草舟子

昨日は日曜日なので、私は、弟を連れて金峰山に、きのこ採りに行きました、すると山の東の方の木が殘らず切り盡されて、禿山になつて居ました、弟は、洪水になるかとて、大變心配して居ます。

○母樣の朝　　越前　町山下里子

朝暗い内下女と臺所をなさり、私が妹弟の仕度をさせて了ひ、御飯を頂き父樣の出勤に玄關まて……かへつて掃除私共を學校にやり。あとて横に敎へてやりながら御仕事これが母樣の朝て御座います。

○はつと思ふた事　　播磨　高見琴子

今朝、烏止の卵を取ろうとして、下へ落してはつと思ひ、父の云ひつけを忘れて、はつと思ひ、井戸へ、簪を落して、はつと吃驚。

○母の聲　　丹後　鹽見千代子

私が精神病であつた時何故か急に自殺がしたくなつて矢庭に井戸に飛び込むだ其時あーつと叫ばれた母の半泣の大聲に、思はず身と胸を打たれたあゝ其時の母の聲、如何して忘れられませう。

○變らぬもの　　仙臺　白雪女

親友の、つる子さんの心と。家の前の清き流れと、子を思ふ親の心と、弟の無邪氣と、夕べ出た、あの星と月、そうして、女子文壇を、愛する、私の心は、いつも、變るまじ。

○人はいやしきもの　　印旛　細谷さかえ

何時も姿適な少女等、少女等と呼ぶ船頭翁。或日姿がお萩を持て行てやりました處、其の翌日からは、ねーさん達と云ふ樣になりました。嗚呼如何に人はいやしきものかな。

○夢　　京都　箕浦梅子

私は此頃しきりに、夢を見ます。其が、牛に追はれたり、犬にかまれたりする嫌な夢てす。けれど、昨夜床に入つてから、必と、今晩は見まいと固く思つて、休みましたら、見ませんてした。

○妹　　遠江　大石よし子

朝飯の仕度をすましたので、部屋のお掃除に行つて見ると、まだ妹は優しい息響て眠つて居る、可愛相に昨日挿したお下髮の白い梅の花が枕元の向ふに二片三片散つて居る。

○四季の花　　美作　日下富子

春の花は妹の敏子の樣、夏の花は戀になやめる姉樣の樣、秋の花は威のある御母上樣の樣て、冬の花は老衰した御祖母樣の樣てす、そして私は何の部につくのかしらん。

○四十年のお正月　　失名

私は今度のお正月ほど樂しい正月はまたとなかろうおぢいさんは六十五おばあさんは六十三父は四十八母は四十七兄は今年大學校へ入學する筈嫁にいつた姉は今年生れた赤ちやんをつれてくるし私は愈此二月に……あゝはづかしい。

○私の一日の仕事　　白すみれ

私は朝の用をすませますと、裁縫を始めます、それて一日縫事をする積りて座るのてすが、其間には買出買置が參りますので出たり、附たり致します、其から食休みは、女子文壇を見る事と定めて置きます。

○吾家の門　　長門　浜子

秋風や、門に、へちまの影五尺。

そして裏の欅から下つて居る眞赤な烏瓜も見えて夕げの煙は、ふわりふわりと。

暮の秋、されども嬉し、己が家。

○氣がつかぬ事　　小石川　北澤ふさ子

親類よりみやげ物として、そばこを送つてよこしましたすると袋に「信濃では月と佛とそばの花」と書いてありました私は是に目を止め自分の國の名産を基として作つたのはいゝ思ひつき私は今まてこんな事は氣がつかなかつたと思ふ。

○節　儉　　博多　露子

妾れ、月に一圓五十錢だけ御小使を戴くのてすがれ、御正月から、リボンやお白粉を買はず一生懸命儉約して、御母んにも云はないてためました御錢が四圓八十五錢ありましたから、昨日女子文壇といつからもほしかつたオレンヂの洋傘とを買ひました。

○日　課　　横須賀　吼園

私は起床六時、庭そうぢして朝食し、六時廿分から勉強して學校にゆき、三時にかへつておしごとをし、四時に夕食をすまして、一時間老母に話をして、それからられます、それが日課てす。

○戀しき妹　　東京　江川春子

風暖かき小春の日の、椽に頭なうすや／＼と戀しき妹は何時しかに、笑みて眠りに就きにけり、オヽそが姿の愛らしき、汝が清き心には、富も望も煩ひも、寶山も知らざらむ!!

○わが家　　北埼玉　浮子

慈愛あふるゝ母上と、父上と、私は、いつもかう思ふのてす、父上が外へ御出てのときは母上と小さな弟と何をしていらつしやるかしらあの大きな眼て教科書を讀んてきかせるときのあの可愛い弟の顔は……と。

○大事なもの　　周防　翠散女史

私は尋常一年受持の先生よ、或日「皆さんの、お家て、一番だいじなものは何んてすか」と問ひますと、唐突に、「先生!!ミケてあります、お茶碗とふとんは私と共有よ」

○繪葉書に　　下總　以波瀬信子

もう梅は咲いてよ。早いてせう。だが今宵は今宵は、月が曇つて終つて、たゞ千鳥が愁しく啼くの。なぜ這麼に淋しいのてせう……。さうさう、貫一が貫一が、お宮と別れた晩てすもの、別れた晩てすもの。

一月十七日、熱海より。

○一日の栞　　伊豫　迷小舟

友がお役所に行つてからは、自分ひとり丸火鉢の傍て近所の針仕事にかかり晩方はご飯をたくの外、鐵瓶の湯を沸かし火を暖めて夫の歸りをまつのてある。

○祝ひ日　　駿河　かをる

大宮淺間神社本社の前、こゝぞ龍田織姫が御手の中、からくれなゐにては茜に、今日しも七五三の祝ひ日とて身もあやにきかざれる乙女子、楓のやうな手をさしのべて、おちくるもみぢばそとうけぬ。一ひら三ひら。

○兄　様　　播磨　幸登女

妾の兄様は年功加俸の二度もついたよーな帽子を被つて、尻のぬけた軍艦羅紗の服を着て、辯當て日々通つて居られますが、口にはいつも「己れても第二の良國民を養成すべき重大な任務を帶びて居る」と

○初　夢　　石川縣　今永君江

妾は昨夜の初夢に、緋桃咲く間に、白い小羊が二つ三つ寐ころんてゐて、其傍には美くしい天使が野笛を吹いてゐる。其下の小川には、靜かに水が流れて、ゆるやかに水車が廻つてゐる。

○田舎の新年　　肥前　峰女

鷄の鳴く音床しく明けぬれば太郎ちやんは、御紋付の羽織着て向の仙チヤンと學校へ、父上様は役場へ祝賀會に光チヤンは隣の繁チヤンと羽子つき遊び是れ即ち田舎のお正月。

○日曜　朝　　甲府　秋葉

鉛筆片手にノートブツクを前にひろげしきりと考へて居ると急にけたゝましく釉さん／＼と姉上のこゑ。何事の出たりしにやといそぎ二階を下りて行けばもう教會に行く時間。

○花の行くへ　　香川　文子

清き春川のぬるみ／＼て流れ行く中に、いづこの少女が投げこみけん、美はしき菫の花束、やさしき蝴蝶の夢をのせて、いづこまて流れて行くらむ、水のまにまに。

○カルタ會　　松山　孤蝶女

運惡く妾は下女と組になつて、初めて負けましたら兄様はしつぺい返しに、涙い／＼盛て二人に高眉をお書きになりますのよ、けれど下女は平

飢て顔を出して顔を視詰め、お姫様になつたとにこ〳〵して居ますのよ。

○明治五拾年　尾張 波邊霞石

輕便な空中飛行船が出來て、昨日植ゑた柿の苗に綺麗に實が熟つて、再び日露交戰の噂が高まつて末の弟は首尾能く合格して入營し、妾はもう可愛らしい赤ん坊のお母さんになるのでせう。

○妙な夢　下總 濱の家雅子

妾昨夜妙な夢を見ました、それは繪葉書交換をして居る千葉の藤子さんの事ですが、二人て寒川の濱に貝を拾つて遊んで居る所です、不思議なのは其の藤子さんと云ふ方が妾の兄さんと能く似て居た。

○元旦の朝　福井縣 美谷椋光子

お隣りの小學校には今しも元旦の式を行つてゐるらしい生徒の歌つてゐる君が代は遠く彼方の御山を越して響き渡つて家家の國旗は平和の風に吹かれて舞つてゐる妾が胸中には溢るゝ計りに喜びの血潮が躍て居る。

○拜賀式　岡山 永原多計子

待兼れし新玉も早今日とはなりぬ、午前九時と云ふに拜賀式の開れしもの嚴き講堂も立錐の餘地なき迄に職員生徒を以て充され、式は最と嚴肅に行はれ、終に聖上陛下の萬歳を唱へ、散會して各々家路を辿つた。

○番椒　下總 染谷枝葉

兄様の植ゑた番椒が、あまり綺麗に色づいたので、今年四つになる竹ちやん、何の氣なしに採つて口へ入れたが、さあ大變。たちまち大きな聲て泣き出して、どうしてもだまりません。

○初雪　富山縣 高辻そと子

今朝起き見れば初雪白し、椽に行けば母上そこに居らる、美しい庭の景色を餘念なく眺めて居る後から「珍しいのう」としわがれた父の聲、弟は眼をこすりながら出て來た、ジヨンは嬉しさうに廣い庭を飛び廻つて居る。



おすまし（賞外）　芝 杉水利子

○春　千葉縣 岩佐ひさ子

春をかざるものは、一に花なり、天地美裝す。一に鶯、歸雁、雲雀なり、自然の音樂をなす。三に暖氣なり、寒からず、熱せず、心自から草木と共に舒ぶ。四に霞なり、日光に映りて景致和らぎ、月かげ之に映じて夜色更に幽なり。

○霜の夜　小石川 大石浜江

「玉の臺に住居の人は」瀏亮たる聲が窓の外に起つたがはたと絶えた「何て知らうか此の月を」次は天使の琴の音の如く響た窓を推せば波蕩の舟が岸を離れかゝつて居る、オヽ好い月……丁度霜の様だ。

○夢　愛知縣 宮地國子

冒業終はらぬそのさきに、猫ひきとめて、母上とよばむとすればあともなく、まどのともし火かげくらし。アヽ、夢であつたかなつかし。

○菊の花　奈良縣 島田紫子

大きな黄のは學者、白は詩人俳士、赤は藝者、紫は奥さん、黄と赤との交りのは裏長屋の女房、小さな桃は女學生、紫は舞妓、白は尼さん、黄の豆菊は小學校の生徒、豆ぎくの白と紅のまじりはお三どん。

○新らしい袴　越後 金澤としゑ

降校して來ると故郷から小包と書狀が來て居ました、開て見たら新らしい袴て、卒業式に穿けつて。それから最う机の上より卸しませんの袴を。

○白　神田 蓮月女史

白菊の清洒、白雲の雄大、白鳩の崇高、白萩の清麗、白泡の幽寂、白浜の崇厳、白露の淵寂、そーして最も淋しく哀れなるは死人やく野邊の白烟。

○晩秋の夜　滋賀 辰井ふみ子

鈸婆と落ちぬ。梧桐の一葉なるらし。ものゝ怪しのびよる如くペサペサペサペサ……………と音す

ろは秋の風か。我れは窓によろ力だになし、襟かき合はせて灯火を明かくしぬ。

○買物　小石川 柳下くら子

今年は柿が大當で背戸の柿の木は皆なすゞなりてほんに枝が裂けさうて先日からぽつ／＼賣てしまいましたの其の賣上金は父が下すつたので姉妹三人山分よ私しは何を買ましやう。

○平和　埼玉縣 藤野加露子

二階の窓によりかゝつて田面を眺めて居ると、稻は黃金の錦に染め渡り男女老若の百姓は睦ましげに働きながら語つて居る、日は平和なる彼等に向つて長閑に。

○秋晴　三河 つばめ子

湖の様に澄んだ空には、白雲が一片漂うてゐる。野菊や、水ひきや、お彼岸花が咲き亂れた野道には、乳母車が靜に通つてゐる。田道て牛がモーとないた。

○嬉しい時　松江 白菊子

近所の戸が開かないうちに起きてお父さんと後畑へ出て作物の世話するのと、料理がうまく出來て褒られた時、家内揃つて食卓に向つた時、學校て優等賞取つた時、初めて投書したのが出た時、が何より嬉しい。

○星の夜　千葉縣 八千代女子

一夜郊外に歩めば天女がさながら小鈴ても振り給ふやう、微妙なる虫の聲は、糸萩の叢みの中より一齊に起り、小川にかゝる水車は絕えず月を汲こぼし、並び立つ秩父の山々は、夜霧模糊の中に眠つて居る。

○大ホラの由來　信濃 すゞ子

「八房、汝敵將の首とり來たらば姫を與えんに」あはれこの一句こそ、稀代の名士馬琴が二十餘年の努力に成りしてふ大ホラの由來なり。意味なくして、さても意味深き語よ。

○墓参り　美作 よし子

今日は母様の命日てもあり、お日和もよかつたので、姉様と、二人て丹誠して作り上げた菊の、一番大きく好いのを、五本六本手折つて、折て御参りしました、母様は生前から、菊が大變お好きてしたから。

○我が顔　麹町 山岡ふみ子

私一昨日姉と二人て靖國神社へ行きましたそーして今日勸工場へ行つて何氣なく姿鏡を見ましたら眞赤になりましたわだつても私が横を向いて笑つて居る顏が眞正面に寫つて居るんですもの。

○月の忍耐　廣島縣 今西初野

十五夜の月が雲を凌ぎ凌いて、とう／＼大空に出た、嗚呼人も此月のよーに、何事をするのにも、忍耐したら、成功が出來るのだろうに……。

○冬薔薇　島根縣 河野ふさ

朝早うから誰だらうと、障子の硝子を覗いて見たら、妹が、薔薇の雪をのけてゐる。そして、くびを擡げた赤い蕾を兩手にかこつて。ほーと息をしかけた。袖のみじかい綿衣に、うす雪がちらりちらりと。

○栗拾ひ　常陸 錢子

山路を歩いて栗の毬で足を突きましたが我慢して山へ入りましたらそれは／＼見事に落ちて居ましだ。弟と共に笊の中へ拾ひ入れ一時間計りにもう一杯になつて中々持つて行かれませんてした。

○燒野　安藝 高杉さなへ

騷がしくわめき立つるを何事にかと二階の窓おし開きて打見れば、榎が下の枯芝生は見事眞黑に燒き盡されて現はれ出てし石點々、燃え殘りたる茨の叢に立ち昇る薄き烟は夕空に、兒等は家路に消えぬ。

○小春の寺　北豐島郡 梅香

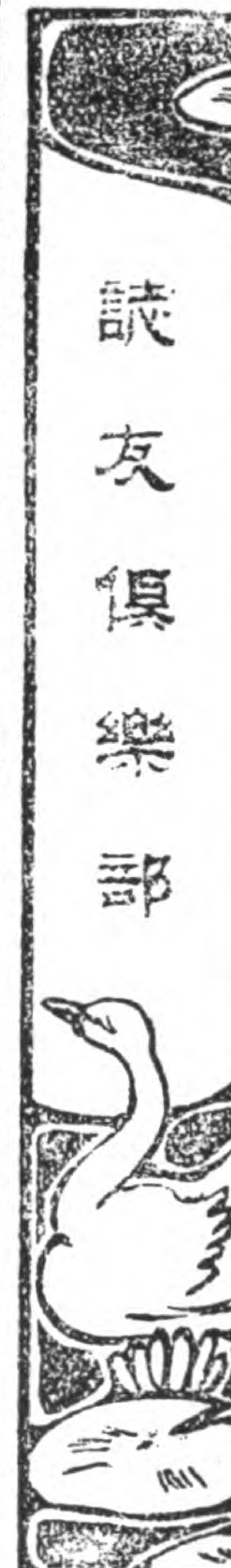
白絹は佛の塵に黑ずんて、花桶にかけてある。うすくらい堂の隅には、善男善女が座つてゐる。やゝに晴れ渡る日和、鳥の聲も何となく極樂のやうてある。

○はやおき　磐城 いつみ

妾の家の井戸端に、小さい石のお地藏さまが祭つてあります。毎朝そこへ顏洗ひにゆきますと、例のお地藏様が笑つて居らつしやるので、如何しても朝寢坊は出來ません。

○ハット思つたら　茶の花

日が暮てから裏門を閉に行きましたが、恐かつたから下計見て行ました、ソット上眼をしたら何か黑い者、ハット思つて胸がどき／＼しました、が、能く考へて見たら、自分の前髮が見えたので。



諸嬢と記者

○記者樣にお伺ひ申ます、誌友倶樂部へ投書したのでも貴方の御都合て沒書になるのてすか、それからも一つ敎て下さい、君が代は千代に八千代にの歌はどなたのお作なのてす(Y子)(記者曰、誌友倶樂部ても同じやうな文句や亂雜な投書は沒收します、併し大抵は出します、君が代の歌は「古今集」にあります)○私はこう思ひますのよ記者先生の御親切なのと愛讀者の多いのは本誌の特色だらうと(沼津の里鈴木多歌美)(記者曰、有りがたう、一層お言葉に背かないやうにいたします)○郵便爲替と原稿とを同封にして出してはいけませぬか次號て御答下さいまし(茨城白ばら女)(記者曰、成るべく別々の方が間違なくて宜しいてせう)○記者さん。妾ネ只今は小學校の敎師をして居ますがネ、折りにふれて書き綴つた、いろ〳〵な者がありますが、今までたび〳〵投書しようと思ひましたがどうも耻しうて〳〵なりませんてしたが、一つ齡をとりましたから、心が大きくなりましたから、之から少し投書して見ますからネ、どうぞ笑はないて、よくなほして頂戴よ、(愛知早川千代子)(記者曰、年と共に進歩するのは最も結構てす)○今年は元日に初雪が降つたから髄か豐年てせうれ、追々是れから降つて去年にまけないと今から樂しんで居りますのよ、皆樣は雪が降ると喜びますか、記者さんは如何てすか、(上野光磬女史)(記者曰、喜びますが後は困ります)○記者樣私は根室のかたほとりに住て居る小學校も卒業せぬ無學な者て御座いますが去年七月より女子文壇を愛讀して居りますが此度始てこんなへたなのを投書致しますのだから可笑しいてしようけれど御目をおとうし下さい(根室町大字有磯町若狹はな子)(記者曰、北海道には存外多數の誌友があるやうてす)○懐かしき記者樣お變はりは有りませんか春とは言へどまだ舊暦ては十一月の末て寒さも大變にきびしく有りますから皆樣折角に御自愛あそばせ(京都朔顏)(記者曰、拜謝)○記者樣妾も愛讀者の一人て有りますが、此れからは拙作なども顧みず投書致しますから、何卒幾重にも御敎導の程を願上ます。(相州高座郡相原村橋本矢島瀧子投)(記者曰、お尋ねの事は投書規程を御覽下さい)○記者樣、出世作一覽表等に有益の者にて、有難く拜見致しました、其れて私は下の書物を、求め度く成りましたから、發行所及び定價を御敎へ下さいまし。『島崎藤村氏の若菜集、兒玉花外氏の行く雲、上田敏氏の黑瞳等』又泣菫の暮笛集より白羊宮、鐵幹の東西南北より紫、晶子のみだれ髮より舞姫や夢の華の方が傑作て無いてしようか。又蒲原有明小川未明二氏の、傑作とも云ふ可き物を御知らせ下さい(成田町夢の舍の人)(記者曰、若菜集は春陽堂の發行てすが藤村詩集に皆有ります、行く雲は隆文館發兌、黑瞳は古い「明星」に出たので何かの集にありましたが今一寸書名を覺えません、仰せの集は傑作てせうけれど、出世作とも言ふべきものてありません、有明、未明の傑作は一つはなして言い難いてす)

諸嬢の交際

○私は美くしい繪葉書だとか又は何錢以上の繪葉書だとかそんな榮輝な事は望みません只の葉書や玉章て結構てすとも只通信が出來ればよいのてすから只の葉書などて充分てすからどうか私に御賛同の諸孃樣は下名へ御送り下さいキット御返事致しますそして何卒一時的てなく末長く御交際下さいませ(德島縣那賀郡下荒井村濱崎樣方關番子)○天が下のさかしき姉上樣方よ。妾は愛知縣碧海郡大濱尋常高等小學校に日々愛らしの稚兒を相手にいそしみつゝあるはしたなきものには候へども、今よりのち本誌上に於てつたなき筆をもかへりみず、見ゆる心に候へば、何卒寫眞玉章等の交換なし下され度く、去りながら、妾が友とちの語る所によれば殿方がをり〳〵女人に化け給ふとか承り候へば水莖の跡をながめうたがはしと思ふふしあらば返事致しかれ候、眞の女人にて又妾と同じ道にたづさはり給ふ方には一入御願ひ申上ら〜(愛知縣碧海郡大濱學校早川千代子)○誌友の諸孃樣私は濤音高きこゝ助川の海邊に濱の松風を友として淋しく暮して居るものてございますがあはれと思召さるゝ御方はどうぞ御芳墨を御めぐみ下すつて永久に御交はり下さいまた女子大學の敎育部國文科家政科昨年度の入學試驗問題御存じの御方はどうぞ御知

らせ下さい（規則書も添へて）申まてもなく御禮は致します（茨城縣多賀郡高鈴村佐藤たま）

○記者樣はじめ誌友諸孃樣に申上ます。私はこんな山奥の片田舍に居ります者てございますが此度本誌愛讀者と成りました、然し不束者で其上まだ何も存じませんから どうぞ何かに宜しくお願い申上ます（兵庫縣氷上郡和田村雛波あいの）

○皆さん私しと水繪のともにおなり下まいな繪は習畫用にするのてすから 念を入れて濟いに畫いて下さい妾も精いだして畫いて上げますから（羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子）

○ごく優しい東京の方と永久の交際を願ひます（伊勢國宇治山田市浦口濵出きみ子）

○一月本誌和歌欄てお目にかゝりました東京の御姉上 水塚紫水樣朝井綠子樣入江茂子樣野菊子樣 迎月女史樣泉三乃子樣淺井千島子樣今井下枝樣田中常子樣 細谷すみれ子樣川島たつ子樣和田てる子樣 さゆり女樣曾我雪江子樣山本春子樣よ妾の兄上は錦地に於て苦學中てすから妾毎日東の空を眺めてばかりれどうか皆樣妾の心を不憫と思召して お寫眞とお手紙下さいまし妾も醜いながらせ返し致し升（紀伊日高郡藤田村大字吉田阪本六右衛門方春江子）

○女子文壇愛讀の諸姉樣、 私は田舍生れの不束者てありますが、 御見捨なく美しい繪葉書や其他の物を交換して下さいませ （山口縣都濃郡戸田村河津イト方オ子）

○此の頃柳河の方か折々出してゐらつしやるやうに見受けますが 妾ほんとにうれしいのよ 妾もれ力の限り本文壇に盡す積りてすから 何卒皆樣もドシ／＼投書遊ばして下さいよ（柳河初香）

○誌上て御交際願ひましたら皆樣澤山繪葉書やお玉章お惠み下さいましてありがとふ存じます ちよふど手許にあつた畫葉書が終りましたから 一時中止致しますお玉章の御交換なら何時ても致します （埼父縣秩父郡三田川村近藤とく子）

○ゑはがき交換はしませぬたゞ御交通は紙上のよろこびてす （和歌山縣那賀郡長田村大字深田山西好子）

○誌友諸姉樣久敷御無沙汰仕りまして相濟みませんてした今後相變らず交誼を願います （上總長生郡新治上太田森久子）

○諸孃樣私は片田舍に住んて居る不束な者てあります 本年より愛讀者の一人となりました以後は 永久に御交際を願ひます（福岡縣粕屋郡仲原村上仲原小西うら子）

○私は至つて無智無學の者てすが此度女子文壇愛讀の一人となりましたからどうぞ諸姉樣末長く 御交際下さいましそして繪葉書手紙寫眞 リボンの交換を御願ひ申升 （神奈川縣高座郡麻溝村當麻萩原あさ子）

○今まで御交際下されたおん方よ妾の父は此度下名の處に轉住となりましたので 去る入日此の地に參つて居りましたから 相變らず末長う御交際御敎導の程伏して御願ひ上ます （陸奥西津輕郡深浦港大字追良瀨若生なか子）

○私專常より草花を好みて候就ては 大和朝顏諸種、朝鮮朝顏、百日紅諸種、 鳥兜、紅草旗、 絲瓜 等の種子澤山手許にこれ有り候間 御望みの諸姉は於國繪端書未使用又は新年諸雜誌 諸新聞の附錄畫御惠み下さる方へ送り申上べく候 たゞし三種以上御惠與下され候方へは 以上種子外に二種をそへ申すべく候あら／＼かしこ （東讃和知村野村季子）

○繪葉書々狀和歌新派和歌俳句等の御交換及び御文通を致し度 鮀度返事致します（千葉縣山武郡成東町字宮前吉原勳子）

○皆樣私は田舍にさびしく暮して外にたのしみが ありませんからあみ物のひな形や栞を御めぐみ下さいませんか其御禮として 文藝倶樂部其他の雜誌を先着順に二十名かぎり御返禮致します （福岡縣三井郡北野今山上瀧嘉之方永野吉子）

○誌友の諸姉樣與はしいの御送り下さいまして有難う 以後もよろしく繪葉書や 玉章の交換をそして一度きりてなく永久に御願いたします （伊勢宇治山田市浦口町濵出絹子）

○先般の諸孃樣妾も文壇の交際家の一人に加名致しますから 繪葉書文書編み物の交換を願ます （茨城縣新治郡栗原村二十七番地天貝守子）

○先般の諸姉樣私は北國の一隅に住むまことにゆきとゞかないものてすから 何卒御敎導を願ひます、 また以後は繪葉書やお手紙の交換なら願ひます、 必ず／＼御返事を差し上げますから （能登鹿島郡西湊村字小島天涙女史）

○諸友の皆樣私は片田舍に淋しくくらす者てすが此度誌友の仲間へ入れてもらいましたから皆樣御見捨なく御玉章や 寫眞送り下さいきつと御返事致します永久に御交 際なすつて頂戴よ御願てすから（播磨國飾磨郡東山村橋詰てい子）

○愛讀者諸孃樣妾は當文壇を愛讀する 田舍山里に住む無才無智のふつゝかなものてすが 此後よろしく御交際を願ひます 又美しう繪はがきや玉章新聞雜誌の御交換を願ひます 何か御送り下された方には相當の御禮を致します （群馬縣群馬郡中島村木暮春子）

○誌友の御貴孃よ妾何の樂みも御座いませんが只皆樣の 文通の御交換が何よりの樂みてすわ地方の狀況を御知らせ 下さればば妾喜ぶわ 御繪葉書やしほり等の御交換を御寫の御交換をれ必ず差上げます （滋賀縣甲賀郡柏

木村酒人五六七番地藤野靜子）○皆樣の中で本年數へ年十七歳以下のお方は何卒改良半紙へ御名詠二首以上十首以內明記して御送り下さいませな誠に下手ですがレース糸の栞九首以下の方へ一ツづゝ五首以上の方へ二ツづゝ御禮の印に差上げ升（大阪府牧方町三矢三一六陰山禮子）○北海道の相原春美子樣思がけなく私のお姉樣になつて下すつて實に嬉しわ、ふつゝか者ですお紙上ばかりでなく末長くお姉になつて頂戴他の誌友諸姉樣も相變らず御交際下さいまし（八王子八木町三十七井澤菊江）○私は本誌愛讀の諸姉樣方と繪葉書や玉章の交際を末長く願ひます（周防熊毛郡三丘村字和田澤文子）○私は大層繪が好きなんですが皆さんの中で水彩畫のお上手な方で永く御交際下さるお方はありませんですか臨畫かスケッチを一枚送つて下さい早速御返事いたします（福井市佐佳枝上町岩永方濱田正子）

繪葉書交換

○誌友の皆樣私は大の繪葉書好きですからどうぞ御交換遊ばして下さいな、そしてれ余り失禮な申分ですけれど上等な趣味多い品でそれに御自作の新體詩か和歌か文學として價値あるものを綺麗に認めて下さい、私は常々畫く事柄と書き方とを研究してなるべく詩趣多いやう注意して居ります、どうぞれ、お願ひします（信濃上伊那郡中箕輪村澤有賀まさ子）○皆樣の中で歌カルタお持ちの方お古いの一組お惠み下さいませお禮には絹製寫眞掛及び極上等繪葉書拾枚を添へてお禮致し升から何卒送つて頂戴な（紀伊國日高郡藤田村吉田驛本六右衛門內春江）○三卷の壹號でお目に懸りました、大阪の鎌田春枝樣、愛同國ですはね……、實に貴孃のお言葉に贊成ですわ、實に大阪は少ないですわ、何だか淋しいよーですの、みなさん一時的で無く永久的に願ひます、中に交換をひろめながら返事をせぬ方がありますが、あんなお方はどし／＼お止めなさい（大阪市東區淡路町四丁目中村ニテ東柳子）○朝鮮、臺灣、九州、北海道の方々よ御地の新聞紙或は御地名所繪葉書と交換を望みますどうか寫眞を交換して下さい其の御禮としては米國の兄より送り下さつた米國名所繪葉書を四枚づゝ差上ます又皆樣の內にて寶風戀風なお持ちの方は皆卷、流子と交換を望みます、（千葉縣長生郡茂原町文學仝志會內鵜飼かつ子）○誌友のやさしき諸姉樣よ無才なる不束者ですが、皆樣と同じく繪はがき玉章の交換を永久に願ひよす（上野國小泉町長谷川繁子）○和歌、俚謠道樂者へ上等繪端書の交換を願ひます、秀逸廿名へ秋田名所繪端書を贈す、以下は相當に報酬をなします（秋田縣角間川町照丸とみ子）○大阪木田改代樣始め廿六名の諸兄姉樣へ此間は美しい繪葉書又はレターを頂きまして有難たう此後厚く御交際をお願申します繪葉書の御交換もどし／＼お頼み致します（京都市新藥師寺町西入北田紫影）○本誌の御愛讀樣よ、文の御交際を末長くお願します、又優美なる官私製の繪葉書送つてくださいな、先着より三十名迄壹圓以下拾錢迄の雜本と、會津百景の繪葉書一組を差し上げますよ又どうか編物の交換を願ひます、又寫眞もれ以上まあ（若松市中六日町宮原靜子）○嬉しい愛讀者の皆樣私も女子文壇愛讀者の一人で御座いますが以後繪葉書の交換又文通の御交際を願ひます一時的はいやですよ又紀洲川俣たれ子樣おうつしゑ早く送て下さいまし（豐後臼杵新町安部ふじ子）○本誌愛讀の皆々樣御手紙繪葉書有難う御座います今後も御變りなくどし／＼御交換を願ひます（群馬縣佐波郡玉村町字角淵村山田節子）○諸孃樣私は先月から愛讀者の一人となりましたから寫眞や繪葉書の交換を願ひます此度御返し致します（山口縣熊毛郡三丘村字和田澤わたる）○同姓または同名のお人と寫眞又はがき玉章の交換を願ひます（淡路津名郡郡志村ノ內武藏伊藤綾子）○誌友の皆さん美に觀艦式、滿州軍凱旋、第三回（遼陽及旅順口の分）第四回（沙河の分除く）戰役紀念、第九回大觀兵式（丙種）の各スタンプ付繪葉書を封入にて御惠み下さい御禮には郵便聯合紀念繪葉書、聯合紀念スタンプ付繪葉書、陸軍恤兵部繪葉書（紀念切手スタンプ付）、海戰紀念スタンプ付繪葉書、銀婚式、日清戰役、東宮紀典、大觀兵式（三號）等の紀念切手、外國切手、水彩畫法、水彩畫手本、文藝倶樂部、暗香疎影等にて致します靜岡の深谷岩子樣の御住所を知らせて下さい（鹿島市盤屋村四二星出方友江）○誌友の愛姉よ繪葉書交換を希ひますもし妾繪葉書なくなつたら雜誌にて返禮いたします（滋賀縣甲賀郡三雲村上富子）○愛讀者の諸孃樣妾は兄から凱旋土產に繪葉書帖（八十餘枚）を貰ひましたが此度交換を始め樣と思ひますから寫眞ても繪葉書でもにて御申込になれば早い方から美人のでも風景のでも御好みのを必らず差上ます（大分縣東國東郡西安岐村宮野直子）○誌友の姉上樣妹と思召し末長く繪葉書の交換をしてく

ださい昨年中に妾より差上てもくださらなかつた方が佐渡、岩代、波島、上野、越前の方にありました御名前だけは申しません（大阪市東區和泉町一丁目野々村内伊藤初榮）○妾も愛讀者の一人てすが何卒繪葉書交換を願ひます又編物は私大好てすから皆さんどーぞ送つて下さい御送り下された方には物しだいをいつてドッサリと御禮を致します 但先着二名て二月十日までに限ります（陸前登米町小野ひろせ）○皆さん繪はがきの交換切に御願しますして尾張の渡邊暖子さん神戸の小國榮江様 へがきの口へとりとはひどいてしよ（近江紅雨子）○十七の春秋をむかえられた姉様方無學な妾てすけど栞造花繪葉書等の御交換下さいませんか永久に御交換いたしたいのてすが御玉章もれても男子の方はおことわり（佐世保市島助町七石田みち）○御寒くなりました記者様にはおかわりもありませんか伺ひ申候記者様に御願申上ますが私しも女子文壇愛讀者の一人てありますが何卒左記の繪葉書交換欄へ御記載願度ござります誠に御手數てしようが誌友の諸姉上様方繪葉書、寫眞、編物、造花の交換を願ます妾しよりは寫眞及當驛の婦人會よりの出版の婦人の務、又は佐野の瀧、五龍園の寫眞お厚禮いたします（東海道佐野松葉屋方杉山光子）○繪葉書玉章栞等を御惠み下さいました方にそれ／＼御禮書に物品をそへ御送申ましたが御受手の上御知らせのない方は御一報下さい尚此後も御愛讀の習句を繪葉書カード等に書入れて御送下さい同じ種類ては面白くありませんからハかきも繪葉書も押花も栞あみもの等いろ／＼の交りをせよーてはありませんか 但し

失禮ですが男の方は御返事いたしません（近江甲賀郡三雲基督教會婦人部しらみづ女史）○諸姉君様!! 何卒繪葉書の交換をして下さいな、それから色々のスタンプ付繪葉書送つて頂戴な、返信はきれいなスタンプ付繪葉書か、見惡いてすが、妾の寫眞をお送り申します。又雑誌の交換も願います（播磨國揖保郡千本國重貴美子）○皆様繪端書や寫眞の交換を願ひます然し寫眞は持合せがありませんから先着五名丈け送ります、あとは繪端書て返事します（千葉縣香取郡古城村鏑木大川直子）○皆さんから繪葉書や畫葉書澤山お惠み下さいまして誠に有難う御座いました今度又誌友の諸嬢様にお願ひ致します此頃の雑誌には何れも水彩畫や木彩はがきが口繪や附録に出てゐますのれ、あれを畫いてお惠み下さいまし畫はお手本にして習ひますのてすから手本通り形ちも色合も密にかえて御送り下さい妾も精だして畫いて上げます左様なら（羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子）○妾に日露戰役紀念はがき紀念スタンプ付と英、米、佛其他外國の切手が有升から動物の繪はがきにて繪の處へ字を書ずに交換してください猶外國切手の交換も願升（横濱西戸部町六五一古川方青木しげ子）○誌友の姉上様、妾も愛讀の一人となりましたから、宜敷繪はがきの交換を願ひます、就ては紀念はがきを澤山持て居りますから申込下さい、差上ます（大阪市東區高麗橋詰丁加納よし子）○女子文壇愛讀の諸嬢何卒繪葉書て英文て書て永久に交換して下さいませんか返事は直にいたします、（長崎市船大工町シンガー會社内笠井花子）○誌友の皆々様妾はスタンプ付色々ありますから皆々様

何か珍らしきスタンプ付御送り下さい、但し五千哩紀念スタンプ付及び汽車博覧會の紀念スタンプ付を、ことに好みます（沼津鐵道官舍阿部方操子）○諸姉上様妾美くしい繪はがきや御寫眞わ澤山持つて居ります何卒御交換して頂戴な御返事はきつと致します（長野縣延徳郵便局集配區内牧野芳枝子）○御愛讀者の皆々様私も愛讀者になりましたから繪葉書交換して下さいませ（千葉縣多古町黒田よしの）○僕は男子てすが參考として本誌を購讀して居ります亦女生徒にも讀ませて居ります就は教育上參考となるべき繪葉書の御惠投を願ひたい御送り下すた諸嬢へは春莊先生の直筆繪葉書を差上ます（兵庫縣川邊郡小濱村與田別莊内大門月性）○誌友の諸嬢何卒上等繪はがき及栞の永遠的の御交換を願ひます妾昨年は病氣勝にて誠に御無沙汰致しました（大阪薩摩堀裏町四石上秋子）○誌友の諸姉様妾は七月より愛讀の一人となりましたのよ何卒／＼上等の繪はがきを永久に御交換して下さいな御返事は「キット」出します（大阪市西區阿波堀通五丁目灘登代子）○私なにもしらない不束者てすが大の繪葉書狂てす親愛なる諸嬢様なにとぞ繪葉書御みぐみ下さい御玉章も御禮は屹度てすよ（常陸國新治郡藤澤村大塚いつ子）○誌友の皆様よ繪葉書や御玉章の御交際をお願申します御返事は必ず／＼差上ます（岩代安達郡本宮下町六十二番地橋本せん子）○誌友諸嬢様よ繪端書の御交際を願ひます千葉縣の柴田きぬ江様未だ前記のところにいらつしやいますや亦病氣は如何てすか暫く絶へましたので誌上て御伺ひいたします（山口縣山口道場門前町五十

君方守富以智子）○誌友の方で十八歳以下のお嬢さんにお願申升 妾に上等繪端書七十二枚と小説「不如歸、町の仙女、青春、緣不緣、己が罪、乳姉妹、伯爵夫人、朝晴、玉蟲など其他いろ〳〵の詩集がありますから十錢以上繪端書か絹紫、ひぢかけ、にお寫眞などそへて御申し下さらば即日御郵送致し升わ（羽後國岡本莊町古雪百五菊池隆子）○皆さんお目出度う今年もどうぞ相變らず「上等」繪端書及び印影端書の 交換して下さいれ（神戸市相生町四丁目一五一ノ七木田柳溪子）○私は下記郵便局に在勤するもの以後繪葉書交換を願ひます しかし永久的にはまずいのは御斷り又親愛なる諸姉よ私の許に小説 不如歸小公子、不思議の娘。潮待ち草、思出の記 其外雜誌小説本等數種あり 諸姉の相當書籍「何種にか丶はらず」御送りて 交換申込まれたし一覽の上諸方より贈られしものとも 交換して返戻す圖書交換紹介者なり（薩摩國西加世田村小湘相德）○皆さんどーぞエハガキと寫眞とアミ物との內どれでも御送り下さいきつと私の寫眞をお送り申します私は今寫眞は六枚持つておりますが寫眞をお送つて下さいましたら寫してても御送り致します 記者樣どーぞ此の文をなをして御書き下さい願ひます(京都市下京區下馬場鹽屋町東入住吉町天谷さかえ)○誌友のお嬢さん達妾は美くしい繪はがきを澤山持つて居りますから宜しく御交換して頂戴な（長野縣下高井郡日野村更科牧野芳枝）○皆樣繪葉書御交換を願ひますそして城崎溫泉入浴紀念スタンプ附少々持て居ますから御申込くだされば差上ます（兵庫縣城崎郡城崎郵便局區內三米比村湖源造樣方白露）○記者樣毎度ながら誌友倶樂部に記載して頂だいな

誌友の諸姉樣繪はがきありがたう猶ひきつゞき繪はがきや寫眞の交換を願ひます手許に五二共進會及陸軍進水紀念スタンプ付のが拾四枚丈ありますから御交換を願ひます（東京麹町區上六番町三十六番地赤木鈴子樣方西つる子）○本誌愛讀の諸孃樣よ何とぞ繪葉書の交換をねがひます妾も相當なお禮いたしますから（上毛碓氷郡烏淵村川浦宮下雄太郎方芳葉子）○親愛なる諸姉樣此新年には美しい繪端書を交換して下さい即日相當の物にて御返事致します（陸中國黒澤尻町健太郎方大內よし子）○誌友の皆樣どうか繪はがきカードの交換をねがひます（神戸市元町三丁目增谷晴子）○親愛なる誌友の姉樣よ繪葉書幷に文章の交換を願ひます御返事は必ず必ず致しますから（日向國西臼杵郡三田町右松學子）○本誌愛讀の諸姉樣よ妾は繪端書や玉章の交換を望みます何卒御送下さい返禮は失しません必らずいたします（北海道小樽郡錢函村林秀子）○賢明のみなさん!! 歐やゑはがきの交換を願ひますそれから林秀子さんとか申すお方よこの間は美しいゑはがきおありがとうだが不幸にも消印にかゝつて住所がわかりません故もう一度下さいどうぞ願ひます（函館大黒町中野石）○誌友の姉上樣妾も愛讀者の一人ですから宜敷繪はかきの交換を願ひます就は當地歩兵八聯隊軍旗祭紀念繪はがきスタンプ付十八枚と明治二十五年萬國聯合郵便紀念繪はがき加盟スタンプ付六枚と都合廿四枚有りますから紀念スタンプ付にて封入して申込被下れば差上升（大阪東區高麗橋詰町加納正子）○地方の諸姉よ今度私れ京都のミナトヤ洋物店で 小倉百人種の繪葉書を求めまして ネどーぞ姉上樣方の美々しき繪葉書と交換を望ますのよ 心ある人々送被下度後生ですよさよなら!!!（能登輪島町字河井町松平傳次郎內中島幸子）○皆樣お目出度う御座ります昨冬は色々と美しい繪葉書を下さいまして 誠にありがとう御座りました どうぞ今年も變りなう幾久しく御交換をお願ひ致しますよ序にまことに勝手ですがまことの諸姉方と 御交換をお願ひ致します（神戸市北川町岡部とみ子）○私れ皆樣と繪葉書の交換をしたいの、何卒御送り被下いな、直に相當の御返じをします、然しリボンを送つて被下されば誠にうれしいわ、山間ですかられ、送つてくだされた方には夫相當の繪葉書て御禮をしますわ(土佐吾川郡大崎村美爾子）○先月私紅葉形 栞のことを出しましたら申込者が今日で四十二名ありました 夫れて約束通り十九人の方へだけ送附しましたあとの 方へは遺憾ながら送ることが出來ませんてした どうぞ惡しらかず住所姓名は明瞭にれ今度も不分明の方は六人ありました(北海道龜田郡七飯村MC子）○諸姉上樣御變りはありませんか 妾は無事であります妾は山口縣の景色を寫した葉書を二十枚餘持て居ります皆樣よろしく御交換を願ひます（山口縣熊毛郡高水村山部內山本ゆり子）○東京の菊花月子樣 どうぞ御住所を御知らせ下さいまし返事差上ますから、 それから皆樣お姿のこうかんをして下さいませんか又玉章や繪葉書の交さいもして下さいましな 一度きりでなく末長くれー（河內郡羽黒村大字中里池田吉三郎方金田錦子）○天下に尊き諸姉、如何なる種類にても宜

しく候まゝ絵はがき永久に取かはし度候御返しは即日御答申候かしこ（大阪東區北新町壱丁目二二四伊藤巳の吉方阪井壽枝）○誌友諸姉様妾も愛讀の一人てすから末長く親密に御交際を願ひます又絵葉書の交換も御願ひ致します（松江市天神町細木榮子）○誌友諸嬢様妾は北國の一寒村に住む者にて此度絵葉書玉章寫眞雑誌等の御交換御願ひ申度必ず返信は致し升（石川縣鶴來本町六二宮本與兵衛方花子）○絵葉書文通の交換をねがひます先着五名の御方には佐世保十景の一景を差上ます（長崎縣佐世保市平瀬上京町三拾五番地井上頁廼）○第貳回の時も皆様有難うよ悉皆三十一葉中、中に二三のお方様に住所不明の爲、肝要の郡名抜けの爲矢礑しました お知らせ下さいませどうぞおいかわらず、れ（尾張中島郡起町畑由方渡邊段子）○皆様絵はがきか玉章の交換を願ます御禮には岡山後樂園か宗忠神社の絵はがきを送ります（備前國御津郡今村上中野ヵ三欅原榮寄子）○皆様私も絵葉書交換の御仲間入をさして下さいませんか、私は西澤のも澤山また諸方面のスタンプ押捺したるのも澤山持つて居ますから何卒交換願ひます（近江國滋賀郡石山村背山庄一頁様内山本政子）○諸嬢様の篤き御志により只今までに若致しました絵葉書寫眞の数は二百餘りですそこで會は二月十日より三日間開くことに成りましたからそれまでには是非御送り下さいな開會の模様を本誌を以つて御知らせ申しますわ（奈良縣山邊郡朝和村長柄西岸寺にて夢誌友倶樂部）○皆様の内で絵葉書の交換をして下さる御方はありませんか御返事はきつと致します私の所に去年九月に米子に開かれ鳥取縣外四縣畜産共進會の紀念スタンプ付の絵葉書を米子の誌友から澤山貰いましたから御望の御方には御送り致します（鳥取市東町山根綾江）○記者様妾は貴誌々友の絵葉書交換の望に從ひ十、十一月の二ヶ月に交換の爲め各地へ差上し絵葉書數は百二十枚でしたが同情厚きお方は直に御返事下さいますのみならず中には誠に親しき友を得まして將來の事共契り互に智識を交換し其利益を享けて居りますが中には歴々たる住所氏名のお方にて郵便局より受取人不分明の付け手紙にて戻りしもの十二枚又全く今日まで返事のなきもの三十六名もありました（肥前國佐賀市上芦町花島方秋山靜子）○本年も絵葉書玉章御交換彼下様願上ます（名古屋市替地町一三八戸田方西村浪子）○私しは本月までの申込の方に一人も殘さず御送り致しました倘女學世界女子文壇はがき文學文藝倶樂部中學世界少年世界等澤山所持致して居りますから紀念絵葉書か上等ゑはがきにて申込下されば一人〱必ず差し上げます僞は夢にも致しません（紀伊那賀郡中貴志村米田時子）○誌友の諸姉様美しき絵葉書や玉章の御交換を願ひます（静岡縣磐田郡岩田村匂坂中鈴木金子）○諸姉様方よ美しき絵葉書を御送下さい又玉章の御交換を願ひます（静岡縣磐田郡岩田村匂坂中寄島脊子）○妾は下總成田山のふもとて、たゞ絵葉書なたのしみに、淋しく暮らして居るものてすから、何卒か絵葉書の交換をして下さいまし、御送り下すつた方に名所絵葉書を差上ますは、御文通なも（下總印旛郡成田町土屋吾妻屋渡邊かつえ）○本誌の仲よしの、お姉上様達よ、左の通りのお約束にして、絵はがきの交換を望みます、甲乙丙の三種に別ち甲は舶來絵はがき（妾の寫眞か風景寫眞に絵はがきを添えて送ります）乙はスタンプ付絵はがき（美術寫眞を呈す）丙は肉筆又は普通の絵はがき（上等絵はがき）を以て御禮をいたします、但し斷じて男の方はおことわり申します（信濃南安曇郡温村一三六西山方露江子）○皆さま妾にも絵はがきの交はりを垂させ給えお返しは直ぐ致します（和歌山市有田屋町十七番地大草脊子）○絵はがきか俳句か書て送て下さいませんてすか妾しも必ず御返事は差上ます左様なら（肥前有田町一〇〇三柳原初音）○私不用の落語、小説、雜誌澤山持ていますが美はしき絵葉書か栞にて御申越し遊ばせ先着五拾名様に差しあげます倘あとの御方は殘念ながら當地風景絵葉書にて御答へ致します（飛騨國高山町林孝道様方佳織栞）○皆様何卒絵はがきの御交換を御願ひいたします沼津や富士の勝景が有りますから御のぞみなら永久に（靜岡縣沼津町城内八十一番地山田きく子）○皆様妾は五日迄田舎に行て居りまして、翌朝歸へつて見ましたら驚きました。絵葉書交換が六七十枚許り來て居るのですもの‥‥。追々御返事致しますから何卒おゆるしなすつて下さい（横濱市南太田町長谷川波南子）○愛讀者諸姉様どうか御交際を願いますそして絵はがきの交換をして下さいれ（北海道茅部郡森港幾世橋病院一號室村井花子）○私諸嬢と絵葉書の御交換を願ひます先着の御方には鐵道五千哩スタンプ入鐵道協會發行第一回のを一組づゝ五名に御送り申ます（名古屋市堀内町二丁目水谷芳子）○諸姉様方敬催へ

旅行中でしたの爲めに皆樣に御返事が大變遲延いたしましたが惡しからず以後は益々盛んに繪葉書の御交換をお願いたします(神戸市下山手通七丁目二三六蔚澤花子)

○皆樣俳句や和歌を書いてね繪葉書の交換を願ひます妾もきつと御返事致します(加賀國鶴來町濟田勝司方濟田よし子)

○諸姉樣方どんな繪葉書でもよろしいから御送り下さい御禮には栞差上ます又先着一名には押花も上ます私の父はね九月十二日にあの世の人となつてしまつたのよ兄弟もなく母と二人て淋しく世を送つてをりますから御ひまの時御手紙下さい妹と思つて頼みます(大分縣大分郡日岡村向原牧富久子)

○誌友の姉樣美しい繪はがき下され幾重にも御禮申します今度は上等なの送つて下さつた御方には先着者三人には金色夜叉の歌を一冊づゝ分配します其の他の御方にも夫れ／＼畫はがきて御返じ申します(美濃國相生町加藤栽縫舍內金森すぎ子)

○誌友の姉君よ願はくば不束者とも繪葉書の交換を願ひます(福岡市荒戸三番町百九十一番地佐藤きりゑ)

○諸孃妾は水彩畫を稽古して居るお方と繪はがきの交換を致したう御座いますから御同意のお方は下名迄お送り下さい(長野縣下高井郡日野村字更科豐田たかの)

○誌友の姉樣たち美麗な繪はがき下さつてあり難う今度も一層繁く交換を望んでよ！美しいの下さつた方には先着者から順々四名限り一袋一笠を一冊づゝ差し上げますからどん／＼下さいな(美濃國本町愛鄕舍內金森なみ子)

○妾は十月から愛讀者となりました故御交際を願ひます皆さんより上等ゑはがきへ「望交際」として御送り下さる御方へは美しい栞を差し上げます倚編物の交換も願ひます(紀伊那賀郡神戸米田みつゑ)

○皆樣よ私に未使用の紀念、水彩、外國繪葉書或は有名なる神社佛閣學校等の印影葉書四五葉封じ御惠贈給はずやは御禮は相當の者で早速御返じ申します(飛驒高山町空町佳織栞)

○大日本國中の諸孃樣妾の云ふ事を御聞き入れを願ひます私は至つて寂しき山中に居住して居るので皆樣の御玉章を拜するのをこの上もなき樂しみとして居るのですから何卒肉筆なり印刷の御繪はがきを御送り下さい御住所を明記して必ず相當の御返事差し上げます(栃木縣芳賀郡山前村大字南高岡仁平方にて信山菫女)

○南多摩の乙幡もんこ樣、姉妹合せてはからずも貴女の姉になりました、貴女も矢張畫がお好きださうですから、御自筆の畫へかきを送りて下さいませ、拙ながらも妾から御返じ致します其他の皆さんも、何卒繪葉書の交換をして下さいお返じは屹度致します、(大阪市生玉前町五一三三、松田都喜子)

○東京府、京都、靜岡に御出の方々何卒上等繪葉書を永久に御交換を願ひます(東京市日本橋區下槇町八番地大塚方竹村小枝子)

○私の許に樺太風景繪葉書にコルサコフ船改紀念スタンプ付ありますから御入用の御方は繪葉書で申込み下さいきつと差上申します又私の樣な不束ものでもよく交はつてやゝてやろうと思召御方は御手紙下さい(羽後仙北郡淸水村寺田絢)

○前號で名所繪はがき交換を願ひました處早速諸姉上樣方澤山御送り下されれ誠に有がたう厶いました。中には美人繪やあまり參考にならないやうなのもありました。左樣なのは以後御斷り申上ます。どうか地理歷史上名を知られてゐる處であつて而もありふれたものでないのを永久に御願ひます。そして一見わかりにくいものへは簡明な御說明を願ひます(鳥取縣岩美郡河崎村八石みどり)

○繪葉書の交換を御依賴申上候、乾度御返事致す可く候、然し殿方には平に御免仕る可く候なほ靜岡縣のお方には殊に親しい御交誼を御願ひ申上候(靜岡縣濱松町大工町山本仁平方鷹見靜可)

○妾事在桑港の兄より送られし舶來繪端書澤山之あり御望みの諸孃樣方は風俗景色の繪端書で御申込下されば早速御返事として差上ます(埼玉縣熊谷町和久井きん子)

○皆さんどうか今後末永う交際を願ひます、また繪葉書や寫眞の交換も願ひますよ、私はいゝ繪葉書をもつて居りますから、先着順に差上ます(滋賀縣甲賀郡柏木村字北脇七八五番地川島敬子)

○皆樣今迄の不沙汰許して頂戴よ、而して繪端書交換を願ひます(出雲飯石郡赤名村倉橋小鶴)

○熱心なる諸孃樣されいなゑはがき有りがたうございました只ざんねんなのは東京京橋局のけし印のあるのがお名まえのないのでお返事ができません、それからスタンプ付や舶來のゑはがきの御こうかんを願います妾遞信省のスタンプ付持つてゐますから、て上等のを送つて下さつたかた十名だけには木曾名所はがき一組そへてお返事いたします(信州木曾福島町將軍町一八中村みづ)

編物造花交換

誌友の諸姉樣、何卒宜敷御交際を願ひます、そーして誠に厚ヶ間敷お願ひてすが、お手作の肱突か寫眞かけの糸製切製どちらでもあまり品のお粗末てないのをお惠み下さいませんか、お禮には必

ず必ず相當の品物に私の寫眞を一枚つゝ添へて差上ます、決して皆樣の御丹精を無くするような事は致しませんから、どーぞ惜しまないて送つて頂戴お願ひ申ます（丹波須知町山崎床榮）○姉上樣編物や造花の交換を願ひます。又お寫眞も（千葉縣印旛郡遠山村三里塚區內萩原はな女）○おなつかしの皆さん妾紀念の爲誌友寫眞帖こしらへ樣と思ふのですわそれから皆さんお不用の寫眞おありなら送て頂戴な必ず〳〵本か雜誌又は組物の繪葉書でお禮します必ずしますよ（常陸國高濱町東大橋洒葉常子）○此の度始めて御伺ひ致します今後絹製のひじ尖と栞と寫眞はさみ等の交換を御願ひ致します返禮は決して遲滯しません、私は誌友の山下芳枝樣の宅に居りますどうか下名へ（靜岡縣志太郡朝比奈村字新舟山下芳枝樣方高橋節）○私は寫眞が、五枚ありますから、どーか寫眞を交換して下さい（周防國熊毛郡三丘村和田澤文子）

圖書換讀

妾は美文之資料、婦人世界、人世之老旅、秀才文壇（紀念號）少年之友、兒童教育、新小說、文藝界、文藝倶樂部、等の書物澤山持つて居ますから諸嬢の中て不如歸之歌、女學世界、玉蟲、朝晴、唱歌集其他不用の雜誌御持ちの方は交換しては下さいませんか（大分縣東國東郡西安岐村宮野直子）○誌友の諸嬢樣妾の手許に少女界や少女世界や少年世界や其他不要の書籍雜誌がありますから何卒皆樣の不要の本と御交換をして頂戴な又お寫眞を送つて下すつたお方には少年世界と少女世界とを各一册宛御禮致します乾度（滋賀縣伊香郡片岡村東野森定治郞方ニテきゑ子）○君に、西村醉夢譯メイテルリンク神秘論、高須梅溪著の我が散文詩、小原文學士譯の西詩愛吟集、等を御所有の方は、お送り下さい、但し一册宛てすから葉書を以つて通知を願ひます、御禮として當地珠產の富貴菓一箱を一册に對してお送り申ます、待て居ます（秋田縣角館川町黑丸とみ子）○私宅に小說母の心、小猫、火の柱、草枕二册、新小說五册不用になつて居りますが皆樣の內で靑春三册魔風戀風三册と御交換下さる方はありませんか（丹波南桑田郡稗田野村御原方葉山花子）○私は只今「本誌一卷十一號より二卷の終りまて、女學世界增刊女玉手箱及び六卷十三號、文章世界一卷八號、少女界二卷四五十一號、叙事論說普通文教授法上下、探偵小說南洋王、婦人世界一卷九號」等が不用になつて居りますが諸姉樣方に女學世界三十八年以前、文藝界、文藝倶樂部等其他の面白き雜誌小說と交換して下さいませんか（香川縣多度津門前町一二三一神原いし子）○私の手許に不如歸、あやめ草、片手美人、血の淚不用に付御望の御方は美はしき繪葉書にて本月末まて申込て下さい遠近にかゝはらず公平なるくじ別にて差上ます（富山縣下新川郡滑川町明町水野美津子）○明星、心の花、藝苑、白百合、新聲、小天地、火燄、月刊スケッチ、馬醉木、文庫、帝國文學、他地方文學雜誌、國詩を有する諸姉樣方よ乞願くば御惠送あらん事を御送附の御方には詩集文學雜誌文集繪はがき等にて御禮致します下名へ（京都六軒町元智顯寺北入井上けい子）○秋田縣の建部ひさ樣女重寶記雜有女學世界送りましたが行先不明て返つてきました お所くわしく如らせて頂戴、妾渡米したいのよ皆樣渡米に關する有益の書籍て御不用のがありましたら御惠み下さい又詳細通信して下さい、相當の御禮はいたしますよ皆樣御此上とも繪葉書其他の交換を乞ふ（大阪府泉北郡白太村福田淸子）○なつかしい諸姉樣よ皆さんの內に本誌第一卷第一號より第二卷の十二號までの內御不用の部が有つたら御送り下さいませんか、又他の雜誌や書籍或は繪葉書の交換を御願ひ申します（千葉縣山武郡千代田村山田小金淸子）○皆樣の內て、御不用になつた、ほととぎす、の歌が有りましたら、下さる御方は有りませんか、それから妾の「しのぶ草集と紫式部日記」上げますが、黃菊白菊、玉むし、朝ばれ、何れか一册と交換して下さる御方は有りませんか（越後中蒲原郡早通村大字泥潟村山芳子）○夏子、己が罪、女夫波、魔風戀風、若草等御不用の御方は輕快集、女子文のはやし、玉琴集、雪崩と百合、和歌吳竹集、博愛美談、高等才媛文集、高等艷麗文集等の內何れなりと御交換なし下さいませんか代價不相應には相當繪はがき又は栞を差し上げ升同書三着以下は繪はがき一組を呈します（越前今立郡北日野村佐野よしを）○皆樣のお內て世界唱歌下鐵道唱歌御存じの御方は敎へて下さい敎へて下さつた御方樣には粗末ながら少女世界と繪はがきとて御禮いたしますそれも先着五名樣だけよ（京都市上京區千本通出水北エ入廣瀨豐子）○皆樣、小說不如歸、筆子、血の淚、伯爵夫人、青春、御持の方は此內、いづれにても御惠送下さいな、御禮には新らしい聖書一册づゝ着次第差上ます、（備後福山東町矢野品子）○私は金色夜叉の歌、古今和歌集遣

箋卷之十一より二十迄、琵琶歌二種類、忍ぶ草集、殘花集、五彩雲集、女子之本分、禮儀と作法、女子衛生學、其外にも有りますから伯爵夫人、寬風戀風、川千鳥、才媛文集、等の不用のと交換して下さい（日向兒湯穂北島内濱砂まさよ）
○手許に綺麗辭典、書翰文辭書、作文新辭林、世界歷史辭典、國語漢文中辭林、日本歷史辭典、教科書辭典、スケッチ畫法、明星、さわらび以上は極新しい尙文館エスプラント讀本其他澤山あります皆樣の中で交換なして下さる方はありませんか（福井市佐佳枝上町岩永方梅田正子）

懸賞品に就いて

懸賞價格に就いては從來の通り變りはありませんが、其品物に就いて範圍をひろくしました、成るべく宜しい品で、諸孃の御入用になるやうなものを選んで差上やうと思ひます、別項裏表紙の懸賞項目を御覽下さい

郵便用文

今迄の「書簡文」の欄を抒情文に合併して、更に「郵便用文」の欄を設けます、今迄の「書簡文」欄に投寄された文章の多くは、美文として扱ふても差支のないものですから、あゝいふ文體の書簡文をお作りになつた節は抒情文の方へ願ひます、代りになりました「郵便用文」の欄については出來得るだけ、實際的の往復用文を獎勵しやうと思ひます、大體は左の通り定めます

▲手紙又はハガキの文章で實際の用事を主題として作ること▲文體は口語でも文語でもよろしい▲美文的の性質を帶びたものより、實際的の間違ひの無い方を選拔する方針のこと▲假りに題を設けて作つても素より差支えありませんけれど、或る場合には、ほんとうの用事で取り遣りした手紙文又はハがキ文を其まゝ投稿下さるなども面白いてせう▲懸賞其他の規定は凡て他の諸欄と同じことてす、只、原稿に「郵便用文」の四字を落してはいけません。

○課題と文藝遊戲

誌友倶樂部が追々增加するに就いて、新課題を載せる場所を縮少されますから、文藝遊戲と新課題を合併し更に新しい問題を出して、諸孃のお答へを願ふ事にいたしませう、つまり新課題は文藝遊戲として募集する事になつたわけてす、但し本月二十日〆切文藝遊戲「花ことば」は新課題「花」（三月五日〆切）とは未だ別々に投稿して下さい、其次から課題と文藝遊戲が一しよになるのです。

見よ！

誌友倶樂部の擴張

誌友倶樂部が本誌唯一の娛樂機關である事は讀者諸孃も御存知てせうが猶ほ娛樂以外、實用上にも利益のあるやうにいたしたいと思ひます、第一着として

紹介欄

と云ふのを設けます、此欄には諸孃の必要の事なら何ても紹介いたします、最も從來の繪葉書、圖書、編物、寫眞等の交換記事以外てす、學校の問合せ、事業の案內、求むるもの、應ずるもの、要するに用事は何てもよろしい、諸孃の便利の爲なら紙面を惜みませんが、文章の長いのは困ります、それから住所氏名も明記して下さい。

新欄增設 文學顧問

愛讀諸嬢の爲に何か利益になる事をと考へまして更に文學顧問と云ふ新しい欄を設ける事にしました、何か文學に就いてお尋ねになる事があれば遠慮なく申し下さい、大體左の通り規則を定めて置きます

▲餘り漠然たる問ひには答へないこと▲問の事がらは文學上の事なら何でもよろし▲例へば和、漢、洋有名なる書物の解題、文士の事、現在發行の文學書の事、文字又は文語の意義、詩歌の意味何でも宜しけれど普通の講義録か辭書を見れば直ぐ分るやうな事は或はお答へしないかも知れぬ▲原稿は半紙半枚に「文學顧問」とはしがきして記すこと▲〆切は毎月十五日▲原稿集り次第、發表します

○文藝遊戲 花ことば（新課題）

文藝遊戲の第四回として皆さんにお願ひするのは『花ことば』と云ふのです、花ことばとは何んな事を作るかと云ふに左の心得を讀んで下さい

▲春、夏、何れかの花の内で一つを選み其花の言葉、つまり花が何か物を言ふやうにして其ことばを書いて頂きたい▲櫻なら櫻、菫なら菫、何でも其花が言ひさうな言葉を考へること▲むづかしく考へると限りなくむづかしいですけれど、歌や俳句を作る時と同じ位な考へても作れます▲言ふ事がらは何でもよろしい、花自分の身の上でも、花だうしの話でも、花が人に向つて言ふやうに書いても、其邊は凡て作る方の隨意にして置きませう▲懸賞は一等から五等まで差上る事にします▲原稿は十行以内に限つて下さい、假名はつけなくても宜しい、住所姓名は明瞭に書くと▲時や陽春四月、滿都花に埋めらるると云ふ頃、諸嬢の美くしい花ことばを聞くのは何よりの樂みだらうと思ひます（二月二十日しめきり）

○花（誌友倶樂部課題）

▲少女は人生の花、花は天然のうちでも最も美しいものです▲花に就いて諸嬢は何を感ずるでせう▲好きな花と嫌ひな花とはありませんか▲諸嬢の家には何んな花がありますか▲珍らしい花や變つた花を御存知ですか▲花の色、花の香、花の姿を何と思ひますか▲山に咲く花、野に咲く花、庭に咲く花、何れを愛しますか▲花を見ると何んなことを思ひ出しますか▲花賣は何んな風俗で、何んな花を持つて來ますか▲今、諸嬢の手には何んな花が咲いて居ますか▲まだ／＼花に就いてお尋ねしたい事は山ほどあります、一々申しませんが▲諸嬢は何でも彼でも花に就いて言つて御らんなさい、何んな事でもよろしい、花についての事なら▲園藝上、花の養ひ方の心得などもよろしい▲原稿は例の通り半紙半枚に七八行以内「花」と題を書いて其下に姓名雅號を認めること（三月五日しめきり）

雜報

▲『全國各高等女學校一覽』我女子文壇愛讀諸嬢の御便利を圖り新入學期も來ました事故學校をお撰みなさる御參考にもと思ひ文部省御調査最近の全國女學校一覽表を三月發行の本誌に載せる事にいたしました。修業年限、學校、位置名稱、沿革迄精確に一目に分ります

▲婦人博覽會。近々上野の東京博覽會開催を機として婦人博覽會といふのが出來ますそうで、先づ朝野の注目を呼んでをりますが、主なる事項は會期中大家を聘して婦人に關する學術技藝の講演を催す事、毎週兩三回音樂演奏會を開く事、輓近の發明考案に係る趣味ある事物を紹介する事、割烹部にて實地料理の方法を觀覽試食さしむる事等で、總て其他も一般婦人界の爲め裨益する所多てせう、而して入場料は一人金十錢小見及軍人は半額だそうです

▲三十年勤續女教員。今回東京麴町區長大胡純氏は牛込區新小川町三丁目卅四番地住麴町區番町尋常高等小學校訓導馬場とめ子女史に對し教育獎勵規程第一條により慰勞金五十圓を贈與されました、同女史は本年六十歲で教鞭を執ること卅年精勤衆に超え今回まで賞狀を受ること十回餘昇級二十回に及びたりと亦以て其平生を知るに足るでせう、女史は水戸藩鈴木某の次女だそうです

▲お伽噺募集。我文部省は今度貳百金の賞を懸けて口語體の假作物を募集しました、おひ／＼お伽噺の價値ある位置を尚んとするの今日、諸嬢が女子文壇に於て此新方面に筆を染めらるゝもよいでせう

▲女學生應聘。東京小石川區表町女子清韓語學講習所生徒小石川茗荷谷町二六村越信子（十三）は今般清國公使館浙江省總督張元節の紹介により浙江省湖州府呉興女學堂より年俸千二百圓にて招聘され愈よ來月十日を以て出發赴任する由、信子は長野縣下高井郡穗村二一一平民農村越晨作の一人娘にて幼少より非常に學問好てしたが、小學時代から成績優等、卅三年第二高等女學校三年級編入卅六年卒業、同五月女子大學家政學部入學卅九年四月之を卒業したるが同大學在學中清國婦人と相知りしが動機にて清國へ赴き大に婦女教育に盡瘁せんとの考を起し直に清韓語學校へ入學せる次第なりと履歴なき女學生が此名譽ある推擧に與り又かゝる高給を得られたのも始めてでありませう

此社告は愛讀諸孃の精讀を望む

[illegible]（第参卷より改定）

選評大家（文學士沼波瓊音先生、齋津御浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、嚴谷小波先生、山中古洞先生）

甲種
- ◉敍事文 ◉抒情文 ◉評論文（各半紙廿四字三十行以內）
- ◉短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行內）
- ◉新體詩（半紙かな付十句以內）

乙種
- ◉郵便用文（半紙廿四字詰）
- ◉和歌（半紙一首）
- ◉俳句 ◉新歌謠（全上）
- ◉短文（半紙かな付廿八字五行）
- ◉新笑話（半紙半分十六字詰）
- ◉圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種
- ◉文藝遊戲（半紙十六字詰）
- ◉誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

（品目改正す）

甲種
- 第一等　賞金屬品類……價格金拾圓
- 第二等　呉服物類……價格金參圓
- 第三等　小間物類……價格金壹圓
- 第四等　便利の圖書切符……金七拾錢
- 第五等　同……金五拾錢

乙種
- 第一等　絹張洋傘……價格金五圓
- 第二等　帶止、半襟類……價格金壹圓
- 第三等　文房具類……價格金五拾錢
- 第四等　便利の圖書切符……金參拾錢
- 第五等　同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ發賞品贈呈すべし、有當選者は贈品に差支へざる様前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ずは所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に習點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納稅は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年八回一月、五月、八月、十一月の十五日發行）

		郵税共
一冊（大冊百頁）	前金拾錢	前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓廿錢
十二冊（一年分）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六十錢

郵劵代用は必ず壹割増

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年二月十二日印刷
明治四十年二月十五日増刊

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話「本局六〇七番」　女子文壇社

特約會捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

（定價金拾錢）

（宮本製本）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇最廉無比 定價金拾錢 郵税壹錢